

ため、驗者を迎にやるのに、何時もゐる處には居ないで、よそに出てゐるのを、使の者が彼方此方と尋ね歩くうちに、待違しく大分時間が経つたのを、やつと待得て、つれて來た驗者に、喜びながら加持をさせると、この頃、諸々方々の物怪調伏に疲れきつてゐるためか、すわるとすぐに、讀經の聲が眠聲になつたのは憎い。何といふ取所もない人が、無暗に我は顔に、お饒舌を大層したのは憎い。火桶圍爐裏などに、手の甲を返し、皺をさすり伸べなどして突つてゐる者は憎い。いつ若い人が、そんな眞似をしたかい。何でも老いさらばうて、いやらしい者こそ、火桶の端に足ま

めきて、狩衣の前、しもざまにまくり入れても居るか。かゝることは、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の式部の大夫、駿河の前司などいひしがさせしなり。また酒飲みてあめき、口をさぐり、髻あるものは、それを撫てて、盃人に取らすほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。「また飲め」などいふなるべし。身ぶるひをし、かしらふり、口わきをさへひきたれて、わらはべの、「こふどのに参りて」などうたふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなしと思ふなり。

(考異) ○あめき 原本あめきとあり。抄本による。

○ながごとするまらうど 「ながごと」は長言にて、長話なり。「まらうど」は稀人の轉語にて、即ち客人なり。「まらうと」の下、いと憎しを略けり。○あなづらはしき人 輕視してもよき人なり。尙あなづるを見よ。○のちになどいひても云々 御話はゆるりと、後に伺ふべしといひても、追拂ふことも出來得れどと也。○さすがに 然爲からににて、俗のサウ、ハイ、フ、モ、ハ、に同じ。○心はづかしき人 遠慮の入る人をいふ、この時代の通語なり。われより立勝りたる人に對へば、何となく、心に恥かしく覺ゆれば、しかいふ。さやうの人には、後にともいはれず、甚だ憎しとなり。「はづかしき人」の下、なるはを略けり。○硯にかみの入りて 「かみ」は髪なり。紙といふ説はわろし。「すられたる」の下、憎しを略けり。○きしみたる 硯に軋みたるなり。「きしみ」は漉りて滑ならぬこと。「たる」の下、憎しを略けり。○俄にわづらふ人のあるに云々 急病人あるによりて、祈禱せさせんとて、修驗者を求むるにと也。○例ある所にはあら

て持上げて、話をしながら、足をこすつたりなんかはするであらう。そんな不作法な者は、人の家に來て、自分が坐らうとする處を、まづ扇で塵をあふぎすて、居すまひもきまらず、體をふらつかせて、狩衣の前を膝の下にまくり込んでおすわるよ。こんな不作法なことをするのは、いふにも足らぬ下賤の者ばかりかと思つてゐると、少しかなりな身分ある式部、大夫、駿河、前司などいつた者が、そんな事をしたのである。又酒をのんで酔うてわめき、指で口をせ、り、鬚のあるものは、それをなでまはして、杯を人に與へる時の様子は、至つて憎いと見える。「もつと飲め」

で、驗者がいつも居る所には居らでと也。○ほかにある 何處か他に居るをと也。祈禱などに往きたるなるべし。○尋ねありくほどに 使の驗者を尋ね歩くほどにと也。○待ちつけて 驗者のくるを待おほせてと也。○加持 カヂ。眞言宗にて修する佛力護念を禱る咒法。即身成佛義に「加持者表々如來大悲與衆生信心、佛日之影現、衆生之心水、日加、行者心水能感佛日名持」と見ゆ。○物のけにこうじにけるにや 諸方の物怪の祈禱に疲れしにやと也。「こうじ」は困の字音を活かせて、音便にいへるにて、疲る、草臥る、などの意。「にや」の下、あらんを略けり。○あるまに即ちねぶ聲になりたる すわるや否や、眠聲になりたるはと也。○なんでふ事なき人の 何といふ取處もなき人のと也。「なんでふ」は何といふの約轉。○えがちに物いひたる 「えがち」は心得勝にて、何にても知顔したるをいふ。一説、艶勝にて、艶だつ意といへるはいかゞ。古本に、ゑがちとあるは笑勝の意にて、愈よ心明なり。「いひたる」の下、憎しを略けり。○あぶりゐる者 の下、憎しを略けり。○いつかは若やかなる人の云云 何時若き人が、遠慮もなく人前にて、さる不作法をせしか、否せざりしと也。「さ」は火桶などに、手の裏打返して灸るをさす。「かは」は反語。○老いばみうたてある者 「老いばみ」は老いめくと同じく、年寄じみたるをいふ。なほ、かればみを見よ。○うたてある者 疎ましくいやなる者なり。○おしすり 足を火桶にて摩るなり。○さやうの者 火桶のはたに足を持上げたりする老人をさす。○ゐむとする所 すわらんとする所なり。○ゐも定らず 居すまひもきまらずと也。落著きて、ヂツと坐りをらぬをいふ。○ひろめき ひらめくの轉語。ひらく、すること、即ちチラクラ動くことなり。下にも「ひろめきたちて」とあり。古註は廣めくと解きたり。○狩衣 カリギヌ。又カリゴロモ。もと狩獵の時に用るし服なり。闕腋にして、袖口に括緒を通して、事ある時、手首にしめ括るやうにしたり。後には太上天皇以下、六位以上の常服となれり。装束集成に、五位以上織物、六位以下無文の平絹着用と見ゆ。



などと、人に強ひる  
のであらう。身ぶ  
るひをしたり、頭を  
振つたり、べそ口を  
かいたりして、子供  
が「國府殿にまわり  
て云々」と諺ふ時の  
やうな風をするよ。  
それはさあ、下賤の  
者ならばともかく、  
本當によい身分の人  
が、さうなされたの  
を見たので、氣にく  
はないと思ふのであ  
る。

桃草子評釋

色は不定なり。もと庶人の服なれば、専ら布にて製したるを、後にはこれを布衣と呼べり。狩衣着用の時は、奴袴さしきをはく。(附圖參照)○前しもさまにまくり入れ 狩衣の前の垂を、向へ刎ねてのぼし置くべきを、膝の下に捲り込みて敷きたるをいふ。○かゝる事は、かゝる事するはの略。火桶に足を掛け、不行儀なるすわり方などするをさす。○いひがひなき者のきはにやと 言葉にかけていふ甲斐もなき、即ち下賤なる分際の者のみかと思へどと也。「にや」の下、あらんを略けり。○よろしき者 身分のかなりなる者なり。なほよろしうを見よ。○式部 式部省は八省の一にして、朝廷の禮儀、内外文官の考課、選叙、祿賜等を校定し、學校を管し、貢人を策試す。その職員は卿一人(正四位下)、親王四品以上これに任ず。大夫一人(正五位下)、少輔一人(從五位下)、大丞二人(正六位下)、少丞二人(從六位上)なり。○式部大夫 シキブノタイフ。亟は新任を加へんが爲、大丞だいじょうの首席者を五位に叙して、職を去らしむることあるが、五位に叙しても、なほ留任するもあり。これを「式部大夫」といふ。大夫は五位の稱なり。○前司 前の國守。○いひしがさせし 「いひしがはいひし人が也。」「さ」は上の不作法をさす。○あめき わめく、と同語なるべし。酒飲みて、酔ひて喚わめくをいふ。「あかき口」と續く時は、酔ひて充血したる口なり。○口をさぐり 指などにて、口中をせ、ると也。「ひけ」は頤のなるべし。○人に取らする 盃を人にさして、受けさするをいふ。○また飲めなど云々 側より推察しいふ詞。「また飲め」は人にまた飲めとて、モツと飲めと強ふるをいふ。○身ぶるひをし 以下泥酔者の歌を諺はんとする様なり。○口わきをさへひき垂れ 小兒のベソ口する時の如く、口をへの字形にするをいふ。口脇は、和名抄に、物を訓めり。○わらはべのこふ殿に参りて云々 當時の童謠に「こふ殿に参りて云々」の謠ありしならんも、他に所見なし。子供がその俗謠をうたふ時のやうなる身振を、この酔人のすると也。「こふ殿」は國府殿なるべし。さらば國守なり。「する」の下、よを略けり。○それはしも 「し」は強辭、「も」は歎辭。○心づきなし 心付

無しにて、俗の氣ニクハヌにあたる。

(口譯)  
他の幸福を羨んだり  
自分の不幸を歎いた  
り、人の陰口をいひ、  
一寸したことでも興  
ゆかしがり聞きたが  
つて、いつて聞かせ  
ないのを怨み譏り、  
又一寸聞はずつたこ  
とをば、自分がもと  
から知つた事のやう  
に、他人にも、明白  
に筋立つて話し聞か  
せるのも、甚だ憎い。  
物を聞かうと思ふ時  
に泣き出す乳兒、こ  
れも憎い。鳥の澤山  
集つて、飛ちがつて  
鳴いたのは憎い。自  
分の所へ忍んで來る  
男を、見附けて吠え  
つく犬は憎らしく  
て、打殺してもしま  
はふと思ふ。人を忍  
ばすことの出來な  
い、無理な所に隠し  
て置いた男が、奸  
をかけたのは、甚だ

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ 露ばかりの事もゆかしがり、聞かま  
ほしがりて、いひ知らせぬをばるんじそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、われ  
もとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞か  
むと思ふほどに泣くちご。鳥のあつまりて飛びちがひ鳴きたる。忍びてくる人見し  
りて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、かくし伏せた  
る人のいびきしたる。また、ひそかに忍びてくる所に、長鳥帽子ながとぼうしして、さすがに人に  
見えじとまどひ出づるほどに、物につきさはりて、そよるといはせたる、いみじう  
にくし。伊豫簾いよすずりなど懸けたるをうちかづきて、さら／＼とならしたるも、いとにく  
し。帽額ぼうがくの簾は、ましてこはき物のうちおかるゝ、いとしくし。それもやをら引きあ  
げていていりするは、更にならず。また遺戸やどなど荒くあくるも、いとにくし。少しも  
たぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子まじりなどもたをめか  
こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊かのほそ聲こゑになのりて、顔  
のもとに飛びありく。羽風はかぜさへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に  
乗りてありくもの、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。わが乗りたるは、その車  
のぬしさへにくし。



憎い。又密に忍んで通ふ所に、目に立ち易い長烏帽子を冠つて来て、それでも他人に見られまいと思つて、うらたへて出る時に、長烏帽子の先が物に衝突して、ごそりと音を立てたのは、ひどく憎い。伊豫簾など掛けてあるのを潜つて、さらさらと音を立てたのも、甚だ憎い。まして帽額の簾は、潜る時、剛い物が下にうち置かれる音が、ひどく耳立つ。その帽額でも、しづかに引上げて出入するのには、一向に鳴らない。又遣戸などを手荒く開けるのも、甚だ憎い。少し持上げるやうにして開ける時は、鳴ることがあるかい。下手に開けると、唐紙や襖などでもしなばせ、ごそ

ととするのが耳に立つのである。颯々と思つて寝たのに、蚊が細い聲でブーンと名のりあげて、顔のそばに飛んである。羽風まで、體相應にあるのが、甚だ憎い。ぎし／＼ときしむ車に乗つてある者は、耳が聞えぬかしらと思はれて、甚だ憎い。さういふ車を、自分が借りて乗つてゐる時は、その車の持主まで憎

(考異) ○いひしらせぬ 原本、いひしらぬとあり。古本による。

○物うらやみ 他人の幸福を羨むをいふ。○身のうへなけき わが身の不遇なる述懐をする也。○人のうへいひ 他人の陰口などを利くと也。○つゆばかり 少しばかりと也。露は僅なる物なるよりいふ。○いひ知らせぬをばゑんじそしり 話して聞かせぬをば、怨み誇ると也。「ゑん」は怨の字音。○聞きわたる 聞及ぶなり。○こと人 異人にて、他人をいふ。○語りしらすべいふも 「しらすべ」は明白にする意。されば、こゝはわかるやうに、辻褄合はせていふもの意とすべし。更に考ふるに、「しらすべ」はしらすべの誤か。語りしらすべは語り散すをいふ。しらすべは、すべて動作の緊張を意味する接尾語なり。古本語りしらするもとあり。○物聞かむと云々 物は音楽にても、物語にても、用向にても、何にてもあるべし。「ちご」の下、憎しを略けり。○鳥のあつまりて鳴きたる の下、まがくしく憎しを略けり。○忍びてくる人云々 夜更けて密に逢ひにくる情人なり。「人」の下にを、「犬は」の下に、憎さを略けり。○さるまじうあながちなる所 男など忍ばすべからざる無理なる所なり。「さるまじう」は然あるまじくの約にて、さうしてはなるまいの意。「あながち」は強ひたるをいふ。無理ヤリナといふに當る。○いびきしたる 露顯せんことの恐しくて、その男の何の用意もなきが、甚だ憎き也。「たる」の下、いびく憎しを略けり。○みそかに忍びてくる所に 忍びて通ふ所となり。即ち情婦の許をいふ。「みそか」はみそかに同じ。「くる」は往くの意なり。用例多し。○長烏帽子して 長烏帽子を着てと也。長烏帽子は、立烏帽子の長きをいふ。貞丈雜記に「古き繪に、立烏帽子の長きを着たるあり。又折りて着たるも、前へ長くさし出たる、後へ長くさし出たるもあり」と見ゆ。○烏帽子 もと禮冠の下の頭巾なりしを、延喜の頃より、冠は正服に、烏帽子は平服に用ゐること、なり。位官ある者は、家内にて略服の時かぶり、無位無官庶民は、朝夕常に被れりといふ。そのはじめは、黒き絹にて、袋の如く縫ひた

る、至極柔き物なりしを、のち紗や絹などに漆を塗りて、幾分か剛くなれり。堅く漆にて塗固めて用ゐるやうになれるは、鳥羽帝以後のことなり。○さすがに人に見えじ 「さすがに」は人目に立ち易き長烏帽子したるを承く。「見え」は古く見られの意に用ゐる。○まどひ出づる 出づるに周章て、度を失ひたるをいふ。朝になりて、女の許を忍び出づるさま也。一本「まどひ入る」とあるに従へば、夕方か夜など、女の許に男の忍入るさまとなる。さらば上なる「忍びてくる」も、文字のとほりに解すべし。○物につきさはりて云々 長烏帽子の、物に突當りて音を立つるを、忍びたる甲斐もなしと、いたく憎むなり。「そよる」は擬聲にて、ゴソリといふが如し。○伊豫簾 新猿樂記に、伊豫の名産を擧げて「伊豫手筈、又砥又簾」とあり。この簾は、同國浮穴郡露の峯の山中より産する細き篠を、そのまゝ、編める物なり。源氏に「伊豫簾は、さら／＼と鳴るもつ、まし」と見え、簾としては、粗製の物に屬す。○かづきて 被ることにて、こゝは簾を潜るをいふ。○さら／＼と鳴したる 簾を掲げておろす拍子に、音のするなり。○もかうのす 「もかう」は帽額の音なり。簾の上部の外側に、一幅の帛を、横に幕の如く張りて、飾としたるもの也。後世の水引幕なり。簾の縁も帛にて取る。簾の竹は、極めて精巧に、細く削りたるを用ゐる。貞丈雜記に「帽額、額をおほふと訓む。出入る人の額の上に覆ふ故の名なり」。○ましてこはき物の云々 伊豫簾よりも、帽額の簾は、まして剛き物なれば、潜るとてか、けたる簾の裾を放し置く時、音のいたく立つをいふ。「しるし」は著しなり。「こはき物の」を、抄本、一本等に、こはしのとあり。こは假名裝束抄に「小端にて、板を薄く削入れて巻きたるがよき也」と見えて、簾の縁に薄板の入れある爲、重くて音の立つなるべし。又春註に、鎌匙かといへる鎌匙は、簾の下端に附けたるコハゼなり。○それもやをら云々 「それも」は帽額の簾をさす。「やをら」は俗のソロリにあたる。和訓栞に「よわらと通ぜり。そろそろといふに等し」。○いでいりするは 出入する時はとなり。○遣戸 ヤリド。引戸なり。敷居鴨居に入



れて開閉する戸。横にシダ棧あり。いはゆるマキラ戸なり。(附圖參照) ○もたぐるやうにて「もたぐる」は持上ぐるの約。「やうにて」はやうにしてなり。○障子などもたほめかし 闕にこだはるを、無理に開けんとすれば、しむるをいふ。「たほめかし」はたわめかしにて、撓ますることなり。この障子は唐紙襖なり。なほ障子を見よ。○こほめく ゴトくと音するをいふ。源氏に白の音、屏風を疊む音を形容して、こほめくといへり。○蚊の細聲に名のりて「名のりて」は名を告ることなれども、こほは只鳴くをいふ。我こほにありといふやうに聞ゆる故なり。時鳥の鳴くを名告るといふも、その始こそ、名義の起源を思ひて用ゐられたれ、この頃は單に鳴くをいふこと、尙水鶏の鳴くを、叩くといひ習へるが如し。蚊の字、ブンの音なればなどいへる説は、拘はれり。○身のほどに その身相應にと也。○きしめく キシくと音するをいふ。こほ車の輪の軋むなり。○耳もきかぬにやあらむと 耳も聞えぬならんかと思はれと也。聞えぬを強くいはん爲に、自他を反對にいへる也。○わが乗りたるは さる車を借りて、我が乗りたる時はと也。○車のぬしさへ その音の憎きのみならず、その車の持主さへと也。

物語などするに、さし出でて、われひとりさいまくる者、すべてさしいでは、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。あからさまにきたる子ども、わらはべをらうたがりて、をかき物など取らするにならひて、常にきて居入りて、調度やうち散らしぬる、にくし。家にも、宮仕所にも、逢はてありなむと思ふ人のくるに、そら寝をしたるを、わが許にあるものどもの、起しよりきては、い

(口譯) 話などする時に、さし出で自分ひとり、利口ぶる者は憎い。總體さし出をするのは、子供でも大人でも、甚だ憎い。昔話などする時に、自分の知つてゐる事は、ふいと横から出て、その話をくさしなどするの、甚だ憎い。鼠のかけあるくの

ぎたなしと思ひ顔に、ひきゆるがしたる、いとにくし。今まわりのさし越えて、物知り顔にをしへやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。わが知る人にてあるほど、はやう見し女のこと、譽めいひ出しなどするも、過ぎてほどへにけれど、なほにくし。まして、さしあたりたらむこそ思ひやられる。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。おほかた家の男しうならでは、高くはなひたるもの、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたにをどりありきて、もたぐるやうにするよ。また、犬のもろ聲に、長々となきあげたる、まがしくしくにくし。めのとの男こそあれ、女はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いさゝかもこの御事にたがふものをば讒し、人をば人も思ひたらず、怪しけれど、これがとがを、心にまかせていふ人もなければ、所得意みじきおも、ちして、事を行ひなどするよ。

(考異) ○もたぐるやうにするよ 「よ」の字、原本もとあり。光本による。○行ひなどするよ 「よ」の字、原本にとあり。一本による。

釋 ○さしいでて 人中にさし出でて也。俗の出シヤバルにあたる。○さいまくる 我ひとり利口ぶりで、喋々するをいふ。「さい」は才なり。「まくる」は捲くるにて、才を強いはん爲の接尾語。いひまくる、叩きまくるなどのまくるに同じ。春註に「才を捲ぐる也」、一説に「先を捲ぐるにて、話の先を折る也」といひ、濱臣は「才捲ぐる也。才を以て、人の言を押捲ぐる意」、弘恭は「差捲ぐる意に

は、甚だ憎い。一寸来た子供や童を可愛がつて、面白物など遣つと馴染んで、いつも来てはひり込んで、器具や何かを打散したのは憎い。自分の家でも、又奉公先でも、逢はないでゐたいと思ふ人の来た時に、わざと空寝入りをしたのを、自分の手許にゐる召使などが、起しにやつて来て、寢坊だと思つた顔付で、自分を引揺したのも、甚だ憎い。新参者が、古参の者をさしこえて、物識顔に指圖がましいことをいひ、世話をやいたのは、甚だ憎い。自分の今大事の人にしてゐる男が、以前關係してゐた女の事をいひ出して、ほめたりなどするの、過去になつて時日が経つ



た事ではあるけれど、やはり憎い。ましてその女との關係が、現在の事であらうなら、その憎さが想ひやられる。けれど、それは事によつては、さうも憎くもない事情もあるわさ。噓をして誦文をする人は憎い。すべて一家の男主人でない外の者で、高く噓した者は、甚だ憎い。蚕も甚だ憎い。著物の下には、れあるいで、持上げるやうにするこよ。又犬が同音に長々と吠えたたのも、不吉で憎い。乳母の夫は憎いものである。けれど養君が女である場合には、それが近くも寄らないからい。男の子であると、それをばたき自分の物にして、附添うて、手許に取込んで世話を

て、人の物語を、自説の方へさし掛けて、われ獨才子がる也、真頼は「先設るにて、人の話の前に廻りて、話するをいふ」といへり。このうち、濱臣の説、ほゞ可なり。この語、活字本には「さいまくる、」とあり。濱松中納言物語に「さかしら心のきは高く、さいまくれたる」とあるは同語のやうなれど、本文のは四段、彼れは下二段にて、活用たがへり。○知りたりけるは 知りたりける話とはとなり。○ふと出でて チヨイと傍よりさし出でて也。○いひくたしなどする 詰らぬ話なりなど、悪しざまにいひ落すをいふ。○くたすは腐すにて、俗のクサス、ケナスにあたる。○あからさまに 假初に、チヨットの意。○子どもわらはべ おなじことを詞をかへたるまでにて、差別あるにあらず。「子供」は勿論、「わらはべ」も、男兒女兒を通じて、古くより用るたり。たゞ「子供」は親に對したる名稱、「わらはべ」は童稚の意なるが異なるのみ。當時「わらはべ」は元服前の少年、男せぬ少女をもいひたるが、こゝは幼兒をいへり。○らうたがりて 可愛がるをいふ。らうたしを見よ。○ならひて 子供等のなれて也。「ならひ」は馴れの延言。○る入りて 奥に入居てと也。○調度や の下、何やを略けり。「や」は事物を並べ舉げていふ辭。○調度 チウド。源氏などの註書に、デウドと濁るやうにいへるはいかゞ。そは後世の讀癖なるべし。道具のこと。○家にても わが住宅にてもと也。○宮仕所にても 奉公し居る所にてもと也。○そら寝 虚寝にて、所謂狸寝入なり。○わが許にある者ども わが手許にゐる者共なり。召使の者共をいふ。○おこしよりきて そばに寄來て起してと也。かく前後にいひなすこと、この頃の語に例おほし。起しに寄來てと解すべからず。但抄本には、おこしにとあり。○いきたなし 寢穢しの義にて、寢ごきことをいふ。寢は心から眠ること。○ひきゆるがし 引搖しなり。こは女中どもの、わが虚寝なるを知らで、寢坊なりと思ひ顔に、引搖して強ひて起すをいふ。○今まるり 新參者。○さし越えて 古參者をさし越えてとなり。○教へやうなる 指圖がましきをいふ。○うしろ見たる 後見したるにて、即ち

し、一寸でも若君の御意にそむく者なば、主人に讒言し、人を人とも思つておす、怪しからぬけれど、その非行を忌憚なくいふ者も無いので、威張つたえらい顔付をして、指圖などしてゐることよ。

世話を焼くをいふ。○わがしる人にてあるほど云々 わが連合にてある時に、その男、もと關係ありし女の事をいひ出して、譽めなどするも面白からず。そは年月経たる過去の話なれど、やはり憎しと也。「しる」は領すること、わが物とすることなれば、「しる人」は、女よりいふ時は夫なり。情夫なり。「はや見し」は以前逢ひしをいふ。「見る」を男女の出あふ意に用るは、中古文に當の事なり。○さし當りたらむこそ云々 褒めたる女との關係が現在の事ならんには、それこそ如何に憎からんと、思ひ遣らると也。○それは 男の他の女を褒むるをさす。○さしもあらぬ云々 さもあらぬ場合もあるよと也。「さも」は、上の憎しをさす。この句の意、甚だ曖昧なり。旁註に「事によりて憎からぬと也」とあるに、假に従ひ置くべし。一説「いひ方によりて云々」といへるも妥當ならず。○はなひて誦文する人 「はなひて」は鼻放りてにて、噓のこと。「誦文する」は自ら誦文する也。「誦文」はズモンと訓む。禁厭の文句を誦し唱ふること。「人」の下、憎しを略けり。噓は古より何かの前兆として、大抵の場合忌みたる也。されば、人噓する時は、その災禍をはらふ爲に、傍の人、呪文を唱へてやる也。四分律に「時世尊噓、諸比丘咒願言、長壽」とあれば、或は印度系統の迷信か。その呪文は、休息萬命急々如律令と、拾芥抄、簾中抄に見ゆ。又クサメの語もその呪語なること、徒然草に明なり。いづれも災を轉じて幸となす爲の誦文なり。○家のをとこしう云々 その家の男主人ならずしてはと也。「しう」は主の音にて、「男主」は女よりいふ詞なり。男主人以外の、高く噓するを咎むるは、その不遠慮を憎むなり。○もたぐるやうにするよ の下、憎しを略けり。○もろ聲 諸聲なり。聲を揃へて出すをいふ。○なきあけたる 吠立つるをいふ。○まがくしく 禍々しくにて、不延喜なることなり。今も犬の遠吠を災事の兆として、厭ふ者あり。○めのとのをとこそあれ 乳母の縁によりて、その夫の恣なる振舞するを憎む也。「を」とこ」は夫の意。「こ」の下、憎くを略けり。○女はされど云々 養君が女の兒の時、流石にその夫が



近寄らねばよしと也。「されど女は」とあるべきを倒置して、語調を強めたり。「されど」は「憎くあれ」をさす。○をのこ兒をば云々 乳母の夫の恣なるさま也。「たい」はひたすらの意。○領じて 占有すること、取込むこと。○この御事に 養君の御意にと也。「この」は養君をさす。○人をば人とも云々 人をも思はぬとは、養君の威をかりて、傍若無人の様なるをいふ。「思ひたらず」は思ひてあらずの約。○あやしけれど 怪しからねどと也。乳母の夫の舉動をいふ。○これが咎 「これが」は乳母の夫をさす。「咎」は非行なり、罪なり。○心にまかせていふ人もなければ ひそかに憎めども、心に任せて、主君へ申上ぐる人もなければと也。○所得いみじきおもちして 尊大に、えらき顔付してと也。「面持」は顔付なり。○事を行ひなどするよ いたく憎める口調なり。「よ」は歎辭。

評 この條は婦人の觀察として、きはめて敏慧な特徴のあるもの、一つである。清少は同性間よりは、むしろ異性間の方に、人望があつたらしくて、そのむきの交際家であるから、自然來客が多かつたであらう。随つて長尻のお客には、閉口しぬいたものと見える。硯の髪の毛は、當時の垂髪では、落毛の入がちな筈で、墨の石は、さすがに文筆者の觀察である。驗者の居睡、ことごとくなるもの、段では、大に同情したのを、こゝではひどく攻撃してゐる。得勝に物いふは、引かれ聲の先生と同様で、一は小面に、一は厭味に堪へぬのである。式部丞が叙爵し、駿河守が前司になる頃は、相應の老境であらう。老人には、自我的の感情が發達したり、頽廢的の氣分に陥つたりして、社會の禮法などを無視したやうな、行動をとる者がよくある。人の家に来て、扇で塵をあふぎ立てるのは、不作法の壓巻ではあるが、昔の殿舎は、今の住宅とちがひ、掃除が不行届で、塵埃がなかく、多かつたらうと推察される。狩衣の前を捲り入れるのは、塵を附けまいとするのだらう。出這入の注意は、なかく、こまかい。流石に婦人であるとは、ゑまれる。

飲酒家の攻撃は、中、關白記に大酒と書かれた清少としては、同情が無き過ぎるほど、辛辣である。醉人の形容は奇妙な筆で、徒然草の酒の段と相匹敵してゐる。「物うらやみし云々」は、さういふ婦人を對象として、いつてゐるものらしい。泣く兒は、さすが子供好の清少も閉口したと見えて、後にも「よる鳴くものはめでたし」といひながら「乳兒共のみぞさしもなき」と、但書を添へてゐるからをかしい。鳥は昔から、支那でも日本でも、憎まれ者ときまつたのが氣の毒である。忍男を吠ゆる犬を「打ちも殺しつべし」は、姫御前には、ちとあられないやうだが、清少はかうした烈しい氣性だつたのである。下にも、從者の強辯を悪んで「人目を思はずば、はしりも打ちつべし」といつてゐる。さて男を忍ばせるのは、宮廷内でも、自宅でも、當時一般に行はれたことで、今日で考へるやうな、甚しいふしだらではなかつた。この草子中に、この種の記事が多いのを見て、特に清少を放埒な女と想像するのは、時代を解せぬ批評であらう。

蚊の羽風は警句、車の泣くに至つては、全く感心しない。貸主さへ憎いのは、勝手な言草のやうで、しかも尤である。さし出口を憎む資格は、清少にあるかしらと思ふと、可笑しくなる。子供の増長は、子供好の清少には、實驗する機會が多かつたらう。轉寢中との理由のもとにおひはらふ來客は、元より侮ららしい身分の者で、生意氣な今參は、さし出口の儔である。男がなじみの女を褒めたのは、小憎らしいのが人情の常なのを、「さしもあらぬやうも」と、微温的にいひかへたのは、季吟が「嫉妬を恥ぢたる所あるなり」と評したので、了解がいく。乳母は比較的身分のひくい者であるが、養君の御成人と共に、鞠養の恩にほこつて、分外の尊榮をきはめ、その夫も資縁して、勢力を得た。これは平安時代の皇室に纏綿した通弊であつたが、その端緒は、蓋し本文にあるやうな事情から起つて來るらしい。



二十四段 (下)

文ことばなめき人こそ、いとどにくけれ。世をなのために書きなしたる詞のにくきそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわろき事ぞ。されど、わが得たらむはことわり、人のもとなるさへにく、こそあれ。大かたさし向ひても、なめきは、などかくいふらむと、かたはらいたし。ましてよき人などを、さ申す者は、さるはをこにて、いとにくし。男しうなどわろくいふ、いとわろし。わが使ふものなど、「おはする」「の給ふ」などいひたる、いとにくし。こゝもとに「侍る」といふ文字をあらせばやと、聞くことこそ多かめれ。あいぎやうなくと、詞しなめきなどいへば、いはるゝ人も、聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまりてうろうするなどいはるるまである人も、わろきなるべし。殿上人、宰相など、たゞなる名を、いさゝかつつましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず。女房の局なる人をさへ、「あのおもと」「君」などいへば、めづらかにうれしと思ひて、響むることぞいみじき。殿上人、君達を、御前よりほかにては、つかさをいふ。また御前にて物をいふことも、さしめさむには、なごてかは「まるが」などいひむ。さいはむにくし。かくいはざらむにわろかるべき事かは。

(考異) 原本には、「こ」に「小一條院をば」の一段ありて、次に又、「この」に「くきもの」の第二段を擧げたり。必ず錯簡と思はるゝへ、同一題目の文の中斷したるも、通讀に不便なれば、「小一條院をば」の段と、これを前後せしめたり。  
○宰相など 原本宰相などをとあり。別本による。○さいはむ憎しさいはざらむに 原本さいはざらむ憎しかくいはむにとあり。活本による。

○文ことばなめき人云々 「文詞」は消息文の詞なり。「なめき」は、續紀に無禮を訓めり。なみするの無の形容詞格に活ける語。「いとく」はいとく略。○世をなのために 世間をい、加減に見さけて書做したる詞の憎さは、いひやうもなしと也。敬意を闕きたるを憤れるなり。「なめ」は斜の轉語にて、當時、加減の意に用るたり。源氏に「なめ」に「なめ」に「なめ」に「なめ」とあり。「こそ」の下、いはん方なけれを略けり。○さるまじき人のもとに云々 然あるまじき、即ちさほど尊敬すまじき人の許に、あまり慇懃にいひ遣りたるも、まことよからぬ事ぞと也。「さるは」は、下の「畏りたる」をさす。○されど 「さるまじき人の許に畏りたるはわろし」とあるを抑へていへり。○わが得たらむはことわり 詞なめき文を我が得たらむは、憎しと思ふもことわりなり、されどと也。「ことわり」は事割るの義にて、道理なるをいふ。○人のもとなるさへ さる文の人の許にあるさへと也。人の所にきたる文にても憎きをいふ。○さしむかひても 互にさし向ひて物いふにもと也。上の文詞のなめきに對して、談話上の注意をいへる也。○なめきは 詞なめきはとなり。○かくいふらむ 「かく」は詞なめきをさす。○かたはらいたし 傍痛しの義にて、傍に居るも心痛ましきをいふ。轉りて、氣の毒、苦々しなどの意に用る。○よき人 高貴の人なり。○さ申す者は 「さ」はなめくいふをさす。この句の下、別本「いみじうねたうさへあり。田舎びたる者などのさるは、をこにていとよし。」とありて「男しう云々」に續けたり。○さるは 然あるはなり。この語「こ」には軽く使はれたり。俗のスリヤア(それはの轉)に近

(口譯) 手紙の文言の無禮な入は、頗る憎い。世間をい、加減に見さけて、敬意を闕いて書いた詞の憎さは、いひやうもない。それ程尊敬すべき人でもない所へ、あまり畏つた文言で書いてやるのも、ほんにわるいことである。けれど無禮な手紙を、自分が貰つた時は、憎いの尤もなことだが、他人の處へ來てゐるのでさへ、憎いのである。物じて手紙ばかりではない、お互同士さし向の時でも、詞の無禮なのは、なぜかう無禮なことをいふのだらうと、苦々しい。まして貴い人などを、さう失禮にいふ

者は、それは小癩で、甚だ憎い。男主人などを、召使の者が不敬にいふのは、甚だわるい。自分が召使ふ者に對して「おはする」「宣ふ」など、丁寧にいひつてゐるのは、甚だ憎い。かう間違ふなら、いつそ自分の事をいふ時に「侍る」といふ詞を、序につけさせたと思つて、聞く事が多いやうである。愛敬はなくても、上品らしくなどしていふと、話かけられる人も、又傍で聞く人も、喜んで笑ふ。かう上品な詞がいふと思ふからでもあらうか、やたらと品めいて、あまり嘲弄するなどいはれる程な人も、わるいのであらう。殿上人宰相などに對して、その實名を、すこしも遠慮な



くいふのは、大變不都合なを、ほんによくさういはず、女房の局にゐる下女をも「あのおもと」「あの君」などいふと、さういはれた事のないう下女だから、珍しく嬉しいと思つて、その人を褒めることが非常である。殿上人公達を呼ぶに、兩陛下の御前以外では、官名をいふ。又陛下の御前では、自分等同士が話をすると、陛下がお聞きなされる場合には、どうして自分のことを「磨が」といふべきではない。それを「磨が」といふのは憎い。又「磨が」といふのではないが、都合であらうが、そんな事はない筈である。

し。おもく見て、「なめき」をさしたりとする時は、意重複して煩しがるべし。○を「馬鹿なるをいふ。可笑しの轉語なり。然るに、後漢書南蠻傳に烏潯國の事見え、その俗馬鹿らしく、笑ふべき事多きより、後にはその國名を混用するに至れり。○男しうなどわろくいふ云々 男主人の事などを、その使はる、者の、不敬なる詞にていふは悪しと也。春註に、男衆即ち從者が、主人を悪しくいふはと解けるは非なり。又諸註、男主人の事を是非して誹るは悪しといへるも、いかゞあらん。こゝは尙詞のうへをいへるにて、「悪くいふ」は詞づかひの悪しきをいふ也。○わが使ふ者など云々、おはするも「官ふ」も、主人のうへにつけて、家來のいふべき敬語なれば、主人が、家來のうへにつけて用ゐては、本末顛倒にて憎きなり。「おはする」は居る、「宣ふ」はいふの敬語なり。「者など」の下、にを略けり。○こゝもとに侍るといふ文字を云々 無暗に家來に敬語を用ゐるならば、むしろ主人が家來に對して、自分の事をいふ所に、反對に「侍る」といふ詞を、一々附けていはせたきものと也。敬語の濫用の調和が取れてよからんと、反對の方より誹れる也。諸註「こゝもとに侍る」と續けて解けるはわるし。「こゝもとに」は此處許にて、主人の方の詞のところの意。「侍る」は主人に對して、家來自身の方につけていふべき敬語。「文字」は詞なり。○あいぎやうなくと「あいぎやう」は愛敬なり。「と」はともとの意。蜻蛉日記に「花薄穂に出でたりとかひやなからん」、金葉集に「たちながら來たりとあはじ云々」とあると同じ。○しなめきなどいへば云々 品よくいへば、話かけられたる人も、傍に聞く人も、喜びて笑ふと也。品は階級の意なれば、品めきは品あることにて、上品らしきをいふ。「聞く人も」の下、喜びてを略けり。○かく覺ゆればにや「かく」は品めければ人の立腹せぬをさす。「にや」の下、あらむを略けり。○あまりてうろするなど云々 あまり懇歎過ぎて、無暗な敬語など用ゐて、嘲哂するなどおこらる、程なる人も、よからぬならんと也。諸註、これを品めき過ぎて、嘲哂といはる、人はと解きたれど、さては「かく覺ゆればにや」に打合はず。○宰相 サイシャウ。參議の唐名。○參議 職原抄に「四位以上有、其才之人、奉勅參議官(太政官)中政之意也」とあり。定員八人、參議たる時は、四位にても公卿(上達部)のうちにあり。○たい名の名 實名なり。美隆の説に「日本紀に、諱をタ、ハ、ミナと訓めり。空穂物語に「あざな藤えいたい名季房」とあり。たいは平生の義。云々」○つ、ましけならず 憤ましかならずにて、無遠慮なるをいふ。○かたは 片端にて、物の整はぬにいふ語。まほに對す。こゝにては不都合なるをいへり。○さいはず 「さ」は失禮にも、上達部たちの名をいふをさす。○女房の局なる人 女房の局にゐる人にて、下仕の女、いはゆる又者なり。春註に、女房と解したるは非。○あのおもと君 あのおもととの君の略。「御許」も「君」も、婦人の敬稱にて、又者などにはいはぬ詞なり。○めづらかにうれしと思ひてほむる そのいはる、女は、珍らかに嬉しと思ひてしかいひたる人を譽むると也。○君達をの下、呼ぶにを補ひて聞くべし。「君達」は攝家清華の子息などをいふ。○お前よりほかにては云々 兩陛下の御前にては實名をいへども、その外にては、官をいふと也。「つかさ」はこゝにては官をいへり。○御前にて物をいふとも云々 陛下の御前にて、公卿同士の物をいふとも、陛下のお聞あらんからは、自分の事を、何とて磨がなどいはんぞと也。陛下のお聞に對して、自稱代名詞の「まろ」など用ゐるは、失禮に當るが故なり。「お前にて」の下、互にを略けり。「まろ」は翁丸を見よ。○さいはむ 「さ」は陛下の御前にて磨がといふをさす。○かくいはざらむに云々 かくいはずしてあるに、都合のわるき事あらんやと也。「かく」も御前にて磨がといふをさす。「上の句もこの句も、畢竟同意のことなるを、わざと表裏の二面より反復して、丁寧にいへる也。原本の「さいはざらむ憎し、かくいはむにわろかるべき事かは」とあるに従へば、「さ」も「かく」も陛下の御前にては實名、その外にては官をいふをさすこと、なる。意は通ぜぬにはあらねど、上文よりの接續や、不快なり。



ことなることなき男の、ひきいれ聲して、えんだちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする。たゞなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくげごとしたる。ひとり車にのりて物見る男、いかなるものにかあらむ、やむごとなからずとも、わかき男どもの、物ゆかしう思ひたるなど、ひきのせても見よかし。すき影に唯一人かゞよひて、心一つにまもり居たらむよ。

(考異) ○かゞよひて 原本かゞよひてとあり。抄本による。

○ことなることなき男 格別優れたる所なき男にて、こ、はおもに容貌の方をいふ。○ひきいれ聲 地聲を隠して、幽によしめくやうに、作聲したるをいふ。源氏にも「息の下に引入れ」とあり。○えんだちたる 艶かしく氣取るをいふ。「えん」は艶の字音。「たる」の下、いと憎しを略けり。○墨つかぬ硯 石質堅くして、墨の上すべりする硯なり。「硯」の下、憎しを略けり。○女房の物ゆかしうする 女房など相應に身分ある者の、何事にも見聞したがる也。「する」の下、憎しを略けり。○たゞなるだに云々 何もしなくてさへ甚だ好かぬ人の、憎らしき事したると也。「たゞ」は徒の意。「たる」の下、いみじう憎しを略けり。○物見る男 祭など見物する男なり。下に、憎しを略けり。○いかなる者にかあらむ云々 如何なる人にかあらん、そは知らざれど也。○やむごとなからずとも 貴人ならずとも也。「やむごとなし」は打捨て、置かれず、遁れられずなどの意にて、貴人は打捨て置かれず、等閑にし難ければ、やむごとなしといふ。○物ゆかしう思ひたる 若き男共などの、物を見聞したがる者のあるを、同乗せさせて見物せよと也。「たる」の下に者、「など」の下にその車にを略けり。こは殊に祭などの物見には雑沓して、車なき者共は、意に任せて見物も出来ぬ始末なるに、普通四人乗なる牛車に、この

(口説) 格別な取處もない男が、幽な聲をして、艶かしい様子ぶつたのは憎い。墨のすれない硯は憎い。女房の何かと見聞したが、つたりするのは憎い。只でさへ大して好かない人が、憎らしい事をしたのは憎い。たゞ一人車に乗つて見物する男は憎い。それはどんな人間も知らん。貴人でなくとも、若い男共の物を見聞したが、つてゐる者などを、一緒に乗せても見るがよいわさ。車の簾からの透影に、只一人威張つてゐて、わが心一つで見詰めてゐるだらうよ。憎いではない。

男は只一人乗居たるを憎める也。又貴人は、陪乗の人あるも常なれば、上に「やむごとなからず」ともいへる也。○すき影 車の簾より透きとほりて見ゆる影なり。○かゞよひて 耀きてと同じ。光つて居るといふことにて、威張り居る形容なり。○心一つにまもりゐたらむよ 「心一つ」は對手なしに、おのれの心一つにと也。即ち只一人なるをいふ。「まもりゐたらむ」は物を見つめてをるならんと也。「まもる」は目守るの義。「よ」は歎辭。「よ」の下、いみじう憎しを略けり。こは雑沓したる中に、心に任せたる様を憎める也。さるは物見に出づる時は、四人乗の車に五人も六人も乗りて、溢れ出づるなど常のことなれば也。

曉にかへる人の、よべおきし扇、ふところ紙もとむとて、暗ければ、探りあてむくとたゞきもわたし、「あやし」などうちいひもとめ出でて、そよくとふところに入られて、扇ひきひろげて、ふたくとうちつかひて、まかり申したる。にくしとはよのつね、いと愛敬なし。おなじごと夜ぶかくいづる人の、烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人のとがむべきことかは。いみじうしどけなう、かたくなしく、直衣、狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせむ。人はなほ曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたげなるを、しひてそのかし。「あけ過ぎぬ。あな見ぐるし」などいはれて、うち歎くけしきも、げにあかず、物うきにしもあらむかしと覺ゆ。指貫なども、居ながら着もやらず、まづさしよりて、夜ひと夜いひつるこ

(口説) 曉に女の許を歸る男が、昨夜寢床のわきに置いた扇や懐紙を捜すといつて、まだ暗いから顔に捜しあてようと、手さぐりに叩きまはし「不思議だ」といって、漸く捜し當て、こそくと懐におし込んで、扇をひらいて、ばたくと使つて、暇乞の挨拶したのは、憎いといふはまだな事、甚だ愛敬が無い。前の話と同様に、また夜深に女の



とののこりを、女の耳にいひ入れ、何わざすとなければ、帯などをばゆふやうなりかし。格子あげ、妻戸ある處は、やがてもろ共に出でゆき、晝のほどのおぼつかなからむ事なども、いひいてにすべり出でなむは、見送られて、なごりもをかしかりぬべし。なごりも出所あり。いときはやかに起きて、ひろめきたちて、指貫の腰つよくひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯つよくゆふにくし。開けて出でぬる所たてぬ人、いとにくし。

（考異）○笑ひそしりもせむ の下、原本とするの三字あり。古本による。○かたくなしく 原本かたくなく、古本による。

○曉に歸る人 明方に女の許より歸る人なり。これを夜詰の勤番の人の、朝歸るさまとする説は非なり。○よべおきし扇 宵のほど、寢床の傍におきし扇なり。○よべは昨夜をいふ。○ふところ紙 常に懐中する紙なり。紅き、紫、色々なるも、箔置きたるも、又薄様なるもあり。物書くにも、鼻紙にも用る。後世歌など書く懐紙も、これより出でたる也。○た、きもわたし その邊をた、き廻すをいふ。○もは語調のために添へたる歎辭。○あやしなごうちいひ 無きが怪しなごうちいひつ。の略。「うち」は接頭語。○そよそよと 懐紙をそよくとと也。「そよよ」は懐紙を懐中にさし入る、音の形容。今ゴツゴツといふが如し。○扇ひきひろけて 扇を廣げてと也。「ひき」は接頭語。○ふたくとうち使ひこは懐紙や扇を捜すに心いらちて熱くなりたれば、急ぎ扇を使ふなるべし。「ふたく」は「バサ、バサ」といふに同じ。○まかり申したる まかり申したるはと也。「まかり申」は退り去るの敬語なるが、こゝにては、さほどの敬意はなし。單に暇乞とすべし。○にくしとはよの常云々 憎しといふは普通の事にて。

許を出てゆく男が、烏帽子の緒を強く結んだのは憎い。そんなにしつかりしなくともよからう。緒を結ばず、そつとそのまま、頭にさし入れて被つても、人が咎めよう事かい。ひどくだらしく形なしに直衣や狩衣などが歪んでゐたとしても、誰がそれと見知つて笑ひ譏りもせうぞ、笑ひ譏る人はない。すべて人は、やはり曉の別の様が面白くもあらう。男が術ないやうにしづくして、起きにくさうなのを、女が強ひて勤め立て、「夜が明け過ぎた。まあみつてもない」などいはれて、男が溜息つく様子も、ほんに名残が飽かず、歸るのが大儀なのであらうと思はれる。指貫

憎しどころにあらず、いかにも愛敬なしと也。「憎し」との下、いふを略けり。こは心靜に朝のわかれを惜むが當然なるを、さもせず。たゞわが物は少しも残し置くまじと心がくるやうに、騒がしく捜し求めて、すぐに出行くを憎める也。○同じごと 曉にかへる男とおなじやうにと也。「ごと」は如くなり。○夜ぶかくいづる人の まだ夜も明けぬに、女の許を立出づる人のと也。或註に「夜深く」を曉前と解し、曉を待たず歸るをいふなどいへるは、當時の語意を辨へざるなり。この頃は、曉を夜深の意に用るたりしをや。○烏帽子の緒強くゆひたる 「たる」の下、憎しを略けり。烏帽子の紐を強く結ぶは、あまりキチンとかたづけ過ぎて、名残惜しさうなる様無ければ、憎きなるべし。○さしもかためすとも云々 それほど固く結ばずとも宜かりぬべしと也。○やをらさながら 「やをら」は柔と同じく、そろりと、徐ろの意。「さながら」は然ながら、即ちその儘なり。こは紐を結ばぬをいふ。○さし入れたりと 「さし入れ」は烏帽子を頭に被ぶるをいふ。髻に入る、をいふに非ず。昔の烏帽子は柔なれば、頭にふかく引入れて被らる、也。○人のとがむべき事は 女の許より歸るに、少々ぐらゐる様子が亂れたりして、誰かは咎むべき、誰も咎めじと也。○しどけなう 俗にシダラナシといふに同じく、取締りたる所なきにいふ。○かたくなしく 頑の形容詞格なり。但、古本打解けたる形容を頑しとはいひ難きこゝちするが、當時の通語には、頑しにおろかしの意がある。さればこゝは馬鹿氣ての意と解しておく。さて上の「しどけなう」もこの「かたくなしく」も、下文の「ゆがみたりとも」へかゝる語。○誰かは見知りて 誰が衣裳などのゆがみを見知りて、その風を笑ひ謗りもせんぞ、さやうの人もあらずと也。こは夜深にかへる故、誰も見る人なき也。夜深に歸るを常とするは、人目をはゝかる、その頃の習慣なり。○曉のあり様云々 すべて人は曉の別の様子が興あるものならんとなり。○わりなくしづくに これよりきぬくの別の興あるを叙べたり。「わりなく」は術なくなり。「しづく」は

なども、坐つたまふで穿かうともせず、まづ第一に女の方にさし寄つて、終夜話したことのいひ残しを、女の耳にさし、やき、何をするといふ事もなく、もぢくしてゐるけれど、いつか着物も袴もきて、帯などをばしめるやうであるよ。それから格子を上げたり、妻戸のある處は、あけに出る女と、すぐに一所に出で行き、これから夕方になるまでの間の待遠からうことなど、いひながら出て、靜に歸つて往かうのは、自然その後姿が見送られて、名残も趣のあることだらう。名残惜しいのも、男の別れやう次第にある。ひどくさつぱりと起きて、周章てふためいて、指貫の



腰紐をきつく結び、直衣でも袍でも狩衣でも、袖をひき捲つて、自分の物はみんな懐にねぢ込んで、上帯をきつくしめるのは惜い。開けて出た所を開けない人は、甚だ惜い。

しづ／＼にして也。心の進まぬ様をいふ。「起きがたけ」は歸りにくさうとなり。○しひてそ、のかし。女の強ひて歸らむことを、のかしと也。○あけ過ぎぬ見ぐるし。あかるくなり過ぎたり、人の見る目も見苦しなど、女の強ふる也。「あけすぎぬ」は夜の明け過ぎぬとなり。「見苦し」の下、はや起き給へを補ひて聞くべし。○うち歎くけしき。男の歎息する氣色となり。「歎く」は長く息づくこと、即ち、溜息つくことなり。○けに飽かず云々。こは女が男の心中を推量する也。「飽かず」は名残の飽かずと也。「物うき」は起別れゆくが大儀なると也。懶の字の意。「にしも」の「し」は強辭、「も」は歎辭、「覺ゆ」は女の思ふをいふ。○指貫なども云々。坐りたるま、指貫などもはかんともせずと也。別れ難くするさま也。○まづさし寄りて。何はさし置きて。まづ、女の傍へさし寄りてと也。○夜一夜いひつることの云々。終夜契りたる話のいひ残りを、女に囁くとなり。「こと」は言の意。事にあらず。「耳にいひ入れ」は耳元に付きて、「さ、やくをいふ。「まづ」の語おも白し。○何わざすと云々。話終りても、尙もぢ／＼して、際立ちて何をするといふこともなけれど、自然そのうちに、帯などを結ぶ様子なりと也。「やう」の語おもしろし。○格子あけ。格子をうへに上ぐる也。「あけ」は必ず濁るべし。○格子。カウシ。細く角なる木を、縦横に組みたるものにて、寢殿、對屋などの四方をおほふ。即ち柱と柱との間毎にありて、上下二枚となせり。開くる時は、上を外側に釣上げ、下はそのま、掛鉤にて掛け置き、出入を許さず。又、母屋と廂と、二重格子ならば、母屋の格子は内側へ釣上げ。こはもと竹にて造りしを、中古より木を細く削り、黒く塗る様になりしなり。今も社寺などにこの制残り。(附圖参照)○妻戸ツマド。寢殿造の家屋の格子入れたる四隅にあり。「つま」は端の義なり。よりて小脇戸ともいふ。主客これより出入す。家屋雜考に「その作り方は板戸を兩開にして、内外共に鐵具あり。開く時は外の方へ開き、其戸のあふらざる爲に、掛鐵ふかけて止めおく。此をさるつなぎといふ。閉づる時は又内に掛鐵

ありて、しめおく事なり。總じて主殿の四方を格子にし、格子の間は常に鎖して、別に妻戸といふものを設けて置きて出入する事は、専ら要害の爲にして、貴人高位のおはします所は、元よりさもあるべき事なり。されば、妻戸の作りは精粗さま／＼あれど、いづれも厚板に鐵具をしつけて堅固にするなり。格子も細やかに木を打ち違へて、飾をのみむねとしたる者の如く思はるれど、後の明障子の如く、むげに手薄なる物にはあらず。云々。(附圖参照)○やがて。即ちの意。○もろともに。女と諸共になり。○晝のほどの云々。暮るれば復もくべきを、晝の間の待遠ならん事などいひながら、すべり出づるはと也。「おぼつかなし」は雅語釋解に、シツカリトセヌ、心モトナイ、待遠ナと譯せり。こは待遠の意。「いひいで」はいひつ、出づること。「すべり出づ」は徐に出づること。○見送られて。その後姿の見送られてと也。男の情にほださる、故なり。○なごり。あとに、その氣の残るをいふ。波殘の義にて、波の引きたるあとに、水の残れるをいふより出づ。○をかしかりぬべし。前の心なく名殘なども惜けならぬ人に比べて、褒むる也。○いで所あり。名殘の戀しきも憎きも、その出行きやうによると也。「いで所」を出行き方の意とするは穩ならねど、他に明解なし。以上「人はなほ」より、この「いで所あり」までは、中間の挿入文なり。されば、次なる「いときはやかに云々」より以下の文は、この挿入文を隔て、直に上文に續くものと知るべし。○きはやかに。際やかににて、際立つをいふ。俗言のキツバリ或はハキ／＼シタにあたる。○ひろめきたちて。あわてまはる様をいふ。ひろめきを見よ。○指貫の腰。指貫の袴の腰紐なり。○へのきぬ。袍のこと。男子の朝服なり。文官は縫腋とて、裾に欄のあるを用る、武官は闕腋とて、脇のあきたるを着す。色は位階によりて異り、又時代に隨ひて變遷あり。大寶の衣服令には、天皇は黃檯染、麴塵、皇太子は黃丹色、親王及び一位は深紫、二三位は淺紫、四位は深緋、五位は淺緋、六位深綠、七位淺綠、八位深縹、初位淺縹、無位黃袍なりしを、一條帝寬弘以來は、四位以上皆一色の



黒になりて、之を椽つるはの衣といひ、五位は蘇枋、六位は縹、七位以下服色の制廢せり。又地質は五位以上冬は表綾、裏平絹、夏は穀こめの薄物を用ゐる、六位以下、夏冬とも無文むぶんの穀を用ゐる。(附圖参照) ○袖かいまくり、着物の袖を捲りあけて、かひなく支度すると也。當時の服は、袖のユキ長ければ、邪魔になる故なり。「かい」は搔きの音便にて、接頭語。○よろづさし入れ「よろづ」は懐紙或は扇など凡て也。「さし入れ」は懐にさし入れと也。かく明くれば歸ること、して、テキバキ支度したるは、名残を惜まぬやうにて憎きなり。○開けて出でぬる云々 藩臣いふ「こは別の事なり」と。思ふに上文「遣戸など荒くあくる——こほめくこそしるけれ」の次に入るべきものならん。

評 詞の失禮なのが憎いとて、他人のところの手紙にまで及ぶは、オセツカイな性分である。「こ、許に侍るといふ文字を」、こんな皮肉を、臆面なくいつて退けるような者は、當時清少の外には、殆どあるまい。會話上の注意も、その女房生活から得た、經驗の結果であることは勿論である。

人の實名を斥して呼ぶのは、固より失禮だが、又者に敬稱も、不釣合で宜しからぬといふ意見である。天子の御前で、自他共に實名をいふことは、蓋し主上に對して、敬意を表する爲である。禮記に「君前臣名、父前子名」と出てゐる。されば、麻呂がと、自稱代名詞を使ふのは、失禮となる譯である。これは既定の事實なのを、今更らしく丁寧反復したのは、當時は、稱呼が段々紊亂して、僭上失禮の語が多かつたことが察せられる。王室式微の兆は、そんなわづかな語言の端にも現れてゐる。

つくり聲の氣障男、無遠慮に物ゆかしがる奉公人、こんなのは今でも、ザラにある。尤も作聲には、相當の理由があるので、九條殿遺誠に「莫、伴、高聲惡狂之人」と見えて、轡蟲のやうに喧しいのは、紳士の態度でないとしてあつた。物見車に獨乗るを、情なしと嫌つたのは、清少の持論である。今鏡に清少を情ある人と書いたのも、その謂れがないでもない。

隣の別の一章は、「人はなほ云々」から、百尺竿頭一步を進めて、まるで一部の人情本を讀むやうである。否その寫實の微細をつくして、その綺靡を極めたことは、實にそれ以上である。當時の婦人は、大抵夫婦同棲せぬ間が長いから、そのきぬぐの情趣を解する點は、現代人の想像以上であつて、殆ど娼女や圍者と一般である。ことに清少のやうな才はじけた女は、男に對しては、頗る手のある女だらうから、その經驗上から得た批評と描寫とは、實にかゆい所に手の届くやうな心地がして、字々艶、句々冶。更に想ふに、こんな情話は、御前勤のつれづれに、年配の女房達が、何時もいひ合つた理想でもあらう。そのうへ清少の筆致は、甚だ赤裸々である。故に時代思潮の相違によつて、更に大に大膽に見えらう。そのうへ清少の筆致は、よく當時の人情風俗を咀嚼して、幾分の割引をして見なければならぬと思ふ。

當時の男子は、實際色道の大家であつた。「親子の道にはなほ限あり、男女の道は限なし」と稱して、數多の婦女を降させるのを名譽と心得、婢妾はもとより、本妻すら二人も三人もこしらへた。  
よき女といへど、一人あるは、悪しき二人に劣りたるものなれば、我もくと、男一人に女二人三人付きてなむある。(空穂物語、吹上)

といつた有様で、それを各怨聲の無いように掉縱する。どうして尋常一樣の手腕では、出來るものではない。「澁々に起きがたけなる」に胚胎した「居ながら着もやらず」「帯などゆふやうなりかし」「いひ出にすべり出でなむ」の諸句は、皆その巧妙な手練手管を語つてゐる名文句である。「夜一夜いひつることの名残を、女の耳にいひ入れ」に至つて、その喃々たる軟語、今も耳につくやうである。「いときはやかに云々」から、「帶強くゆふ憎し」までの句は、むしろ無い方がよい。前文に重複の氣味がある。

さてこの憎きものの全文を通じて見ると、やゝ猥雑である。同種同様の事柄を、類聚整理することは、さうむづかしい事ではないが、それは却つて、作者の眞面目を潰すことになるだらう。



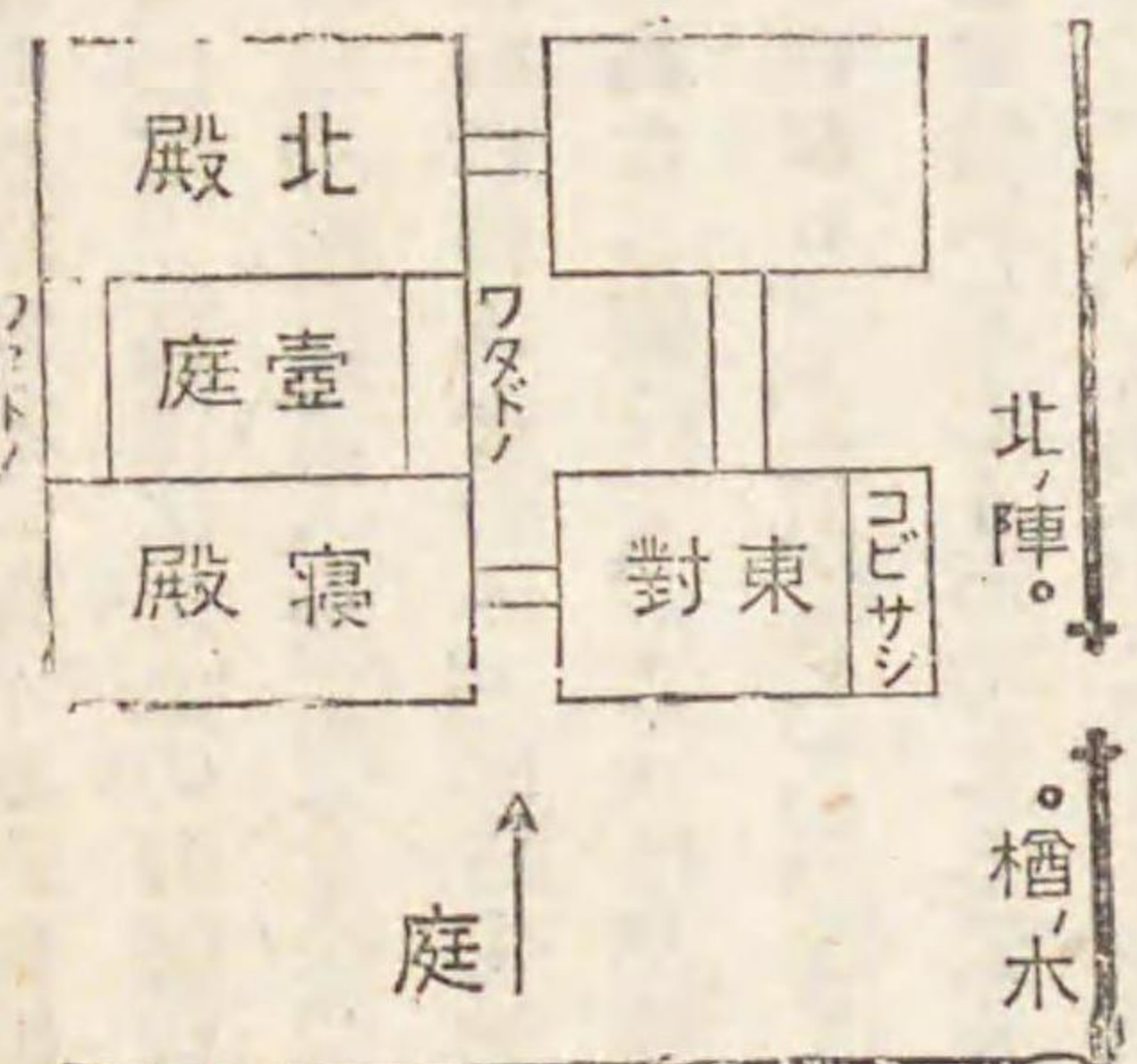
二十五段

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて、渡らせ給ふ。常にまうのぼらせ給ふ。おまへはつばなれば、前栽などうゑ、ませゆひて、いとをかし。きさらぎ二十日の日の、うらくとのどかに照りわたるに、わたどの、西の廂にて、うへの御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、こと笛ふたつして、高砂ををりかへし吹かせ給へば、なほいみじうめてたしといふも、よのつねなり。御笛のことどもなど申し給ふ、いとめてたし。御簾のもとに集り出でて、見奉るをりなどは、わが身に芹つみしなど、覺ゆる事こそなけれ。すけたゞは木工允にて、藏人にはなりにける。いみじうあらくしうあれば、殿上人、女房は、「あらわに」とぞつけたるを、歌につくりて、「さうなしのぬし、をはりうとのたねにぞありける」とうたふは、尾張の兼時がむすめの腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを、添ひさぶらひて、高遠なほたかう吹かせおはしませ。得聞きさぶらはじ」と申せば、まういかてかさりとも聞き知りなむ」とて、みそかにのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、まうこのものなかりけり。只今こそ吹かめ」と仰せられて、吹かせ給ふ。いみじうをかし。

(口譯) 小一條院をば今内裏といふ。主上の御坐なされる御殿は假の清涼殿で、中宮はその北の御殿に入らつしやる。その御殿の西東は、渡殿であつて、それから、時をり主上が北の御殿へ御出なさる。また中宮がいつも清涼殿へ参上なさる。御殿の御前は壺庭であるから、前栽の草木などを植ゑ、籬などを結んで、甚だ趣がある。二月二十日の、うらくかに長閑に照り渡つてゐる時に、渡殿の取付の西廂の間で、主上が御笛をお吹きになる。高遠の大貳は御笛の師範役で、御前に侍うて居らるゝが、主上は

(考異) ○この段、原本、憎きもの、段中に混入したれば、一段引下げて、ここに置きつ。もと、いづれより錯亂せしものぞ。活字本には、社はの段の次にあり。○二十日 原本十日とあり。春曙抄の一本による。○御笛のこと 原本御笛の師にてそのこととあり。古本による。○あらわに 原本あらはにとあり。一本による。

○小一條院をば 上なる「今内裏のひむがしをば」の段を見よ。「小一條院」は即ち一條大宮の院なり。○おはします殿は 主上のおはします殿はと也。○清涼殿にて 假に充てたる清涼殿にてと也。一條院の寢殿をしつらひて、假に清涼殿としたるをいふ。○その北なる殿におはします 清涼殿となしたる殿の北の御殿に、中宮は住み給ふと也。○西東はわたどのにて この兩殿の東西に渡殿ありて、それより往來するとなり。「渡殿にて」の下、それよりを略けり。○渡殿 渡り殿にて、殿舎と殿舎との往來のためたて續けたる廊にて、橋がかりになるもの。○渡らせ給ふ常にまうのぼらせ給ふ 主上北なる殿へ渡らせ給ふ、中宮假清涼殿へ常にまうのぼらせ給ふの略。いづれも渡殿より、主上、中宮の往來し給ふをいふ。「まうのぼらせ給ふ」の轉語。○御前はつばなれば 北の御殿の御前(即ち假清涼殿の後に當る)は、壺庭なればと也。○壺 壺庭の略。つばやかに小さく圍まれたる庭をいふ。中庭なり。○前栽 センザイ。庭前に植うる草木、または植込をいふ。○ませ 馬迫の義より出づ。籬と同じ。○二十日の日 二十日にあたる日の意。なほとほか、はつかの「か」に就いては説あれど、さし置く。○わた殿の西の廂にて 渡殿の取つきなる、寢殿の西の廂の間にてと也。渡殿に廂の間ありと思ふべからず。○廂 ヒサシ。日指の義にて、日影のさし入る間をいふ。寢殿造にては、母屋の四方にある間をいふ。後世の入側のこと。○うへの御笛吹かせ給ふ 「うへ」は一條帝。禁秘抄に「管絃、



御自分の笛と、高遠の吹く別な笛と二つて、催馬樂の高砂を繰返して御吹きなさるので、非常によめたいとほめるのも、やはり尋常の事て、感歎の詞も無。高遠は御笛の師範で、笛の御心得の事など申上げられる有様は、誠にめでたいものである。他の女房達と共に、御簾のきばに集り出で、この御有様を拜見する時などは、自分の身に「芹摘んだ」など思ふ、即ち不如意など感ずることは、少しもない。輔尹といふ人は木工の允で、藏人に成つた人であるが、ひどく動作が荒つぱくあるので、殿上人や女房達は、荒鷲と諷名をつけたのを、歌に作つて「さうなしの主、をはりうと



の胤にぞありけるし  
(動作の荒々しいこ  
とは、外に類なしの  
先生よ。それもその  
筈、尾張の田舎者の  
血胤であつた)と歌  
ふその譯は、輔尹が  
尾張の兼時の娘の腹  
に生れた人であるか  
らである。主上はこ  
の歌を、御笛にお吹  
きなされるのを、高遠  
はお附添ひ申して  
「やはり調子を高く  
お吹き遊ばせ。輔尹  
は何の事とも、よう  
聞知りますまい」と  
申上げるを、主上は  
「どうして高く吹か  
れようか。さうはい  
うても、輔尹が聞知  
るだらう」と仰せら  
れ、ひそかにばかり  
お吹きなされるのを、  
この時あちらの御殿  
から、中宮の御方へ  
御出で遊ばして「こ  
こにはあの者(輔尹)  
が居ないわい。只今

延喜天曆以後、大略不絶事也、可通一曲、圓融一條、吉例ニテ、于今御笛代々御能也。○高遠の大貳  
關白藤原實頼の孫。參議齊敏の男。正三位大宰大貳に至る。長和二年薨す。年六十五。歌人。○御笛の  
師にて。高遠は主上の御笛の御師範にておはすと也。春註に禁秘抄を引き、「管絃、一條院十一歳、  
圓融院被傳申、然而大貳、高遠爲御師範。」(コノ文今本禁秘抄ニ見エズ、異本カ)○物し給ふを。主上の  
御前に侍ふをいふ。師にて物しと續くべからず。○こと笛二つして。「笛」の下、とを略けり。「こと笛」  
は異なる笛にて、こ、は高遠の笛をさす。主上の御笛と二つにてと也。○高砂。催馬樂の律の歌、高砂  
の曲なり。「たかさごの、さいさごの、尾の上にたてる白玉椿、玉柳、云々」。○をり返し。繰返すをいふ。  
○なほいみじうめでたし云々。甚しく面白しといふも、なほ普通の事なりと也。申様もなくよきをいふ。  
「なほ」は「よの常」にかゝる副詞。○御笛の事ども申し給ふ。高遠が主上の御笛を吹習はせ給ふへの注  
意など申さると也。○御簾のもとに集り出でて云々。傍輩の女房達と、御簾のきはまで集り出でて、笛  
の御稽古を見たてまつる折はと也。「みすのもとに」の下、人々とを略けり。○わが身に芹つみしなど  
我が身に不如意に覺ゆる事なしと也。綺語抄に「昔淺ましかりし賤の男の、この殿原の南面にて掃除せ  
しに、思掛けず御簾を風の吹上げたりけるに、いつき娘の、芹を食ひてありけるを見て、人知れずわり  
なく、志ありて思へども、かひなくてありけり。人知れずめし、芹を摘みありきけれども、この戀更に  
心にかなはで、止みにけり。云々」。この事、童蒙抄にも見ゆ。これにより、心に物のかなはぬ事を。芹  
摘むと、當時常にいひ習ひしが如し。狭衣にもこの語出でたり。文選の獻芹の故事は、物々しけれど遠  
ふべし。○すけた。尾張守藤原興方の子にて、中納言懷忠の養子となれる、藤原輔尹なるべし。尊卑  
分脈によれば、この人藏人を經て、木工頭從四位下、大和守に至る。父興方が尾張の在任中、尾張人兼  
時の娘に生まれし子ならん。○木工の允。木工寮の三等官にて、七位相當なれば、甚だ卑き官なるに、

そ高調子で吹かす  
と仰せられてお吹き  
なされる。それがひど  
く面白い。

權威ある六位の藏人に成りたると也。○なりにたる。の下、がを略けり。○あらわに。荒歸なり。その  
行爲の荒々しければ、しか結名したる也。一本あらはこそとある、あらはは露顯の意、こそは人名の下に  
つけて呼ぶ語にて、不遠慮なる趣をいへる結名とすべけれど、上に「あらわしければ」とあれば、荒歸  
の方勝るべし。○歌につくりて。その惡口を、殿上人の歌に作りてと也。○さうなしの主。左右無し  
主にて、並なき人の意。こは荒々しき方に並ぶ者なき主なる也。この句の下に、それもその筈を補ひて  
聞くべし。○をはりうとのたね。「をはりう」とは尾張人の音便。「たね」は血胤の意。○うたふは。歌ふ  
その理由はと也。○かねとかが娘の腹なり。輔尹は尾張の兼時が娘の腹なりと也。「腹」とは腹に出來た  
る子の意。○兼時。紫式部日記に「兼時がこぞまではいとつきくしけなりしを、こよなく衰へたる振  
舞ぞ、云々」。續古事談に「神樂の人長は近衛舍人のすること也。昔尾張の安居兼時、ねむとこの事に堪  
へたり。云々」。○これを笛に吹かせ給ふ。これを主上の笛にて吹かせ給ふと也。「これを」はこの歌の  
節をさす。○そひさぶらひて。高遠の主上に添ひ侍ひてと也。○なほ高う吹かせ。やはり調子を高く吹  
かせ給へと、高遠の主上に申上ぐる也。○え聞きさぶらはじ。輔尹は得聞知り申すまじと也。無骨者なれ  
ば、樂の音など辨へじと侮れるなり。○いかでかさりと聞き知りなむ。「いかでか」はいかでか高く吹  
くべきの略。「さりとも」はさは申してもにて、「え聞知りさぶらはじ」をさす。○みそか。ひそかに同じ。  
○あなたより渡らせ。假清涼殿の方より、北の御殿におはしましてと也。わが侍ふ北の御殿を本にして、  
主上の御殿の方を「あなた」といへる也。○この者なかりけり云々。「この者」は輔尹をさす。「なかりけ  
り」は不在なるをいふ。表御殿にては、藏人の侍ふ所近ければ遠慮し給ひたれど、この北の御殿はかけ  
離れたれば、この者なかりけりと、安心し給へる也。○今こそ吹かめ。「吹かめ」の上、高くを略けり。  
評 この段は長保二年二月廿日の事である。この翌月の三日に、翁丸花臺して、宮庭をゆるぎあるいた



のである。史に據ると、二月十二日に中宮は御子敦康親王をつれて、また入内なされたから、原文の十日とあるのは、一本の廿日とあるに従ふがよい。(主上御年廿一、中宮廿五、高遠五十二、輔尹采詳、清少卅五六?)

この前月の九日には、京にはめづらしい二尺からの大雪で、餘寒も一とほりではなかつたらしいが、さすがに如月もなかば過ぎては、春光陽和、午すぎの暖い日影を浴びて、西廂での笛の御稽古、女房達でなくとも、この有様を見奉る者は、身に芹つむ思がなくなるであらう。

囃物をして人をなぶるは、王朝時代にはよくあつた事で、季仲は「あな黒々、くるき頭かな」、忠盛は「伊勢平氏はすがめなりけり」と囃された類、みな殿上人等が、暇にまかせてのいたづらである。この囃の節を取つて、主上が御笛に吹かせられたのは、一時の御座興ながら、輔尹には聞かせまいと、遠慮遊ばされる所、自然奥ゆかしいなつかしい、御君徳が拜察される。高遠が「聞知り候はじ」といつたので見ると、輔尹はロクに物の音も聞分けな無骨者であつたらう。これが即ち他のハイカラな殿上人等に疎外され、嘲笑される所以である。

「輔尹は」から「みそかにのみ吹かせ給ふを」までは中間挿入の文で、過去の出来事を語つてゐるのである。うつかり續けて見ると、譯がわからなくなる。

この文を読んで第一に感ずるのは、今内裏の甚だ手狭に、簡略なことである。高が方一町の敷地だから、無理もないが、上文の「今内裏の東を、北の陣といふ」で、その大略が察せられ、翁丸の段の「門のほかにひき棄てつ」で、屏一重をとほ、すぐに往還であることがたしかめられた。又、一條院遣らせ給ひけるの段に、東門に向いた小廂に、主上の常におはしまして、物など御覽なされたとある。御殿はまた、本文に見えた趣、および翁丸の段に、主上の中宮の御方に渡らせられた様の御手輕さなどを思ふと、

いよく、狭いことがわかる。王室の式微と共に、諸事お手輕を喜ぶ傾向を生じて來て、表向と奥向との區別が、殆ど撤廢にも近いこの假御所は、珍しくも亦をかしくも思召されたのであらう。

### 二十六段

心ときめきするもの 雀のこがひ。ちごあそばする所の前わたりたる。よきたき物たきて、ひとり臥したる。からの鏡の少しくらき見たる。よきをよこの車とゞめて、物いひあないせさせたる。かしら洗ひけさうじて、香にしみたる衣着たる。ことに見る人なき所にて、心のうちはなほをかし。待つ人などある夜、雨のあし、風の吹きゆるがすも、ふとぞ驚かる。

○心ときめき 物に感動したる時、胸のドキ／＼するをいふ。○雀のこがひ 何となくはかなげにて、心配になるなり。「こがひ」は子飼なり。「子飼」の下、心ときめきするもの也を略けり。○ちごあそばする所の云々 乳兒を遊ばする前を通りたる也。その平和の氣分をかき亂さんことを恐る、也。或説に、乳兒の怪我などせぬかと氣遣ふなりといへるは非なり。「たる」の下、心ときめきするもの也を略けり。以下みな同じ。○よきたき物たきてひとり臥したる 上等の煉香をいぶして、獨寐たるは心地よくて、訪ふ人もあれかすと、心ときめくと也。○たき物 燒物の義。幾種の香を合はせ作りたる煉香をいふ。香木をそのまゝ、燒くは、後世の事なり。○からの鏡 唐の鏡にて、支那その他より舶來の鏡なり。その質當時の和製に優る。○くらき見たる さる大切なる鏡に、曇を見付けたるは喫驚せらると也。春註

(口譯)  
胸のドキ／＼の  
雀の子飼、乳兒を遊ばしてゐる前を通つたの、い、匂の薫香をたいて、一人寢たの、唐の鏡のすこし曇つたのを見付けたの、身分のよい男が、わが門前に車をとめて、従者を以て物をいひ入れ案内させたのは、いづれも心ときめきする。髪を洗ひお化粧して、薫香に染みつけた着物を着た時は、心ときめきするものである。別に見る人がない所でも、自分の心の中は、やはり愉快である。待つ男などのある夜は、心ときめきする



ものである。雨の脚を風の吹掃す音にも、待人がきたのかと、はつと驚かれるものである。

枕草子評釋

非なり。或説に、後にはいかに成行かんかといへるもいか。『くらき』は曇なり。『くらき』の下、をを略けり。「見たる」は見付けたるの意。○よきをとし、身分よき男なり。或説に、可成の男といへるは、よしとよろしとを混同したるもの也。○車とめて、わが門に車とめてと也。○物いひ、人して物いひの略。○あないせさせたる、案内を乞はせたと也。何用ならんと心ときめく也。○かしら洗ひ



(經寫古面扇) ふ洗を髪に水遣

髪を洗ふをいふ。髪を「かしら」といふは常のことなり。かしら付を見よ。○けさうじて、顔容をつくるひてと也。「けさう」は化粧の字音。○香にしみたる衣きたる、薫香に染みたる衣着たるは、心ときめくと也。古へは、薫爐に香を焚き、薫籠を覆ひ、その上に衣をかけて、香を焚きしめて着たりき。○ことに見る人なき所にても見人ある所ならば勿論、格別誰も見る人のなき所にてと也。○待つ人などある夜、の下、心ときめきするものにてを略けり。○雨のあし風の吹きゆるがすも、雨の脚を風の吹動かすもと也。雨粒を風の物に吹付くるをいふ。「雨のあし」は漢語の雨脚の直譯なり。雨の降行くをいふ。○ふとぞ驚かる、風雨の音にも、待つ人の來れる音かと、ハツと驚かると也。

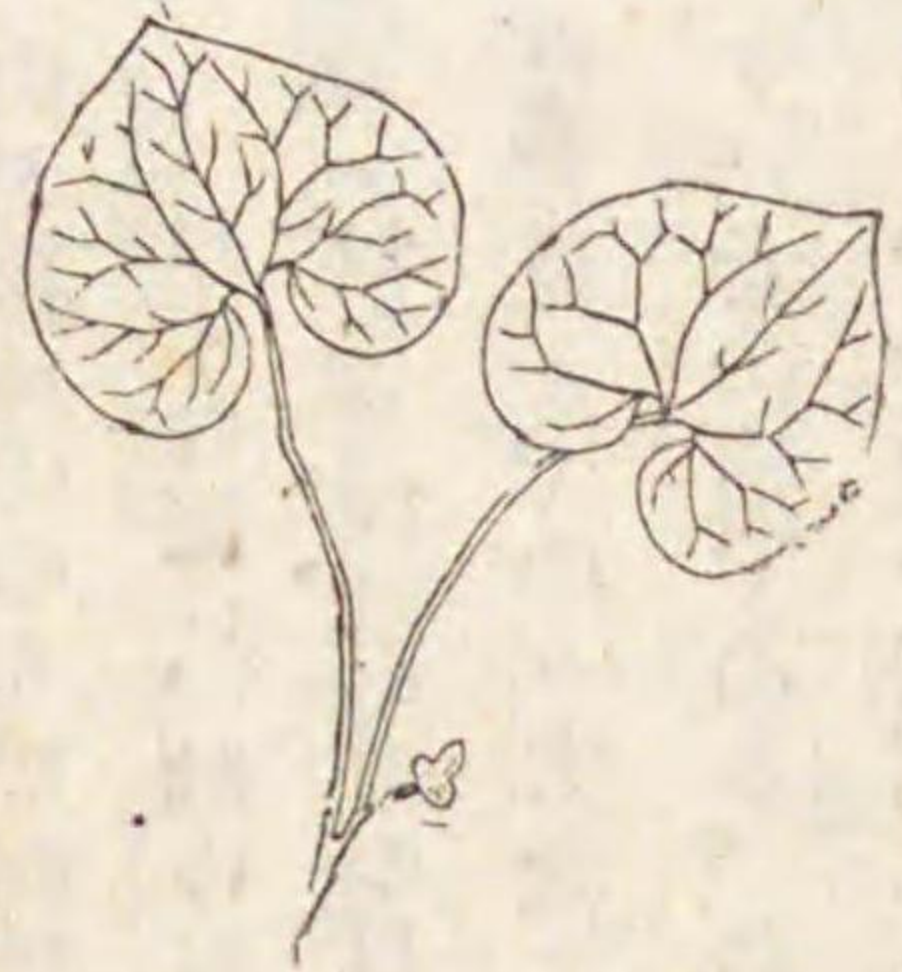
評 雀の子飼は、源氏物語や、扇面寫經にも見えて、子供の慰にした、その頃の流行物であつた。薫香上の趣味は、藤原時代がその頂點に達した時で、今の我々では、直覺的に、こゝにいふやうな感じが出てこぬ感がある。頭洗ふのは、あの長い垂髪では最必要で、しかもまた最臆動な仕事で、時には遣水に臨

み、涼みがてら河原に出てまで洗つた。されば洗ひあけた時は、實に氣が改つて嬉しかつたに違ない。とに角大抵、婦人の生活にもとついたりやさしい情調で、脂粉の氣が、紙面に漂つてゐるのが面白い。

二十七段

すぎにし方戀しきもの 枯れたる葵。ひ、な遊の調度。二藍、えび染などのさいてのおしへされて、草子のなかにありけるを見つけたる。又折からあはれなりし人の文、雨などのふりて徒然なる日さがしいでたる。こぞのかはほり。月のあかき夜。

釋 ○枯れたる葵 賀茂祭に用ゐたる葵の枯残れるに、面白き四月の祭思ひ出されて、戀しき也。「葵」は所謂二葉の葵にて、京都の上賀茂の神山より採來りて、祭の當日種々の調度に著く。柱簾などに掛けたる



葵 葉

は、無くなるまでその儘にして置くなり。葵のことは、なほ下文、草はの段の神代よりしてを見よ。以下句の切目毎に、過ぎにし方戀しきものなりを略けり。○ひ、な遊の調度 「ひ、な遊」は人形遊なり。「ひ、な」は雛にて、紙にても何にても作れる小人形をいひ、女兒の平生の手遊物とす。三月に飾る物となれるは後の事なり、「調度」は道具なり。○えび染 葡萄染なり。古代紫の極めて薄き色にて、衣服令の註に「紫色、最淺者也」と見ゆ。名義は野葡萄をえび蔓といふ。その實の色によりて付けたり。○さいで 裁端の布切をいふ。裂出、または裂妙の約轉とぞ。○おしへされて 押潰されてと也。○さうし 古今の草子を見よ。○人のふみの下、をを略けり。○かはほり 蝙蝠扇なり。地紙を骨の片面にのみ張りたる物。河海抄に「蝙蝠を見

(口譯) 過ぎ去つた昔の戀しきもの、枯れた葵、人形遊の道具、いづれも昔戀しいものである。二藍葡萄染の裁切がおしつぶされて、本の中にあつたのを見つけたの、又よこした折節の面白かつた人の文殻を、雨などの降つて退屈な日に、さうし出したのなどは、昔戀しいものである。去年使つた蝙蝠扇、月のあかるい夜、いづれも昔が偲ばれて戀しいものである。



て、扇を作り初めける也。夏の扇の惣名」と見ゆ。檜扇とは別なり。○あかき 明らかなり。

賀茂祭は、平安京第一の物見だから、その神事の象徴たる二葉葵は、祭過ぎてても、年月が経つても、床しい物に取扱はれて、それに就いた風流的話説は、殆ど枚擧にたへない。當時の上流社會の雛遊は、今のお雛様のやうな飾附を、常にやつてゐたらしい。源氏物語に、雛の家の事があり、又齋宮女御集に、ひいな遊に、神のおもとに詣づる女に、男出會ひて物いひなどす。

おなじ雛社の前の川に、紅葉のある所。

など見え、中々大業なものだつた。随つて残る道具の眼に觸れる物も多く、小兒の昔が懐しくなる。さすが女の情である。裁切が草子の間に挿まるのは、女でなくては、更に出會はぬ事件で、ふと見付け出して、衣裳を新調した折柄をしのぶ、その事その情、いづれも幽婉である。二藍、葡萄染は、當時の人の好尚にかなつた色合であつた。それは紫を基礎色としたからである。「人の文」は、徒然草に、これを潤色したのがある。兼好法師も同感と見えた。扇は折に觸れて、新規につくるを興とした時代だから、古扇は昔をしのぶよすがとなるのである。月に往事を思ふことは、文獻上では、支那文學の將來した思想のやうであるが、元來どの民族でも固有してゐる感情だらうと思ふ。

この文、名詞止の双頭で起り、おなじ双尾で結び、中間また、長句の中止法で對句を作つて、齊整簡約な體裁である。しかも内容は、極めて柔いなつかしい情調が籠つてゐる。

二十八段

心ゆくもの よくかいたる女繪の、詞をかしよう續けて多かる。物見のかへさに、乗

(口譯) 氣持のよいもの 上

手に描いた女繪の繪卷の、詞が面白く續けて、澤山書いてあるのは、氣持がよい。祭見物などの歸りに、車にはみ出すほど、多人數乗つて、牛を上手に使ふ牛飼が、その車を走らしたの、氣持がよい。白く綺麗な檀紙に、極めてほそくは書けさうもない筆で、もつて、文を書いたのは、氣持がよい。川舟の下つてゆく時、早くて氣持がよい。お齒黒のよくついたのは、氣持がよい。双六の調半に、調目をおほく打つたのは、氣持がよい。綺麗な絲の練りぐりして繞つたのは、氣持がよい。辯口のいい陰陽師を頼んで、河原に出て、咒詛のお祓をしたのは、氣持がよい。夜寢起きに飲む水は、氣持がよい。

りこぼれて、をのこどもいと多く、牛よくやるもの、車はしらせたる。しろく清げなるみちのく紙に、いと細う書くべくはあらぬ筆して、文書きたる。川舟のくだりざま。齒ぐるめのよくつきたる。てうばみにてう多くうちたる。うるはしき絲のねりあはせぐりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出て、すその祓したる。よる寝起きて飲む水。つれづれなる折に。いとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたり、この頃あることをかききも、にくきも、怪しきも、これにかかり、かれにかかり、公私おぼつかならず、聞きよきほどに語りたる。いと心ゆくこゝちす。社寺などにまうでて、物申さするに、寺には法師、社には禰宜などやうの者の、思ふほどよりも過ぎて、滞りなく聞きよく申したる。

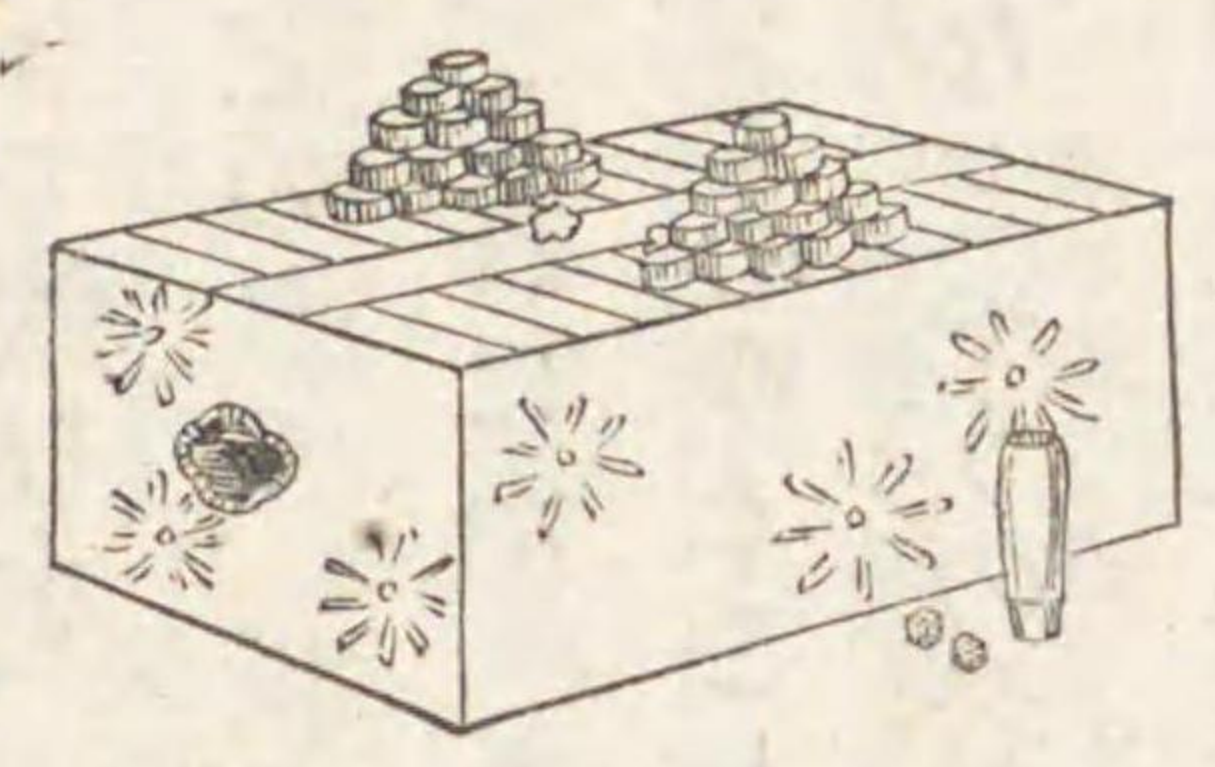
(考異) ○社には 原本社にてとあり。活本による。

○心ゆく 俗の氣ノ、ユクと同じ。氣持のよきこと。轉じては満足するの意に用ゐる。○女繪 女の姿を描ける繪なり。源氏物語に「をかしかける女繪どもの、戀する男のすまひなど描きませ」とあり。その他榮花物語、紫式部日記などにも見えたり。これに對して、男の姿を描けるを男繪といふ。榮花物語に「男繪など、繪師恥かしようか、せ給ふ」。又「男繪女繪とかきたるに」とあり。草畫又は春畫なりといへる説はいかゞ。○詞をかしよう「詞」は畫中の趣を説明する文なり。これを畫詞といふ。○かへさ 歸るさと同じ。○乗りこぼれ 車に乗りこぼるゝ也、數多乗合ひて、簾の下より、衣などのこぼれ出たるを



退風な時分に、さう大して悪意でもない、といつて疎くもない客人がきて、世間話を、この頃の出来事の面白いのも、いやなもの、怪しからんのも、これにつけ彼につけて、公私一とほり不明瞭な所なく、聞まい程に話してくれたのは、氣持のよい感じがする。社や寺などに参詣して、祈願させるのに、寺では法師、社では禰宜などのやうな者が、想つた程よりも勝つて、すらくと聞きよく、願意を申述べたのは、氣持がよい。

いふ。○をのこども 車副くるまのへの侍達なり。○牛よくやる者 牛を上手に遣ふ牛飼なり。○みちのく紙 檀たん紙なり。狩谷接齋の説に「檀木たんのぎの皮にて造る故に、まゆみの紙と名づく。陸奥より出づる故に、みちのく紙ともいふ」。又貞丈は、檀紙とは別にて、楮の皮にて厚くすきたるものといへり。○いとほそう書くべくはあらぬ筆 細くかけさうもなき筆、即ち太筆ふちまきなり。○文書きたる いと細く文書きたるの略。○齒ぐろめ お齒は黒なり。和名抄に「今婦人有黒齒之具」と見え、源氏物語、榮花物語、堤中納言物語等にも見えたり。村上帝時代の藤原元眞の歌集に、北の方齒黒めの墨をといふ詞書あり。さては清少の頃も、この齒黒め墨を以て染めしならん。この物、鐵漿てつじやうとおなじ物か否かは明かならず。但早くより大抵附子鐵漿ていしをつけたり。○てうばみ 丁半てうはんの音便。もと本双六ほんすわろくは賽二箇ありて、二箇とも同じ目に揃ひて出づるを調、調目、揃目そろめなどいひ、「半」はその揃はぬをいふ。丁の字はあて字。○てう多く打ちたる 調目をおほく打つ時は勝つゆゑ、心ゆくなり。○うるはしき絲の云々 「うるはしき絲」は精選したる絲なり。「ねりあはせぐり」は二節を一筋に合はせて、練練ねねしたるなり。○物よくいふ 辯舌のさはやかなる也。○陰陽師 オンヤウジ。オンミヤウジ。職員令に、占筮相地を掌るとありて、祓除祈禱の業をも兼ねたり。○河原に出で 祓除を水邊にてするは、すべての罪穢を、行く水にまかせて、根の國に流しやる義なり。この事、大祓の祝詞に見ゆ。○すそのはらへ 咒咀の祓なり。人に呪はれたるを禳ふなり。「すそ」は咒咀の字音。○よる寝起きてのむ水 の下、など心ゆくものなりを略けり。○むつましくはあらず 次に「疎くもあらず」とあれば、こゝも睦しくも對すべきに似たれど、睦しくはあらず、さりとて疎くもあらずと解すれば、この儘にてよかるべし。○この頃ある事 この頃世間にある事なり。○これにかゝり彼にかゝり 此に



六 双

つけ、彼につけと也。「かゝり」は關り合ふなり。○おほやけわたくし 公私の事の略。○おぼつかなからす 不明瞭ならずと也。おぼつかなしを見よ。○物申さするに 神佛にむかひて、おのれの祈願を代辯せしむるにと也。○禰宜 ネギ。神官なり。記に祈の字をネギと訓めり。願ひと同じ。さて神に乞願こひねぐ業を旨とする者を、禰宜と呼べり。○思ふほどよりも わが思ふほど合よりも優りてと也。「思ふほど」は豫想なり。○申したる の下、心ゆく心ちを略けり。

評 繪卷物の地の文の分量を多かれと望んだのは、文筆ある清少としては、さもありさうな事であるが、想ふに、繪卷物の多くが、繪を主とする爲、地の文が極めてすくないからだらう。物見の事は「歸さ」とあるに、注意するがよい。往路こそ行粧を繕うて、ゆるやかに遣るが、歸路には、その必要がないから、一散に走らせるのである。この牛車を走らせるといふ事が、また興味のある事だ、若し君達などは、祭のかへさに、紫野あたりを、括の緒は土につくほど、前板に指貫ふみしだいて、思切つて走らせたものである。又牛飼の手腕を示すものとして、随分往來で競争することも行はれ、牛も随つて逸物を選んだから、いざといふ場合には、決してのろくしたものではなかつた。本文は女車に就いていつたものと見えるが、こんな荒つばい男めいた事が好であつたのを見ても、清少の性格は、ほゞうかいはれるではないか。従者の數は、延喜式に明かにその規定があるが、一條朝時代には式制を破つて、清少位の連中でも、勝手に多人數の供を召連れたものと見える。太筆に墨をタツブリ含ませて、厚つばい檀紙に、細目にかくのは、筆のはしりが快い。練ぐりの色絲は、男が見ても氣持がよい。

咒咀調伏は、その頃一般の迷信的流行で、弱者が强者に對する、唯一の報復手段であつた。それは贖物を埋め、祕法を修して祈禱する、頗る大業な、本式のものも多かつたが、また不用意の談話でも、すこし忌諱に觸れる類は、咒咀と見做されることがある。小説ではあるが、空穂物語に、



政時何心なく、げに怪しく大將殿のまわり給はぬは、惱み給ふことやあらむと申ししは、上野の宮大に驚き給ひて、「かの大將を仇にて、すそし奉るなり。さても人のるふ人は、三年に死ぬるなり。大將聊の足手の恙もあらば、朝臣(政時)のすると思はむ」と、いと切に怨じ給へば、云々。

必ずくる筈の人がこぬ場合には、心配して「病氣ではないか」とは、今も常に人のいふことである。それをも咒胆だと怨むに至つては、その神経過敏さに驚かれるではないか。随つて咒はれた者は、非常に神経を悩したものだから、その御被に物をよくいふといはぬとでは、大に米櫃に影響すること、陰陽師等の、殊に大事とつとめることであつた。禰宜のは祝詞、法師のは表白願文である。それも辯口次第で、御利益に厚薄のあるやうに感ずるのは人情である。

寢起には、口熱があるから、冷水が旨からう。道隆公記に、清少大酒の評判があるから、酔醒の水としても面白からうが、やはり穿鑿過ぎると思ふ。女繪を枕繪と解し、これを酔醒の水ときめられては、流石のお狭も、啞然とするだらう。新聞もない時代とて、世間の咄の上手や、座談の名人は、特に歓迎されたに違ない。睦しくも疎くもない客人と限つた所に、清少の氣分を重んじた物好が見える。

二十九段

檳榔毛はのどやかにやりたる。いそぎたるはかるくしく見ゆ。あじろは走らせた。人の門より渡りたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、たれならむと思ふこそをかしけれ。ゆるくと久しくゆけば、いとわるし。牛は額いと

(口譯) 檳榔毛の車は、ゆつくり引かせたのがよい。急いで遣つたのは、軽々しく見える。

ちひさく、しろみたるが、腹のした、足のしも、尾のすそ白き。馬は紫のまだらづきたる。蘆毛。いみじう黒きが、足肩のわたりなどに白きところある。うす紅梅の毛にて、髪尾などはいとしろき。けにゆふかみともいひつべし。牛飼はおほきにて、髪あかしらがにて、顔の赤みて、かどくしげなる。雑色隨身はほそやかなる。よきをのこも、なほわかきほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからむ人と思はる。小舎人はちひさくて、髪うるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞらうくじき。猫はうへのかぎり黒くて、ことは皆白からむ。

(考異) 白きところある ちひさく、しろみたるが、腹のした、足のしも、尾のすそ白き。馬は紫のまだらづきたる。蘆毛。いみじう黒きが、足肩のわたりなどに白きところある。うす紅梅の毛にて、髪尾などはいとしろき。けにゆふかみともいひつべし。牛飼はおほきにて、髪あかしらがにて、顔の赤みて、かどくしげなる。雑色隨身はほそやかなる。よきをのこも、なほわかきほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからむ人と思はる。小舎人はちひさくて、髪うるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞらうくじき。猫はうへのかぎり黒くて、ことは皆白からむ。

○髪尾などは 原本などもとあり。活本による。○らうくじき 原本りやうくじきとあり。古本による。

○檳榔毛 檳榔毛の車の略。貴人の乗る正式の車なり。蛙抄に「親王以下束帯直衣共乗之」。委しくは上出。○やりたる やりたるがよしと也。「やり」は車を運轉せしむしむること。○あじろ 網代車の略。網代にて外部を背ける車にて、褻の時に乗る。「網代」は檜皮を細く割きて、これを組合はせ、そのうへを漆にて塗る。竹の網代もあり。蛙抄に「多者直衣之時乗之。又褻時若遠所之時、着束帯、差綱乗之」。(附圖参照) ○走らせたる の下、がよしを略けり。○人の門より渡りたる わが門前を通りたる也。「人の」は軽く添はれる語にて、今も他に對するものある時、わが家を人のウチといふは常なり。「より」はをにかよふ辭なり。土佐日記に「水底の月のうへより漕ぐ船の棹にさはるは柱なるらむ」。

網代車は走らせのがよい。人の門前などを通つたのを、ひよいと見やる間もなく通り過ぎて、お供の人ばかりが驅けて行くのを、車の主は誰だらうと思ふのが面白い。ゆるくと手間取つて行くと、不似合で甚だわるい。牛は額が小さく、其處の毛の白けてゐるが、腹の下や足の先や尾の端が白いのがよい。馬は栗毛の駁のあるのがよい。葦毛もよい。極めて黒い馬が、足や肩の邊などに、白い所のあるのもよい。又薄紅梅色の毛で、立髪や尾などは大層白いのがよい。いかにも木綿髪ともいへる。牛飼は大柄で、髪が赤毛で、顔が赤らんで、さも氣の利いたやうなのがよい。



雑色や隨身は細つそりしめるのがよい。身分柄の家來も、やはり若い間はさういふ瘦形の方がよい。ひどく肥えたのは、定めし眠たうらうと見える。小舎人童は小柄で、髪美しいのが、その髪先が、さらりとさげけて、聲がよくて、相手を敬つて物などいつてゐるのが、功者らしくてよい。猫の脊の全體が黒くて、ほかは皆白からうのはよい。

宇津保物語に「この俊蔭の家の前より詣で給ふ」、後拾遺集に「門の前より忍びて渡り侍りけるを」など例多し。○たれならむ 車に乗れる人は誰ならんと也。○久しくゆけば 長くかゝりて往けばと也。○腹のした 腹といふに同じ。○足のしも 足の下部。○尾のすそ 尾の先。○白き の下、がよしを略けり。○紫のまだらづきたる 栗毛の駁あるをいふ。和名抄に「紫馬栗毛馬也」とあり。「たる」の下、がよしを略けり。○葦毛 アシゲ、青白相まじりたる毛色なり。葦の花毛ともいふ。和名抄に「漢語抄云、駿青馬也、黃駿葦花毛馬也、日本私記云、駿馬、美多良乎宇末、青白雜毛馬也」とあり。又同抄に「葵をよめり。葵は葦の初生をいふ。この下、よしを略けり。○白きところある 下に、よしを略けり。○薄紅梅の毛 薄赤毛なり。櫻色に近し。○髪 鬘なり。○いと白き 下に、よしを略けり。○ゆふかみ 木綿髪なり。八雲御抄に「馬の髪白き也」とあり。木綿は楮にて製せる布にて、その色白ければ譬へたり。○牛飼 牛使なり。大人にても童形なれば、牛飼童といへり。○あかしらが 髪赤毛になりたるをいふ當時の語なり。赤毛と白毛と雜れるにはあらず。○かどくしけなる 氣の利きたる様子なるがよしと也。「かど」は才、藝、はたらきなどの意。日本紀に才をよめり。○雑色 ザフシキ。名義は無位の人にて、袍色の定なき者をいふより出づ。こゝは公卿の召仕へる車副の侍なり。寮司の下役人にも雑色あれど、そは良家の子にして別なり。○隨身 ズキジン。朝廷より官吏のたまはる護衛兵にて、近衛の將曹、府生、番長、舎人等が勤仕する也。その員數は後世のものながら、弘安禮節に「太上天皇十四人、攝政關白十人、大臣大將八人、納言參議六人、中將四人、少將二人、諸衛督四人、同佐二人」とあり。この規定外の官吏には、隨身なし。(附圖參照)○ほそやかなる 瘦ギスなるがよしと也。○よきをのこ 然るべき身分の家來。○ことねり 小舎人童ともいふ。小供の舎人の義にて、身分ある人の召使へる童なり。花鳥餘情に「中少將の召具する童を、小舎人といふ」とあり。藏人所に奉仕する小舎人とは

別なり。○すそさわらかに 「すそ」は髪先の先なり。「さわらかに」は毛が結ばれず、サラリとさげけたるをいふ。濱臣いふ、さわやかと同語と。○かしこまりて 畏敬の態あるなり。○らうくじき 勞々にて、功者なるをいふ。「勞」に功勞の意。○うへのかぎり 背筋の總體なり。○ことは 異はなり。ほかはいふに同じ。○白からむ の下、よしを略けり。

檳榔毛は晴の車、網代車は曇の車であり、また構造上にも、大小精粗の差があるから、重々しげな檳榔毛はゆるく、軽々しげな網代は早くとは、誰も心には思つてゐた事らしいが、清少に先手を打たれた氣味がある。「人の門」から以下は、面白い描寫である。車は過ぎて、供の者ばかりおくれで走る。その早さ、その様、見るやうではないか。「誰ならむ」の閑想像、僅にこの一句を著けて、前文がいよく活きてくる。後白河帝の頃は八百臺もあつたといふが、まだこの頃は車臺數の少かつた事實が、これに依つて、間接に證明される。「ゆるく」と久しくゆけばの一句は、惜しいかな蛇足。

次に車に關聯して、車牛をひき出した。苟も上流社會に生活して、車に乗つてある程の身分の者は、男も女も、牛に對して、相應の鑑識と趣味とをもたぬ者はなかつたらしい。後の事ではあるが、大臣で斯道の専門家さへ出來たほどである。駿牛繪詞に、

やり入れられて、逸物の名を取りぬる後は、繩一つにて、思ふやうに振舞はせて、主をば牛好みとも、牛飼をば遣手とも申侍りし。

とある。額の小さく白いのをよいとするのは、同書に「面瘦せたるが、額けさやかに白きに」と名牛の容體を叙べたのと一致する。中世以降の繪畫に現れたのも、額は割に小さい。さては單に清少一己の物好と見てはならぬ。駿の好みは、猫の斑に「うへの隈は黒くて」といつたのに共通してゐるから、これは清少の嗜好であらう。

車に乗らぬほどの者は勿論、身分のある者でも、行幸の御供や遠出や御使など、馬に乗る機會が多か



つたから、婦人も相應に、馬に興味をもつたものらしい。但こゝに毛色ばかりをいひ立てたのは、所謂皮相の見で、印象が甚だ淺い。

牛飼の大柄に、日焼した赤ら顔は、牛そのものと相俵つて頼もしさうであり、これに對して、瘦ギヌの雜色隨身は、立はしり自在で、かひなくしさうである。太つた男を眠さうだと評したのは、面白い觀察であり、また皮肉である。小舎人に髪を好むをいつたのは、垂髪で、人目につくからである。女の評を移していつたのではない。他は可愛らしく小まめなのをいゝとした。

要するに調和上の美に就いての理想であり、希望である。しかし一二の項を除いては、全體に當代の好尚を語つてゐるものである。

三十段

説經師は顔よき。つとまもらへたるこそ、その説く事のたふとさも覺ゆれ。ほか目しつれば、ふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らむと覺ゆ。この詞はとゞむべし、すこし年などのよろしきほどこそ、かやうの罪は得がたのことば書き出でけめ、今は罪いとおそろし。

○説經師 セキヤウジ。佛法の要義を講演する僧。僧の中にも講學、修驗、練行、説經など、各その専門を分てり。○顔よき 顔の美しきがよしと也。○つとまもらへたる 「つと」は俗言のジツトに當る。「まもらへ」は目守へにて、守るの延言なり。見詰めらるゝをいふ。○ほか目しつれば 上に僧の顔

(口譯) 説經師は顔の美しいのがよい。美しさにしつとその顔の見詰められたのが、自然注意がひかれるから、その説經の尊さをも感ずる。顔がわるい説經師だと、つい餘所見をするから、聞いた事も、ひよつと忘れるので、

説經師の顔のわるいのは、聽聞者が、不信心の罪を得ようかと思はれる。いやこんな事をいふのはよさう。かなり年などが若い時分こそ、かやうな罰の當りさうな詞は書出しもしたであらう。今は年取つてゐるので、罪を得るのが、ひどく恐ろしい。

の。にくげなる時はを補ひて聞くべし「ほか目」は餘所見なり。○ふと忘るゝに その説く事を、ふと忘るゝに也。「に」は、によりての意。○にくげなるは 僧の顔の醜けなるはと也。○罪や得らむ 聽聞者が不信心の罪を得んかと也。○この詞はとゞむべし 「この詞」とは上の説經師の美醜問題をいへるをさす。「とゞむべし」は中止すべしと也。○年などのよろしき程 年齢などのよい加減の時分と也。「よろし」は例の可成の意にて、こゝは年のかなり若きをいへり。○罪は得がた 上の詞は十戒の中の邪淫、妄語、惡口などにあたる故なり。「得がた」は得方なり。○今は 年寄りたる今はなり。○罪いとおそろし 破戒の罪が、後世安樂の妨になりもやすると思はれて、恐ろしと也。

評 色即是空の法談に、僧の美醜を問題とするに至つては、あまりに奇矯である。暇さへあれば、佛いぢりに日を暮した當時において、こんな思ひ切つた告白をした、その大膽さに呆れざるを得ない。これは殊更に、因習に反抗しようとしていつた譯でもない。たゞ深い信仰心を缺いてゐる爲、演藝を観ると同様な氣持で、説經を聴くことになるものだから、測らず、顔がわるいと餘所見をするなどといひ出されるのである。しかし、これが全く正直のところ、却つて世間の所謂信仰者の方に、人ぞめきの虚偽の行爲者が多かつたらしい。次の章がその事實を證明してゐる。とはいへ時勢が時勢で、世間體をつくらふ爲にせよ何にせよ、「今は罪おそろし」の一語をいはずに居られない所に、因襲の力のおそろしさも、人間の弱さも見え、清少の性格も、そこに現れてゐる。

たふとき事、道心おほかりとて、説經すといふ所に、さいそにゆきぬる人こそ、なほこの罪のこゝちには、さしもあらでと見ゆれ。藏人おりたる人、昔は御前などいふこともせず、その年ばかり、うちわたりには、まして影も見えざりける、今はさし

(口譯) 又あの法師は尊い事よ、道心が一方ならぬといつて、その説經するといふ所



に、一番驅に往つた人は、やはりこの罪を得さうな心持からは、そんなにもしないでよからうと思はれる。藏人を退官した人、その人は、昔は行幸に御前驅などいふこともせず、退官した年だけは、餘所よりはまして影も見えなかつた。今ではさうでもないやうである。藏人の五位といつて、その退職者なれば、禁中で忙しく召使ふけれど、在職中が非常な多忙だつた名残で、やはり手持無沙汰なので、自分の心だけでは、暇のある氣持がするやうであるから、そんな説經場で、一兩度、説經を聴きはじめる、何時も參詣したくなつて、夏などの暑い時にも、下着の

もあらざめる。藏人の五位とて、それをしもしそがしうつかへど、なほなごりつれづれにて、心一つはいとまあるこゝちぞすべかめれば、さやうの所にて、一たび二たび聴きそめつれば、常にまうてまほしくなりて、夏などのいと暑きにも、かたびらいとあざやかに、薄二藍、青にびの指貫など、ふみちらして居ためり。烏帽子に物忌つけたるは、けふさるべき日なれど、功德のかたにはさはらずと見えむとにや。いそぎ來て、その事するひじりと物語して、車立つるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しくあはざりける人などのまうてあひたる、めづらしがりて、近く居より、物語し、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇ひろうひろげて、口にあて、笑ひ、装束したる珠數かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、なにがしにて、その人のせし八講、經供養などいひくらべ居たるほどに、この説經の事もきゝ入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺えぬにこそはあらめ。

〔考異〕〇さしもあらでと見ゆれ、との字、古本によりて補ふ。〇さやうの所にて、原本さやうの所にいそぎゆくをとり。抄本による。〇青にび、原本青にぶとあり。

〔釋〕〇たふとき事道心おほかりとて、かの説經師は尊き事よ、道心多くありといひてと也。「道心」は菩提心にて、佛果を求むる心をいふ。〇説經すと云々、その説經師の説經するといふ所にと也。〇さいそ

帷子を、大層あざやかに拵へて着て、薄二藍や、青鈍色の指貫をはき散して居る様子である。烏帽子に物忌の簡を附けたのは、今日はさうした忌目であるけれど、功德の方の事には、その儀もしないといふ譯かしらん。急いで來て、説經する上人と話をして、後からくる人の、車(女車)を据ゑるのをさへ目をつけたりなどして、何かにつけて、氣を配つた様子である。久しく逢はなかつた人などの參り合はせたのを、珍しがつて、側近くすり寄り、何かいうてうなづき、をかしい事などいひ出して、扇を廣くひろげて、それを口に當て、笑つたり、飾をした數珠をいぢり廻し、お

最初の字音。初をソと讀むは吳音なり。〇この罪のこゝち、清少自身の罪得がたの心ちなり。前の「罪や得らむ」を承けたり。〇さしもあらでと見ゆれ、「さしも」は説經場に最初に往くをさす。「あらで」の下、あれかしを略けり。「見ゆれ」は思はるといふにおなじ。〇藏人おりたる人、藏人を罷めたる人なり。六位の藏人は、六箇年の任期満ちて罷むる時は、必ず五位に叙せらる。これを巡爵といふ。六位にても、藏人なれば殿上すれど、五位になりても、藏人を罷めては、地下になる故に、罷むるを「下る」といふ也。なほ藏人を見よ。〇御前、ゴゼン。御前驅の略。行幸の折、馬にて前驅する也。〇その年ばかり、藏人を罷めたる年だけはと也。〇影も見えざりける、藏人を罷めたる者は、もとの地下に返りて、勢力も無くなれるを恥ぢて、その當座は、あまり世間に顔出しせず、まして、禁中には影も見えぬと也。〇さしもあらざめる、さもなき様子なりと也。藏人罷めたる年も、やはり禁中へ參るをいふ。上の「見えざりける」も、この「あらざめる」も、下によの歎辭あるものとして解すべし。〇藏人の五位、五位藏人と混すべからず。五位藏人は現任なり。藏人五位は退職者なり。職原抄に「六位藏人四人、重代、諸大夫中、不放埒、有器量之輩補之、地下諸大夫多以之爲先途、雖五位已後、以藏人五位爲規模之故也」。〇それをしもぞ、「それ」は藏人の五位をさす。「しも」は強むる辭。〇いそがしう仕へど、御前その他の御用に、いそがしく召使へどと也。〇なごりつれゝにて、いかに忙がしう召使はるとも、當官の折とはちがひて暇なれば、在職せし名残には、徒然に感ずとなり。〇心一つはいとまある、餘所目には忙がしさうに見えても、當人の心の内だけは、暇があると也。〇さやうの所、上の「説經すといふ所」をさす。〇聴きそめ、説經を聴初むる也。〇帷、カタビラ。布にて仕立てたる汗取の帷子なり。形は單に似て、すべて小さく短し。中古は夏のみ、單の下に重ねて着たりき。西三



もちやにし、あちこち見廻しなどして、庭前に立てた車のよしあしを褒めたり誇つたり、何處やらで、誰それのした八講や經供養などを較べて批評したりしてゐるうちに、もう始まつてゐる説經の事も、耳にも入れない。何の、何時も聴くことであるから、耳馴れて、珍しく思はれないのであらう。

條裝束抄に「紅に染めたる大帷なり。夏秋これを著る。老人は白なるべし」。○あざやかに 紅白いづれにも通ずべし。○薄二藍 二藍の淺き色。○青にび 濃き縹色と、飾抄、胡曹抄等に見ゆれど、伊勢貞丈説に「鈍色は薄墨色、俗にいふ鼠色なり。これに移花を加へて、青氣を添へたるを、青鈍といふ」とあるに従ふべし。○踏みちらして 穿散すといふに同じ。或説に、殿上にある時は、指貫の裾の紐を解きて長袴とする故に、踏散すなりといへるは迂遠なり。○物忌の簡を附けたると也。なほ物忌を見よ。○さるべき日云々 さやうに物忌して慎み居るべき日なれどもと也。○功德の方には云云 佛法功德の爲には、物忌の愼をも憚らずとにやあらんと也。熱心なる信者と思はせんとする野心あるをいふ。「功德」は佛語にて、積善または修道の手柄をいふ。「障らず」は障とせずの意に用ゐらる。○その事するひじり 説經する僧をいふ。「ひじり」は日知の義にて、天子の上にいふ敬語なるより、聖の字を訓めるが、轉じて哲人清僧を稱することとなり、更に僧侶の敬稱となれり。こゝもその意なり。○車立つるさへぞ見入れ 「車立つる」は車を据ゑること也。こゝは婦人連が屋内には入らで、車に居ながら聽かんが爲に、車を庭前に立つる也。「さへぞ見入れ」は説經師と話してをりながら、車を立つるまでも目を著くると也。○ことにつきたるけしき 何彼の事に氣を附けたる様子なりと也。濱臣は、言に盡きたるの意として「最初に來りし故に、もはや話も盡きて見まはしをる也」といへり。これも聞ゆべし。また本居内遠いはく「車はこの藏人の車なり。車立つるさへぞは、他人よりはよき場所取りて、殊更に見ゆる意なるべし。見入れは外よりの見榮のこと也。物語してにて切りて、車立つるは又車のことといふ也」と。これも一説ならん。○まうであひたる 偶然こゝに參り合はせたるをと也。○近く居寄り その知人のそば近くすわり込むと也。○さうぞくしたるす、裝束したる珠數なり。「裝束したる」は飾をしたるにて、金銀珠玉にてする也。大鏡に「紫檀の御珠數の、水晶の御さうぞくしたる」。○かいま

さぐり云々 弄びにし、手なぐさみにしと也。おなじことを重ねていへるまで也。「かい」は接頭語。「まさぐり」は、垂仁紀に弄の字を訓めり。○何がしにて 某所にてと也。○その人の 或人のなり。八講、經供養など發願して營める人をさす。○八講 法華八講の略。延曆十五年大和の石淵寺の勤操、これをはじむ。法華經八卷を、朝夕二座に、一卷づつ講じて、第四日目に結願す。即ち八座なり。その講すること、一卷を悉く講ずるにはあらず。その要文を取りて、問答講釋するなり。問ふ者は問者、答ふる者は講師なり。講師の解論、白地に通ぜざる時は、おし返して難詰す。講師辭屈して閉口すれば、判者出でてこれを捌く。この判者を證 誠といふ。この他讀師、咒願、散華等の諸役あり。一座ごとに役者を替ふ。また法華八卷に、開結二經の二座を加へて、五日に修行することもあり。經の五卷目を講ずる日を中日として、特別の法要あり。八講行はれてより、十講三十講、相次いで出づ。○經供養 キヤウクヤウ。何の經にても寫し、又寫させもしたるその功德を、所願に廻向せんが爲に、供養するをいふ。「供養」とは佛法僧の三寶に對し、堂舎を壯嚴にし、讀經禮讚をなし、飲食衣服を進むるをいふ。○なにかは 何かは怪むべきの略。聞かずとて何の不思議もなしといふが如し。

さはあらで、講師あてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とどめておる、人、蟬の羽よりもかるげなる直衣、指貫、すゞしのひとへなど着たるも、狩衣姿なるも、さやうにてわかかくほそやかなる二四人ばかり、さぶらひのもの、又さばかりして入れば、もと居たりつる人も、すこしうち身じろぎくつろぎて 高座のもと近き、柱のもとなどにすゑたれば、さすがに珠數おしもみなどして、伏しをがみ居たるを、講師

(口譯) 又そんな藏人の五位のやうな風でなくて、講師が高座にすわつて、暫く經つと、警蹕の聲を、一寸申譯ばかりにかけさせた車を止めて下りる人は、蟬の羽よ







る氣になるのは、今の退職の軍人達が、あやしげな教會などの信者となるのと、動機が似てゐる。況や佛教全盛時代だから、それでなくとも、佛參や説經場廻りはなくてはならぬ時風であつた。

藏人の五位のしたり顔な動作よ。藏人だつた名残をほこる僭上がましい直衣姿、厭味らしい烏帽子の物忌、信心らしい飾付の珠數、これだけでも澤山だのに、わざ／＼「その事する聖」と殊勝らしく話をしながら、女車をふり向いたり、又は知人との饒舌に、うるさくキイタ風を振廻したりして、肝腎の説經聽聞は、お留守となつてしまつてゐる。この五位殿の對照として描かれた貴人は、珠數おし揉んで禮拜はするもの、おそく來て早く去り、一寸二言三言、女車の噂をするやうで、それも大した熱心でもないらしい。この程よくアツサリしたのを是とし、かのシツコクこちたいのを非としてゐる。清少が人事美の理想とした所は、まづこんなものである。

さて信仰心の方から見ると、是とした貴人も、非とした藏人の五位も、講師も聽衆も、共に一向價値のない者である。當時は佛教の勢力が、絶頂に達して、堂塔建立は、年月を逐つて盛に、佛事法要は、日もこれ足らぬといふ觀はあつたが、その信仰は、宣傳者も被宣傳者も、却つて奈良時代に見るやうな狂熱を缺いて、徒に皮相に着し、形式にとらはれ、因習的に流れて居つた。その佛事は莊嚴を粧ひ、繁華を銜ふまでの事で、つまり體のよい、一種の虚榮である。その説經はいかで聞傳ふばかりと意氣込んで、單なる口舌の技術者に過ぎないので、貴人の一拜を、無上の名譽と心得る外に、何も無い。參聽者もまた、第一著に詣でてからが、喝潰しの爲に過ぎぬ藏人の五位のやうなのがあり、珠數おしもむも、ほんの人間をつくらぬに過ぎぬ、或貴人のやうなのもあつて、心から無常を觀じて、この世の濁を濯がうといふ者は無い。たゞ社交的に顔を出して、義理一遍の隨喜の涙をこぼすにとゞまつてゐる。こんな風では、到底同化の境に入らないから、見聞に隨つて、批評を試みる餘裕のあること、貴人も藏人の五位

も、また清少自身も、皆同じである。

服裝を叙して、藏人の五位と貴人との人品の高下を點出したのは、例の時代思潮である。貴人の參詣に、人達の席を譲るのは、さすがに階級觀念の強かつた時代の現象と見られる。

この文「さはあらで」を轉換の楔子として、反對の内容をもつた二篇を合掌させたものである。さて輕薄な貴人の態度も、相應に描かれてはあるが、驕慢な藏人の五位のは、描寫が一層微細にわたつて、筆筆活動して印象が深刻である。清少はひどく、それを憎らしく感じたからであらう。

「そこに説經しつ、八講しけり」など人いひつたふるに、「その人はありつや」、「いかゞは」など定りていはれたる、あまりなり。なかはむげにさしのぞかてはあらむ、あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば。さればとて、はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。たまさかには、つぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物詣をぞせし。説經などは、ことに多くも聞かざりき。このごろ、その折さし出でたる人の、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。

○説經しつ八講しけり。そこに説經しつ、こゝに八講しけりの略。鈴木弘恭本には、そこに、こゝにを、本文に加へたり。○その人はありつや。然らばその席上に、かの人は居たりや否やと、噂したる人に尋ぬる也。○いかゞは。いかゞはあらざらん略にて、勿論居たりと、問はれたる人の答ふる也。さてこの詞を、春註に、聽聞など遂にせぬ人を謗れるなりと解けるは、反對の意にして非なり。○いは

(口譯)「そこに説經した、こゝで八講した」など、人が噂をする時に、「あの人はその席に居たか」、「何て居ぬ事があるぞ」など、何時もさうした場處に居る者のやうに、きまつていはれたのは餘りである。賤しい女でさへ、熱心に聴くやうであるものをば、何で一向に、有難い法席を覗きもしないで居らうか、それは聴きにも往かうさ。賤しい女までも聴くといつても、



以前は徒歩でくる女はなかつた。たまには徒歩できて、壺裝束などくらゐをし、品めいて身づくろひして居つた。それも、寺社への参詣をした。説經などは、格別おほくも聽かなくつた。その時分に生れ合はせた人が、長生をして、この頃の女が、説經のやうな人込にまで、徒歩でくるのを見ようならば、どの位誹謗することであらう。

れたる。の下、はを略けり。○あまりなり 餘り程を過して悪しと也。この句の下に、さりとてといふ詞を補ひて、下文に續けて聞くべし。○などはかはむけに云々 説經場などを、何とて丸きり覗見ぐらゐせずしてあらんやと也。下の「あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば」より、この句へ打返して聞くべし。○あやしき女 卑しき女なり。○いみじく聞くめる 大層熱心に聞く様子と也。○さればとて「卑しき女だに云々」とあるを承けていへる也。○はじめつ方は 最初の時分はとなり。説經聽聞しに行くことの流行せし初の頃をいへり。「さればとて」以下、一本には「されど、この草子などいできはじめつかたは」とありて「かち歩き云々」の句に續きたり。これはこの枕草子などの出来しはじめ頃は、意にて、この草子が經房卿の手にて、最初世間に流布せし頃をさせるものとすべし。さてはこの一節は、のちに作者の手に戻りてより書加へたるものと見らる、也。○かちありき云々 「かちありき」は徒歩なり。徒歩する人なしとは、車にて皆行きたりしをいふ。この「人」は女なり。○たまさかには の下、假令徒歩にて參る人もを補ひて聞くべし。○つばさうぞく 壺裝束なり。練などの單衣を、頭より被り、そのうへに市女笠を着る。かづきたる單衣の前の左右に開くを、兩方の襟を取り、ひきあけて折りて、前腰に挿みおく也。王朝時代の中頃、婦人が物詣見物旅行等の時、この装をなしたり。「壺」とはつばぬる意にて、襟を折りて、前腰に挿みたる形をいふ也。○なまめきけさうじて 「なまめき」は品を作るなり。「けさうじ」は化粧じなり。身づくろひするをいふ。粧をサウと讀むは吳音。



東 裝 壺

○物まうで 神佛に詣づること。○説經などは 説經場などに行くことはの略。○この頃 「見ましかは」につやく詞。○その折さし出でたる その折は、上の「はじまつ方」をさす。「さし出でたる」は

出あるきたるをいふ。これを世にさし出でたる意として、その折生れたる人のとも解せらるれど、婦人の徒歩は、評文中にいへるが如く、漸く二十年前よりの事なれば、「命長くて」などあるに候はざるを思ふべし。○見ましかば 今の風俗を見ましかばと也。○いかばかり の下、かの疑辭を略けり。○そしり誹謗せまし 「誹謗」もそしる意なれば、かくいひては重言なれど、意調を強めんが爲には、同意の國語漢語を疊用する例、ま、あり。

評 説經場にくる男の評は、一轉して女の評となり、風俗の頹廢を歎いてゐる。これは藏人の五位が、昔はその年ばかりは影も見せざりしを、今はいそがしう出入すといつたのに、共通した意見である。

元來寺社への徒まうでは、地理上の關係もあり、また信仰上、佛神に、わが熱誠のほどを示すべき理由もある。大鏡に、藤原兼通の女嬋子が、玆時參詣祈禱を熱心にせられたことを叙べて、伏見の稻荷の坂を上るに、

いと苦しげに御後おしやりて、仰がれさせ給ひける御姿つき、宿貫の腰ぎはなども、さはいへど、多くの人よりはけ高く、なべてならずぞおはしける。

と見え、つひにその功德によつて、圓融院の皇后になり給へりと書いてある。これらが婦人の徒詣の始であらう。爾來廿年の歲月は、説經場にさへ、徒歩でくる女があるやうになつた。蓋し時勢の自然の推移である。清少この消息を解せず、その折さし出でたりし人を借來つて、當世女の舉動を、輕々しく憶ましからずと攻撃した。この邊甚だ保守的である。

「餘なり」と抑へ、「さし覗かでは云々」と揚げ、「さればとてはじめつ方は云々」と抑へ、「たまさかには云々」と揚げ、「それも物詣をぞ」と抑へて、一擒一縱、反復の間に、波瀾を醸成して、文勢甚だ險奇である。



三十一段

菩提といふ寺に、結縁の八講せしが、聞きにまうてたるに、人のもとより「とく歸り給へ。いとさうぐし」といひたれば、蓮の花びらに、もとめてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかはと書きてやりつ、まことにいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

○菩提といふ寺 京の東山の一峯阿彌陀が峯の南にありしが如し。長徳元年六波羅密寺の像覺信が火定の事を、百鍊抄に「於阿彌陀峯燒身」と見えたるを、日本紀略には「於菩提寺北邊燒身」と書けり。又雲林院菩提講寺は名稱の似たるのみにて、山寺の趣なし。又諸註、これを菩提樹院とするは非なり。同院は後一條帝の代の建立なり。○結縁の八講 佛道に縁を結び、又は結ばしむる爲に行はる、八講なり。されば誰にまれ、ひろく聽聞を許すなり。結縁はケチエンと讀む。○人のもとより 「人」は朋輩か、家の人かの中なるべし。○さうぐし 寂しきをいふ。さびしきの音便。○はちすの花びら 蓮花の花弁なり。但こゝは紙の造花なり。八講には散華といふ役ありて、散華盆に盛りたる造花の蓮の花片を打撒きつ、行道することあり。○もとめても云々の歌 「もとめて」は強ひて求めて也。「も」は歎辭。「かゝる」は如此あるにて、露の縁語なり。「蓮の露」は八講の法事を喩へたり。「おきて」はさし置きてにて、これも露の縁語なり。「うき世」は憂き世にて、この世を五濁の穢土と觀じ、さて八講ある菩

(口譯) 菩提といふ寺で、結縁の八講をしたが、自分が參詣したのに、人の所から「はやくお歸りなさい。ひどく寂しい」といつて来たから、返事として、散華の蓮の花片に、もとめてもかゝる

はちすの露をおきてうき世にまたは歸るものかは(わざとでも濡れたい蓮の露をさしおいて、即ちこの有難い八講をさしおいて、憂き世の方へ、又と歸らうと歸りはせぬ)と書いてやつた。ほんに大層尊く身にしみて感じたから、そ

のまゝ、この寺に止つてしまひさうに思はれる。さうちうが家の人の待遠しさも、忘れてしまひさうである。

提寺を、名詮自稱の淨土と見立てたる也。即ちわざと求めても、かゝる菩提の佛地にこそあるべきなれば、これを打置きて、濁世に再びは歸るまじと、上求菩提の心を詠める也。○尊くあはれなれば この八講の尊く感に堪へたればと也。○やがてとまりぬべく「やがて」は即座に、直になどの意。「とまりぬべく」はこの寺に止りぬべくと也。そのまゝ、發心出家もすべきをいふ。○さうちうが家の人「さうちう」は湘中老人の事ならん。列仙傳六に「唐呂雲卿嘗寓君山側、遇一老人、索酒數行、老人歌曰、『湘中老人讀黃老、手援紫雲、坐碧草、春至不知湘水深、日暮忘却巴陵道』と見えて、湘水溢れて君山は湖中の島となれるも知らず、湘中老人は黃老の書に讀耽りて、家路の巴陵の道をも忘れはてたる也。されば湘中老人の家人はその歸を待詫びて、もどかしく思ふ也。さて詩は三體詩にも出づ。○もどかしさも云々 待てども歸り來ぬ湘中老人を、家人のもどかしく思ひし昔の例の如く、人達の、長居する我を待わびて、もどかしく思はんことも、忘れてしまふと也。「もどかし」は、俗に齒痒シといふに當る。

評 都をさう離れた寺でもないが、宮中から毎日聽聞に通ふこともならず、八講四五日間を寺籠したものと見える。そこで朋輩達が、ひどく寂しがつて、「疾く歸りこ」といつたのである。全く淨世の塵縁を絶つた山寺に身を置いて、耳に目に、八講の尊さを味ふに、感哀しきりに催して、上求菩提の道に入りたくなつてきたのである。さてその意を歌に詠んだ。

この文、機智を誇るとなしに、機智が隨處に閃いてゐる。取あへず散華の花瓣を拾つて歌を書いたの、これは外にもやつた人がないでもないが、その歌は、主經の題目の蓮華の露を主材としたの、また淨土穢土を撮合した譬喩が、折によく打合つたのがそれである。「とく歸れ」とあるに對しては「やがてとまりぬべく」と應じ、終に湘中老人の典故を以てとちめたのは、筆々ひき締つて、些のたるみもない。歌も應酬の作としては當意即妙である。實は只この一首の爲に、この一文が書かれたものともいへる。



三十二段

小白河といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達部、結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人のあつまり行き来て聞く。遅からむ車は、よるべきやうもなし」といへば、露と共にいそぎ起きて、げにぞひまなかりける。轅のうへに又さしかさねて、三つばかりまでは、すこし物も聞ゆべし。六月十餘日にて、暑きこと、世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、すこし涼しき心ちする。左右の大臣にちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣、指貫、あさぎの帷子をぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、青にびの指貫、白き袴もすずしげなり。佐理の宰相なども若やぎだちて、すべてたふときことの限にもあらず、をかしき物見なり。廂の御簾高くまき上げて、長押のうへに、上達部、奥にむかひて、ながくと居給へり。そのしもには殿上人、わかき君達、かりさうぞく、直衣などもいとをかしくて、居もさだまらず、こゝかしこに立ちさまよひあそびたるも、いとをかし。實方の兵衛の佐、ながあきらの侍従など、家の子にて、今すこしいていりなれたり。まだわらははなる君達など、いとをかしうておはす。

(考異) ○佐理 原本安親とあり。古本による。○いでいりなれたり 原本いでいりたりとあり。抄本による。

(口譯) 小白河といふ御殿は、小一條の大將殿の御家である。そこで上達部が、結縁の八講をなさるに、甚だ立派な法會で、世間の人々が集まつて来て聴聞する。遅からむ車は近寄れようもないといふから、朝露のおくと同時に起きて往つたが、ほんと一杯で、すき間がなかつた。轅のある上に、又車臺をさし車れて、三側目ぐらゐの車までは、すこしは物も聞えよう。六月十餘日、暑い事は、全く例をしらぬ程である。只池の蓮を見渡すだけが、少し涼しい氣持がする。左右の大臣達を除き申しては、

釋 ○小白河 小白河殿の略。白河は京都鴨川以東、粟田口以北の地の汎稱なるが、この殿の所在地は不明なり。○小一條の大將 藤原濟時。當時權大納言右近衛大將たり。小一條、左大臣師尹の二男。後正二位大納言兼陸奥出羽按察使となり。長徳元年四月薨す。年五十五。妹芳子は村上朝の宣耀殿の女御にして、女成子は三條帝の皇后たり。(三條帝は當時東宮なり) 諸註、これを小一條左大臣と混同して、師尹とせるは非なり。○大將 ダイシヤウ。近衛府の長官なり。從三位相當官。職原抄に「非三譜第之花族、更不任之、多是、大納言、上藤任之、又任大將一人、其儀大略同大納言、只守三位次、着計也」。近衛府を見よ。○上達部結縁の八講し給ふ 上達部が主催にて、結縁八講の法會し給ふと也。○遅からむ車は寄るべきやうなし あまり聽衆澤山にて、遅く參らん車は、御殿の際近くは寄せやうもなしと也。○露と共にいそぎ起きて 曉の露の置くや否や、一所に自分も急ぎ起きてと也。起きに置きをいひかけたなり。○「おきて」の下、行きたるにの語を略けり。○けにぞひまなかりける。「けに」は上の「遅からむ車は云々」を承けたり。「ひまなし」は車の立込みたるをいふ。○轅のうへに又さしかさねて 後の車の轅の上に、また前の車の車臺を重ね据ゑてと也。つまり成るべく前に寄りて、八講の盛儀を見聞せん爲なり。○暑三つばかり 三かは目位なり。○六月十日 ミナツキトヲカアマリ。花山帝の寛和二年のなり。○暑きこと 陰曆にては、六月は暑中なり。○よに知らぬ 「知らぬ」は知られぬに同じ。○左右のおととい 左大臣源雅信、右大臣藤原兼家なり。○おき奉り 「おき」はさしおき也。○二藍の直衣云々 若き上達部はなり。○指貫 指貫着てとなり。○あさぎ 薄黄。○すかし給へる 直衣に透し給へるとなり。直衣地薄ゆるゑ、下着の帷の色を透きとほる也。○おとなび 大人だつなり。相應の年配なるをいふ。○白き袴も 白き袴着たるもと也。この袴は指貫の下袴にて、壯年の時は紅色、長大の後は白色を用ふる由、飾抄、西三條家裝束抄等に見ゆ。○佐理の宰相 小野宮太政大臣藤原實賴の孫。天元元年參議、正曆二年

お出でなさらぬ上達部もない。二藍の直衣や指貫を著て、淺黄色の帷を、下から透して入らつしやる。少し年取つた方は、青鈍色の指貫、白の下袴をはいたのも涼しさうである。佐理の宰相なども若がへつて、總じて尊い事ばかりではな、面白見ものである。廂の間の御簾を高く捲上げて、長押のうへに、上達部が、奥に向つて、横に長々とならんで居られた。その長押下には、殿上人やわかい君達、狩衣や直衣なども、大層風情を盡して、居處もきめず、あちこちにうろくして遊んでゐるのも、甚だ面白い。實方の兵衛の佐、ながあきらの侍従などは、この小一條の家



族で、他人よりは、  
少し出入が物馴  
れてゐる。この外に  
まだ子供である君達  
などが、甚だ愛らし  
くて入らつしやる。

參議を辭して、太宰大貳となり、後兵部卿となりて、長徳四年七月薨す。年五十五。書法の名手にて。小野道風、藤原行成と共に、三蹟の稱あり。「宰相」は參議の唐名なり。參議を見よ。原本なる安親は藤原仲正の男にて、この時六十五歳なれば「若やきだちて」とあるには、最もよく適へど、この時は從四位春宮亮にて、參議になれるは、一年後の永延元年の事なれば、この人にはあらざるべし。○若やきだちて佐理この時四十三才なり。四十歳を初老とせり。さて「若やきだちてすべて」は、次の句を隔て、「をかしき物見なり」へかゝる。○たふときことの限にもあらず。佛事の尊さの頂上なるのみならず也。○をかしき物見 人々の衣裳なども風流を盡して、面白き見物となり。○廂の御簾 廂の間と寶子との界の簾なり。○長押のうへ 長押通りの意にて、廂の間の、寶子に添ひたる處なり。この「長押」は無論下長押なり。寢殿造及び長押を見よ。○奥にむかひて云々 奥即ち身屋には八講の法座ある故、それに向きて、上達部が大勢、長々と横に列座したると也。上達部の居たるは廂の間なり。○その下 長押の下にて、寶子のあたりをいふ。○狩さうぞく 狩装束は即ち狩衣姿なり。狩衣を見よ。○居も定まらずどこに座を占むるともなしにと也。○實方 濟時の兄定時の子。この時兵衛佐たりしが、一條帝の朝、左近衛中將となる。藤原行成と争ひて陸奥守になされ、長徳四年十一月任地に逝く。歌人。○兵衛の佐兵衛府の次官。兵衛府を見よ。○兵衛府 六衛府の一にて、宮中宣陽陰明二門の外を守衛し、行幸の時供奉す。左右に分れて督(從四以下)佐(從五位上)大尉(從六位上)少尉(正七位上)少少志等の官あり。兵衛二百人を統ぶ。○ながあきら 榮花物語に長命君とある人にて、濟時の子相任の幼名と見ゆ。命の字アキラと訓むは、書經に「顧諟天之明命」とあるによる。但音讀を可とす。尊卑分脈に「從五位下侍從、寛和二年出家、十六」とあり。○家の子 小一條の家の子なり。「家の子」は家屬をいふ。○今すこし 外の人よりは今少しと也。○まだわらははなる君達 長命の弟通任は十四歳なり。その外幼弟二人あり。

(口譯)  
すこし日の開けた頃  
に、三位中將、それは  
只今の關白殿を申上  
げた。この方が香の  
羅の帷、二藍の直衣、  
おなじ色の指貫、濃  
蘇枋色の下袴に、張  
つた白い單の甚だ鮮  
かなのをお着なされ  
て、この席へはひつ  
て來られたが、外の  
方々が、それ程輕や  
かに涼しさうな支度  
をしてゐる中に、三  
位中將の服裝は鼻苦  
しさうであらうが、  
大層見事にお見えな  
さる。細塗骨の扇な  
ど、骨は人のとは變  
つてゐるけれど、ま  
るで赤地紙なのを、  
人とおなじやうに使  
つて持つてをられる  
様は、瞿麥の花の盛  
に咲いたのに、甚だ  
よく似てゐる。まだ  
講師も高座にあがら  
ぬ間で、懸盤などで、

すこし日だけたるほどに、三位中將とは、關白殿をぞ聞えし。香のうすもの、二藍の直衣、おなじ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白き單衣の、いとあざやかなるを着給ひて、あゆみ入り給へる。さばかりかるび涼しげなるなかに、あつかはしげなるべけれど、いみじうめてたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、たゞ赤き紙を、おなじなみにうちつかひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師ものぼらぬ程に、懸盤どもして、何かはあらむ物まあるべし。義懷の中納言の御ありさま、常よりもまさりて、清げにおはするさまぞ、限なきや。上達部の御名など書くべきにもあらぬを、誰なりけむと、少しほどふれば、色あひはなくといみじく、にはひあざやかに、いづれともなきなかの帷子を、これはまことに、たゞ直衣一つを着たるやうにて、常に車のかたを見おこせつ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけむを。

○三位中將 藤原道隆。この時、從三位右中將たり。上の只今の關白殿を見よ。○關白殿をぞ云々 只今の關白殿をぞ申し、と也。道隆の關白時代になりて書けるが故に、この一句を、三位中將の註脚として挿めるなり。さて「聞えし」の下に、この君といふ詞を補ひて、下に續けて聞くべし。○香のうす物 「香」は香木の色に似たるよりの稱にて、丁子茶の色なり。玉藥に「以丁子染タル香帷著之」とあり。○「うす物」は紗又は羅の類の織地をいふ。さて「香の薄物」とのみにては、何物なるか不明なれど、姑く玉藥に香帷とあるによりて、下への帷の落字あるものと定め、帷の染色地質をいへるものとす。○



何かしら召あがるやうである。義懐の中納言の御有様、それは何時よりもまさつて、清らかにありなざる様が、限もないことよ。一體上達部のお名前など書くべきでもないのを、誰だつたか知らぬと、すこし時日が経つと忘れるから、書いて置く。外の方々の装束は、色が花らしく立派に、つやがあざやかで、何れが優つてゐるともきめられないその中の帷をば、この中納言は、ほんに只直衣一枚を着たやうに、目立たぬやうに着込めて、絶えず庭前の女車の方を見やり見やりして、それに物などお話しかけなされる。その様子を面白くと見ぬ人はなかつたらう。

枕草子評釋

おなじ指貫 同じ二藍の指貫なり。○濃き蘇枋の御袴「蘇枋」は紅の黒みか、りたる色にて、蘇枋の木の下皮にて染む。「袴」は下袴なり。一本「蘇枋の下」の御袴とあれど、上にも「白き袴も」とのみあれば、下のは無くて通ぜし也。○張りたる板引にしたるなり。貞丈の説に「漆塗の板に、絹に糊を付けて張付けて、よく乾して引離せば、光出づる也」。○白き單衣「白き」は色の白きなり。さてこの順序は、羅の帷の上に張單を着、その上に直衣を着たる也。○さばかりかろび涼しけ 多くの人は、さやうに軽々と涼しさうなる中にと也。○暑かはしけ云々 三位中將は、單だけ一枚多く着たるうへに、香や濃蘇芳の色合なれば、他の人の青鈍や淺黄やに比ぶれば、暑苦しさうならんもと也。○細塗骨など骨はかはれど中將の扇は細き塗骨などにて、他人のとは骨は違へどと也。夏扇の様なり。又塗らぬ物には黒梯などもあり。その頃の扇は、骨を紙の中に張込ます、うへに張付けたるものなり。○たゞ赤き紙を の下、張りたるをを略けり。「たゞ」はひたすら、「一途」などの意。「紙」は地紙なり。○おなじなみに 他人と同じ並にとなり。すべて同様なるをいふ。○のぼらぬほどに 講師もまだ高座に上らぬ程にと也。この下、上達部等はを略けり。○懸盤 カケパン。貴人の用ゐる膳の一種なり。四本足の臺の上に、折敷を載せ懸くる様にしたるよりの名なり。三口中傳に「如高坏面、有四方縁、其面押織物也、裏并足指具、足者各別也、四角立縁、上下有横縁、四方彫牙象也」。○何かは「か」は疑辭、「は」は添へたる辭なり。「か」「は」を一つにして、反語と見るべからず。○物まるるべし 食物を召上がるやうなりと也。○義懐の中納言 一條攝政藤原伊尹の五男。寛和元年遜位に遇ひて悲傷、叡山に入りて出家す。壽五十二。○限なきや「や」は歎辭。○上達部の御名など書



懸盤

從二位權中納言たり。妹懷子、花山帝の生母たりしかば、外戚の勢威を以て、頗る良治を圖りしが、帝の遜位に遇ひて悲傷、叡山に入りて出家す。壽五十二。○限なきや「や」は歎辭。○上達部の御名など書

くべきにもあらぬを 上達部は尊大の御身分なれば、その名をあらはに書記さんは失禮なれば也。○誰なりけむとすこし程ふれば すこし時日経てば、その人は誰なりしかと、記憶の覺束なくなる故、強ひて御名をも書くと也。この句、下文に續かず。こゝにて切れたりとする時は、詞足らず。必ず脱文あるべし。但大意は上述の如くなるべし。○色あひはななくといみじく 人々の装束の色合が、花やかにめでたくと也。「いみじ」は極めてよきをいふ。○にほひあざやかに つやの鮮明にてと也。「にほひ」は光澤なり。○いづれともなきなかの帷を いづれが勝るとも見えぬ中にての帷をと也。この「の」を、義門法師は「にに通ふのなり」といひたれど、意すこし違ふべし。さて「帷を」の下、目立たぬやうに著込めての語を補ひて聞くべし。○これは 義懐の有様をさす。○直衣一つを著たるやうにて 直衣のみ著たるやうにして。出すべき帷の袖口をも出さず、極めてジミなる體なり。○車の方 聽聞の女車の方なり。○物などいひおこせ給ふ 色々と物いひ遣り給ふと也。○をかしと その様をかしと也。○なかりけむを「を」は歎辭にて、よに近し。

のちにきたる車の、ひまもなかりければ、池にひき寄せて立てたるを見給ひて、實方かたの君に、「人のせうをこつきくしくいひつべからむ者ひとり」と召せば、いかなる人にかあらむ、えりてゐておはしたるに、いかゞいひ遣るべきと、近く居給へるばかりいひ合はせて、やり給はむことは聞えず。いみじくよそひして、車のもとに歩みよるを、かつは笑ひ給ふ。あとのかたによりていふめり。久しく立てれば、人々「歌など詠むにやあらむ。兵衛ひやうゑの佐返すけがへしおもひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事かへりごと聞かむと、おとな上達部まで、皆そなたさまに見やり給へり。げにけさうの人々ま

(口譯) 後からきた女車が、近くには、車をすゑる餘地もなかつたので、池の際に寄せてすみたのを、中納言の見られて、實方の君に「人の口状を、種よくいへさうな者を、一人呼んで下さう」といふ男が知らぬが、實方の君が、一



人選り出して連れて  
お出でなされたの  
で、「何といつて遣ら  
うか」と、中納言の  
側近くをられた方だ  
けが相談して、その  
いつてお遣りなさる  
事は、こちらには聞  
えない。使の男は大  
層氣取つて、その女  
車のそばに歩み寄る  
のを、方々は見てま  
あお笑ひなさる。使  
の男は、その車の後  
の方に寄つて、口上  
をいふ様子である。  
久しく立つてゐるか  
ら、人々が「あゝし  
てゐるのは、車の女  
が、歌など詠むのだ  
らう。兵衛の佐よ、  
返歌の覺悟をしなさ  
い」などいつて笑つ  
て、何時その返事を  
聞かれうかと待遠し  
がつて、年取つた上  
達部までも、皆そち  
らの方に、眼を向け  
てお出でなすつた。

ほんにむき出しに立  
つてゐる一般の人々  
までも、それに眼を  
つけたのも、面白か  
つた。女車からの返  
事を聞いたのか知ら  
ぬ、使の男がすこし  
此方へ歩いてくるう  
ちに、女車から扇を  
さし出して、呼返す  
から「歌などの文字  
をいひそこなつた場  
合だけこそ、呼返し  
もせう。長い間か  
つたのに、そんな事  
のあるべき事か。よ  
し間違つても直すべ  
きでもあるまいもの  
な」と、自分は思は  
れた。使の男が近づ  
いてくるのを待遠し  
く「どうだ」と  
誰もお問ひなさるけ  
れども、使の男は、  
答へない。中納言が  
お召しなされると、使  
の男は、其處に寄つ  
て、様子ぶつて申上  
げる。三位中將が側

て見やりしもをかしうありしを、返事き、たるにや、すこし歩みくるほどに、扇を  
さし出でて呼びかへせば、歌などの文字をいひあやまちてばかりこそ呼びかへさ  
め。久しかりつる程に、あるべきことかは。なほすべきにもあらしものをなど覺え  
たる。近く参りつくも心もとなく、「いかにいかに」と、誰も問ひ給へどもいはず。樞  
中納言見給へば、そこによりて、けしきばみ申す。三位の中將「とくいへ。あまり有  
心すぎて、しそこなふな」との給ふに、使「これもたゞおなじ事になむ侍る」といふは  
聞ゆ。藤大納言は、人よりもけにのぞきて、「いかゞいひつる」との給ふめれば、三位  
の中將「いとなほき木をなむおし折りためる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何  
となく、さと笑ふ聲聞えやすらむ。中納言「さて呼び返されつるさきには、いかゞい  
ひつる。これやなほしたること」と問ひ給へば、使「久しうたちて侍りつれども、とも  
かくも侍らざりつれば、『さは参りなむ』とてかへり侍るを、呼びて」とぞ申す。義  
が車ならむ。見知りたりや」などの給ふほどに、講師のぼりぬれば、皆居しづまり  
て、そなたをのみ見るほどに、「この車はかいけつやうにうせぬ。下簾など、たゞ今日  
はじめたりと見えて、濃き單がさねに、二藍の織物、蘇枋のうすもののはぎなど  
にて、しりに、すりたる裳、やがてひろげながらうち懸けなどしたるは、何人ならむ。  
何かは、人のかたはならむことよりは、げにときこえて、なか〜いとよしとぞ覺

ゆる。

○のちにきたる車の 次の句を隔て、「池にひきよせて」に續く。車は女車なり。○ひまも 立つべき  
ひまもとなり。車を据うる餘地なき様なり。○見給ひて 義懐卿のなり。義懐その女車を見て、ゆかし  
く思ひて、物いひ遣らんとする也。○人のせうそこ 人の口狀をと也。「人の」は他人の意なるが、  
ここは廣く軽く使へる添詞と見るべし。「せうそこ」は消息の字音にて、使の意。○つきんくしくいひつ  
べからむ者一人 程よくいへさうなる者を、一人呼び給へと也。「一人」の下、呼び給へを略けり。○召  
せば 使の者を呼べばとなり。實方に誂へたるは、この小一條の家の人なる故なり。○えりてゐて  
實方が人選をして、その者を連れてと也。○近く居給へるばかり云々 義懐のそばに居らる、人だけ  
相談してと也。○やり給はむことは聞えず いひ遣り給はん事柄は、何やら、清少には聞えずと也。  
古本に「ことばは」とあるは優れり。○いみじうよそひして 使者がなり。「よそひして」は様子を作るこ  
と、氣取ること。○かつは笑ひ給ふ 「かつ」は片一方はの意なれば、こゝは使とは頼みながらも、又笑  
もし給ふと也。○あの方 車の尻の方なり。○寄りていふめり 使者が近寄りて、口狀を申入る、様  
子ごと也。○立てれば 使者がなり。○歌などよむにや云々 返事に、車中の女が、歌など詠むならん  
かと也。これは側近く居たる人々の詞なり。義懐の詞とするは非なり。次に「など笑ひて」とあるに、敬  
語を添へぬを思ふべし。○兵衛の佐返し思ひまうけよ 實方よ、返歌する覺悟をせよと也。「兵衛の佐」  
は實方の官を以て呼べる也。○いつしか 何時かなり。「し」は強辭。○おとな上達部 上に「すこしお  
となび給へる」とある上達部なり。○そなたさま その女車の方なり。○けそうの人々まで 外に暴露  
せられたる人々までと也。即ち殿内車中以外の聽衆をいふ。「けそう」は顯證の字音にて、あらはなるこ  
と。○かへりごと 返言即ち返事なり。○聞きたるにや の下、あらんを略けり。實は返事を待勞れて



から「早くいへ。あまり氣取過ぎて、やりそこなふな」と仰しやると、使の男が「どうせ申上げて、興のないことですか、有心過ぎてしそこなつたのも、只おなじ事でございます」といふ事だけは聞える。藤大納言は、外の人よりも殊にさし覗いて「何といつたか」と仰しやるやうである、三位中將が「ごく眞直な木を、わざと骨折つて押折つたやうだ」とお答へなると、藤大納言がお笑ひなされるので、それに連れて、一同が何かなしに、さつと笑ふ聲が、あの女車に聞えただらうか。中納言が使の男に「さて呼返された前には、何といつたか。これはいひ直した返事なの

歸りくるを、人々のよそながら、返事を聞きたるにやと想像する也。○すこし歩みぐる 使者がなり。○扇をさし出でて 扇を車なる女のさし出してと也。○呼び返せば 使者をなり。○歌などの云々 以下清少の批評なり。呼返すは、歌の文字をいひ過りたる時にのみこそすべけれ、それも時間のかゝりたることゆゑ、いひ過ることはあるべきことならんや、今更直すべきにもあるまじきを、何故に呼返すならんと也。「あるべき事かは」は、豊穎の、いひ誤るまじき也といへる當れり。呼返すことあるべきかはの意にも解せられぬにはあらねど、さては上の「ほどに」の解、俗意に墮つめり。○近く参りつくも 使者の引返して、御殿の方に近く参り着くもと也。○心もとなく 待遠なるをいふ。○誰も 上達部の人をさす。○いはす 使者がなり。○權中納言見給へば 義懐が使者を見給へばと也。「見給ふ」は召給ふをいふ。○そこに寄りて 使者が義懐の居る處に近寄りてと也。○けしきばみ申す 何か様子を作りて申すと也。氣取りて急に物いはぬ態なり。「けしきばむ」はその氣持を見するをいふ。「ばむ」はその氣のあらはるゝ意。○三位の中將 道隆。○有心過ぎて云々 風流を求め過ぎて、やり損ふなと也。「有心過ぎて」は、上の「けしきばみ申す」を承けたり。後鳥羽帝の世に、有心、無心の歌合ありて、有心は本歌、無心は狂歌なりき。有心は風流なるをいふなるべし。○とのたまふ と使者に宣ふとなり。○これまたおなじ事に 申上ぐるも興なき事なれば、有心過ぎて興を損じたるも同じ事なりと也。「これも」は今復命せんとする事をさす。「たゞ」はひたすらなり。「おなじ事」とは、しそこなひたるも同じ事となり。○といふは聞ゆ と使者のいふは、清少に聞ゆと也。その外のこととは聞えぬ趣なり。○藤大納言 藤原爲光。右大臣師輔の九男。圓融帝の貞元二年大納言たり。この八講の翌月右大臣、正曆二年太政大臣となる。同三年薨す。諡して恒徳公といふ。年五十一。女悋子は花山帝の弘徽殿女御たり。○人よりもけに 他人よりも勝りてと也。殊にゆかしがりて、その場を覗きたる様なり。「けに」は越への約語にて、

かとお問ひなさると、使の男が「長いこと立つて居りましたが、何ともかとも返事ありませんでしたから『それでは立戻りませう』といつて歸りますのを呼返して、前のやうな返事を致しました」と申上げる。中納言が「誰れの車だらう。お前は見知つてゐるか」など仰しやるうちに、講師が高座に上つたから、皆静まりゐて、そなたの高座の方ばかり見るうちに、この女車は、搔消すやうに居なくなつた。車の下簾などは、今日使ひはじめたと見えて新しく、濃い紫の單重に、二藍の織物の單、蘇芳色の羅の上衣などで、車の尻に、摺模様を、そのまゝ、廣げたまゝ、打掛け

他よりも優りたるをいふ。俗のモットにあたる。○いかゞいひつる 彼の女車の返事はなり。○なほき木をなむおし折り 眞直なる木を趣あらしめんとて曲けて、無理に折りてしまひしやう也と、三位中將が、藤大納言に申さるゝと也。これは後撰集に「いたく事好むよしを時の人のいふと聞きて」と詞書ありて、高津内親上の「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ」とあるを典據として、初より構はず置けば、何の事もなきものを、強ひて事を好みて、かの女車に消息して、却りてつまらぬ返事に、折角の興を醒したる喩なり。使者の、仕損ひたるもおなじ事といへるより想へば、その女車の返事は「どうも御答が出来兼ねますから、宜しく御取なし下され」などいひしなるべし。○うち笑ひ給へば 藤大納言がなり。○さと サツトといふに同じ。○聞えやすらむ 彼の女車へなり。○これや直したること、云々 これがいひ直したる返事かと、使者に問ひ給へばと也。「こと」の下、なるを略けり。○ともかくも侍らざりつれば 何とも有無の返事のなかりければと也。○さは参りなむ さらば歸り参るべしと也。○呼びてとぞ申す 女車より呼びて、始めてこの返事ありたりと、使者の申すと也。「呼びて」の下、かくは申侍りつを略けり。○誰が車ならむ云々 これも義懐の詞なり。○のぼりぬれば 高座に上りぬればと也。○居しづまりて 靜座するをいふ。○そなた 講師の方なり。○この車は 彼の女車はなり。○かいけつやうに失せぬ 搔消したる如く、何時か居なくなりたりと也。○下すだれ 車の簾の内に懸くる帷にて、長さ九尺五寸、二筋竝へ懸けて、長く地に引くほどに作る。綾絹の染めたる物なり。又繡物したるもあり。(附圖参照)○けふはじめたりと 今日懸け始めたりと也。新しき様なり。「下簾など」以下、かの女車の様をいへる也。○濃き 紫の濃きなり。○單がさね 花鳥餘情に「女房の装束、五月五日よりは單重を著る。單二つを捻り重ねたる物なり」と見ゆ。捻り重ねるとは、二枚の單の端々を一所にして、捻るをいふ。○二藍の織物 これも單なり。「織物」は綾織物なり。○蘇枋



などしたのは、何者だらう。何の事があらうぞい。人の風情を求めて、なかなか詰らぬ返事をしようよりは、この女車の不挨拶の方が、尤と聞えて、却つてよいと思はれる。

のうすもの 蘇芳色に染めたる羅なり。一羅は紗絹の類の總稱。○うはぎ 上衣なり。女官飾抄に、「主人の表着、小桂は必ず二重織物なり」。要領抄に「うはぎ、上薦は織物にして、中下薦は織物綾を着ざる也。衣よりは、丈も袖幅も短くをめらかす(順々に上ほど短く仕立て、幾枚なるか見ゆるやうにする)由なり」。○しりに 車の尻になり。○摺りたる裳 地摺の裳ともいひて、白地の絹に、物の形を山藍などにて摺付けたる裳なり。○裳 女の正装の一部にて、唐衣を着たる時、上衣の上に、後の方はかり、腰より下にあつる袴のやうなる物なり。深く襷をたて、裾を引くやうにす。小腰にて結び、懸帯は肩より打越して胸にかけ、引腰は飾として引垂れ、長さ六尺五寸にも及ぶ。地質は繡物、織物等、染色模様は纈纈、目染、下濃、地摺等あり。(附圖参照)○やがて廣げながらうち懸けそのまゝ廣げながらに、車の鴉尾にひき懸けたりと也。鴉尾とは、車臺の後方に出でたる轆の餘なり。(附圖参照)○何かは 何かはあるべきの略にて、何の不都合なる事はなしと也。上に人達の嘲り笑へるを承けていへり。以下清少の批評なり。○人のかたほならむことよりは云々 才がりたる人の、なまじひに不完全なる返事せんよりは、かくキツパリと、出来ませぬと斷りたる方優れりと思はれて也。「かたほ」は和訓栞に、偏秀の義にやといへるよし。眞秀に對する語にて、眞秀は完全、偏秀は不完全なるをいふ。「げにと」はげにかくもあるべしとの略。○なかく 却りて、又なまなかの二義に、この頃は用ゐたり。こゝは却りての意。

朝座の講師清範、高座のうへも光り満ちたる心ちして、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しきすまじき事の、今日すぐすまじきをうち置きて、たゞ少し聞きて歸りなむとしつるを、しきなみにつどひたる車の奥に居たれば、出づべきか

(口譯) 朝座の講師清範は、高座の上も光り満ちた氣がして、えらい尊い様であるよ。しかし暑さの難儀なの

たもなし。朝の講はてなば、いかで出てなむとて、前なる車どもに消息すれば、近くたゝむうれしさにや、はやくと引き出であけて出すを見給ひて、いとかしがましきまで人ごといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、きゝも入れずいらへもせて、せばかり出づれば、權中納言「やゝまかりぬるもよし」とて、うち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑さにまどひ出でて、人して、五千人の中には入らせ給はぬやうもあらず」と聞えかけて歸り出でにき。

(考異) ○見給ひて 原本見給ふとあり。古本による。

釋 ○朝座 八講は、朝夕の二座一日にある也。○清範 古事談に「播磨國人、興福寺法相宗、空晴僧都の孫弟ナリ。諸法ニ於テ無双、文殊ノ化身トイハル。不思議計フルニ勝ヘズ。清水寺ノ上綱ト申ケリ」と見ゆ。長徳四年權律師となる。長保元年閏三月寂す。年三十八。説法の名人。○光り満ちたる心ちその尊き形容なり。○あるや 「や」は歎辭。○わびし 難儀なるをいふ。○しきすまじき事の今日すぐすまじきを 仕掛けて置きてはならぬ事にて、しかも今日を過してはならぬ事をと也。必ず今日中に果すべき大切の用事をいふ。○すこし聽きて 説法を少し聽きてと也。○しきなみ 重波の義。もと幾重にもあとよりく、寄りくる波をいふ語なるが、こゝは幾列にも重なりたるをいへり。○奥になむ 外より見ての奥なり。即ち御殿の勾欄近き處にあたる。○あしたの講 朝座なり。○いかで 何卒の意。○前なる車 出でなんとしての前なれば、實はうしろの車なり。○つどひたる車の奥に 「車のつどひたる奥に」を前後にいへる也。○消息すれば 退出する故、よけて通して下されといひやる也。○近く立たむ

に加へて、仕掛けてはならぬ事、何でも今日を越してはならぬ事を、さし置いて来たので、只少し聽いて歸らうとしたのを、幾重にも車の集まつた奥の方に居たから、中途では出られやうもない。朝座の講が濟んだら、どうぞして出ようと思つて、後にぬる車どもに、その譯をいふと、一筆だけでも、高座の方へ近く立とう事うれしさに、早々と車を引出して道をあけて、自分の車を出すのを、方々が御覽なされて、ひどく喧しい程にまでわる口いふのに、老上達部までも一所になつて、笑ひ惡むのを、自分は耳にも入れず、返事もしないで、狭いところを窮屈がつて出る



と、中納言が、「あ、退出したのも亦よい」と仰しやつて、お笑ひなされたのが優れてよろしい。かしそれさへ耳にもとまらないうで、暑いのに夢中で出て、人を以て「さう仰しやる貴方も、五千人の中におはひりなさらぬ譯もありますまい」と申し上げかけて、さつさと退出してしまつた。

うれしさにや。後に並びたる車どもは、御殿近く立たんことの嬉しさにやあらんと也。前の車が退けば、それだけ順に進まる、故なり。○引きいで、車を外の方にひき出すなり。○あけて出すを、通り路を開けて、清少の車を出すをとなり。○見給ひて、上達部殿上人どものなり。○人ごと、「人言」は噂なり。但悪き意味にての噂なり。萬葉集に「人言は夏野の草の繁くとも云々」。○おい上達部、おとな上達部より、更に年嵩なる上達部なり。○笑ひにくむ、人言いふも、笑ひにくむも、皆尊き説法を聞きして歸る、その不信心を嘲れる也。○せばがり出づれば、多くの車の間を窮屈さうに出づるをいふ。○權中納言義懐の中納言のこと。○や、「や」の發語を重ねたる也。漸の義にあらす。○まかりぬるもよし、退出するも亦よしと也。これは法華經中の語なるを引出でて、説法の中途に退出する清少を、増上慢の人間と冷かしたる也。法華經方便品に、釋迦如來開三顯一の法を説かんとする時、五千人の増上慢座を起ちて退くを、如來默然として制止せず。舍利弗(弟子)に「かくの如き増上慢の人退りぬるも亦佳し」と宣ひしこと見ゆ。増上慢とは、未だ得ざるに得たりとおもひ、未だ證せざるに證せりとおもひ違へるをいふ。方便品の本文は「爾時世尊告舍利弗、汝已懲勸三請、豈得不説。汝今諦聽、善思念之。吾當爲汝分別解說。説此語時、會中有比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等、即從坐起、禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重、及増上慢、未得謂得、未證謂證。有如是失、是以不住。世尊默然而不制止。爾時佛告舍利弗、我今此衆、無復枝葉、純有眞實。舍利弗如是増上慢人、退亦佳矣。汝今善聽、當爲汝説」。○人して、使を以てとなり。○五千人の中に入らせ給はぬやうもあらじ、私をば五千人の増上慢に喩へて嘲り給へども、御自分とても、その五千人の仲間に入り給はね譯もあるまいと也。義懐が凡夫の癖に、釋迦如來を氣取りて、退亦佳矣などいへるを、増上慢の所爲なりとして、反對に嘲りたる也。○聞えかけて、義懐にいひかけてと也。「聞え」はいふの敬語。

そのはじめより、やがてはつる日まで立てる車のありけるが、人寄りくとも見えせず、すべてたゞあさまじう、繪などのやうにて過しければ、ありがたくめてたく心にくく、いかなる人ならむ、いかで知らむと問ひけるを聞き給ひて、藤大納言「何かめてたからむ。いとにくし。ゆゝしきものにこそあなれ」との給ひけるこそをかしけれ。さて、その二十日あまりに、中納言の、法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、なほよのつねなりや。「おくを待つまの」とだにいふべくもあらぬ、御ありさまにこそ見え給ひしか。

(考異) ○おくを 原本おいをとあり、古本及び演臣の説による。

○そのはじめより云々 八講の初日から最終日まで四日間を、毎日來聽せし車なり。これも女車なり。○人寄りくとも見えせず 誰一人よりつくとも見えすと也。物いひかくる者もなきをいふ。○あさまじう 呆るゝほどの意。あさまじけを見よ。○繪などのやう 繪に描ける車のやうと也。何時も立ちて、人出入さへなければ也。○ありがたく 稀なるをいふ。○心にく、奥ゆかしきをいふ。○問ひけるを、その車の主の名を、人に問ひけるをと也。清少はこれを眞の信心者と見て、感心したる也。○聞き給ひて 藤大納言のなり。○何か 「か」は反動の辭。○ゆゝしき者 忌嫌ふべき者となり。信心振たるいやな奴と謗れる也。ゆゝしを見よ。○その二十日あまりに 花山帝、弘徽殿女御藤原愜子の失せ給へるに御歎深く、寛和二年六月廿三日の夜、禁中を忍び出で給ひて、藏人道兼、僧嚴久を御供にて、花山の元慶寺に至りまして落飾、翌廿四日その事を聞きて、義懐中納言、惟成左中辨兩人も參りて、同じく出

(口譯) この八講の始から、やがて終る日まで、聽聞に立つてゐる女車があつたが、誰一人寄りくとも見えぬない。總じて只果れる程に、まゝで繪かなんどのやうで過したから、珍しくめてたく奥床しく思はれて、「どういふ人だらう。どうぞして知りたい」と、人に問うたのを、藤大納言がお聞きなされて、「何てよからうかい。ひどく憎い。いやな奴であるのだ」と仰しやつたのが面白い。さてその月の廿日餘の日に、中納言が、法師におなりなすつたのが哀であつた。櫻などの散つてしまふのも、惜しいには違ないが、これに較へては、やはり尋常の惜しさであるよ。



古人が朝顔の早く萎むのを惜んで、「おくをまつ間の」といつたが、これはさうともいへさうもない、御盛んな御様子にお見えなされた事であつた。

家せし也。○櫻などの散りぬるも云々 櫻の散るは惜しけれど、この義懐の出家に比ぶれば、なほ一通りの惜しさなりと也。義懐の俄の出家を惜める也。「や」は歎辭。○おくを待つまの 濱臣は、原本の「おく」の誤なりとて、新勅撰集戀、源宗子「白露のおくを待つまの朝顔は見すぞなくあるべかりける」といふ歌を引けり。宗子は朱雀帝時代に卒せし人なれば、必ずこの歌を典據として書けるなるべし。歌の意は、白露のおくを待つ、僅ばかりの間を命として、咲きては萎む朝顔は、これを見ればこそ、あまりのはかなさに、惜しくて堪へられぬ故、かう早く萎むほどならば、寧ろ最初より見ずしてあるが優れりと也。さて本文の意は、白露のおくを待つ間のといはれし、はかなき朝顔などは、喩にも引かれさうもなき、幾久しい榮華の御有様と拜見されしが、それを突然と御出家ありしことよと也。

評 小白河殿の八講は、花山帝の寛和二年六月十八日から廿一日までの四日間催されたのである。本文に「十餘日」とあるは、十八、十九兩日のうちであらう。(濟時小一條 四十六、爲光藤大納言四十五、義懐權中三十四、佐理宰相四十三、道隆三位三十四、實方兵衛廿四五以下、清範律師廿五、清女廿一二)。その他お上達部は源重信、同重光、同保光、藤原文範、同爲輔、大江齋光等、おとな上達部は藤原顯光、源伊勢等、若上達部は藤原朝光、同公季等である。

延暦中に石淵寺の勸操が、八講を始めてから殆ど二百年、天台宗の興隆に伴つて、ますます法華經の價値を高め、宮中に寺々に、八講はしばしば行はれ、つひに私人も興行するやうになつた。もとより大法會だから、上達部が聯合して、濟時の小白河殿で催した。そこで一切の公務を擲つて、毎日出動、大にその有難振を發揮したのである。本朝世紀寛和二年六月の條に、

廿日丁巳天晴、諸卿不參、無政、從去十八日至廿一日、限四介日、右近大將藤原濟時、於白河被行入講、諸卿每日被參向、但今日依當五卷日、諸卿並諸大夫、各以珍寶被捧物。

とあるのがそれである。「おはせぬ上達部なしは、世紀の文がこれを裏書してゐる。關白左右大臣は、さすがに身分柄遠慮したらしい。

庭上の池蓮を見て涼しさを感じるのは、恰も今日の主經の妙法蓮華の名にちなみがあつて、芬陀利華咲く極樂の清涼界が聯想される。或はこの意味で書いたかも知れない。とにかく陰曆六月の末は、いはゆる三伏の暑中である。「露と共に起きたりとはいへ、婦人はことに外出の支度に手間取れるから、相應に日も高くなつた筈だから、殿前の空地に立つた、幾十臺とない車の群に取巻かれて、炎天干になつては、車内は狭し、風は通らず、ほんに「暑きことよに知らぬ程」であつたらう。下の「暑さのわびしきに」、「暑さにまどひ出でて」は、皆この首尾である。公卿の服色を、しきりに涼しけなりと評し、池の蓮を見やるが涼しといつたのも、つまり暑さの反映である。扇を遣ふのも亦さうである。紅の扇のひらひらと動くのを、撫子の咲亂れたのに喩へたのは、形容の妙を極めたもので、しかも婦人の口吻であることが面白い。

公卿の服色を叙べたのに、おのづから次第があり、變化がある。初は少壯の人の涼しさうなの、中は三位中將の暑さうなうちに見所のあるの、をよりは義懐の更に一層涼しさうなのを並べてゐる。懸盤で物參るのは、主人方の御馳走だらう。當時は日に二食だから、朝飯も可なり遅いので、そこで朝座のはじまりも、甚だ遅い譯である。

文は一轉して本題に入り、義懐の活動を叙することになつた。「車の方を見おこせつ、物などいひおこせ給ふ」は總括的の語で、次に實例二件を擧げて、それを説明してゐる。即ち池際に立てた車に消息したのはその第一例、清少に挑戦したのはその第二例である。

女車に消息して遊ぶのは、若上達部義懐などには相應した行爲なのを、大人上達部も、顯證の人も見や



るとなつては、滿場注視的といふ譯だから、使者の男も車の女も、甚だむつかしいハメに陥つたものである。「見やりしもをかしうありしを」は、次に返事のはしたなさをいひ出す襯染である。「いつしか聞かむ」は、返事の手間取れることの逆寫である。「返し思ひ設けよ」は、歌詠みかけられ、ば、必ず返歌するを禮とした時風であることを、まづ記憶しなければならぬ。この場合返歌の役は晴業である。歌人實方こそ、まさにその人であらう。使者の役、これまた晴業である。多少外交的手腕をそなへて、動作も閑雅に、辯舌もさはやかな者でなくては勤まらぬこと、最初に「人の消息つきくしくいひつべからむ者」と、特別注文があつたのもわかる。いみじく用意するも、けしきばむも、仕そこなふ程にまで有心めかうとするも、皆この故である。「かい消つやうに失せぬ」は、上の「笑ふ聲聞えやすらむ」を承けてゐる。下簾など、今日の爲にと、新規にして出掛けた位なのに、甚だ罪なことをやつてのけた連中かな。

さて車の主の詮義する、講師が座にのぼる、しづまつて皆傾聽する、女車は消えてなくなる。かう描寫のはこびが、極めて迅速なのは、今まで長々と消息事件の顛末を叙してゐた反映で、文勢の變化が、ひどく面白い。又こゝで、女車を委細に描寫したのは、却つて餘情のある文致である。車中の婦人の服装のわかるのは、出衣として、車の簾の下から袖口をほころばし出す、一つの作法があつたからである。その裳を着たのは、同車の主人に對する禮裝である。されば、この車には、然るべき身分の婦人の乗つて居つたことが推知される。

講師清範は「いみじくぞあるや」と、清少に渴仰された程だから、尊けなことは勿論として、「光りみちて」とある位で、男前も極めて立派だつたらうと思はれる。「説經師は顔よき」とある注文に、必ずはまつて居つたに違ない。しかもその辯舌は、山門三千の大衆に口をつぐましめ、遂に文殊の化身とつたはれた。或時犬の法事を頼まれて「過去精靈は、九品蓮臺のうへにて、ひよと吠え給ふらむ」と洒落のめ

した男である。山奈良に人も多からうに、當年取つて廿五歳の若僧で、八講の講師となつたのも尤もである。

前にもいつた通り、當時は法華經流行の世の中だから、經中に出てゐる、釋迦の説法を聞かして退座した、五千人の増上慢の話も、釋迦が退亦佳矣といつたのも、誰知らぬ者はなかつたらう。現にこの四十年前の朱雀帝の御八講に、江納言が「一乗轉輪非無退亦佳矣之輩」と書いたのは、著名な名文句である。義懷乃ちこの語を借來つて、清女を増上慢とからかつたのは、つまりその適用が妙なのである。洒落の極意は、世間周知の事相言語を捉へて、それを巧に運用する所にある。清女の感心したのも尤である。そこで取あへず、同じ典故によつて、「五千人の中には」と、義懷を釋迦氣取の増上慢に見立て、「憚ながら貴方も、お仲間ではありませんか」と、一本參つた手際のおさやかさ。八講興行中の洒落としては、殊に氣の利いたものではないか。

終りに繪に描いたやうに、始から果つる日まで立つてゐた車があつたといつてゐるのを見ると、清少自身も、毎日此處に來たことがわかる。しかし遅く來るやら、早く歸るやらしてゐるから、陰ながらこの車の人の、菩提の方に志の篤いのを感心したのを、爲光がゆゑ、しき者と謗つたのも、前々段に、説經場に最初にゆく人、必ず定つて説經場にいる人を謗つたのと同じ思想で、餘に餘裕なくゆき詰つた氣分を嫌つたのである。

「義懷中納言、常よりも勝りて清けにおはする」とあるのは、この女の、義懷を中心人物としたことを語つてゐる。單にこの八講ばかりではない。當時の政治上での中心人物も、またこの人であつた。上達部中の最若輩として、花山時代二年間の政柄を握つてゐた。上に關白左右大臣はあつても、皆手を拱いて成を受けたのは、蓋し帝の外戚であつたからである。けれども醍醐朝の政弊をあらため、寛和の治を



致したのは、決して尋常一様の執袴子ではない。「この中納言文官にこそおはせしかど、心魂ひいとかしこく、有識におはして」とある大鏡の文、「や、まかりぬるも佳し」の機智、これを内外から立證してゐる。この八講の時は、義懐が得意の最頂上にあつた時である。この僅二三日の後、時勢は急轉直下して、政柄移動の機に出會はうとは思ひもかけなかつたらう。それは中宮の御祖父にあたる右大臣兼家が、暗中の大飛躍を遣つて、花山帝に御出家をすゝめ、一條帝を擁立して、自分が外戚の重寄に居つたことである。義懐變を聞いて出家、一夜のうちに、榮華困厄、忽にその處を易へた。「櫻などの散りぬるもよの常」の評語は、允によく當つてゐる。

八講聽聞に往つても、法式談義の威儀や綱要や感想を書かうとはせず、専ら朝紳達の風采舉動言語と、聽衆の批評とで終始してゐる。婦人の筆、自然さうした傾向にはなり勝ではあるが、これは又あまりであらう。一體八講に往くといふ目的が、あながち信心ばかりではない。清少自身も白狀して「をかしき物見なり」といつてゐる。これは清少ばかりではない。八講の催主たる上達部連も亦おなじ事で、義懐は頻に女車に消息する、道隆も爲光も、一所になつて立騒ぐ、老上達部もこそつて見遣つたり、笑ひにくんだり、他人の退出するのを見ては、罵しいまで批評する、若殿上人は、そこら立さまよひ遊ぶ、熱心な聽者を、却つてゆゝしき者と誹謗する、信心か遊樂か、殆ど見當のつかぬ始末で、これが前々段の藏人五位や、遅參早退の貴人やと共通する現象であつて、即ち藤氏全盛時代に漲つた、享樂氣分の結果と見られる。尤も折角待設けた返歌の役が不用になつたので、技養の感にたへかねた實方が、今日の法會を讚歎して、

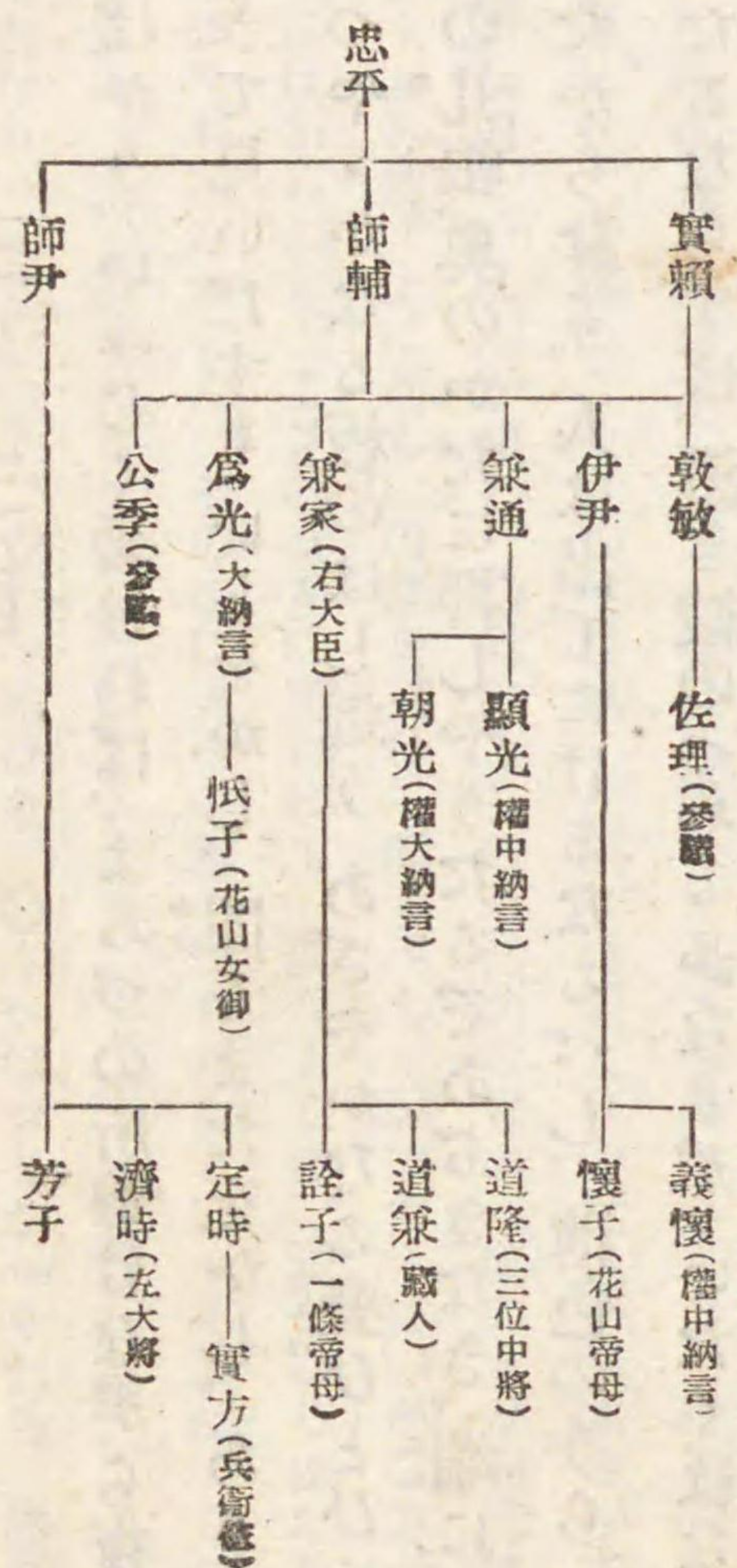
けふよりは露の命をしからずはちすのうへの玉とちぎれば

と歌つたのは、命をかけた程だから、極めて眞面目なものではないかと疑ふ人もあらう。しかしそれは

皮相の見で、當時の歌人は、命を危末にいひなす常習者であつて、口ほど腹には、一向感じてゐない。單に技巧の作といふだけである。

要するに八講の一日、聽聞に立てた車の内から、目の及ばぬ所は耳、耳の及ばぬ所は目をはたらかし、臆氣ながらも觀察し得た材料を一括して、はつ／＼にこの一篇を纏め上げたのは、實に大手腕である。當時清少は廿一二の年若だのに、後年宮仕に出て、宮廷内を震動させた才鋒が、この文中所々に閃いてゐる。清肥後守が娘の才物といふ評判は、この時分から立つたかも知れない。さて三四年経つて、中宮奉仕の女房となつた。道隆を「只今の關白殿」といつたのから推すと、この文を書いたのは、八講の年からは、少くも八年以上も経つたらうと思ふに、よくも今見るやうに記憶をよび起して、描寫したものである。或は筆達者の清少の事だから、何かに書付けて置いてあつたかも知れない。

○今本文に關係ある藤氏略系を左に示す(官ヲ記シタルハ當時現存ノ人)





三十三段

(口譯) 七月頃、ひどく暑いから、どこもかも開けたまゝ、夜もあつすに、月夜の時は、寝起してながめるのも、甚だ面白い。闇夜の月、これはまた興があることは、いふも尋常なことである。大層つやのある板敷の端近に、鮮やかな畳一枚を、一寸敷いて、三尺の几帳を、奥の方におし遣つて立てたのは、埒もない。これは端の方に立てるがよい。それを奥に立てたのを見ると、奥の方が氣づかひしいのであらうよ。男は出ていつてしまつたのであらう。女は薄紫の衣の、裏は大層濃い紫で、表面の色が、一

七月ばかり、いみじく暑ければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは、寐起きて見いだすも、いとをかし。闇もまたをかし。あり明はたいふもおろかなり。いとつや、かなる板のはし近うあざやかなる疊ひとひら、かりそめにうち敷きて三尺の几帳、奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。端にこそ立つべけれ。奥のうしろめたからむよ。人は出てにけるなるべし。薄色のうらいと濃くて、うへは少しかへりたるならずば、濃き綾のつや、かなるが、いたくはなえぬを、かしらこめて、ひき着てぞねためる。香染のひとへ、紅のこまやかなるすゞしの袴の、腰いと長く、きぬの下よりひかれたるも、まだ解けながらなめり。そばのかたに、髪のうちた、なはりてゆら、かなるほど、長さおしはかられたるに、又いづこよりにかあらむ、朝ぼらけのいみじうきり満ちたるに、二藍の指貫、あるかなきかの香染の狩衣、白きすずし、紅のいとつや、かなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば、烏帽子のおし入れられたるけしきも、しどけなく見ゆ。朝顔の露おちぬさきに、文書かむとて、道のほども心もとなく、「をふの下車」など口ずさびて、我がかたへゆくに、格子のあがりたれば、御簾のそばを、いさゝかあけて見

す認めかけたのでなければ、濃い紫の綾織の艶のよいのが、大して萎えない衣を、あたままで引かぶつて、寝てあるやうである。香染の単を着て、紅の色の濃い生絹の袴の腰紐が、大層長く、かけた衣の下から引かれてゐるのも、まだ解けたまゝでゐる様子である。寝てゐる側の所に、髪の毛のたたまつて、ゆらゆらしてゐる具合は、長さの程が、一通りてなからうと想像されたのに、これは又、何處から来たのか知らぬ、明方の大層きりこめてゐる中に、二藍の指貫をはき、色の有るか無いかといふ薄き香染の狩衣、白い生絹の単を着、紅の大層つやのある打衣の、霧にひどく

るにおきていぬらむ人もをかし。露をあはれと思ふにや。しばし見たれば、枕がみのかたに、朴に紫の紙はりたる扇ひろごりながらあり。みちのくに紙のた、う紙のほそやかなるが、花か紅か、少しにほひうつりたるも、几帳のもとに散りぼひたる。

○七月ばかり「ばかり」は頃、又は時分の意。○夜もあかすに「夜も」は晝は勿論なるをいふ。○見いだす 外を見出すと也。○あり明 在明の月の頃をいふ。「在明」とは月の空に在りながら、夜の明くる義にて、月は下弦なり。○いとつや、かなる板 よく拭きこみて澤の出たる板敷なり。寶子の板にはあらず。これより以下、或女の様を叙したり。○あざやかなる疊ひとひら 表も縁も鮮なる疊一枚なり。新しき疊なるべし。昔の疊は、後世の如く室内一杯に敷つめたるものにあらず。座臥する所だけに敷きて、必要に随ひ移動する置疊なり。又縁を取つたる吳産をもいへり。○三尺の几帳 常に手輕に取まはす几帳は、高さ三尺のなり。(なほ几帳を見よ) ○あぢきなき 雅語譯解に、無益ナコト、ラツシモナイと譯せり。○端にこそ立つべけれ 几帳は外面よりの見込を障ふるが主なれば、前の方に立つべしと也。「端」は前といはんが如し。○奥のうしろめたからむよ 奥の方が何で氣遣はしからう、そんな譯は無からうよと也。上に何しにの語を補ひて聞くべし。詞のまゝに、奥の方が氣遣はしからんよとも解せられぬにはあらねど、こゝは女房の曹司にて、奥などなき、淺まなる處なるを思ふべし。又奥の方に氣遣はしき人があるならん、その後人々を隠しつらんなどいへる説は、この場合に適はず。○人は出でにける云々 来て泊りたる男は、既に歸りしならんと也。○薄色の裏いと濃くて 表は薄紫にて、裏は濃紫なる由なり。「薄色」の下、衣のを略けり。○うへは少しかへりたる 濃紫の少しうは白みたる也。「うへ」は表面なり。「かへる」は褪色するをいふ。○濃き綾 紅濃き綾なり。○なえぬを 萎えぬ衣をと也。



しめつたのを、しどけなく着て、髪が少しふくらんでゐるから、烏帽子の押込まれた様子も、だらしなく見える。朝顔の花の露が乾かぬさきに、急いで後朝の文を書いて遣らうと思つて、歸る途中もどかしく、口をふの下草など口ずさんで、わが宿所の方へゆくに、丁度この格子があがつてゐるので、御簾の端をすしあけて見ると、女が寝てゐるので、起別れていつた男のうへも、想ひやられて面白い。多分その男も、自分のやうに急いで歸つたのは、露の乾くを大事と思ふのかわらぬ。暫く見てゐると、枕もとの方に、朴の骨に紫の紙を張つた扇が廣がつたまゝある。陸奥

「なえぬ」はタタ／＼せぬをいふ。糊氣の失せぬ程なり。○かしら籠めて 頭より被りたるをいふ。髪を「頭」ともこの頃はいへど、次に髪毛の側の側た、なはりたること見ゆれば、この「かしら」は常の意に解すべし。○引き著て 著てなり。「引き」は接頭語。○紅のこまやかなる 「こまやかなる」は色の濃きをいふ。こ、は袴の色なり。○すいし 生絹にて練らぬ絹をいふ。こ、は袴の地質なり。○袴の腰 袴の紐をいふ。○衣の下より引かれたる 引掛けたる衣の下より、長く出たると也。○まだ解けながらなめり 男と逢ひて帯など解きたるまゝにて、また袴紐をも結ばである様子ぞと也。○そばのかたに 寝てゐる側の方にと也。○た、なはりて うね／＼して重なりたるをいふ。た、まる、た、むなど、同語の變化したるもの也。○ゆら、か ゆら／＼としたるをいふ。長ささま也。○いづこよりにか 何處より來れるにかと也。これより別の男の來れる様を叙したり。○きり満ち 「きり」は動詞の用法なり。天ぎる、水ぎるなどのきると同じ。「きり満ち」は水蒸氣の立込めたるをいふ。「きり」の名詞となれるが、即ち霧なり。○あるかなきかの 極めて色の薄きをいふ。○白きすいし これは單の地質なり。○うちぎぬ 打衣なり。砧にて打ちて澤を出したるよりの名なり。後世は板引にすれども、なほ打衣といへり。色は紅を常とし、單のうへに着る。婦人の装束にもうちぎぬあれど、全く別物なり。○ぬぎ垂れて ダラシなく着こなせるさま也。狩衣の領の紐などもさ、ぬなるべし。膚脱になれるにはあらず。○ふくだみ くらみと同じ。上にも「もちなしふくだめて」とあり。こ、は髪毛の枕の爲に癖付きて、ふくらめる也。○おし入れられたる 頭におし入れられたると也。冠るをいふ。○しどけなく しどろなる様をいふ。取しまらぬ、シダラなし、膚次もなしなどの意。○朝顔の露落ちぬさきに 朝早くといはんが如し。「落ちぬ」は乾かぬをいふ。○文書かむ 「文」は後朝の文なり。第三段十五日の條の評の附言を参照せよ。○道のほども心もとなく 道ゆく間もどかしくと也。○をふの下草 六帖に「櫻麻のをふの下草

紙の疊紙の幅のせまいのが、赤花か、紅かわからぬが、少し色のさめたのも、几帳のきはに散らばつてゐるよ。

露しあらばあかしてゆかむ親は知るとも」とあるを口ずさめる也。「櫻麻」は、麻は櫻のさく頃、種蒔く故とも、枝葉のさま稍櫻に似たればともいふ。「をふ」は麻生にて、麻の生へたる畑をいふ。歌の意は、麻生の下草の曉露の繁からば踏分けんも難儀なれば、此處にて夜を明して後歸らん、よし親に知らるとも厭はじと、女の許に忍びたる男の、曉の別の情を詠めるもの也。この歌、もと萬葉十一に出でて、「櫻麻のをふの下草露しあればあかしていゆけ親は知るとも」とあれど、六帖の「あかしてゆかむ」とある方、この趣にはよく適へり。この時代には、萬葉よりは六帖を、常に取馴したりと見ゆれば、この男も六帖の歌へるものと見るが至當なり。○口ずさびて 口進の義にて、口まかせにいひ出づるをいふ。○わが方へ 自分の宿直所の方へとなり。家路にあらず。○格子 女の局のなり。○御簾のそば 簾の端なり。○あけて見るに の下、女のしどけなげに寝たればと、詞を補ひて聞くべし。○おきていぬらむ人もかし この男の心中に思ふなり。わが如く起別れて往きし人のうへもをかしと也。○露をあはれと思ふにや わが如く早く歸り去りしは、露を大事と思ふにやあらんと也。上の「朝顔の露おちぬ先に」を承けて、露の乾かぬ先にと急ぐを、露をあはれむ意に取做したり。古本に「おきていぬらむ人もをかし」よりこの句までを、「かくてふしたるさまや目とまるらむ」とあり。これは意明らかなり。○枕がみ 枕許なり。「かみ」は頭に、あと(足の方)に對する語。○朴に 朴の木骨になり。夏扇の様なり。○ひろごりながら 廣がりたるまゝにと也。○た、う紙 疊紙の義。大きな紙(この頃はおほく陸奥紙)を二つに折りて、懐に入れ置くもの。物書くにも、何にも用ゐる。懐紙とおなじ。後世歌など書くに用ゐる懐紙のおこり也。○細やかなる 大なる疊紙を、便利の爲に細く裁ちて、短籍の如くしたるをいふ。これ即ち短冊のおこり也。○花か紅か 明方のすき見にて、色合しかとせぬ様なり。「花」は赤花の略。赤花は茜の色、「紅」は紅草の色なり。○にほひうつりたる 色澤の變りたる也。○散りばひたる



散らばりたるよと也。「たる」の下、よの歎辭を補ひて聞くべし。

人のけはひあれば、衣きぬのなかより見るに、うちゑみて長押ながしにおしか、り居たれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。男おとここよなき名残なごりの御あさいかな」ととて、簾すだすのうちになからばかり入りたれば、露つゆよりさきなる人のもどかしさに「といらふ。をかしき事とりたて、書くべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもにくからず。枕がみなる扇を、わがもちたるして、およびてかき寄するが、あまり近う寄りくるにやと心ときめきせられて、今すこし引きぞ入らるゝ。取りて見などして、疎とろくおぼしたる事など、うちかすめうらみなどするに、あかうなりて、人の聲々し日もさし出でぬべし。霧きりの絶たぎ間見えぬほどにといそぎつる文あひらも、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人も、いつの程にかと見えて、萩あぎの露ながらあるに付けてあれど、えさし出でず。香かうのいのみじうしめたるにほひ、いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、わがきつる所もかくやと、思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

〔考異〕○をかしき事とり立て、原本、「事」の下、と文字なくて、文意たしかならず。よりにて假に補ひつ。と文字三つ重なりたれば、一つを書落せるならん。○ひきぞ入らるゝ、原本ぞ、文字なし。古本による。

〔釋〕○人のけはひあれば、これより又、女を主として書けり。人の居る氣色あればと也。○衣のなかより

(口譯) 人のおる様子があるの、女は被つておる衣の中から見ると、男がこつて、長押におしか、つてゐた。遠慮の入る人ではないけれど、打解ける程の心持でもないのに、くやしきも、寢姿を見られたことよと思ふ。男は「この上ない、あのお名残の朝寢でお出でなさるよ」となぶりながら、簾のうちに半身ばかりはひつたから、女は「露の置くより早く起きてきた貴方が、齒がゆきに、私を朝寢と思ふのでせう」と答へるのも、わざと取立て、興ある事として書くべき程のものでもないが、かう男女互にいひあふ様子なんど

引ひ被ひきたる衣の中よりと也。○うちゑみて 男おとこがなり。元より知りたる中にての事なるべし。○おしか、り 體を横へて、簀すい子より長押をかけて、寄り懸りたる様なり。○恥ちなどする人 遠慮など入る人なり。「恥ち」はその意輕し。○うち解くべき心ばへにもあらぬに 親密になるべきほどの意志も持たぬにと也。こは女の意中をいへるにて、懇意なる友達位の交際にて、それ以上うち解けて、情交を結ばんの考なき也。○ねたうも見えぬるかな 「ねたう」は嫉やくの音便にて、残念なるをいふ。「見え」は見られの意。夫婦關係なき男には顔見せぬが、當時の慣習なれば、ねたましくも見られたるよといへるなり。○こよなき名残の御朝いかな この上もなきあのお名残の朝寢よと、男の女をなぶりたる也。「名残」は男に逢ひたる名残、「朝い」は朝寢、「こよなき」は朝いにかゝる形容の詞。○なからばかり 體たいの半分ばかり也。○露よりさきなる人のもどかしさに 露つゆの置くより早く起きて來りし貴方が、わが寢たるをかり也。○露よりさきなる人のもどかしさに 露つゆの置くより早く起きて來りし貴方が、わが寢たるを見て齒痒はがゆさに、しか思ひ給ふなるべしと也。豊とよ穎へいの「我を朝いといへど、我は朝いせるにあらず。お前が早き故に、さ思ふなるべし」といへる從ふべし。春註に「此男を咎めて、早く起出でし人のもどかしさに、かく朝寢するぞ」といひ、詳解に「わが許を露より先に立出でし人の、後朝の文おこすかもどかしさに」といへる、皆意通ぜず。「もどかしさ」の下、さ思ひ給ふなるべしを略けり。○をかしき事とこれは興味ある事としてと也。以下地の文なり。○いひかはすけしきども憎からず 男女の互にいひあふ様子なども、見悪くはなしと也。○枕がみなる扇 かの朴に紫の紙張りたるものなり。○わが持ちたるして 持ちたる扇あふしての略。「わが」は男自身がなり。○及びて 及び懸りてとなり。及び腰になるをいふ。○あまり近う云々 女の心なり。「にや」の下、あらんを略けり。○心ときめさせられて 胸騒むねさわぎせられてと也。胸がドキツクといふに同じ。○引きぞ入らるゝ、「引入らるゝ」は奥の方にして、衣の下にとしても、意通すべし。○取りて見 扇あふを取りて見るなり。○疎とろくおぼしたる事など 近寄れ

も、見悪くない。女の枕元にある扇を、男は自分の持つてゐる扇で、及腰になつて振寄せるのが、女の方では、ひどく近く寄つてくるのかと、胸騒ぎがされて、今すこし衣の中に體が引込まれる。男は扇を手に取つて見などして、餘所なくお思ひなすつておる事よ、など、それとなく怨んだりなどするに、あつてなつてきて、人の聲々がし、日もさし出でであらう。霧の絶間の見えないうちに、書いて遣らうとい、そいだ後朝の文も、こんな事だなまけてしまつたのが、はたから見ても氣懸りなものである。この女の所を立出ていつた人も、何時の間にか萩あぎいたと見えて、萩



の枝を露のあるまゝ、折つたのに、文を附けて、使の者が持つてきてゐるが、客がゐるので遠慮して、さし出し得ない。薰物の香の、その文にひどくたきしめた句が、甚だ趣がある。段々明るくなつて、あまり見苦しい程にゐるから、この男は此處を立出て、自分が別れて来た女の所も、こんなだらうかと想像されるのも、面白い事であらう。

ば女の引込むを見て、われを疎く思はれたる事よなど、男の怨みいふ也。○うちかすめうらみ それとなくいひ怨むと也。○あかうなりて 明くなりて也。○霧のたえ間みえぬほどにと 霧の晴れかゝらぬうちにと也。上に「朝顔の露おちぬ先に」といへると同じ。霧の晴れぬほどは、即ち朝顔の露のかわかぬ頃なれば也。「ほどに」の下、書かんを略けり。○たゆみぬるこそ 俗のオ留守ニナツタハガの意。「たゆむ」は油断なり。○うしろめたけれ 俗の氣ニナル、氣ニ懸ルなどの意。これは地の文の評なり。男のうしろめたく思ふにはあらず。○出でぬる人も 上に「人は出でにけるなるべし」とある男のこと也。○いつの程にかと見えて「にか」の下、書きたるを略けり。はやくも後朝の文を書きおこせたるをいふ。○萩の露ながらあるにつけてあれど 萩の露置きたるまゝの枝に文を附けて、使の者の持来てあれど也。萩の枝に文を附くるは、風流の業なるが、この頃は人への贈物は、何にても、小物は草木の枝に附くる習慣ありしなり。特に多く花の枝に附けたり。○えさし出でず さし出し得ずと也。今來てゐる男の手前を遠慮したるなり。○香のかのいみじうしめたる句 薰物の香の甚しく焚きしめたる句なり。句は風韻などいふ意。直に薰のこと、するは後世の意なり。こは文に香を薫じたる也。この頃は衣服は勿論、その他の物にも、香を焚きしむること行はれたりき。艶書などは、殊に心の見らるゝものなれば、なまめかしくせんとて、いたく焦したりと見ゆ。○はしたなき程に 明過ぎて、あまり具合のわるき程にと也。「はしたなき」は半なる意より轉りて、物事の満足ならず、不都合なるをいへり。○わがぎつる所も 男の胸中なり。わが出で來つる所もと也。別れて來りし女のあたりをさす。○かくや かくやあらんの略。この女の所のやうならんと、大やうにその有様を想像する也。自分がこの女に引懸りたる如く、わが女の所にも、他の男が來てたはれて居るならんとまで解くは強ひたり。

評 冒頭は苦中に趣を求めたのである。七月は陰曆では残暑の候だから、その夜を憂するのには、この草子の

の第一段に「夏はよる」とある思想に吻合してゐる。夜はいつもよしといふだけのことを、月の頃も、闇も、有明もと、具象的に列擧したのは、文致をもとむる手段で、有明から後朝の別に聯想してゆくのは、推移が自然である。

簀子に續いた板敷の間に女の寝ることは、外の場所でもある事だが、こゝは禁中の細殿あたりの女房の局の模様である。几帳を奥へおし遣つたのは、「端にこそ立つべけれ」と、小言を喰つたが、實はせまい局の蒸暑さに、風を入れたい爲であるらしい。衣の色合など委しく書いたのも、いはずには置かれな

い當時の慣習で、髪長いことをいつたのも、美人を證する紋切形である。袴の紐の引かれたのを捉へての想像は、頗る氣の利いた筆づかひである。「朝ぼらけの」と、叙景の語を挿んで、始めてこゝに時刻をあらはし、薄色か、それとも艶ある濃い綾かをわきかねるのも、明仄のほのぐらい頃なことを、具象的に知らせたのである。一體こゝに書いてゐるのは、宮禁内の出來事で、殿上人と女房との情事に就いて語つてゐるのだから「おのが方へ」は、殿上人が、おのが宿直所へ歸るものと見たがよい。さてその朝歸りの男の扮装にうつる。薄香染、白、二藍などの配色は、女の薄紫、香染と共に、夏向の小ざつぱりとした服装なことが想像され、鬢莖のふくだみは、女の袴の紐と共に、一對の頗る意味あるものである。

後朝の文は、情交を左右する一大事である。曉起別れて、晝時分までに、男からこの文をよこさぬ時は、即ち愛想をつかされたものとして、女は絶望の淵に沈む。こんな一大事をひかへながら、餘所の局の前渡りに、ふと好色心を起して、他の女にふざけてゐる。この氣の多くて、悠々閑々たる所は、流石にこの時代の人間である。

枕許の扇や疊紙も、この男の眼中から、美しく寫し出された。元來宮仕の女房は、この草子中にもい



つてあるやうに、誰にも顔をさらす者だが、寢姿をまで見られたのは、流石に悔しかつたらう。初は簾の端を、臆病らしく聊ばかり開けて見、次におちついて、腰をすゑて見、次に簾を打被いで、體を横へて長押におし懸り、次に簾のうちに半身を乗入れ、次に扇を種に及びか、つて、遂に女に近づかうとする。層一層、漸一漸、無遠慮になつてくる男の様子が、信にうまく描かれてある。ここに「明うなりて云々と、また叙景の一句を挿んだので、變幻測るべからざる趣がある。

「霧の絶間みえぬ云々」は、「朝顔の露おちぬ先に云々」とある首尾である。さてここ、後朝の文の來たのは、この道草を喰つてゐる男に對しての一種の皮肉である、反映である。「わが來つる所も」の想像の一句、最も適當に、この一篇を收拾し得たものである。

この文、霧と露とを字眼としてゐる。「いみじうきり満ちたるに」「霧にいたくしめりたる」「霧の絶間みえぬ程に」「朝顔の露おちぬ先に」「露をあはれと思ふにや」「露より先なる人の」「萩の露ながらあるに」とあるのがそれである。「をふの下草」も、陰に露がある。霧と露とは即ち曉を象徴してゐる。

通篇初秋の景象を背景として、曉起の男女が、偶然邂逅的一幕を演出させた。叙景叙事會話、いづれも綺靡艶冶であつて、人を惱殺させる。色彩も亦、今日から見れば濃艶である。素より事實を根據としたものには相違ないが、清少の理想によつて、更に美化醇化された、一部の艶話であることを忘れてはならぬ。大體客觀的の描寫であるが、ま、主觀的に、清少自身が現れてくるのは、白壁の微瑕である。

又いふ當時の人士は、情に活き美に活き、春風煦日のやうに、萬事優長で、餘裕のあるのを尙び、秋霜烈日のやうな、はげしい行詰つたのを嫌ふ。戀も心中する程の狂熱のあるのを、反つて恐ろしいと感じ、美の調和を破るもの、やうに觀じたから、自然微温的にながれ、熱してるやうでもあり、冷めてるやうでもありして、隨つて汎愛的であつた。だから結果から見れば、靈的の戀よりはむしろ肉的の愛、

即ち好色に傾いた觀がある。但この文を以て卑猥としりぞけ、作者の人格を彼はいふの間違つてゐる。武家時代の男女の風儀が嚴格だつた、情勢中にある今日の我々が、淫奔と見、卑猥と感ずる事も、當時にあつては、格別何でもない、當然の事であつた。されば清少も「をかしき事と取立て、書くべきにはあらねど」と、自ら證言してゐるではないか。

三十四段

木の花は 梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びらおほききに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品おとりて何となけれど、咲くころのをかしう、時鳥のかげにかくるらむと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いとしろく咲きたるこそをかしかしけれ。青色のうへに、白き單がさねかづきたる、青朽葉などにかよひて、いとをかし。四月のつごもり、五月ついたちなどのころほひ、橘の濃くあをききに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にもおとらず。時鳥のよすがとさへおもへばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

(考異) ○こがねの玉と 原本こがねのたまかとあり。

(口譯) 木の花は 梅が面白。濃くも薄くも紅梅が面白い。櫻の花びらが大きく、葉色の濃いのが、枝がほそくて咲いたのが面白い。藤の花は花房が長く、色がきえて咲いたのが、大層よい。卯の花は品格が劣つて、何といふ取得もないけれど、咲く時節が面白く、時鳥がその蔭に隠れるだらうと思ふと、大層面白い。賀茂祭の歸りしなに、







やうあらむとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにはひこそ、心もとなく  
つきためれ。楊貴妃、みかどの御使にあひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝春雨  
を帯びたり」などいひたるは、おぼろけならじと思ふになほいみじうめでたきこ  
とは、たぐひあらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉のひ  
ろごりざまうたてあれど、またこと木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこ  
しにことごとくしき名つきたる鳥の、これにしも栖むらむ、心ことなり。まして琴に  
つくりて、さまざまなる音の出でくるなど、をかしとはよのつねにいふべくやはあ  
る。いみじうこそはめでたけれ。木のさまざまにくげなれど、棟の花いとをかし。か  
ればなにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

釋 ○よにすさまじく、「よに」は甚しき意にいふ副詞。「すさまじ」は無興なるをいふ。○あやしき物にし  
て、卑しき物としてと也。怪しき物の意とするは當らず。○目に近く、ま近く取はやしてと也。下に、  
もてなしを補ひて聞くべし。別本にはこの語あり。又抄本には「近うもてなさず」とあり。○はかなき  
文、一寸したる文なり。○愛敬おくれたる、愛敬のすくなきをいふ。○たとひにいふも、その頃、不人  
相の顔を見ては、梨の花のやう也と喩へていひしなるべし。「いふも」の下、ことわりにてを略けり。○  
その色よりしてあいなく見ゆる、花の色白けて、愛想氣なく見ゆると也。「あい」は愛の字音。○もろこ  
しに、唐土にてはなり。○かぎりなき物にて、無上によき花としてと也。○文にも、詩賦の類をいふ。  
○さりともあるやうあらむ「さりと」は「よにすさまじく」より「愛なくみゆる」までをさす。「ある

文を付たりなどもしない。愛敬の劣つた人の顔などを見ては、この花を譬にしていふのも、ほんにその花の色からして、愛想氣なく見えるのを、唐土ではこの上もないものとして、詩文にも作つてあるものを、詩らぬ花だとは思つても、何かさういはれるだけの仔細があらうと思つて、強ひて眼をつけて見ると、花びらの端に、美しい紅い色が、おぼつかなくついてゐるやうである。楊貴妃が唐の天子の御使にあつて泣いた顔に譬へて「梨花一枝春雨を帯びたり」などいつたのは、いゝ加減の事ではあるまいと思ふと、やはり勝れてよい事は、他に類があるまいと思はれた。

桐の花、その紫色に咲いたのは、やはり面白いのを、葉が大きく広がつて、恰好は感心しないけれども、又外の木などと同じやうにいひ落すべきではない。唐土に仰山名名のついでゐる鳳凰といふ鳥が、これに取分けて栖むのであらうと思ふと、甚だ格別な氣がする。まして琴に造つて、様々な音色の出でくるなどは、面白いなどと、世間並にいへようかいへはせぬ。非常に結構である。木の振は醜げであるが棟の花は大層面白い。枯びた花で、風がはりに咲いて、きつと、五月五日の節供に咲合ふのも面白い。

やう」はし。かあるやうの略にて、褒めらる、だけの理由があるべしと也。「しか」は「もろこしに限なき物として云々」をさす。○せめて、強ひて也。○にはひ、こ、にては、紅色のホンノリしたるをいふ。○心もとなく、こ、は覺束なくといはんが如し。あるかなきかなるをいふ。○楊貴妃みかどの御使に云云、楊貴妃は字を大真といふ。唐の玄宗帝の妃なり。容貌艶冶、帝これを寵して政を忘る。安祿山兵を擧げて反し、長安の京に入るに及び、玄宗貴妃を伴ひて、蜀に遷幸す。兵士貴妃を惡んで、令を奉ぜず。いはく妃を殺さば從はんと。玄宗やむを得ず、貴妃を出す。兵士即ち貴妃を馬嵬坡に縊殺す。年三十八。白居易(字は樂天)その長恨歌に、この事を作りて、楊貴妃馬嵬に害せられて後、玄宗臨卍の道士をし、その魂魄を尋ねしめ給ひしに、方士東海中の仙山に到りてこれに遇ひ、天子の恩命を傳へければ、貴妃いたく感泣したる有様を形容して「玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨」と作れり。意は玉の如き美しき容貌も物寂しく、涙がほろ／＼と溢れぬ。その様恰も、春一枝の梨花の花が、雨に逢へるが如しと也。絶世の美人もうちしほれて、玉顔の寂寞たる故に、淡白なる梨花を以て喩へたるのみ。梨花を無上の物としたるにはあらず。○顔に似せて、顔に喩へて也。○春雨を帯びたり、「春」にて切るべし。春の訓むべからず。○おぼろけならじ、尋常一樣の事にはあるまじの意。「おぼろけ」は並大抵、大凡、一通りなどの意。○なほいみじう、前の梨花を惡くいひしを承く。「なほ」はヤ、ハリの意。○うたて、うとまし、厭はし、感心せずなどの意。○こと木、異木なり。○ことくしき名つきたる鳥、仰山なる名の付きたる鳥とは鳳凰のこと也。格物論に「鳳ハ瑞應ノ鳥ナリ。太平ノ世ニハ則チ見ル。雞頭、蛇頸、燕頤、龜背、魚尾ニシテ、五彩ノ色アリ。高サ六尺許、梧桐ニ非レバ栖マズ、竹實ニ非レバ食ハズ、醴泉ニ非レバ飯マズ。凡ソ栖止スル所、衆禽必ズ之ニ隨テ集ル。故ニ曰ク羽蟲三百有六ニシテ、鳳凰之ガ長タリ」。○これにしも栖むらむ心ことなり。鳳凰のごとき靈鳥も、この桐の樹に栖むらむと思へば思ひなし



は格別なりと也。○琴に造りて、桐は琴材となる。支那にては、既に詩經に見えたり。萬葉五に「梧桐日本琴一面、此琴夢化ニ娘子」曰云々、偶遭良匠散爲小琴、恒希君子左琴云々」。○をかしとは世のつねに「世の常にをかしとは」といふべきを、前後にいへり。○棟、アフチ。櫂の字をも書く。俗に櫂檀の木といへど、香木にはあらず。花薄紫にさく。○かればな、枯花なり。花のからびたるやうなるをいふ。○さまこと咲きて、風變りに咲きてと也。長き穂をなして、五瓣の薄紫の花の聚り開くをいふ。○五月五日にあふ、「あふ」は棟の花の、五月五日の節供に咲合ふをいふ。中右記、拾芥抄等に、棟の葉を、五色の絲を以て臂に懸け、悪氣を避くることあれど、こゝには不用なり。端午を見よ。

奈良時代には、専ら白梅を賞翫したが、平安時代になつて、紅梅を珍重することが始まつた。尤も奈良時代には、白梅こそ舶來してゐたが、紅梅はなかつたかも知れない。平安時代は、優美といふ方面に、その全力を傾注した時代で、社會のあらゆる事件から、文學工藝の上にも、その結果があらはれた。そこで紅梅も大分ふえて來て、禁中にも數多う置かれ、色の濃いのを殊にめでやして、紅の濃染の梅といひ、鶯宿梅の佳話さへのこつた。紅梅合も始まつた。櫻はわが邦花だが、その枝さしの無骨なのに氣付いたのは慧眼である。(枝のしなやかな今の櫻は、染井吉野といつて、徳川時代の變種である)花山院も櫻は梢ばかりを眺めるが面白いと仰つて、中門から外に植ゑられた。

藤の花は奈良以前から賞翫された花で、これを氏名とした藤原氏もある。「今ぞ榮えむ北の藤なみ」など歌はれて、藤原氏の興隆と共に、ますます珍重され、その花の紫色は、色相上非常になつかしい色合である。殊に平安人士の性情では、この派手やかな優雅な紫色が、大にその嗜好に適つたもので、大寶令の服色の制度が一變して、四位以上一色の黒袍となつたこの時代にも、なほ紫を聽色即ち禁色といつて、勅許を経ぬ以上は、君達でも著ることが出来なかつた。で單に色合が濃い薄いといふ時は、紫色の

うへのことである程に、一般的好尚となつた。當時非常にもはやされた葡萄染でも、二藍でも、つまりは紫が基礎色である。下文に「紫のものは、何もくめでたし」といつてゐる。

桐の花や棟の花も、色が紫だからよいのである。花にはさのみい、所は認められない。鳳凰や琴は典故的で、印象があさい。棟は禁中に割合に多かつたことから想像すると、これをめづるのは、時代の好みであつたらう。まして古人が、五節供などの年中行事に對する趣味心執著心の強いことは、現代人の夢にもおもひ及ばぬ所で、殊に婦人の筆者としては、必ず端午の節に咲合つて、その花は贈物として翫ばれる棟は、なつかしくもめでたくも覺えたであらう。

卯の花は平安朝に入つて、いよく器量をあげた。祭のかへさの卯の花は、下文に更に詳述した名文がある。清女のよほど氣に入つたものであらう。白重した青色、青朽葉に比べたのは、さすがに婦人の觀察である。

橘は垂仁朝以後繁殖して、奈良時代には、路旁庭前、これを植ゑぬ所はなかつたといふ。和銅中、犬養宿禰に橘姓を賜うた勅に、「橘者菓子之長上、人所好、柯凌霜雪、而繁茂、經寒暑、不凋、與珠玉、共競光、交金銀、以逾美、云々」、又天平中葛城王等に、橘姓を賜ふ御製に、

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいとこはの樹

とも見えて、その賞翫が一方でなかつた。餘勢平安時代になつても衰へず、「雨のふりたるつとめて」は、その香の高いことが想はれ、「朝露にぬれたる櫻にも」は、櫻のめでたさが、言外に立證され、事の外に、橘の風情を、當時の人がいかにめでたかゝ窺はれる。そして卯の花も橘も、時鳥を點景として賞翫することも、奈良時代の遺風である。

梨は禁中諸所に植ゑられ、昭陽舎には梨壺の號さへあり、一般に愛好されたやうである。清女がこゝ、



に「すさまじ」といひ、「あいなく見ゆ」といつたのは、直覺的感情を基礎として、創見を立てたやうではあるが、楊貴妃を引あひに、しひて世評に雷同を試みたのは、全く因習の力に壓されたものである。かうなると、前言は只抑揚の筆法に過ぎないことになる。

又支那に、梨花を花王のやうにいつたものは、絶対にない。恐らくは、樂天の詩意を誤解したものだらう。清女の漢學は、あまり根柢のあるものでないことは、この事でもわかる。また鳳凰の栖むのは梧桐に造るのは桐で、樹がちがふのを、一つにしていつてるのは變のやうだが、既に奈良時代にも「梧桐日本琴一面」とあるから、清少一人の誤でもない。

以上を總括して見ると、特色のある意見はすくなく、種類は八種、色は三色に止まつてゐるのは、甚だ貧弱である。見聞のせまい上流婦人には、最も困難な題目であるから、その月並に終つたのも、無理はない。但文章は、安らかに書けてゐる。

序に参考の爲、記録によつて、大内裏中の植木を統計して、當時の好尚を示さう。

櫻	一〇	松	四	木蘭	—	椋
梅	七	五葉松	一	椎	—	椴
紅梅	五	藤	三	桐	—	—
楝	七	枇杷	三	柿	—	—
梨	六	橘	二	栗	—	—
柳	五	楓	二	櫻櫨	—	—
竹	五	辛夷	一	夏櫨	—	—

三十五段

池は 勝間田の池。磐余の池。にへ野の池。初瀬に参りしに、水鳥のひまなくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしの池、「あやしうなどてつけゝるならむ」といひしかば、「五月など、すべて雨いたく降らむとする年は、この池に、水といふものなくなむある。また日のいみじく照る年は、春のはじめに、水なむ多く出づる」といひしなり。「むげになく、乾きてあらばこそさもつけめ、出づるをりもあるなるを、一すぢにつけゝるかな」と、いらへまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるを聞きしめして、みゆきなどありけむこそ、いみじうめでたけれ。「ねくたれ髪を」と、人丸が詠みけむほど、いふもおろかなり。御まへの池、また何のこゝろにつけゝるならむとをかし。鏡の池。狭山の池、みくりといふ歌をかしく覺ゆるにやあらむ。こひぬまの池。はらの池、二玉藻はなかりそ」といひけむをかし。ますだの池。

○勝間田の池 大和添下郡(今生駒郡)樂師寺の東にありしが、清少の頃には、殆ど廢せり。萬葉十六、「勝間田の池はわれ知るはちすなししかいふ君が髭なきか如」。○磐余の池 大和十市郡(今磯城郡)香具山の東にあり。一名市磯の池、また埴安の池。履仲二年の築造なり。池塘今廢せり。○にへ野の池 山城相樂郡。更科日記に、早朝京を立ちて、宇治を経て、栗駒山を越え、贊野の池の邊にて、日暮れ、其處に一泊して、翌朝東大寺を拜みたる由記せり。蜻蛉日記にも「いさもてゆけば、贊野の池、泉川な

(口釋) 池は勝間田の池、磐余の池が面白い。にへ野の池、この池は初瀬に参詣した時に、水鳥が隙なく立騒いだのり、大層面しるく見えたのである。水無しの池、これは不思議に、何でそんな名をつけたのだらう」といつた所が、「五月などは勿論、すべて雨がひどく降らうとする年は、この池に水といふ物がなくなる。又ひどく日でりする年は、春の始に、水が澤山出る」と人の答へたのを「まるきり水が無く、乾いてゐるならば、さう水無しともつけよう。出る時もあるののであるを、一途にも水無しとつけた事よ」と



ど」とあり。○初瀬 長谷の觀音なり。長谷寺を見よ。○水なしの池 抄に大和なるべしと見ゆ。濱臣は、耳無の池の轉れにやといへり。○水といふもの この書きさま面白し。まこと聊も無き趣に見えたり。○五月などすべて 梅雨の候なる五月は勿論、五月ならでもすべて、何時にてもと也。○むけになくむけに水のなくと也。○さもつけめ 「さも」は「水なし」をさす。○いづるをり 水の出づる折なり。○一すぢにつける 一途に考なしに名附けたりと也。○いらへまほしかりし 答へたかりしよと也。昔人に問ひ聞きし折のことをいふ也。「し」の下、よの歎辭を略けり。○猿澤の池 大和添上郡奈良の興福寺の南崖下にて、卒川の水を湛ふ。○采女の身を投げけるを云々 拾遺集に、猿澤の池に采女の身投げたるを見て、人麻呂「我妹子が寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるぞ悲しき」とあり。大和物語に「昔奈良の都に仕う奉る采女ありけり。——御門召してけり。さて後又も召さざりければ、限なく心うしと思ひけり。——夜みそかに出でて、猿澤の池に身を投げてけり。——いといたう哀れがり給ひて、池の邊に行幸し給ひて、人々に歌よませ給ふ。柿本人丸、我妹子が云々」とあり。事實は眞偽不明なり。○采女ウネメ。宣長は頸懸部にて、頸に領巾を懸けて、御饌に奉仕する團體の稱なりといひ、又氏女、頸居女の説あり。采女と書くは貢女を采る義にて、後宮職員令に「貢采女、郡少領以上」とあり。年齢は十六以上三十以下に限り、水司に六人、膳司に六十人を置けり。天皇に侍御し、飯饌を掌る官女なり。然るに、村上帝の時より、陪膳は内侍所の典侍の役となりて、後は髮上采女の名稱のみありき。○寝くたれ髪 の歌 わがなつかしき女の寝亂髪を、池中の亂藻の如くに見ることが、意外にして悲しと也。「寝くたれ髪は、寝てクタクになるをいふ。寝腐れの義。「玉藻」の玉は美稱。○人丸が詠みけむ 歌は人丸時代の風調にあらず。はるか以後のもの也。○人丸 柿本氏。持統文武二朝に仕へて、有名な歌人なり。嘗て草壁太子の舍人たり。石見に終るといふ。その歌萬葉集に出づ。○いふも 哀といふもと也。○御前の池

いひたつた。猿澤の池、この池に采女が身を投げたのを、御門がお聞きになつて、行幸などのあつたさうだが、大層えらい事である。それぐたれ髪を、柿本人丸が詠んだ事など、そのめでたさは、いふも並一通りの事である。お前の池、これは又何の譯で、こんな名をつけたのであらうと思はれて面白。鏡の池が面白。狭山の池が面白。みくりといふ歌が面白く思はれる故だらうか。こひぬまの池、これを古歌に「玉藻はな刈り」と詠んださうな面白。益田の池が面白

大和生駒郡。諸註は上野。○何の心に 何の心にてと也。鏡の池 諸註、美濃とせり。美濃各務郡各務に麻綜の池あり、これか。夫木集、謙徳公「面影に見つ、ををしむ花のいろを鏡の池にうつし植ゑては」。○狭山の池 武藏北多摩郡狭山。また、續紀に天平四年十二月築、河内國丹比郡狭山池とあり。いづれか。○みくりといふ歌 六帖の「戀すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶えすれ我や根たゆる」の歌なり。みくりは引けば切れもするが、私は貴方と切れは決して致しませぬといふ意なれば、「をかしきにや」といへる也。「みくり」は、和名抄に三稜草を訓みたり。莖の三稜をなす一種の水草。箋釋「圖經、春生、苗高三四尺、似菱蒲、葉皆三稜。五六月開、花似莎草、黃紫色、生淺水、傍或陂澤中、其根初生成塊、如附子大、或有扁者、傍生一根、又出苗」とあり。木居内遠は、今世にいふ三角蘭といふ物ならんといへり。簾に織ること、下文に見ゆ。○こひぬまの池 不明。○はらの池 武藏幡羅郡(今大里郡)の池か。さてはらの池の歌は、風俗の上野歌なれど、幡羅郡は、利根川を隔て、上野に隣りたれば、上野人の歌ひしにやあらん。○玉藻はな刈りそ 風俗「をしたかべ鴨さへ來るる、はらの池のや、玉藻は眞根な刈りそや、生ひも續ぐがにや、生ひも續ぐがに」とあり。意は色々の水鳥の住む、はらの池の藻の根は刈るな、生え續きてゆく爲にとなり。たかべは小鴨、眞根の眞は美稱、やはいづれも歎辭、がにのはのやうにの意の接尾の助辭。○益田の池 大和高市郡。弘仁中の築造なりしが、今は廢せり。評 水鳥の騒ぐのは、誰が見ても興味のある事だが、殊に清少に取つては、珍しくもあつたらう。それに池名の贊といふことが、この水鳥に對して、聯想上、特殊の面白味を感じたのかも知れぬ。水無しの小理窟は例の癖だが、黙つてゐられぬやうな來歴に、面白味があるのである。猿澤の池の傳説は、情味のおほい話だのに、惜しいかな、筆端に熱を缺いてゐる。御前の池は、神佛などの御前の義で附いたには相違なからうと思ふが、「何の心に」といつてる所を見ると、堤中納言物語や大鏡などにも、女陰をいつた話もあ



るから、それを下に思つたのかも知れぬ。この外大抵は、古歌古諺などの聯想によつた名所である。

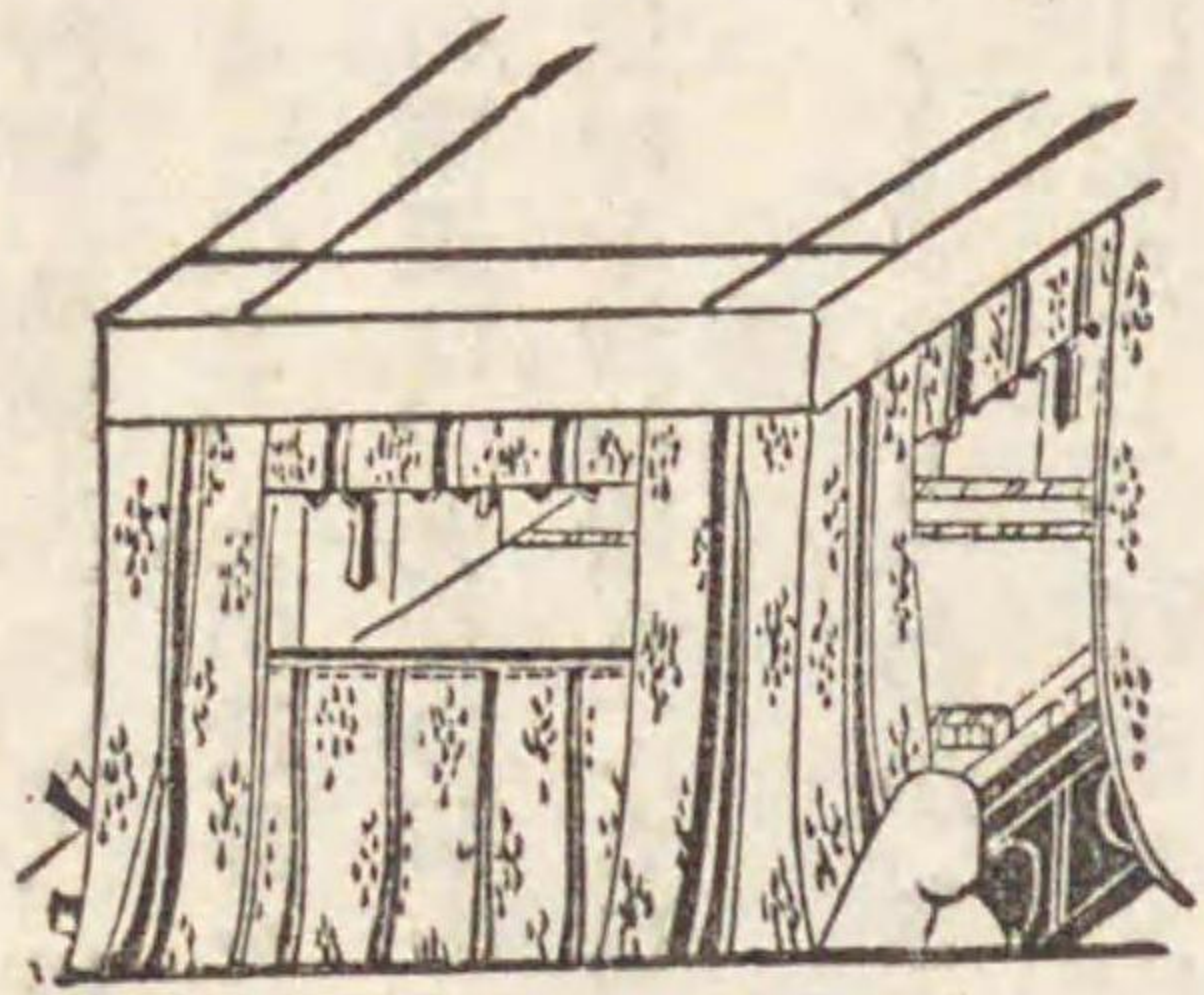
三十六段

せちは 五月にしくはなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたるも、いみじうをかし。九重のうちははじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく茸かむと茸きわたしたる、なほいとめづらしく、いつかことをりはさはしたりし。空のけしきの曇りわたりたるに、きさいの宮などには、縫殿より御薬玉とて、いろいろの絲をくみさげて参らせれば、御帳たてまつる身屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、あやしき生絹のきぬに包みて参らせたる、おなじ柱にゆひつけて 月ごるある、薬玉に取り替へてすつめる。また薬玉は、菊のをりまであるべきにやあらむ。されどそれは、みな絲をひき取りて物ゆひなどして、しばしもなし。

(考異) ○あやしき 原本あやとあり。抄本による。○薬玉に取りかへて 原本に文字なし。古本による。  
○せち 節の字音にて、いはゆる節供なり。○五月に 五月五日の節供にと也。この節供、禁中にては、まづ三日に、六衛府より菖蒲、艾を獻るを、四日に主殿寮、これを所々の殿舎の軒に茸く。五日に絲所より、菖蒲織を獻じ、主上これを懸け、武徳殿に行幸ありて、節會を行はる。群臣みな菖蒲を臺にす。なほ群臣に薬玉を賜ふ。畢りて騎射の事あり。(公事根源による) 端午を見よ。○菖蒲蓬などの薫りあひたる 菖蒲も蓬も、邪惡の氣をさぐる物として、五日には屋根に茸き織にし、種々の物に取付けな

(口釋) 節供は五月五日の節供に及ぶものはない。この日は、菖蒲や、蓬などが葺り合つたのも、甚だ面白く、禁中をはじめとして、いひやうもない程の賤しい民の住居まで、どうぞして自分の所に一番茂く茸かうと、競うて一面に葺いたのは、やはり大層珍しく、いづ他の節供の折はさうしたが、さうはしなかつた。この日は空の模様が、一面に曇つたのに、皇后の宮などには、縫殿から、御薬玉といつて、その節に色々の絲を組下げて献上したので、御帳臺をお立て

なざる身屋の左右の柱に懸けておく。去年の九月九日の節供の菊を、粗末な生絹の切に包んで献上したのを、おなじ柱に結び付けて、長い月日懸けてあつたのを、今日の薬玉に懸替へて、菊をば薬玉に九月九日の菊の節供まではある筈のものだらうか。けれどもその薬玉は、皆絲を引取つて、物など結んだりして、暫しの間ものこつてゐない。



臺 帳

て、句を切るべし。諸註「月頃ある薬玉に云々」と續けて解きたるは、次句に「薬玉は菊の折まである







あたりへ、お文を書  
いておやりなさる人  
も、今日は心が改ま  
つて、優美に面白い。  
夕暮の時分に時鳥が  
啼いたのも、總じて  
面白く、感じが深い。

く 町の辻を遊びあるくと也。○程々につけて 小供同志がおのが身の程合に應じてと也。○いみじき  
業云々 えらき事をしたりと也。薬玉折枝を袖袂に飾りたるを得意がる様なり。○常に こゝはひたす  
らにといはんが如し。○袂をまもり 附物したる袂をまもりと也。「まもり」は見つむること。目守の  
義。○人に 他にの意。他の兒の持ちたる薬玉に見くらぶるなり。○そばへたる 和訓葉に「戯れそ  
そりたるをいふ」とあり。俗のフザケタにあたる。○小舎人童 コトネリワラハ。小間使の男童なり。  
中少將の召具する童をいへど、こゝにはかなはず。又小舎人と童と別ちて見るべからず。○ひき取られ  
て 附物をなり。紫の紙に棟云々 その花、その葉、その根の色に應じたる色紙にて包みなどしたる也。  
棟の下、を包みを補ひて聞くべし。「ほそく巻きて」は「菖蒲の葉」をのみ承けたればなり。○根にして  
その菖蒲の根にしてと也。菖蒲の根は白ければなり。○長き根 菖蒲のなり。○えんなる 「えん」は  
艶の字音。やさしく風流なるをいふ。「なる」の下、よの歎辭を略けり。○返事書かむと「と」はとての  
意。○いひあはせ語らふどち 物事相談して、中よ、語らふ同士なり。○見せあはせ 互の返事を見合  
はせとなり。○人のむすめ 然るべき人の娘なり。○聞え給ふ人も 敬語を用るたれば、この「人」は、上  
臈の女房などならん。○今日は心ことに云々 今日とは思なしか格別に、優美に興ありと也。○時鳥の名  
のりしたる 時鳥の啼くを名のるといふ。ほと、ぎすの名は、もとその鳴聲によりて附きたればなり。  
「名のる」は、名告の義。

評 嘗て「折に觸れて一年ながらをかし」といつた清少が、五節供中ひとり端午を推奨したのは、どうい  
ふものか。祭の頃のおもしろさを再三復し、若葉をいひ、卯の花橘をいひ、時鳥をいつたので見ると、  
一般に夏季に興味を感じたことも、その一因である。  
殊に端午に留意すべきは、婦人の關係する行事の、他の節供に比べて多かつた事である。宮中では、

菖蒲の命婦が、薬玉を親王公卿に賜ふことがある。その他、薬玉をつけるのも、菖蒲の刺櫛をするのも、  
村濃の組糸で折枝をつけるのも、色紙で物を巻くのも、長き根を入れて消息するのも、皆これ婦人の業  
である。當時一般の婦人は、清少でなくても、この端午を、殊に興がつたものであらう。これがこの節  
供を推奨した、最大原因であらうと思ふ。また嗅感の美を、比較的重んじた時代だから、菖蒲の蕙、蓬  
の匂は、殊にこの節供に、不言の趣味を饒かならしめたものらしい。これもその副因の一つといはれよ  
う。

元來五節供は、支那風俗の輸入されたものながら、夙くからわが一般の習俗となつて、蜻蛉日記に、  
五月にもなりぬ。わが家にとまれる人の許より、おはしますとも、菖蒲葺かてはゆい、しからむを、いかせむ  
とはするといひたり。

とあるは、こゝに「いひ知らぬ民の住家まで、いかでわがもとに茂く葺かむ」とあるのを旁證するも  
のである。さて薬玉あり、菖蒲の櫛あり、菖蒲の蕙あり、菖蒲の太刀あり、菖蒲の枕、菖蒲  
の酒あり、その根の九節あるのを靈とする所から轉じて、長いのを喜ぶ習慣を生じ、それに歌など詠み  
こへてやり取した。興はその日一日に盡きず、

局ならびに住侍りける頃、五月六日もる共に詠めあつして、晨に長き根を包みて、紫式部につか  
はしける。 上東門院小少將

なべて世のうきにながるもあやめ草けふまでかゝるればいかゞ見る。 紫 式 部  
返し

何事とあやめはわかでけふもなほ袂にあまるれこそたえせぬ。  
と新古今集にあるのは、六日の菖蒲である。かうしたはては、その長短を競ふ遊戯も起つて來て、郁芳



門院の根合には、一丈有餘の尤物を出した。(外の草の根だといふ説もあるが)その節供遊の盛んなことは想ひやられる。

唐衣汗衫の連中から始めて、辻にあそぶ童まで、袖袂に折枝藥玉を附けることは、現代人には、一寸了解がいくまいが、賀茂祭、石清水臨時祭にも、雜掌の袖に造花をつけることがあり、徒然草にも、祭の日の放免の附物が、年を逐うて豪華になることが書いてある。文永賀茂祭の附物の圖を見たら、大體の想像がつくであらう。

辻あるく童子の描寫は、短文ながら活躍しておもしろい。清少得意の文字。

櫻を比喻に出したのは、折角集中しかけた注意をそらす傾があつて、妙ではない。筆の廻りすぎた失だらうが、一面から見ると、清少の人格のあらはれた所に活氣があり、親みがある。藥玉と菊との交代をいつたのは、智的の説明でうるさいが、「物結ひなどして」で、再び叙事に立返つたのはよい。

要するに、菖蒲蓬の香が、常に筆端に搖曳して、字々句々、皆芳しい。結末の夕ぐれの時鳥は、冒頭に、自然の照應があつて、旨く中間の瑣細な事項を包容し盡してゐる。文に長けた者でなくては出来ぬわざである。

この草子に紙のことが、處々に散見してゐるから、序に一應いつて置かうと思ふ。抑もこの時代の紙には檀、麻、楮、松皮、河苔、雁皮などから製した厚様があり、薄様があり、各種の色にすぎあけた色紙があり、染紙がある。それに支那舶來の唐紙がある。殊に邦製の紙は、本元の支那朝鮮よりも進歩發達したもので、その質が甚だ靱強であり、圖書寮附屬の紙屋院で製した物などは、最も精撰のものであつたらしい。第一この時代の上流人士が、紙に興味をもつた事は、今日の我々の想像以上で、實用以外には、種々様々の風流を罄したものであつた。經卷や、物語物や歌物などを書寫したものは、地紙に金

銀の泥繪で、山水草木花鳥を描き、或は切箔を押ししたり、塵地(梨子地)を撒いたりした、一見目もくらむ程の光彩燦爛たるものもある。又あつさり吹繪をしたものもある。又織色紙といつて、各種の色紙を織合はせた瀟洒なものもある。中には破織といつて、山水雲烟などの形態色彩を、あらゆる各種の色紙を幾重にもきり合はせて現した、意匠製作の風流巧緻を極めたものもある。(西本願寺藏三十六人集の如き)懐中の疊紙は、當人の好によつて各種の色紙を用意し、手紙に至つては殊に風流を罄して、四季折々に相當した各種の色目を用ゐ、それを又、周圍の色彩に調和させることに注意した。それは大抵周圍と同色を用ゐることが一定の習慣のやうで、赤染集に燈心を菖蒲の根にしたとある。手紙を枝に附けて人に贈るにも、柳の枝なら青、椎の枝なら緑、紅葉の枝なら紅の紙を用ゐた。物を包むにも同様で、即ち本文にも「紫の紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉、白き紙を根にして」とあるのが、それである。こんな、色彩に大きな趣味をもつたことは、蓋し衣裳の染色の趣味からうつつて來たものだらう。

三十七段

木は かつら。五葉柳。橘。そばの木。はしたなき心ちすれども、花の木ども散りはて、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず、濃きもみぢのつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。檀。さらにもいはす。そのものともなけれど、やどり木といふ名、いとあはれなり。榊。臨時の祭、御神樂のをりなど、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけむも、とりわきをかし、

(口譯)  
木は、楓、五葉、柳、橘、いづれも面白い。そばの木、名がふつつかぬ氣はするが、外の花の咲く木などが散つてしまつて、一體に緑になつた中に、その時でもなく、







也。これ戀する人の例に引かれたる也。○たれかは數を知りて「千枝」はたゞ枝の繁きを轉義したるま  
 でなるを、こゝは千ある心にいひなして、戯れたる也。「か」は疑辭、「は」は歎辭。○人近からぬ 人氣  
 遠きをいふ。檜は深山にある木なれば也。○みつばよつばの殿づくり 催馬樂の「この殿はむべも富み  
 けり、さきぐさの三つば四つばに殿造せり」とあるによりて書けり。さきぐさのは、三つば四つばとい  
 はん序詞なり。さきぐさは眞淵の冠辭考に「三枝と書きて、これは佐草草なるべし。佐草は山百合の本  
 名なり。その莖の先分れて、三つにも四つにも、枝を打ちて花咲く」といへり。その他三極、沈丁花など  
 の説もあれど探らず。「三つば四つば」は、守部いはく「三つ間四つ間の意なるべし。バとマと通ふ。棟一  
 つを一間といひて、その家の榮行くまゝに造り添ふる故に、その棟數の添りゆくを、富榮ゆることにい  
 へり」と。更に思ふに、「三つば」のばは端の義にて、家の幾棟にも分れたるをいへるか。守部説も物遠  
 きが如し。さて、檜は神代紀に「檜可<sub>ニ</sub>以爲<sub>ニ</sub>瑞宮之材<sub>一</sub>」こと見えて、太古より建築用の良材としたれば、  
 この歌の詞を借りて、をかしと稱美したる也。○五月に雨の聲まねぶらむ その下露の繁くて、五月雨  
 に似たるをいふか。諸註、葉の風にそよ音の、雨に似たるをいふといへり。さては「五月に」の語不  
 用となるべし。典故か引歌かあるべく思へど、未考。「まねぶ」はまなぶに同じ。○かへの木 兒手柏な  
 り。和名抄に「柏實、一名樵子、和名加倍」とあり。旁註に「木ずゑのあかみてとあるは、柏の葉のう  
 へに微赤毛のある也。おなじかたにさしひろごりたる葉のさまは、本草綱目に、「萬物皆向<sub>レ</sub>陽、而柏獨  
 西指<sub>ニ</sub>、陰木也。故字從<sub>レ</sub>白、白者西方也。埤雅云、柏有<sub>ニ</sub>數種<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>藥唯取<sub>ニ</sub>扁面側生者<sub>一</sub>、故曰<sub>ニ</sub>側柏<sub>一</sub>也」  
 かの柏ひとり西にさすとある側柏のこと也。三月に花を開き、九月に實をむすぶもの也。是皆本草の趣  
 也。然るを季吟子楓の事に註せし、殊の外のあやまり也。異本にかえてとあり、それも楓にあらず、柏の  
 こと也。柏をかえてとよみたる體歌あり。「塚の上に松とかえてのおひんまで、またむと契る妹のかしこ  
 ば也。○かれたる 干枯びたると也。

さ。』松柏は塚上に生ずるもの也。云々。○さ、やかなるにも 小やかなる木にもと也。○おなじ方に  
 さしひろがりたる云々 柏の複葉の一方に片寄りて繁茂したるをいふ。○物はかなげにて 便りナイヤ  
 ウにて、埤モナイヤウにてなどの意。「はかなし」は物事しかとせぬをいふ。柏の花は花らしくもあらね  
 ば也。○かれたる 干枯びたると也。

(口譯)  
 あすは檜の木、これ  
 は世間の手近な所に  
 見えもせず、あると  
 聞えもしない。金の  
 御嵩に参拜して歸る  
 人などが、さやうに  
 持歩くやうである  
 よ。枝振などが、ひ  
 どく手もつけられな  
 さうに荒々しいけれ  
 ど、何の譯があつて、  
 明日はひの木と名を  
 つけたのだらう。つ  
 まらぬ豫言であるこ  
 とよ。誰れにあてに  
 させた豫言だらう  
 か、と思ふにつけて、  
 その人が知りたくな  
 つて面白い。ねずも  
 ちの木、これは世間  
 並てありさうな様で

あすはひの木、この世近くも見えきこえず。御嵩にまうでて歸る人など、しかもて  
 ありくめる。枝さしなどの、いと手ふれにくげに、あらしくしけれど、なにのこゝろ  
 ありてあすはひの木とつけ、む。あぢきなきかねごとなりや。たれにたのためたる  
 にかあらむと思ふに、知らまほしうをかし。ねずもちの木、人なみくくなるべきさ  
 まにもあらねど、葉のいみじうこまかに、ちひさきがをかしきなり。棟の木。山梨の  
 木。椎の木は常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるも  
 をかし。白檜などいふもの、まして深山木のなかにも、いとけどほくて三位二位の  
 うへのきぬ染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事  
 とり出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞鳴尊の  
 出雲の國におはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあは  
 れなり。いふ事にても、をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつ  
 る物は、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えね。



もないが、葉がひどくこまかく小さいのが面白のである。棟の木、山梨の木が面白。椎の木、常磐木はどれもさうであるのを、特にこの木がさ、葉替しない例にいれたのも面白い。白樫などいふものは、おなじ深山木の中でも、まして人あ遠くて、三位や二位の袍を染める折ばかり、葉だけでも人が見るやうであるから、結構な事や面白い事として取出していへさうもないが、いつも雪の降つたのに見まぢがへられて、素盞鳴尊が出た事跡を思つて、人丸が詠んだ歌などを思ふと、甚だあはれである。一體、人のいふ事でも、折節につけても、一かど

(考異) ○椎の木 の下、原本は文字あり。抄本による。

○あすは檜の本 明日者檜の木の義。略してアスハ、アスヒ、アスナラフといふ。羅漢枯なり。檜に似てその葉粗大なり。深山陰濕の地に生ず。○この世近くも 世間普通にもといはんが如し。その深山の奥に生長するをいふ。○御嵩 ミタケ。金の御嵩の略。○しかもてありくめる 家苞として、さやうに持ちあるく様子なるよと也。○めるの下、よの歎辭を補ひて聞くべし。○手觸れにくけに さはりにくさうにとなり。○あらくし 粗雑なるをいふ。○なにのころ 「心」は俗のワケといふに同じ。○かねごとなりや つまらぬ豫約なるよと也。○かねごと」は豫言なり。「や」は歎辭。「あぢきなき豫言」とは、その名の明日は檜とならんとあるをさす。○たれにたのめたるにか 明日は檜にならんと請合ひて、誰に當にさせたるにかと也。「たのめ」は頼みに思はする也。○ねずもちの木 和名抄に「椶、漢語抄云彌須美毛知乃岐」とある是なり。今いふ鼠もちは、和名抄に「女貞、大豆乃岐」とある物にて、別種なるべし。「葉のいみじう小さき」とあれば、枸黄楊の類ならんか。○人なみく」なる 普通の木と並べいはる、をいふ。「なみく」は並々なり。木に「人並々」といへるは、例の擬人なり。○山梨の木 山野に自生する梨。俗に聖 靈梨といふ。その實小さくて棗に似、酸味あり。和名抄に「檜子、夜末奈之、山梨也」と見ゆ。六帖に「世の中をうしといひてもいづこにか身をば隠さむ山なしの花」。○常磐木はいづれもあるを 常磐木は、いづれもかあるをの略。「常磐木」は常緑木、即ち冬落葉せぬ木をいふ。○それしも 椎の木をさす。○葉がへせぬためしに 落葉せぬ例にと也。昔より椎の木を葉替へぬものとして、歌には詠み來れり。拾遺集に「はし歴のとかへる山の椎柴の葉替はすとも、君はかへせじ」、後拾遺集に「年をへて葉がへぬ山の椎柴やつれなき人の心なるらむ」。○白樫 小野博いふ「血楯は赤樫、鉤栗は白樫なり。白樫は葉の形狭小にして、柯葉の如く、鋸齒あり。實は赤樫よりや、大にして、苦味少なく食ふべし」。

あはれとも、面白いとも聞いて置いたものは、草でも木でも鳥蟲でも、おろそかには思はれない。

○まして 「深山木の中にも」の句を隔て、「いと氣とほくて」にかゝる。○けどほく 人氣遠きをいふ。但「け」は接頭語なり。氣の義とするはいかゞあらん。○三位二位のうへの衣をむる 二位三位の袍は、令制には淺紫なれど、この頃は四位以上悉く黒袍となれりと覺し。さてその黒を染むるには、櫟即ち櫟の實の皂を用ゐること、令以來の法にて、延喜式には茜をも混ぜたり。色を皂むる爲の下染ならん。白樫を用ゐることは、延喜式にも、和名抄にも見えず。但この時代は、服色の過渡期なれば、櫟の實を用ゐるべきを、白樫の葉をも用ゐたることありしにや。眞頼が白樫を櫟の事といへるは、據を知らず。○葉をだに人の云々 葉だけにても、人の見る様子ぞとなり。撮要抄に「白樫の葉を煎じて、それにて染め、その上を五倍子鐵漿にて染むるにや、云々」。○見るめる の下、さればの接續詞を略けり。○取り出づべくもあらねど 白樫は木としては詰らぬ物なれば也。○いつとなく雪のふりたるに見まぢがへられて 解しがたき句なり。新釋に「白樫の葉裏のうす白いのが遠くから見ると雪の降つた如くに見まぢがへられるといふのだらうか」といへるに、假に従ひおかん。○素盞鳴命の云々 今一つ白樫の興あることとは、素盞鳴命の出雲國におはしたりし事に就いて、歌人柿本人麿の詠みたる歌を見ること、也。素盞鳴命の出雲國へおはし、は、須賀宮の段なるべきが、紀記共に、白樫の事なし。眞頼が「この尊が白樫の枝を取りて舞給ひしこと、出雲風土記にあり」といへれど、同書には佐世の葉とあり。佐世はタモの木にて、藪肉桂のこと也。しかも山路に雪の降りたることなど見えず。○人丸が詠みたる歌 萬葉十「足引の山路も知らず白樫の枝もとを、に雪のふれ、ば」といふ歌の左註に「柿本朝臣人麿之歌集出」とあれば、拾遺集にも、これを人麿の歌とし、人麿集にも入りたり。素盞鳴命には全く無關係なる歌なれど、當時の傳説に、素盞鳴命が、高天が原を逐ひやられて、出雲に到り給ひし途中の深山中に、大雪にあひて難儀せられしことを詠める歌といひしならんか。又「素盞鳴命云々」の句を他段の挿入として、



「見まがへられて」より直に「人丸がよみたる歌」に續くる時は、や、簡明のやうなれど、「いつとなく云々」の句意なほ明確ならねば、いかにせん。要するに「いつとなく云々」以下は、その意明らかならず。誤脱にてもあるべし。○いふことにても云々 世上にいふ事にても、又四季の折ふしにつけてもと也。○一ふしあはれとも云々 一節にても、感哀ありとも面白しとも、心に思ひ置きたる物はと也。○おろかに 疎になり。

ゆづり葉のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青うきよげなるに、思ひかけず似るべくもあらず、莖の赤うきらくしう見えたるこそ、賤しけれどもをかしけれ。なべての月ごろは、つゆも見えぬもの、しはすの晦日にしも時めきて、なき人のくひ物にもしくにやと哀なるに、又よはひのぶる齒固の具にもしてつかひためるは、いかなるにか。「紅葉せむ世や」といひたるもたのものし。かしは木いとをかし。葉守の神のますらむも、いとかしこし。兵衛の佐、尉などをいふらむもをかし。すがたなけれどするの木、からめきて、わるき家のものとも見えず。

○ゆづり葉 古くはゆづる葉といへり。交譲木のこと。○つやめきたる 葉のうつくしく光あるをいふ。○似るべくもあらず 「見えたる」にかゝる詞。○いやしけれども 色相上、緑に赤の配合は、強烈に過ぎて卑しけなり。○なべての月頃は 大抵の月々はと也。○つゆも見えぬ すこしも目に觸れぬとなす。○しはすのつごもり 十二月の晦日なり。この「つごもり」は廣義にはあらず。報恩經に、亡靈來去の時日を舉げて、二月、五月、七月、八月、九月の外「十二月晦日午時來、正月一日卯時歸」とあるによりて、當時は十二月晦日にも魂祭せし也。このこと曾丹集、和泉式部集にも見えたり。○なき人のく

(口譯) ゆづり葉が、その葉のひどく房々として、艶々しいのは、大層青く美しいのに、意外に似合ひさうもなく、莖が赤くきらきらしく見えたのが、下品だけれども面白い。平生は、すこしも眼にかゝらぬ物が、師走の晦日には、時めいて、亡者に供へる食物の下にも敷くかしら、とおもふと哀であるのに、又御祝儀の壽命を載せる料にも敷いて使つてゐるやうなのは、どういふ譯だらうか。古歌に「紅葉せむ世や」と歌は

れたのも、交譲木の常盤なことをいつたものだから、頼もしい。かしは木、これが大層面白い。この木には葉守の神がましますらしいのも、大層長い。兵衛の佐、尉などを、柏木と呼ぶらしいのも面白い。木に趣はないけれど櫻欄の木、唐風で、つまらぬ家にあるべきものとは見えぬ。

ひ物にも敷くにや 聖靈に手向くる食物にも、搔敷として用ゐるにやあらんと也。古へは食物を草木の葉に盛ること常なりき。世進みては器皿に盛りたれど、祭祀や儀式の折は、なほ舊慣に従ひて、物の華には盛りたりけん。今も魂祭に、蓮の葉に飯を盛る。また正月の鏡餅に、交譲木などを飾る。○よはひのぶる 年の始に種々の物にて、齒を落ちざらんやうに食ひ固めて、壽命を延ばす祝を、「齒固」といふ。江次第抄に「齡謂、人年齢也、齒固者、延年固齡之儀也」とあり。○齒固の具にもして 交譲木を齒固の品々の搔敷にもしてと也。「齒固」は、江次第に「元日平旦、内膳供、御齒固具、盛、青瓷、云々、大根一坏、瓜串二坏、押鮎一坏、煮鹽鮎一坏、猪突(以雉代之)鹿突(以田鳥代之)一坏」とあり。○いかなるにか 無常の魂祭にも用ゐる、祝賀の齒固にも用ゐるは、何の故にかあらんと也。○紅葉せむ世や 六帖に「旅人に宿かすが野のゆづり葉の紅葉せむ世や君を忘れむ」とあるによれり。意は交譲木が紅葉する世とならば、君を忘れんも、その紅葉する世はともあるべきならねば、決して君を忘れはせぬと、固く誓ひたる也。故に頼もしく思はる、也。○かしは木 榎なり。宣長いふ、「かしはは炊葉の義にて、飯を炊ぐ顛の下敷に用ゐる木葉をいふなれば、朴ガシハ、長目ガシハなど、炊葉の名ある木數多あり。中にも榎は葉も廣く大きくて、使用上都合よければ、炊葉の名を占領せる也」と。又搔敷にも古より使川して、葉椀、葉盤など作れり。本草和名には、榎の一名を久奴岐とあれど、なほ今柏餅に用ゐる榎とする方可ならん。○いとをかし その頃専ら神に捧ぐる物の、搔敷などに用ゐたるが故ならん。○葉守の神のますらむ 後撰集に、枇杷左大臣(藤原仲平)「ならの葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな」。この初句を、大和物語にはかしは木にとあり。大和物語の話説の方世にひろがりて、榎木に専ら葉守の神をいふやうになれり。葉守の神は、袖中抄に「樹神也」とあり。榎は古葉の樹に著きたるまゝに、春まであるより、葉を守る神あるやうにはいひしなるべし。後撰集にいへる榎の葉も、昔



通には、枯葉の散らで梢にある物なり。歌は主ある女の家に、人を立入らせて、櫛の葉を探らせしを、女の咎めたるより、詫び入りたる意にて、葉守の神をその夫に喩へたるなれど、この寓意の方をさし置きて、只表面の意をのみ、本文には引用せる也。○兵衛の佐ぞうなどを云々「兵衛府の佐」は次官、「ぞう」は尉の直音にて、尉は三等官なり。兵衛の督、佐、尉、皆異名を「かしは木」といへり。何の故なるかを知らず。思ふに、古へ兵衛府に、櫛の木ありて、さる異名をや附きたりけん。眞頼が、かしは木は神供に用ゐる物なれば、畏みて人の手も觸れぬを、兵衛の武官の檢非違使兼ねたるが、威勢の凄じきに擬へたるならんといへる、面白けれど、鑿説にちかし。○姿なけれど、棒立にて趣もなきをいふ。○すろの木 櫻欄なり。○からめきて 唐國の物のやうにてと也。○わろき家の物とも 舶來の唐物の貴かりし時代なれば、器物にても草木にても、よき家ならでは、唐めきたる物はなかりし也。

評 楓、五葉、柳、橘、棟に、何の説明も批評もつけぬのは、一般にめでたい木と認められてきたからであらう。柳、橘、棟はいふまでもなく、楓は賀茂祭の探物であり、五葉松は、延喜時代にも、禁中に植ゑられ、雖も小不<sub>レ</sub>失<sub>ニ</sub>勁節<sub>ナ</sub>などいはれた、庭木としての流行兒であつた。そば、檀の春秋の紅葉は、珍しいが取得で、榊、榊、檜、楠、白樺、椎は、聯想の面白い點を取つた。山梨は樹としてはつまらぬ物であるが、六帖の證歌がゆかしいので、こゝに擧げこのだらう。そば、かへで、ねずもち、交讓木等の、精細な觀察は流石である。この文の價值は、全く是等の文字にある。櫻欄が、わろき家の物とも思はれなかつたのは、舶載後まだ十分に繁殖しないで、貴人の庭園にばかり珍重されたからであらう。禁秘抄の文が、ほゞこの消息を説明してゐる。

櫻欄、延喜五年栽<sub>ニ</sub>東庭<sub>ニ</sub>、清涼殿前有<sub>ニ</sub>此樹<sub>ニ</sub>而枯<sub>ル</sub>、尋<sub>ニ</sub>舊迹<sub>ニ</sub>被<sub>ル</sub>栽<sub>ニ</sub>、是<sub>ニ</sub>貝親王樹也、又應和中被<sub>ル</sub>栽<sub>ニ</sub>中殿前<sub>ニ</sub>、前の木の花とちがつて、可なり多種類にわたつて、内容も豊富である。そばの木に「さし出たる」、寄生

木に「やどり」、楠に「まじらひ」、檜に「雨の聲まねぶ」、あすは檜に「かね言」などの擬人はもとより、間接にも人格視しての品評は、無情の植物にもなつかしみを起させるもので、情味が甚だ饒い。又名詞を擧げるにしても、助辭のあるのがあり、無いのがあり、更に語句を添へたのがあり、修飾語を先にしたのがあり、後にしたのがあり、種々様々に辭様を變化させたのは、筆者苦心のところであらう。

三十八段

鳥は ことゞころの物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ。時鳥 水鶏。鳴。みこ鳥。ひわ。ひたき。山鳥は、友をこひて鳴くに 鏡を見すれば慰むらむ、いと哀なり。谷へだてたるほどなど、いと心ぐるし。鶴はこちたきさまなれど、鳴く聲雲居まで聞ゆらむ、いとめでたし。かしら赤き雀。班鳩の雄鳥。たぐみ鳥。鷺は、いと見る目もみぐるし。まなこゑなどもうたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎの森にひとり寝じと争ふらむこそをかしけれ。はこ鳥。水鳥は、鴛鴦いとあはれなり。かたみに居がはりて、はねのうへの霜を拂ふらむなど、いとをかし。都鳥。川千鳥は、友まどはすらむこそ。雁の聲は、遠く聞えたるあはれなり。鴨は、はねの霜うち拂ふらむと思ふにをかし。

(差異) ○見すれば 原本見せればとあり。古本による。 ○ことゞころ わが邦と異なる所、即ち異國なり。 ○まねぶらむよ 鳥ながらも、感心に人の詞を真

(口釋) 鳥は 外國のものだけれど、鸚鵡が甚だ興がある。鳥ながら、人のいふ言葉をまねるであらうよ。時鳥、水鶏、鳴、みこ鳥、ひわ、火焼、いづれも面白い。山鳥は友を戀しがつて啼くに、鏡を見せると、自分の影のうつるのを友と想うて、慰むであらうのが、大層あはれである。雌雄谷を隔ててゐる時など、甚だ氣の毒である。鶴はこてこてした姿であるけれど、鳴く聲が、たま



て聞えるであらうの  
が、大層結構であ  
る。頭の赤い雀、斑  
鳩の雄鳥、たくみ鳥  
いづれも面白い。鸞  
は見た目が、甚だ見  
にくい。眼付なども  
いやで、惣體になつ  
かしくないけれど、  
ゆるぎの森に獨は睡  
まいと、妻争をする  
てあらうことが面白  
い。は、鳥が面白い。  
水鳥では、鸞が、  
大層あはれてある。  
雌雄互に居代つて、  
羽のうへの霜を拂ふ  
てあらうことなど  
が、大層面白い。都  
鳥が面白い。川千鳥  
は獨はぐれて、友を  
惑はし失ふであらう  
ことが、あはれてあ  
る。鴨は羽におく霜  
を羽たきして拂ふ  
てあらうと思ふにつ  
て、面白い。

似るであらうことよと也。禮記に「鸚鵡能言、離飛鳥也。〇みこ鳥 濱臣いふ「巫鳥ならん。巫の字、  
コといへば也」と。和名抄に「鴨、音巫、漢語抄云、巫鳥、之止々」とあり。雀に似て黄赤にして、翅に黒  
き縦の斑あり。眼に菊座の如き輪あり。〇ひわ 鶺鴒。雀より小く、全體黄色に青を帯びて、處々黒みあ  
り。秋來てよく囀る。その聲清滑なり。〇ひたき 鶺鴒。大さ雀ほどにて、大方黒くして、背は灰赤、處  
處白斑あり。秋の末きてよく囀る。〇山鳥は——鏡を見せれば 萬葉十四に「山鳥の尾ろのはつ尾に  
鏡かけとなふべみこそ名によそりけめ」と見えて、夙より山鳥に鏡をいへり。奥儀抄に「この鏡のこ  
と、或物には、昔隣の國より山鳥を贈りて、鳴聲妙なる由を申しけれど、すべて鳴かざりけるを、或女  
御、友を離れて鳴かぬならん、鏡を懸けて見せ給へと申しければ、籠に鏡を懸けたりけるに、影を見て  
鳴きけり」とあり。こはもと支那の傳説にて、事文類聚後集に「昔爾賓王結、言峻如之山、獲鸞鳥、王  
甚愛之、欲其鳴而不能致、乃飾以金縷、饗以珍羞、對之逾戚、三年不鳴、其夫人曰、嘗聞鳥見  
其類、而後鳴、何不懸鏡映、王從其意、鸞觀形、哀音響、中宵、一奮而絕、云々」とあり。この鸞  
鳥を「山鳥」と譯したるものと見ゆ。〇谷隔てたる程など 奥儀抄に「或説には、山鳥は夜になれば、  
雌鳥は山の岑を隔て、別々にぬるに、曉になりて、雄鳥の尾をもたけてみるに、雌鳥ある處の鏡にて  
見ゆる也、云々。〇心ぐるし 氣の毒なるをいふ。〇こちたき 言痛の意より轉じて、うるさく、ゴタ  
ゴタしたるをいふ。〇鳴く聲雲居まで 「雲居」は空なり。詩經に「鶴鳴九臯、聲聞于天」。〇かしら  
赤き雀 抄に、「俗にニフナイ雀といふ雀の屬にて、甚だ小さく、頭背赤し。紅雀とするはわろし。〇い  
かるがの雄鳥 「いかるが」は斑鳩と書く。和名抄には、鳩の字を訓めり。俗にいふ豆廻しなり。雄鳥を  
いへるは、雌鳥よりは羽色の美しければ也。〇たくみ鳥 鶺鴒か。和名抄に「巧婦、太久美止利、好  
葦皮、食中蟲、故亦名、蘆虎」とあるを、掖齋は、蘆虎は葦切の事にて、巢を營むことさのみ巧ならず。

(口譯)  
鶺鴒は詩文などにも、  
結構な物として作  
り、聲からはじめて、  
姿形もそれほど上品  
に美しい程合にくら  
べては、禁中に鳴

鶺鴒は葦切の屬にて、巢を造るに、人髮馬尾を用る、蘆花を綴りて、その形儀の如く、巧緻愛すべし。さ  
れば、巧鳥は鶺鴒を訓むべし」といへり。〇見るめも見ぐるし 清少の好かぬ故ならん。〇まなこ居な  
どもうたて 「眼居」は目付なり。「うたて」はうたてての略にて、續く句なり。實に鶺鴒の目付は憎々し  
けなるもの也。〇ゆるぎの森に云々 六帖に「高鳥やゆるぎの森の鶺すらも獨は寝じと争ふものを」と  
あるに據りて、その情合を知るが面白しといへり。「ゆるぎの森」は近江高島郡萬木にあり。古は琵琶  
湖の水近くて、鶺の群栖したりし處ならん。歌は、鶺ですらも、獨にては寝じとて妻争をするものを、  
我はさびしくも獨寝することよの意なり。〇はこ鳥 六帖に「深山木によるは來てぬるは、こ鳥の明けば  
歸らむことをこそ思へ」、又源氏に「深山木にねぐらさだむるは、こ鳥もいかでか花の色にあくべき」とあ  
るにて思へば、春先になく野禽なるべし。春註に「或説は、やこ、と鳴く故にいへるか。〇かたみに居  
かはりて 雌雄互に居かはりてと也。「鶺鴒」は雌雄互にその霜を拂ひ合ふといふ傳説、その頃ありしな  
るべし。六帖(童蒙抄による)「羽のうへの霜、うち拂ふ友をなみ鶺の獨寝するぞわびしき」。〇都鳥 契  
沖、季吟、眞淵などの鶺と定めたる、確論なるべし。〇川千鳥 川に居る千鳥をいふ。「千鳥」は群を成  
すよりの稱にて、貝原篤信は「河海の水邊にあり、その形儀、又鴨に似たり」といへり。〇友まどはす  
らむこそ の下、あはれなれを略けり。六帖に、友則「秋くれば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥  
なくなり」とあるに據りて、川霧に隔てられて、友を惑ひ失ひて鳴くらんことのははれなるよと也。〇  
はねの霜云々 萬葉九「埼玉の小埼の沼に鳴ぞはねきる、おのが尾にふりおける霜を拂ふとならし」と  
あるに據れり。

鶺は、文などにもめてたきものに作り、聲よりはじめて、様かたちも、さばかりあて



に、美しきほどよりは、九重ここのへのうちに鳴かぬぞ、いとわろき。人の「さなむある」といひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ととせばかりさぶらひて聞きしに、まことに更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。まかて聞けば、あやしき家の、見どころもなき梅などには、花やかにぞ鳴く。よる鳴かぬもいぎたなき心ちすれども、今はいかゞせむ。夏秋の末まで、おい聲こゑに鳴きて、蟲くひなど、ようもあらぬものは、名をつけかへていふぞ、くち惜しくすぎ心ちする。それも雀などのやうに、常にある鳥ならば、さもおぼゆまじ。春鳴くゆるこそはあらめ。年立ちかへるなど、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは、なほ春のうちならましかば、いかにをかしまし。人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、謗そしりやはする。鶯とが鳥などのうへは、見れ聞きいれなどする人、世になしかし。されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心ちするなり。祭のかへさ見るとて、雲林院りんごん、知足院ちそくごんなどの前に、車をたてたれば、時鳥ときどりもしのばぬにやあらむ鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、もろ聲こゑに鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。

○文にも「文」は詩賦をいへり。○あてに 上品になり。貴の字を訓みたり。○美しき程よりは美しき程合に比べてはと也。この「より」の用法、後世になし。○九重のうちは 禁中なり。○さなむ 禁中

ないのが、甚だわるい。人が「さうである」といつたのを「さうでもあるまい」と思つたのに、この十年ばかり禁中に奉公して聞いたが、ほんに向に聲もしなかつた。それは竹も御殿の近くにあり、紅梅もあつて、鶯の大層よく通つて来さうな縁があることよ。それなのに鳴かない。里にさがつて聞くと、賤しい民家の見所もない梅などには、調子づいて鳴いてゐる。夜鳴かないのも、寢坊な気がするけれど、その生れ付きたがら、今はどうしよう、仕方がない。夏から秋の末まで、老いた聲に鳴いて、蟲喰など、下賤な者は、その名を附けかへていふのが、残念にすこい心

持がする。それも雀などのやうに常にゐる鳥ならば、さうも思はれまい。十年たちかへる鶯の聲など、歌にも詩にも作つてゐるのは、春を主として鳴く鳥だからであらう。してみると、やはり春のうちだけ鳴くのであるならば、どんなに面白からう。人間でも、人氣がなく、世間の勢望もいかゞはしくなりかゝつたのをば、誇ることはい。鶯や鳥などのうへをば、目をつけたら耳を立てたりして、注意などする人は、世の中にはないさ。されば、鶯は結構な管のものとなつてゐるから、非難もされるのであると思ふにつけて、不満足な心持がするのである。賀茂祭の歸の行列を見る

に鳴かぬをさす。○十年ばかりさぶらひて 十年ほど宮仕して、禁中に居りてと也。○さるは それはといはんが如し。○竹も近く紅梅も 「紅梅も」は紅梅もありての略。清涼殿の東庭には、吳竹河竹あり。東北庭には八重紅梅あり。西庭には白梅あり。仁壽殿、擬華舎にも紅梅あり。○通ひぬべきたよりなりかし。鶯の來通ふべき十分の便ある事なりと也。この句の下、さるに鳴かぬは如何なる故ぞを略けり。○まかでて 禁中をまかでての略。「まかで」は退出の略。○あやしき家 賤しき家なり。○いぎたなき寝機いぎたなきの意にて、眠を食るをいふ。○今はいかゞはせむ 今更いかにとせむ方なしと也。その生れ付なればなり。○おい聲 老聲なり。盛り過ぎたる聲をいふ。○ようもあらぬ者 身分のよくもあらぬ者なり。賤民をいふ。○蟲くひ 潜臣いふ「蟲喰は、鶯の異名にはあらず。昔は草木鳥蟲などの名似たる物をば、大様に一つ物と心得たること多し。云々」。○すぎき心ち 蟲を食ふといふより、恐ろしくて凄き心持がすると也。○さも覺ゆまじ 「さも」は時過ぎてわろきをさす。○春なく故こそはあらめ 春鳴く故にこそあらめと也。春を主として鳴くゆるならんと也。次なる「年たちかへるなど——作るなるは」より打返して、この句に續けて解すべし。但この句を上文に續け、次の句を獨立せしめて、「作るなるは」のはを歎辭として切りても、その意は聞ゆるやう也。こは試にいへるのみ。前説なほ優るべし。○年たち返る 拾遺集、素性「新玉の年たち返るあしたより待たる、ものは鶯の聲」とあるに據れり。○春のうちならましかば 鶯の鳴くことが定りて、春の内ならばと也。○人をも 鶯は世にもてなざる鳥なればこそ、色々難癖を付けて謗りもすれといはんとて、人間界の例を引ける也。○人けなう世のおぼえあなづらはしう 「人氣無う」は人らしくもなきことにて、衰へたる様なり。「世のおぼえ」は世間の思はくなり、聲望なり。「あなづらはし」は侮る、なり。○謗りやはする さやうに零落して、世間から人とも思はれぬやうに蔑視せられたる者は、謗るほどの甲斐もなければ、誰も謗りはせぬと也。○見



というて、雲林院や知足院などの前に、車をすゑてゐると、時鳥も時節柄とて、忍ばれないのかして鳴くと、鶯が大層よくその聲をならつて似せて、背の高い木などの中に、時鳥と聲を合はせて鳴いたのが、時節はづれは悪いとはいふもの、流石に面白い。

(口譯)

時鳥はその面白さが、なほ改めていはうやうもない。その時節になると、何時かの間に、その聲が得意顔に聞え、卵の花や花橋に、宿を留めて、一寸姿を隠したのも、妬ましいやうな、面白い氣前である。五月雨頃の短夜に、寢覺をして、どうぞして人より先に、その初音を聞か

うと、自然に又待たれてゐるに、夜ふけに啼出した、その聲が、功者らしく、愛敬があるのは、ひどく心があこがれて、しやうがない。六月になると、音もしなくなつてしまふなど、總じて、面白いなどといふも、並一通りの事である。一體夜啼くものは、どれもくすべてよい。乳兒共ばかりはさうでもない。

入れ聞き入れ 鶯や鳥の如き、下品なる鳥のうへなどは、誇るところか、最初から目を付けたたり、聞耳立てたりする者も、世になしと也。○いみじかるべきものとなりたれば、鶯はいみじかるべき者となりたれば、少しも難なかるべしと思ふにの略。○雲林院 ウリンケン。山城愛宕郡紫野の船岡の東にありき。初淳和帝の離宮なりしを、仁明の皇子常康親王傳領して、僧正遍昭に付囑して寺となせり。天台宗。○知足院 これも紫野の船岡の南に在りしが如し。醍醐帝、知足院を経て、船岡にいたり給ひしことあり。○忍ばぬにや 折柄のあはれに、忍ばれぬにやと也。○いとよまねび似せて 鶯のいとよま時鳥の聲に眞似び似せてと也。○もろ聲に 諸共に聲を立つるをいふ。こゝは時鳥と鶯となり。○さすがに 前に「夏秋の末まで老聲に鳴きて」と誇れるを抑へて、時節は後れたれど、時鳥と一所に鳴くことが、流石にをかしと也。

時鳥は、なほ更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に、卯の花、花橋などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨のみじか夜に寝ざめをして、いかで人よりさきに聞かむとまたれて、夜深くうち出でたる聲の、らうくじう愛敬づきたる いみじう心あくがれ、せむかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。夜なくもの、すべていづれもいづれもめでたし。ちごどものみぞさしもなき。

釋 ○なほ更に 鶯よりはなり。○いふべき方なし そのめでたさいはん方なしと也。○いつしかしたり顔にも 「いつしか」は何時かなり、早晚の意とするは、後世の事なり。「し」は強辭。「し」たり顔は得意顔

なり。初は忍音に鳴くも、何時かおのが鳴くべき五月がきたりといふやうに、聲高く鳴立て、得意顔にも聞ゆと也。○歌に卯の花云々 上文に屢出でたるを見よ。但「歌に」を承けたる語、下になし。恐らくは衍ならん。略くべし。○はたかくれ 端隱の義にて、全くは隠れぬをいふ。源氏に「几帳には、た隠れたる傍目」とあり。遊仙窟に、半面を訓めらる同意なり。○ねたげなる心ばへ 嫉ましきほど勝れたる氣立なり。愛する餘に、憎しといふに似たるいひざま也。○五月雨のみじか夜に 梅雨頃の短夜なるにと也。「さみだれ」は古くは節をいひ、又雨の名にいふ。後世は雨の名にのみいへり。○聞かむと初音を聞かんと也。○待たれて 待たれてあるにの略とすべし。○夜深く この頃「夜深く」といへるは曉方なり。○打出でたる 打擧げたと同じ。○らうくじう 勞々の音の活用として、雅語譯解には、功ハ入ツタと譯せり。○心あくがれ 心の浮れ出づるをいふ。感に過ぎたる様なり。「あくがれ」は、廣道いふ、在處離の義と。○いづれもく 時鳥に限らず、水雞、秋の蟲などの類なり。

木ノ段中に「一ふしをかしとも聞置きつるものは、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えね」とある首尾で、こゝに鳥を擧げ、次に蟲を擧げた。

鸚鵡は前代に、屢朝鮮から貢にもつて來たが、清少の頃には、實物が居なかつたのだらう。「人のいふことをまねぶらむよ」のよそくしい口振は、それを證してゐる。斑鳩は聖德太子に因み、都鳥は在五中將に縁を結んで、頗る著名になつた。山鳥の鏡は、大江朝綱が清慎公の爲に書いた辭表にも「類山雞之對圓鏡、舞而何爲」と作られて、當時人口に膾炙した故事と思はれる。鶴の聲聞天は甚だ月並だが、いはでは置かれぬ文句であらう。水雞は六帖以來の流行兒で、鴨、鶯、鶯、千鳥は、古歌に立脚した名鳥である。鶴を「こちたく」、鶯を「まなこ居うたて」とけなしたのは、「鳴く聲雲居まで」や、「獨は寢じと争ふ」に對する抑揚の筆法だらうが、また清少の觀察の迹がうかゞはれる。雁の聲に、遠く聞えたの



をあはれとするのは、この草子の發端の文に「雁などの列ねたるが小さく見ゆる」を興がつたのに吻合して、清少の特殊の嗜好があらはれてゐる。

鶯、時鳥の優劣論になつては、間、叙事をあしらつて、縦横に品評し去り、遂に鶯を抑へ、時鳥を揚げた、その筆鋒が甚だすどい。論旨はもとより、清少二己の私見に過ぎない。反對者が澤山あつたので、下文にも「時鳥、鶯に劣るといふ人こそつらう憎けれ」と憤慨してゐる。しかし清少の所論にも、一往の理窟はあるので、實は百日紅よりも三日見ぬまの櫻を愛する、わが淡泊快捷を喜ぶところの國民性の發露もある。折過ぎぬこと、程のよきこと、を理想とした時代精神からしても、また時鳥に左袒せずには居られなかつたであらう。

こんな鶯の甲斐性なしを嘲つた人が、老後になつても、尙「駿馬の骨をば買はずありし」と負けじ魂の減らず口を止めなかつたので見ると、清少自身は、どこまでも鶯の儔であつて、時鳥は遂にその理想に過ぎなかつた事が哀である。

「水無月になりぬれば云々」は、鶯の久しく鳴くを非難した對照に、わざと褒立てたのである。「よるなくものはすべて」は、鶯の夜啼かぬを、いきたなしと譏つた餘波である。但これはいさ、か拍子に乗過ぎて、脱線した氣味がある。清少の物に拘泥せぬ、放縱な氣質が出たものかも知れぬ。「乳兒どものみぞさしもなき」の注脚に、餘波中更に一波瀾を捲き起したのは、いよくその潑瀾たる才氣を想望させる。

鶯は村上帝の代に、菅原文時の宮鶯の詩に、「中殿灯残竹裏音」とつくり、拾遺集に、「醍醐の帝の御前の五葉に、鶯の鳴きけるを」、中務集に、「御前に紅梅植ゑさせ給うて、鶯の巢など作らせ給へるに」と、詞書のあるのを見ると、醍醐村上の時代には、たしかに禁中に来て鳴いたのである。爾來廿有餘年、紅

梅綠竹はその色を改めないが、鶯はその節を變へてしまつた。

時鳥は奈良時代に入つて、珍重し始められたやうである。漢文學の影響には違あるまいが、詩文には、専ら悲哀の象徴であるかのやうに作られたのに反して、わが歌人は、「今一聲の聞かまほしさに」と、面白い趣にのみ取做してゐる所に、國民性の相違が、歴然と見える。

水鶏、鳴、鶴、鶯の涉水類を、水鳥の部に入れぬのは、歌人式分類である。清少の誤ではない。さて勘へて見ると、この一篇は長保元年の夏中の作である。「十年ばかり待ひて」の句が、この證文である。それは元年六月十四日内裏が焼失し、翌二年十月まで、主上は一條の今内裏に御出遊ばされたのだから、この間は清少が、舊内裏に參ることがなかつたと見るのを至當とする。そこで長保元年を本として十年を逆算すると、正暦元年に當り、即ち中宮が始めて御入内になつた年となる。されば、清少は中宮の御入内の支度に、新に召抱へられた女房であることはたしかである。これこの文が長保元年より早くてならず、又遅くてもならぬ所以である。この事はなほ、下文、初宮仕の段で委しくいはうと思ふ。(清少卅四五?)

三十九段

あてなるもの 薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。けづりひのあまづらに入りて、あたらしきかなまりに入りたる。すゐさうの數珠。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しきちごの、覆盆子くひたる。

○あてなる あてに見よ。○薄色 紫のなり。○白がさねの汗衫 汗衫著たるの略。薄紫の柏のう

(口譯) 上品なもの 薄紫色の裵に、白重の汗衫を着たの、家鴨の卵、搔氷が甘葛煎の中に入つたのを、新しい

246



金椀に盛つたの、水晶の數珠、藤の花、梅の花に雪の降つたの、極めて美しい乳児が、覆盆子をくつたのなどが、上品なものである。

へに、白の汗衫を著たるをいふ。○かりのこ、「かり」を古説に鴨といひ、雅澄は鴨の屬なる家鴨なりといへり。又萬葉二に「鳥ぐらたて飼ひし雁の兒、巢たちなば」とあるは雛兒なり。蜻蛉日記に「かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ぬる業を」、空穂物語に「珍しくいできたるかりのこに書付く」とあるは卵なり。いづれとせんか。伊勢物語に「鳥の子」とあるも、卵のことなれば、こは家鴨の卵とする方然るべし。○けづりひ 削氷なり。夏日氷室より氷を取出して、削りて食ひ、又暑さに食物の損せしめぬ爲、氷を削りて加へ置くことありき。○あまづら 甘葛煎のこと。甘葛は蔓草にて、甘茶蔓、蔓甘茶などいふ。古はこの蔓の汁、及び葉の煎汁を取りて、食物に甘味を附くる材料としたり。砂糖は足利時代以後の物なり。○かなまり 金椀なり。和名抄に「古語、謂椀爲末利」。當時盛に食器に用ゐたり。○するさうのす、水晶の數珠なり。「さう」は晶の直音。○覆盆子くひたる 「覆盆子」は草莓なり。尙下文「おぼつかなき物」の段の批評を參看せよ。「たる」の下に、あてなるものなりを略けり。

紅白淺紫の色彩に、形相光澤の美が入まじつて、一篇玉のやうな詩である。作者の心のひゞきが透徹つて見える。汗衫や藤の紫のことは、すでに木の花はの段でいつて置いた。水晶の數珠、家鴨の卵の品のよいのは素よりのことで、金椀は銀で、梅はかならず紅梅でなくてはならぬ。さてこそ氷も雪も調和が美しいのである。乳兒の覆盆子は、紅梅の雪とおなじ配色の美であるが、「食ひたる」の一語に、乳兒の愛らしげな動的の情致が籠つて見える。

今日の氷に甘露をさすはと反對に、削氷が甘葛に入るとあるので、その氷の分量が少くつて、貴かつたことが想像される。しかもこの甘葛が、砂糖とはちがつて、あまり甘心した物でもないが、大御酒參つて氷水召せば、その頃の上流社會の大した奢であつた。

四十段

蟲は 鈴蟲、松蟲、促熾、蟋蟀、蝶、われから、ひをむし。螢、蓑蟲、いとあはれなり。鬼のうみければ、親に似て、これもおそろしき心あらむとて、親のあしききぬひき着せて、一いま秋風吹かむをりにぞこむずる。待てよといひて、にげていにけるも知らず。風のおと聞き知りて、八月ばかりになれば、ちよよくとはかなげになく、いみじうあはれなり。ひぐらし。ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらむ。又おもひかけず、暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきもの、うちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人しう書き出づべきもの、やうにあらねど、よろづの物に、顔などにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは、いとうとまし。夏蟲いとをかしく、らうたげなり。火近うとりよせて、物語など見るに、草子のうへなどに飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれどかるびいみじうて、水のうへなどを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。

(考異) ○心あらむ 原本心ちぞとあり。古本、抄本による。○夏蟲の一項 原本夏蟲いとをかしく、らうの上飛ありく、いとをかしとあるは、書寫の際の誤脱なること明なり。今は古本、抄本、及び光本による。○うとまし 原本かたしとあり。古本による。

(口釋) 蟲は 鈴蟲、松蟲、はたおり、きりん、す、蝶、われから、ひをむし、螢、いづれも面白。蓑蟲が甚だあはれである。この蟲は鬼が生ませたから、その親鬼に似て、この蓑蟲もおそろしい心であらうと思つて、女親が、粗末な着物を着せて、泊付け、秋風の吹く時分に歸つて来よう。それまでかうして待てよとだましてにげていつたのも、子蟲は知らず、まことかと思つて、秋風の音を聞知つて、八月頃になると、ちよよちちよよと便りなさうに鳴くのが、甚だあはれである。蠅が面しろい。ぬかづき蟲、



これがまたあはれてある。そんな蟲などの心に、道心を起して、額づきあるくであらうことよ。それが哀である。又思ひも寄らず暗い所などで、ことごとくしたのを聞付けたのが面白い。蠅こそ憎いものの中に入れておべきだ。そんな愛敬のない憎いものは、人並に此處に書出すべきものやうでもないが、あらゆる物にとまり、顔などに濡れた足でとまつたりなどすることよ。ほんに憎い。人の名前にこの字のついてゐるのは、ひどくうとましい。夏蟲、これは甚だ面白く愛らしげである。燈火を近く取寄せて、物語などを見るに、その本のうへに飛歩くのが、大層面白い。蠅は姿

○鈴蟲 チンチロリンと鳴く。今は松蟲といふ。○松蟲 リン／＼と鳴く。今は鈴蟲といふ。鈴蟲、松蟲の稱呼の入違へることは、藤井高尙の松の落葉に委し。○はたおり その聲の機杼の音に似たるよりいふ。和名抄に「促織、波太於利米」。今のキリ／＼スなり。○きりぎりす これも鳴聲より付きたる名にて、今のコホロギなり。古今集に「秋風にはころびぬらし藤袴衣させてふきり／＼す鳴く」とありて、肩させ裾させと聞ゆる物なり。コホロギの名は、古よりありしを、平安時代には、専らその一名のキリキリスの方をのみ用ひたる也といふ。この機織、キリ／＼ス、コホロギの別は、村田春海の説による。○われから 古今集、因香「海人の刈る藻に住む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば怨みじ」、伊勢物語「戀ひわびぬ蟹のかる藻に宿るてふわれから身をも碎きつる哉」の歌より著名となれり。伊勢物語の舊註に、和布などにつきたる小蝦のやうなる蟲なりとあるに従ふべし。「われから」は割殻の義にて、乾くに隨ひて、その體の割る、故とぞ。○ひを蟲 和名抄に「蜻、比乎牟之、朝生暮死蟲名也」。源氏物語、會丹集などにも見えて、はかなき例に引かる、蟲なり。○蓑蟲 一名はその被きたる巢のさまより付きたり。○鬼のうみければ云々 當時かゝる傳説ありしなるべし。「鬼のうみければ」は、女鬼の生みければと解すれば、異議なきやうなれど、次に「親に似て」とあるが、聊か落着かず。想ふにこれは「鬼のうませければ」の意にて、「鬼」は男鬼ならん。大鏡にも、夏山繁樹の養父の詞に「われは子生むすべも知らざりしに」とあり。これも男を主としたるにて、子を生まするすべなり。かくいふが、この時代の辭様と見ゆ。○親に似て 男親の鬼に似てと也。以下女親を主にして書けり。○親のあしきぬ引き著せて「親の」は女親のなり。「あしき衣云々」は蓑蟲の巢の、芥を綴りたるをばいへり。○いま秋風吹かむ——待てよ 女親の逃げんとして、子の蟲をすかす詞なり。「いま」は俗の追ッ付ケの意。「こむする」は來むとするの略語。○にけていにけるも 秋風吹く頃には來るべしと偽りて、親の棄兒にして逝去り

が憎いけれど、身の軽さが非常で、水の上などを、さつさとあるきまはるのび面白。

しをも、子蟲は知らずしてと也。○風の音き、知りて 秋になれば風のしらべ變るが故也。○ち、よ、乳よく／＼なり。乳はちとのみいふが本語なれど、小兒の語には重ねいふこと常なれば「ち、よ」といへるなり。さて蓑蟲のチ、／＼と鳴く聲を、乳に取做したり。子供は正直なれば、偽を眞に受けて、約束の時來れりとて、子蟲の母親を慕ふなり。○ひぐらし 茅蜩。カナ／＼蟬なり。○ぬかづき蟲 和名抄に「叩頭蟲、沼加豆木無之、蟲細微者、觸之輒叩頭」とありて、米春蟲のこと也。「ぬかづき」は額突にて、お辭儀するをいふ。○さる心 「さる」ははかなき蟲なるをさす。○道心 正道を求むる心に聞くべし。さて、あはれなりといふ餘意の含めるなり。○ほとめきたる 米春蟲のバチ／＼と音を立つるをいふ。「ほと」は擬聲なり。○憎きもの、うちに云々 こ、はをかしくあはれる蟲をのみ收めたる段なれば入るべきならず、憎き物の段に入れつべきなりと也。○愛敬なく かゝる愛敬なくの略。○人々しう書き出づべき云々 一人前の人らしく、他のよきものと一所に、書並ぶべき次第にてはなければと也。「人々しう」は人に擬へていふ也。「あらねど」の下、蟲の事をいふ序なれば書記すがといふ詞を含めて見るべし。○濡れたる 蠅のとまれば、つめたく感ずるよりいへり。○居たるなどよ の下、いみじく憎しの餘意あり。○人の名に 昔は禽獸蟲魚などの名を、人名に附くること常なりき。故に蟲麿、蟬丸の類珍しからず。平安朝の佳名を撰ぶ時代になりても、下衆などの名には尙多かりしやうなれば、蠅麿などといふ人も必ずありしならん。支那にも古く甘蠅などいふ名あれど、それまではいかゞなるべし。○うとまし 原本の「かたし」はかたくなしの意。拗けたるをいふ。本文の方、意明らかなり。○夏蟲 青蛾をいふ。仁徳紀に「夏蟲の火蟲」と見えて、所謂火取蟲なり。後撰集には蟬、大和物語には螢を詠みたれど、こゝには關はらず。○らうたけ 愛らしけなるをいふ。勞痛けの義。○にくけれど



姿悪けれど略。○かろびいみじうて、身の輕びいみじうての略。輕さの甚しきをいふ。○たひあゆみ云々 水の上をもサツサと歩くをいふ。「たひ」はひたすらの意。

蝶、螢、秋の蟲などは、既に世評の定つたものだから、わざと省筆してゐる。蓑蟲はその形状と聲とに就いた有意味の傳説で、頗る情味に富み、額突蟲はその名稱と動作とを基礎として、頗る滑稽味に富み、いづれも得易からざる文字である。蠅は反映のための挿入文で、蟻はかへつた清少の物好に過ぎない。

破殻、ひを蟲にすら、推舉の勞を吝まなかつた清少が、河鹿や、蛙をさし置いたのは、その歌人的嗜好に反してゐるやうだが、その形状の醜を嫌つたのかも知れぬ、婦人だから。

蓑蟲と額突蟲との二箇の長文の間に、只一箇の蝸の名詞を挿んだのは、文勢が頓挫して、極めて妙である。額突蟲に「さる心に道心おこして」は奇句、蠅に「濡れたる足」は警句、いづれも譬喩の面白さが見える。また蓑蟲の首尾に「いとあはれ」「いみじくあはれ」、夏蟲の首尾に「いとをかしく」「いとをかしく」の反復は、古文の格ではあるが、簡淨を尙ぶこの種の文としては、いかゞなやうでもある。

夏蟲も輕く書けてゐるが、蓑蟲の話は、ことに面白く上手に書けた。想ふに、當時に行はれた、婦人に對する訓戒的の寓話であらう。棄兒をする程のつらい親をも、子はなほ一圖に親として慕ふといふ情味を、鬼と蓑蟲との親子に喩へて、具象的に述べたのである。子供を抱へて心配するのは、必ず母親だらうから、棄てたのも母親で、「ちよよ」と泣くは、蓑蟲が乳を呼んで、母親を慕ふ様とするのがおだやかであらう。それを古來父よとのみ解釋して、この棄兒したのを男鬼と見たのは、疎漏のやうである。也有は百蟲譜に「など父をのみ戀ひて、母をば慕はざらん」と書いたが、かう典籍が動搖しては、聊か氣の毒な氣がする。

四十一段

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ、扇もうちわすれたるに、汗の香すこしか、へたるきぬのうすき引きかづきて、晝寢したるこそをかしけれ。

釋 ○雨などのさわがしき 夕立の雨のさま也。○か、へたる 保つをいふ。抱への義。○うすき 薄きをと也。

評 印度人が、極樂を清涼界と觀じたやうに、蒸暑い平安京では、夕立時分の午睡は、特に面白からう。汗の香か、へたる衣は、奇な物好に見えるが、これは必しも汗臭いのを喜んだのではない。多少著刷したのをいふのであらう。

この段、抄の一説に、下文に、風はの段があるから、其處に入るべきものだらうといつてある。

四十二段

にげなきもの 髪あしき人のしろき綾のきぬきたる。しづかみたる髪に葵つけたる。あしき手を赤き紙に書きたる。げすの家に雪のふりたる。又、月のさし入りたるも、いとくちをし。月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる。又、さる車にあめ牛かけたる。老いたるもの、腹たかくてあえぎありく。又、若き男もちたる。いと見

(口譯) 七月時分に、風がひどく吹き、雨などが騒しく降る日、大抵は大層涼しいから、扇も忘れてゐる頃に、汗の匂がすこし含んでゐる衣の薄いのを被つて、晝寢をしたのが面白い。

(口譯) 似合はないもの、髪あしの毛のわるい人が、白い綾織の着物を着たの、縮んだ髪に葵をつけたの、下手な字を赤い紙に書いたの、いづれも似合はない。下衆の家に雪の降つたのは似合は



ない。又そこにも月のさし込んだのも、似合はないで、甚だ口惜しい。月の大層明らかな夜に、屋形のない車に逢つたの、又そんな車に黄牛をかけて引かせたの、年寄つた女が、腹が太きくなつて、喘いであるくの、又そんな女が、若い亭主をもつたのは、甚だ見苦しいのに、その男が外の女の所に通ふといつて、嫉妬したの、年寄つた男が寝ぼけたの、又そんな年寄つた鬚勝な男が、椎の實を食つたの、齒もない老嫗が、梅の實をくつて酸がつたの、いづれも似合はない。下衆女が紅の袴をはいたのは似合はない。しかしこの節は、さういふ者ばかりであるやう

ぐるしきに、こと人のもとにゆくとして妬みたる。老いたる男の寝まどひたる。又、さやうにひげがちなる男の椎つみたる。齒もなき女の梅くひてすがりたる。げすの紅の袴きたる。このごろはそれのみこそあめれ。

釋 ○髪あしき 色にせよ、質にせよ、長さにせよ、髪の毛のすべてよからぬをいふ。○しつかみたる 縮みたると同じ。○葵つけたる 神代よりして、及び枯れたる葵を見よ。○けす 下衆なり。賤民をいふ。○やかたなき車 「やかたは屋形の義。和名抄に「車蓋、俗車屋形、夜賀太」と見えて、人の乗るには、皆車蓋あり。そのなきは即ち荷車なり。これを空車ともいへり。いづれも牛を掛く。○さる車 「さる」は車蓋なき車をさす。○あめ牛 飴色したる牛にて、黄牛をいふ。黄牛は上品として、後世までも貴ばれたりき。○腹高くて 腹の大きなるにて、妊娠なり。○若き男もちたるに 老いたる者がなり。○ことのもとに その男が他の女の許にと也。○老いたる男の寝まどひたる 年寄つた男の、柄にもなき忍歩きして、寢過して周章てたるをいふ。○さやうに 上の老いたるをさす。○椎つみたる 椎の實を食ひたる也。灌臣いふ、物をつまむことを、字鏡などにツミとあれば、椎を摘みて食ふさま也と。○齒もなき女 老いて齒の脱けたる女なり。○けすの 下衆女のなり。こは命婦、内侍、宮仕の女房等に對して、それより身分卑き刀自、得選の類の女官をいふ。○紅の袴きたる 濫用して、下衆女も紅袴を着るといへども、人柄卑しければ相應せずと也。「紅の袴」はいはゆる緋の袴なり。板引にして張る。○この頃はそれのみこそ 「それは下衆女の紅の袴着るをさす。當時の風儀の亂れたるを憤慨したる詞なり。

ゆげひのすけの夜行。狩衣すがたも、いとあやしげなり。又、人におぢらるゝうへの

(口説) 靱負の佐の夜行は、その身分柄似合はない。その際狩衣姿をしてゐるのも、甚だ早しげである。又人にこはがられる、その赤色の袍がまた仰山で、女の肩あたりをうるゝするの、人を見付けたなら、見くびられる。一寸した笑談にも、「嫌疑の者があるか」と、口癖になつて咎める。六位の藏人が、うへの判官といつて、世に又なく、威光の耀いたものと思はれ、里人や下衆などは、この世界の人とすら思つておす。目さへも見合はせえないで、おそれをのゝ程の人が、禁中あたりの細殿などに忍んで、女の所にはひり込んで寝たのが、甚だ不相應で

きぬ はたおどろしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」とたはぶれにもとがむ。六位の藏人、うへの判官とうちいひて 世になくきらくしきものに覚え、里人げすなどは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせて、おぢわなゝく人の、うちわたりの細殿などに、忍びて入りふしたるこそいとつきなけれ。そらだき物したる几帳に、うちかけたる袴の、おもたげにいやしう、きら／＼しからむもおし量らるゝなどよ。さかしらにうへの衣わきあけにて鼠の尾のやうにてわがねかけたらむほどぞ、似氣なき夜行の人々なる。このつかさのほどは、念じてとゞめてよかし。五位の藏人も。

釋 ○ゆげひのすけ 靱負、佐なり。「ゆげひ」は靱負の約。靱は矢を盛りて背に負ふ爲の器なれば、後に出來たる籠、胡籙の類、皆これに屬す。靱負はもと、武官の總名なりけんも、専ら衛門府の稱となれり。されば靱負佐は、左右衛門の佐をいふ。從五位上相當官なり。衛門は宮城を警衛し、行幸に供奉する役なるが、檢非違使の職務を兼任す。檢非違使は、非法違法を檢斷する役なれば、この衛門の官人は、非常に權力ありて、人に怖ぢられし也。殊に檢非違使の實務は、佐の管掌する所なれば、(上に別當あれども)その勢威の熾なる想ふべし。(附圖参照) ○夜行 の下、似氣なしを略けり。「夜行」は弓箭を帶して、夜中巡行して、禁門を警衛するをいふ。佐ほどの身分として、夜廻などするは似つかはしからずと也。○狩衣姿も 佐の夜行には、輕裝を主として、狩衣を着たりと見ゆ。元來狩衣は褻の服なれば、身分ある者の狩衣着て、宮廷内に在るは、不似合にて卑しけなるなり。○人におぢらるゝうへの衣 人に



ある。空だき物をした几帳に引掛けた袴が、重たさうに卑しく、びり／＼してゐるであらうのも不似合である、想像されるなどよ、甚だ見にくい。利いた風に、袍が膾炙であつて、鼠の尻尾のやうに、細くわがれ懸けてあるであらう様子が、一向似合はない夜行の人達である。この官職の間は、我慢をして、局遣入はやめてほしいことさ。五位の藏人もさうである。

こはがるる、袍となり。鞞負佐は五位の常色なる赤袍を著する也。職掌柄、その赤袍の人の目を側つるをいふ。○おどろ／＼しく 雅語譯解に仰山とあり。驚かる、ばかりなるをいふ。この下、てを略けり。○立ちさまよふも 女の局のあたり立ちさまよふもの略。女房の許など忍びあるをいふ。「さまよふ」は小迷ふの義にて、彷徨すること。○人見付けばあなづらはし 非違を檢察する赤袍の役人が、女を張りて歩いては、そを人の見付けたらば、輕侮の念をおこすと也。○嫌疑の者やあると云々 鞞負佐の疑はしき者を咎むる詞にて、一寸としたる冗談にも、常の口癖の出づるさま也。○六位の藏人 四人或は五人あり。殿上人中の最下級なり。藏人所を見よ。○うへのはうぐわん 昇殿ゆるされたる判官なり。「うへ」は殿上なり。「はうぐわん」は判官にて、檢非違使の尉をいふ。尉は昇殿せざれど、藏人にて尉を兼ねる時は、藏人の資格にて昇殿する故に、これを「うへの判官」とはいふなり。判官は三等官の稱なるが、貞丈の説に「ハウグワン」と讀むは檢非違使の尉に限り、他のはハングワンと讀む」と。○世になく世に又なくなり。○おぼえ 人に思はれと也。○この世の人とだに云々 この世の中の人間なりとすらも思ひ居らずと也。威權の凄まじきに、別世界の神か佛かの如く、怖れたるさま也。「思ひたらず」は思ひてあらずの約。○目をだに見合はせて 目をすら向合はせぬは、怖れてその顔を望むこと能はざるさま也。○わな／＼人の 戦かる、程の人のと也。○内わたりの細殿 「内わたりは禁中をいふ。「細殿」には二種あり。和名抄に「殿下外屋也」とあるは廊なり。延喜式に、夾舎とあるは、殿舎の横手裏手などの細長き廂を、仕切りて住む時の名なり。これを當時女房等の、わが部屋として住みたる也。寛平遺誠に「中重北面廊、采女女孀等各爲曹司、居住爲家、代々有出火之畏、雖然不得追却云々」。禁秘抄に「女孀動失禁中禮、占便所爲家」など見えたり。○忍びて入りふしたる 忍びて女の寢間に入臥したると也。○つきなけれ 想應せぬこと。なほつき／＼しを見よ。○そらだき物 何と限ら

ず薫香をたきて匂はしたるをいふ。そのうちに、室内にある物は、几帳も簾もすべて薫るやうになる也。

○おもたけにいやしう 鞞負の尉の袴なれば、あらしき布の白袴なるべし。されば重くも卑しくも思はるるならん。○きら／＼しからむもと きら／＼しからむも似氣なしとの略。「きら／＼し」はその白袴の燈火などに照りたるさまなるべし。○おし量らる、などよ の下、いと醜しの語を補ひて聞くべし。○さかしらに 賢らの義より出でて、俗の牛利といふに當る。官は卑けれど、とにかく武官の端くれにて、わきあけの袍を著たるを誇りていふ。○わきあけ 腋開の義にて、腋の袍をいふ。袖の下より裾まで縫はず。武官の服なり。裝束雜事抄に「わきあけの袍、公卿は衛府官なればとても著す。殿上地下の四位五位の衛府官、これを著る。六位藏人の短く、裾、たけとひとしき也」。〔附圖參照〕○鼠の尾のやうにて おし縮ねたるが見立なき様を譬へたり。膾炙は兩腋の縫はである故、狭き衣巾の縮ねられたるが、一寸鼠の尾の如く思はる、也。○わがねかけたらむ 几帳に縮ね懸けたらんと也。脱きたる袍を折曲けて、三尺の几帳に懸けたるなり。○似氣なき 威勢のいかめしきに引換へて、几帳に掛けたる袍の見窄らしきが、似つかはしからぬと也。○夜行の人々 鞞負の役人をいふ。佐も尉も夜行すれば也。○この司のほど この官職の間はと也。鞞負をさす。○念じて 辛棒して、怵へてなどの意。もと觀念の意より轉じて、諦め忍耐すること、なれり。○とめてよ 忍び歩きを止めてあれよの略。○五位の藏人も下に、おなじ事なりを略けり。鞞負を兼ねざる五位藏人も、忍び歩きはやめよといへるは、身分の同じやうなる人なれば也。

似氣なきは不調和である。不調和は、美の約束に違つてゐる。だから醜と感ぜられるのである。白綾の光にうつるあしき髪、葵の縷にからむ縮れつ毛、赤紙にみ、す書、下衆の家に月夜、月夜に荷車、荷車にあめ牛、老女にわかい夫、及びその妊娠嫉妬、老夫の寢まどひ、下衆女に紅の袴、こられは相對上



調和を缺いて、醜を感じるのである。

下衆の家の月雪は、詩的に感受しないで、差別の見地から批判したのである。當時の貴紳女房等が驕慢で、いかに民衆を侮蔑したかは、この單句の上にも彷彿としてゐる。

虚榮からおこる僭上と驕奢とは、令制式制を無意義に了らしめることが多かつたが、清少はこれに對して、一語も挿まず。たゞ下衆女の紅の袴を咎めてゐる。片落のやうであるが、目下のものの僭上が、何がなしにわが尊嚴を瀆したやうに感じた、女の小さい憤を洩したのさ。

権の實は小兒の、梅の實は若い女の食物である。髭男や鰥ばかりの老女では、繪にも歌にもならぬ。檢非違使廳が、司法警察の職權を獨占してから、頗る横暴となり、下役人の中には、東宮御所に濫入し、或は強盜をする者すら出來てきた。隨つて無辜を虐げ、罪人の檢斷にも残酷の事が多かつたから、別當以下、結縁經を修して佛事を行つたのは、律師清範の示寂した長保元年三月の事で、清少の目撃したことであつた。さればこの使の官人は位こそ卑けれ、威勢は赫々としたもので、只その服色を見るから、おどろくしと目を側めて、閉息せぬ者は無かつた。源氏物語にもこれを「おどろくしき赤き衣」といつてゐる。驕慢な女房の目には、これが氣に食はなかつたらしい。何のといふ反感も手傳つてか、その衣服につけ、動作につけ、事毎に罵倒してゐる。尤もそれ／＼相當の理由のあることは勿論である。成あがり者ともいふべき、藏人の尉となつては、輕侮のうへに、嘲笑をくはへた。几帳に懸けた布袴の重たけなもの、鬨腕の縮ねたのが、鼠の尻尾のやうなもの、現代人の耳には、單なる皮肉に過ぎないが、服色觀念の強かつた當時にあつては、大きな嘲罵で、殆ど常人を赤面させる位のものであつたらしい。五位藏人は、この餘波である。

司法警察の當事者が先に立つて、宮女の局に泊り込むのは、いかに情界の天地が解放的だつた時代でも、多少眉を聳めずには居られなかつたらう。けれども官紀紊亂など、おもて立つた證據は、この道に限つてなかつた。たゞ職掌柄似氣ないといふ感情的の立場から、皮相的の攻撃を試みたばかりである。流石に婦人らしい態度である。

### 四十三段

細殿に、人とおまた居て、ありく者ども、見やすからず呼び寄せて、ものなどいふに清げなるをのこ、小舎人童などの、よきつゝみ袋にきぬどもつゝみて、指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、楯、鉾、太刀などもてありくを、「誰がぞ」と問ふに、つい居て、「某殿の」といひて行くは、いとよし。けしきばみやさしがりて、「知らず」ともいひ、聞きも入れていぬる者は、いみじうぞにくきかし。

○細殿 内わたりの細殿を見よ。○人とおまたるて「數多の人と居て」を、かくいふは當時の辭様なり。「人」は女房達をさす。○見やすからず 人の目に立てて、怪むばかりなるをいふ。○をのこ 召使の男をいふ。○つゝみ袋 包と袋となり。「包」とは裝束など包む料にて、服紗の如き物をいふ。玉海に「童女裝束丑日二具（八條院、各置衣笠蓋、裏赤色織物裏）卯日二具（院、各裏赤色織物裏、不置衣笠蓋）下仕裝束（攝政、生絹假裏、不置衣笠蓋）」と見えたる、裏これなり。「袋」とは上指のある物にて、その上指の紐を引絞ればすままりて、巾著の如くなる。これには夜著布圍なども納れたり。「よき」とあるは、織物などにて、その切地のよきをいふ。○指貫の腰云々 指貫の袴の腰紐の外へ出たる

(口譯) 細殿に、人達と大勢集つてゐて、往來する者どもを、不體裁な程呼寄せて、口などきくに、綺麗な下人や小舎人童などが、見事な包や袋に、著物など包み込んで、その端から、指貫の腰紐などが見えたのが面白い。袋にはひつた弓矢、楯、鉾、太刀などを持つてあるのを、どなたの物ぞ」と問ふと、跪いて、「某殿の物でございます」といつて行くのは、大層よい。様子ぶつたり羞しがつたりして、知



りませんしともいひ、或は耳にも入れないて往く者は、ひどく憎いよ。

也。○見えたるの下、をかしを略けり。○楯、梓 卽位式、大嘗會、行幸などの儀仗には勿論、常の警備にも用るれば、禁中を持歩けるなるべし。○たがぞ 誰が料。その略。○ついで 突き居ての音便。膝を地に着け、體を踵に載せたる姿にて、所謂跪なり。「ついで」の上、呼寄せられたる者の略けり。○何がし殿の の下、料にて侍りを略けり。○けしきばみ 氣色食むにて、様子を作るをいふ。○やさしがり この時代は、「やさし」を羞しの意と、優しの意とに用るたり。こゝは羞しがる也。

評 清少の居た細殿は、登華殿の西裏の細殿であつた。この前は、牆一重で清涼殿の方への通路になつて居るから、前渡りする下人等も、随つて多かつた。そこに三人寄れば姦しい女連の、大勢住んで居たとなつては、到底たゞで事の濟まう筈がない。殊に宮仕に人摺した女房達ではないか。果して通行の男共を呼寄せては冷かす。その不體裁なことは、みづから「見安からず」と評した通りである。

「布袋云々」は、後世ならば「風呂敷包の端から、袴腰が見えた」といふ所である。これは宿直する主人等の着替を、自宅から使で届けるのであらう。袋には束帯を納れたこと、又人をさへ盛り入れたことが、古書に見えてゐる。武官の弓矢、楯、楯、こんなかさばり物は、役所まで、その下人が別に持歩いたのである。

さて返事に「某殿の」とあるのは、無難で見安く、「知らず」とあるのは、虚偽であり、返事せぬのは、人を侮蔑した形である。下文にも、人の返答せぬ者を非難してゐる。まことに女の物いひかけた口頭試験を、無事に通過することは、中頃の某の大臣も、むづかしい事だといはれた。

この段、清少の常識を見る。文章としては軽いだけで、何の奇もない。

月夜にむな車ありきたる。清げなる男のにくげなる妻もちたる。鬚黒にくげなる

(口譯) 月夜に荷車のあるい

たの、美しい男が、見にくげな妻をもつたの、鬚が眞黒で、憎らしい男の年寄つたのが、そろ／＼口を利く人の乳兒をあやしたの、いづれも似合はない。

人の年老いたるが、物がたりする人の兒もてあそびたる。

(考異) ○この一章は、前段の「にげなきもの」の文の竄入なることは疑なし。古本には全くなきものなれど、假にもとのまゝにさし置きつ。

釋 ○むな車 空車にて、二義あり。一は人の乗らぬ車、一は荷車なり。こゝのは荷車なるべし。荷車を空車といへる例は、空種物語、蜻蛉日記、宇治拾遺などに見ゆ。伴信友は「むな車は棧車なり。屋形を取拂ひたる車をいふにや」と。上文「屋形なき車」とあるもこれなり。○にくげなるめ 憎氣なる妻なり。醜婦をいふ。○物語する人のちご 纒に物いふ乳兒なり。對座して話をばして居る人の乳兒と解すべからず。「人の」は例の添へて廣くいへる語なり。○たる の下、似氣なしを、いづれも略きたり。

評 美男の醜婦を持つたのを譏りながら、美女の醜夫をもつたのを、何ともいはない。蓋しわが邦俗は、男子を何處までも主人公と立て、絶對の家長權を認めただからである。清少はたしかに勝氣な女ではあるが、やはりこの思潮を裏切る程の、新しい女ではなかつた。源氏物語にも、玉葛の君は、引手あまたの美男子をさしおいて、鬚黒の大臣に嫁した。

鬚勝な爺さんが、片言いふ小兒をあやすのは、對照が餘に背馳し過ぎて、不調和な感じがするのである。上文に鬚勝な男の椎つむを悪んだのと同じである。月夜の空車は、上文の「月のいと明きに屋形なき車にあひたる」と全く同じ事である。

四十四段

主殿司こそ、なほをかききものはあれ。下女のきはは、さばかり羨ましきものはな

(口譯) 主殿司こそ、やはり



よいものである。下衆女の身分では、これほど羨ましいものはない。身分のよい人にもさせたい事である。年が若くて、器量がよく、服装なども、何時もよくしてゐるなら、ましてよからうよ。年寄つて、禁中の公事の先例などを知つて、場うてのせぬ様をしたのも、大層似合はしくて、見よいのである。主殿司の顔の愛敬をもつてゐるやうなのを、娠に持つてゐて、衣装を、その時節にしたがつて新調し、唐衣など當世風にして、歩かせたらよからうと思はれる。男では又、隨身こそよいやうである。勝れて美しくよい君達も、隨身のないのは、大層興がない。辨官などは立派でよ

い役と思つたけれども、下襲の尻が短くて、隨身のつかないのが、甚だいけないことよ。

し。よき人にせさせまほしきわざなり。若くてかたちよく、なりなど、常によくてあらむは、ましてよからむかし。年老いて、物の例など知りて、おもなきさましたるも、いとつきく、しうめやすし。主殿司の顔愛敬づきたらむをもたりて、さうぞく時にしたがりて、唐衣など今めかしうて、ありかせばやとこそ覺ゆれ。男はまた隨身こそあめれ。いみじくび、しくをかしき君達も、隨身なきは、いとしらぐし。辨などをかしく、よきつかさと思ひたれども、下襲のしり短くて、隨身なきぞ、いとわろきや。

釋 ○主殿司 主殿司に奉仕する女官をいへり。委しくは上出。○なほをかしきものは「なほ」は下衆とはいへど、尙をかしの意なるべし。「ものは」はものにてはなり。○下女のきは「下女」は下衆の女をいふ。奏任官以上の女官や、宮仕の女房よりは身分卑ければなり。但雑仕、下仕、半物等よりは身分高し。「きはは」は分際にてはなり。○よき人 身分ある女房達をいふ。「よき」は身分のよき也。○かたち 容貌。○なり 身形の事にて、衣裳附をいふ。○物の例 儀式等の古例。○おもなきさま 春註に、面強く物にうてぬ様なりとあるに従ふべし。鈴木朗は、源氏物語の文を引きて「恥を捨て、かゝることにて、俗にオシ強ウ、又ツ、ラ厚ニなどいふ意といへり。「面なき」はもと面目なき意なるが、中頃はかやうに轉れる也。尤も原義のまゝに「さし出顔せず、面目なき様」とも解せられぬにはあらねど、かくては殿司あがりの女には、すこし大人し過ぎるなるべし。○もたりて 娘に持ちてありての約。○そうぞく 装束の字音、衣裳をいへり。○時にしたがひて の下、新しくしを略けり。○隨身こそあめれ 隨身こそをかし。あめれの略。○しらぐし 白けて興なきをいふ。○よきつかさ よき官なり。「辨」は職原

抄に「名家譜弟の輩、清撰に依つて任じ、文才無き者は、之に居らず。藏人頭を兼任して、遂に參議となる」と見えて、太政官中の利役なり。○下襲のしり短くて 「下襲の尻」は、うしろをまかせてを見よ。「短くて」とは、辨は劇職なれば、裾の長きは不便なる故、わざと規定より短くせるなり。後世裾の馬鹿くしく長くなれる時代にも、「大辨の參議三尺五寸、(永行卿説)」「辨少納言ノ人丁簡スベシ、其人ツイタケモアリ」(永綱裝束抄)など見えたり。○わろきや 「や」は歎辭。

殿司の女官は、なか／＼派手な役で、もとは殿上の沓腕に伺候して、侍臣の穿物までも直したものだ。が、遂には殿上にたち入り、申文の取次をするやうになり、花奢風流、順徳帝に「美麗姿也、公人内可稱、神妙之職」と歎稱させ奉つた程である。本文に見れば、藤氏全盛時代に、既に、その潛上の傾向の兆したことがわかる。「下女の際は」とは、殿司のほかに、掃司、水司、膳司、酒司、縫司、藏司などに、女官がいくらかあつたので、それ等の中では、殿司を羨ましいと稱へたのである。まこと下衆ながら、あ

の高級の女房中の内侍と、一双の榮譽ある職であつた。年寄つてよく故實を辨へて、物馴れたのを目安いと評したのも、上文に内侍を褒めちぎつたのと、同一の理由からである。隨身もまた、下衆男の中では、その服色物柄からして、一寸高級武官に類似する點があつて、氣の利いた奉公振が、清少の氣に入つたものらしい。流石の辨官も、裾の短いのと、隨身のつかぬとで、清少に見限られてしまつたなどは面白い。蓋し容儀帶佩の外には、殆ど何物もなかつた、當代の風潮の寫眞である。

四十五段

職の御曹司の、西おもての立部のもとにて、頭辨の、人と物をいと久しくいひたち給



而の立部のきはて、頭辨が誰かと、大層長いこと話を立て立つてお出でなさるから、私はさし出て、「お話のお相手はどなたです」と尋ねると、頭辨が「辨の内侍です」と仰しやる。「何をそんなにまあお話をなさるのですか。大辨が見えたら、辨の内侍は貴方を打薬で、往つてしまひませうものを」といふと、頭辨がひどく笑つて「だれがこんな事をまでも、いつて聞かせたのでせう。それをさうするなと、今話してゐるのです」と仰しやる。この頭辨は優れて立派に見えて、別に興ある事など、わざと求めてすることはなく、只在のまゝ、な御心なのを、人は皆さうとばかり知つて

へれば、さし出でて、それは誰ぞ」といへば、頭辨の内侍なり」との給ふ。何かはさもかたらひ給ふ。大辨見えばうちすて奉りて、いなむものを」といへば、いみじく笑ひて、頭辨「たれかかゝる事をさへいひ聞かせけむ。『それさなせそ』と、かたらふなり」との給ふ。いみじく見えて、をかきすぢなどたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、なほ奥ふかき御心さまを見知りたれば、おしなべたらす」など、御前にも啓し、又、さしろしめしたるを、常に、「女は、おのれをよろこぶ者のためにかほづくります。士は、おのれを知れる人のために死ぬ」といひたる」と、いひ合はせつゝ、申し給ふ。「とほたあふみの濱やなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は、たゞいひにくみ、見ぐるしき事どもなど、つくるはずいふに若女房「この君こそうたて見にくけれ。こと人のやうに讀經し、歌うたひなどもせず。けすさまじ」などをしる。更にこれかれに物いひなどもせず。頭辨「女は目はたてさまにつき、眉は額におひかゝり、鼻は横さまにありとも、たゞ口つき愛敬づき、おとがひのした、頸などをかきげにて、聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき。とはいひながら、なほ顔のいとくげなるは心憂し」との給へば、まいておとがひほそく、愛敬おくれたらむ人は、あいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する。

(考異) ○御前にさへぞ、ぞ、文字原本になし。抄本による。

むるに、私はそれ以上、やはり奥深い御心なのを知つてゐるので、「頭辨は尋常の人物ではありません」など宮の御前にも申し上げ、又宮にも、さう御承知遊ばされてゐるのを、頭辨は常に「女はおのれを説ぶ者の爲に顔づくりす、士はおのれを知る者の爲に死ぬ」と、古くもいつてゐると、二人の間柄に古語を引當て、仰しやる。そこで二人は、「とほたあふみの濱柳」で、どんな故障でも、この交情は絶えないなど、互にいひ合つてゐるのに、若い女房達は、一途に頭辨を憎らしくいひ、聞苦しい事なども露骨にいふに、「この君(頭辨)はいやに見にくい。外の人のやうに、讀經

○しきの御さうし 職の御曹司なり。職院ともいふ。「職」は、中宮職、「曹司」は役所なり。中宮はもと三后宮(皇后、皇太后、太皇太后)の總稱なりしが、轉じて皇后宮の別稱となれり。近藤芳樹の説に「中宮は皇后宮にて、居處の稱、皇后はその位の稱にて、義別なり。皇后は中宮におはします故に、その皇后の御事を執りおこなふ官人の居處を、中宮職といへる也」と見ゆ。さて「職御曹司」は内裏の東、外記廳の北、左近衛府の西、梨本の南にあり。方四十丈、四面築牆にて、南及び西に門あり(南門は一條帝の頃はなし)主殿は南面にて、西面に立部あり。(附圖参照)○頭辨 この頭辨は、藤原行成にて、この時從四位上藏人頭權左中辨たり。藏人所、辨、行成を見よ。○さし出でて 清少がその場へ差出でたと也。○それは誰ぞ 行成の話し相手の人を指して、「それは」といへり。○辨内侍 未詳。○何かはさも「さも」は「久しくいひ立ち給へる」をさす。「かは」は反語。○大辨 當時の左大辨は源扶義(四十七歳)右大辨は藤原忠輔(五十四歳)なり。いづれか。○うちすて奉りて云々 貴方を捨て、行かんものを、何かさも語らひ給ふと、上へ反る文法なり。蓋しこの大辨は、辨内侍の情人ならん。○いみじく笑ひて 頭辨のいみじく笑ひてなり。○誰れかかゝる事をさへ云々 「かゝる事」とは辨内侍と大辨との内諍事、即ち情事をさす。「いひ聞かせ」は清少にいひ聞かせと也。○それさなせそと云々 假令大辨見ゆとも、しか我を見すつるなど相談するなりと也。「それ」とは「大辨見えば打捨て、いなむ」とあるをさす。「さなせそ」はさうするの意。これを眞頼の、今辨内侍と語るは、左様の仇めきたる筋にあらず。公事に就きて、それは左様にはすべからずといひ居る處なりといへるは強ひたり。○いみじく見えて云云 上に頭辨はを略けり。以下「みな人さのみ知りたるに」まで、頭辨の氣質を叙べたる也。すぐれてよく見えて、興ある事など、わざと求めてすることはなくて、只在のまゝなる飾のなき御心立をと也。「いみじく見えて」は他人によく見ゆる也。「をかきすぢなど立てたる」はわざと興ある業などもて附く



したり歌を詠つたり  
などもしない。人お  
もしろくもない。な  
ど誇る。頭辨はまた、  
一向に女房の誰彼に  
話などもしない。そ  
して、女は目は堅に  
つき、眉は顔におひ  
かぶさり、鼻は横向  
になつてゐても、只  
口付が愛敬があり、  
頤の下顎筋などが美  
しくて、聲柄のわる  
くなく、う人が、自  
分の氣に入るであら  
う。とはいふもの、  
やはり顔の大層見に  
くげなはいやであ  
る。一途に仰しや  
るから、まして頤が  
瘦せて、愛敬の  
劣つてゐるやうな女  
は、何といふことな  
しに敵にして、宮の  
御前にさへ、頭辨の  
ことを、わるく申上  
げる。

る也。「たいあり」は在のまゝにて、繕ひ飾りのなきをいふ。舊註は、清少が、自分と行成との間柄を辨  
明せるものとし、懇意らしく見えても、夫婦の如きをかき筋を立てたる事なしといふ意に解せるはい  
か。今は美隆、及び豊頼の再考説に従ふ。○さのみ知りたる「さ」は上の「たいありなるやうなる  
を」をさす。○なほ奥ふかき御心さまを云々 只在にてはなく、やはり奥ゆかしき頭辨の御心立なるこ  
とを、自分は見知りなればと也。「御心さまを」は御心様なるをの略。○おしなべたらすなど云々 頭辨  
は凡人ならずなど、中宮に推稱せりと也。「おしなべ」は押並にて、こゝは普通、尋常、平凡などの意。  
○さしろしめしたるを「さ」は上の「おしなべたらす」をさす。「を」を或説に歎辭とするは非。○つ  
ねに 頭辨はを、上に略けり。○女はおのれを—といひたる女は云々と豫讓のいひたるの略。史記の  
刺客傳に、晉の豫讓が、「士爲知己者、死、女爲説己者、容、今智伯知我、我必爲智伯報讎而死」  
といひて、知己智伯の爲に、その仇趙襄子を覗ひて、終に死したること見えたり。○いひあはせつ、  
頭辨が、古人の語を、自分と清少との間柄に適用してと也。「つ、」は軽く用ひたるにて、殆どにて近し。  
○とほたあふみの濱やなぎ云々 「とほたあふみ」は遠江の轉語なり。萬葉七に「霞ふりとほつあふみの  
吾跡川柳、刈れ、どもまたも生ふちふ吾跡川柳」といふ旋頭歌あり。この遠江も、吾跡川も、近江の  
地名にて、其處なる柳は、刈りても直ぐ芽を出すと也。當時この歌の吾跡川柳を謠ひ換へて、濱柳とい  
へりしを、引用せるなるべし。さてこの柳の「刈れ、どもまたも生ふ」とある如く、清少行成二人の間  
柄は、一時いかなる障ありとも、復舊の如くなるべしと、互にいひ交したるにと也。○若き人々云々  
「人々」は女房達なり。「たい」はひたすら也、「いひにくみ」は頭辨を憎けにいふと也。○見苦しき事 聞  
苦しき事なり。○つくろはずいふに 斟酌せずに、即ち露骨にいふにと也。○この君こそ 頭辨をさす。  
○どきやうし歌うたひ 「どきやう」は讀經なり。「歌うたひ」は謠物など歌ふなり。○けすさまじ 「け

は接頭語にて、調子を強むる也。「すさまじ」は興なきこと、面白からぬこと。○更にこれかれに物いひ  
などもせず 頭辨は女房の誰彼に、一向に笑談もいひ掛けずと也。○女は目はたて様云々 「目はたて  
様」は目尻の釣上りたるをいふ。「眉は額におひかり」は眉の額に覆ひかぶさるにて、眉の太きをいふ。  
「鼻の横さま」は鼻筋の通らぬをいふ。以上すべて誇張していへり。○おとがひの下顎などをかしげにて  
頤の下や、顎筋のあたりの美しき様子にてと也。つまりその邊の肥えて美しきなるべし。○とはいひ  
ながら その外の人相は構はぬとはいひながらと也。○まいて 上の若き人々の謗れるを承けて、「まし  
て」といへる也。○おとがひほそく 鐘願なり。○あいなう 愛無うなり。但こゝは玉の小櫛に「何と  
いふことなし」と解ける當れり。○かたきにして云々 頭辨を敵にして、中宮の御前にさへ、頭辨を  
わるく申上ぐる也。

物など啓せさせむとも、そのはじめいひそめし人をたづね、下なるをも呼びのぼ  
せ、局にも來ていひ、里なるには文書きても、みづからもおはして、頭辨おそく参ら  
ば「さなむ申したる」と申しに参らせよ」などの給ふ。その人のさぶらふ」などい  
ひ出づれど、さしもうけひかずなどぞおはする。あるに隨ひ定めず、何事ももてな  
したるをこそ、よき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、頭辨わがもとの心の本性」との  
みの給ひつゝ、頭辨改まらざるものは心なり」との給へばさて「憚りなし」とは、い  
かなる事をいふにか」と怪しかれば、笑ひつゝ、頭辨中よしなど人々にもいはるゝ。か  
うかたらふとならば、何か恥づる。見えなどもせよかし」との給ふを、いみじくに

(口譯)  
又頭辨は、宮に物を  
申上げさせようとし  
ても、最初取次を頼  
んだ者(清少)を尋  
ね、局にさがつてゐ  
るのを、御殿の方  
に呼出して頼み、又  
局にきていひ、又  
里第におりてゐる時  
には、手紙をよこし  
ても、さしなれば  
自身でもお出でなさ  
れて、もし貴女が宮  
中に参るのが遅いや

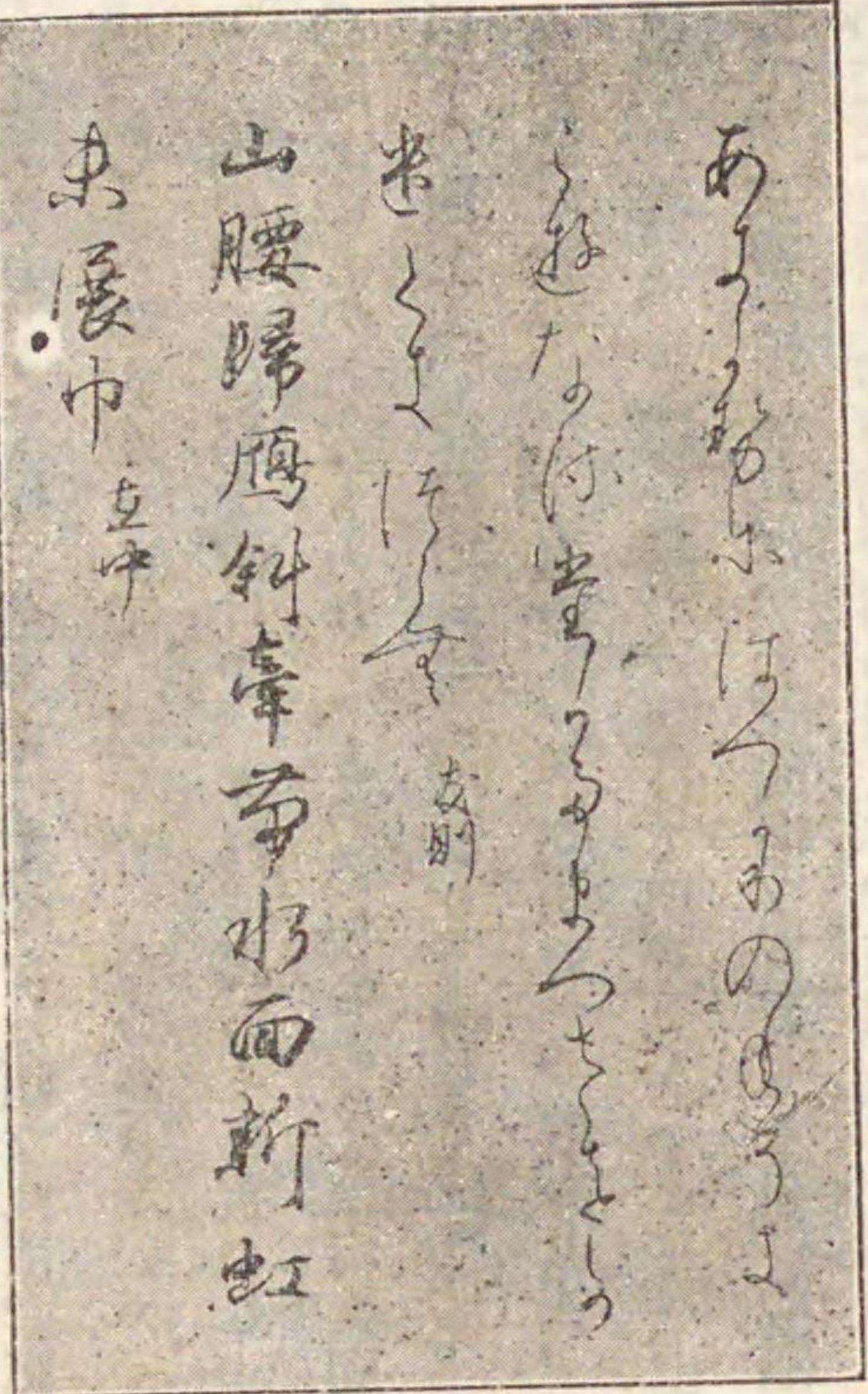


くげなれば、『さあらむはえ思はじ』との給ひしによりて、え見え奉らぬ」といへば、  
頭辨（頭辨）げにくくもぞなる。さらばな見えそ」とて、おのづから見つべきをりも、顔をふ  
たぎなどして、まことに見給はぬも、真心（真心）にそらごとし給はざりけりと思ふに。

釋 ○物など啓せさせむとも 頭辨は取次を以て、中宮に申上げさせんとすとも也。○そのはじめい  
ひそめし人 最初に取次ぎし人なり。その人は即ち清少なり。○トなるをも呼ぶのほせ 局に居るをも、  
わざく御殿の方に呼出でて、取次を頼むとなり。主君の居給ふ殿舎を上として、来るを上るといひ、  
去るを下るといひ、召使の私室を下といへり。○里なるには 里第にさがり居る時にはと也。○おそく  
まるらば 貴女が手間取りて御殿に参らばと也。○さなむ申したる云々 行成がかくく申したりと、  
まづ使を以て、中宮の御方へ申上げに参らせよと也。頭辨の清少に誂ふる詞なり。○その人のさぶらふ  
里に下りるる自分ならども、御殿には取次ぐ人の候ふ、それして申上げしめ給へと也。「その人」は取  
次ぐ人をさす。○さしもつけ引かず 頭辨の様なり。「さしも」は「その人の候ふ」をさす。「つけ引く」  
は承引なり。○あるに隨ひ定めす云々 九條右大臣師輔公の遺誠に、節儉の事をいひて「始自衣冠」  
及牛車馬（牛車馬）隨有用之、勿求美麗、不量己力、好美物、則必招嗜好之誘、云々」とある、隨有用  
之の語を、借來りて、物は必ずこれと定めずして、在合ふま、に用立つるを、善き事にするなれば、  
誰彼といはず、其處に居合せたる人に取次がせ給へといへる也。○うしろみ聞ゆれど 「うしろみ」は  
後見なり。世話焼くこと。「聞ゆ」は敬語。○わがもとの心の本性 この頑固は、わが本来の生れ付なり  
と也。「もとの心」は即ち本性の直譯なれば、かくては重言なれど、語意を強むる爲には、わざとかく  
もいふ也。「本性」の下、なりを略けり。○改まらざるものは心なり それ故外の人に取次させんとは思

うなら、手前がや  
うに申したと、申上  
げに、使者をさし上  
げて下さい」など仰  
しやる。何も私に限  
つた事はない。取次  
の人がございます」  
など断るけれど、さ  
うとも御承知をなさ  
らないでお出でなさ  
る。そこで私が「物  
を一定しないで、何  
でもあり合はせのま  
まに、用立てるのを  
よい事には致しま  
す」と九條殿のお詞  
を引いて忠告する  
が、頭辨は「これが私  
のものからの生れ付  
だ」とばかり仰しや  
つて「改まらないも  
のは心である」と又  
仰しやるから「それ  
では『改むるに憚な  
し』と論語にあるの  
は、どういふ事をい  
ふのですか」と、不  
審すると、頭辨は笑  
ひながら「貴女と私

はすの餘意あり。この語恐らくは出典あらん。後考を俟つ。○憚なしとは云々 論語に「過則勿憚改」とあるは、如何なる事をさしていへるにかあらんと、わざと不審して、頭辨を遣り込めたる也。○笑ひつ、頭辨の笑ひつ、なり。遣り込められて、笑に紛したる也。○中よしなど云々 我と君とは睦じき中と、人達にも評判せらる、よと也。「いはる」の下、よの歎辭含まれたり。○かう語らふとならばかく親密につき合ふ以上は、何か遠慮する事あるべきぞと也。「恥づる」は憚る、遠慮する、隔心するなどの意。○見えなどもせよかし 顔を見せもせよと也。「見え」は見られの約。當時女は他人に顔見られぬやうに、對話の際も、檜扇にて顔を覆ひ隠し、疎きには、簾几帳などの物越にてあひたりし也。○いみじくにくけなれば 顔の器量の甚だわるければと也。○さあらむは さあらん人はと也。上の「顔のいとにくけなるは心うし」をさす。○けにくくもぞなる 果してさる顔ならば、見ては、まことに厭になりもすべしと也。「もぞ」は萬一をいふ辭。○とおもふに と思ふのにの意。



藤原行成書

三月つごもり頃、冬の直衣（直衣）の着にくきにやあらむ、うへの衣（衣）がちにて、殿上（殿上）のとの姿（姿）もあり。つとめて日さし出づるまで、式部のおもとと、廂（廂）に寝たるに、奥の遣戸（遣戸）をあけさせ給うて、うへの御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもあへずまどふ

とは中よしだと、人達にも噂をされますよ。かう親しくつき合ふ以上は、何で遠慮が入るぞ。顔を見せなどしたがよい」と仰しやるのを「顔がひどく醜けてすから『そんなのは思ふことは出来まい』と嘗て仰しやつたから、ようお眼にかゝれないのでありませう」といふと、「ほんに憎くなるかも知れない。それならお見えなさるな」といつて、自然と見えさうな場合も、自分の顔を塞いだりして、本當に御覽なさらぬのも、心から虚言をば仰しやらないのであ  
ると思ふに。  
（口譯）  
三月の晦日頃、冬の直衣が厚過ぎて、着にくいのかしらん。袍だけ着て、殿上の



を、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髪かみのうへにうち着て、宿直物とらひものも何も、うづもれながらあるうへにおはしまして、陣ちんより出て入る者など御覽ごらんず。殿上人のつゆ知らてよききて物いふなどもあるを、ま上「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたゞせ給ふに、ま上「二人ながらいざ」と仰せらるれど、ま上「今顔などつくろひてこそ」とて参らず。

○つごもり頃 下旬の頃なり。○冬の直衣ちよくいの云々 「直衣」は夏秋なつあきは羅らにて裏無く、冬春は志々羅ししやらの綾にて裏あり。こゝは三月の末にて暖なる頃なれば、裏附うらつきの冬の直衣は、あつくて着にくきにやあらんと也。○うへの衣がちにて 袍ほを着たる方多きをいふ。「うへの衣」は袍ほのことなり。袍は冬には裏あれど、他の季には裏を附けず。されば裏ある直衣よりは、裏なき袍の方、春の末には、軽くて著よき也。○殿上とらひのとのる姿もあり 「とのる姿すがたもあり」は宿直姿とらひすがたなるものありの略。「殿上」は殿上とらひの間にて、宿直するをいふ。さて以下の殿上人、交替宿直する所なり。委しくは既出。「とのる」は殿居とらひの義にて、宿直するをいふ。さて正式には束帯たばたけとて、袍ほの下に下襲したしを着て、裾すそを曳ひき、表袴うへはかまを穿はき、太刀、平緒、石帯いしおびを着く。それを袍ばかり着て、下襲したしを略し、隨まひて裾すそを曳ひかずして、表うへ袴はかまの代しろに指貫さしぬきを穿はくを、「宿直姿」といへるにて、束帯たばたけに比すれば、太だ簡略かんりやくなる姿なる也。(附圖参照) ○式部のおもと 中宮方の女房にようぼうなるべし。○廂とらひに 職しやくの御曹司ごそうしの廂とらひの間にて、西廂にしとらひならん。下に「陣ちんより出入る者など御覽ごらんず」とあり。職しやくの陣ちんは西門にしもんにあり。○奥おくの遣戸ちやいど 廂とらひと身屋みやとの界かゝりなる引戸ひきどなり。○うへ 一條帝いちじょうてい。○宮 中宮ちゆうぐう定子じやうし。○起おこきもあへず云々 起おこくるにも起おこきられず、當惑たうかくするをと也。○唐衣たういを 髪かみのうへにうち着て 天皇てんかう中宮ちゆうぐうおはしませば、取とりあへず禮服らいふくたる唐衣たういを着たるが、髪かみは唐衣たういの外ほかに出すべきを、搔かつくらふ暇ひまもなくして着込きこめたる也。○とのる物 宿直物とらひものにて、夜具よぐなどをいふ。但たゞこの時代の夜具よぐは、四角しやうかくなる障とらひ

宿直姿とらひすがたをしてぬる者もある。或朝日あさひのあがるまで、式部しきぶのお許もとと廂とらひの間に寝ておると、奥おくの引戸ひきどをお開ひらけなされて、ま上と中宮ちゆうぐうとお二方ふたはたが入れいれられたから、起おこさるゝ起おこさないかの有様ありさまで當惑たうかくするのを、大層おほいお笑わらひ遊あそばされる。自分達は唐衣たういを髪かみの上うへにうち掛けて、寢道具ね道具も何も、そこにうづ高たかくなつてゐる處ところに、ま上中宮ちゆうぐうはお出でましになつて、陣ちんから出たりはひつたりする者などを御覽ごらんなさる。殿上人とらひが、そんな事こととはすしこしも知らず、この廂とらひに寄よつて来て、詞ことばをかけなごするものもあるのを、ま上は「こゝにわが居る氣振きぶりを見せるな」と仰おほしやつて、お笑わらひ遊あそばされる。そし

てお立ちになるに、「二人とも一所いここにまゐれ」と仰おほしやるけれど、「今顔いまかほなど化粧けしょうして参まゐりませう」と申まを上げて、参まゐらない。

綿わたの衾かみや、直垂ちよくいの類るいなり。○うづもれながらあるうへに 今いままで寝ねて着たりし衾かみなどの散ちらばりながらにある處ところにとなり。「うへ」は邊へたの意い。○おはしまして ま上中宮ちゆうぐうのなり。○陣ちん 職しやくの門脇かどわきにある陣屋ちんやなるべし。○つゆ知らで 帝てい中宮ちゆうぐうの端近はなぢかく出でさせ給たまへるを、一向いこう知らずと也。○よりきて 廂とらひの間に寄よ来てと也。○けしきな見みせそとて かく二所ふたところながらおはします様さま子を、殿上人とらひ等に知らずなと仰おほせられてと也。○さてたゞせ給たまふに やがて、その座まを起たちて歸かへらせ給たまふにと也。○二人ながらいざ 清少きよせうと式部しきぶと二人共ふたりとも、いざ來きれと御供ごこうを命めいぜらるゝ也。「いざ」は率すべにて、誘いざなふ意いの副詞ふくご。○今顔いまかほなどつくろひてこそ 寢起ねおきのまゝなれば、顔かほなど化粧けしょうして追付おっつけ参まゐるべしと也。「こそ」の下、参まゐり侍まゐるべしを略りやくけり。

入いらせ給たまひてのちも、なほめてたき事ことどもいひあはせて居ゐたるに、南みなみの遣戸ちやいどのそばに、几帳いじやうの手のさし出でてたるにさはりて、簾すたれの少しあきたるより、黒くろみたるもの、見みゆれば、のりたかが居ゐたるなめりと思おもひて、見みも入れて、なほ事ことどもをいふに、いとよく笑わらみたる顔かほのさし出でてたるを、のりたかなめり、そはとて見みやりたれば、あらぬ顔かほなり。あさましと笑わらひさわぎて、几帳いじやうひき直ただしかくるれど、頭辨かぶまにこそおはしけれ。見みえ奉ほうらじとしつるものをと、いとくちをし。もろ共に居ゐたる人は、こなたに向むかきて居ゐたれば、顔かほも見みえず。立ち出でてて、頭辨かぶま「いみじくなごりなくも見みつるかな」との給たまへば、清きよのりたかと思おもひ侍まゐれば、あなづりてぞかし。なかは「見みじ」との給たまひしに、さつくくとは」といふに、頭辨かぶま「女むすめは寢起ねおききたる顔かほなむ、いとよき」といへば、

(口譯) ま上中宮ちゆうぐうが、お奥おくにおはひりたされて後あとも、やはりお二方ふたはたのめてたいな御事ごことなどを、式部しきぶのお許もとと話し合あつておたがひ、南みなみの引戸ひきどのそばに、几帳いじやうの手てがつか出でたのにつかへて、簾すたれがすこし開ひらいた處ところから、黒くろずんだものが見みえるから、藏人ざうじんの説せつ孝かうがすわつてゐるやうであると思おもつて、眼まなこもつけないで、やはり何かの事ことなど話はな



ある人の局つはらに行きかいかばみして、又もし見えやするとて來りつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局のすだれうちかづきなどし給ふめり。

(考異) ○入らせ給ひてのちも、のちもの三字、原本になし。古本による。

御二所の御容體の優れてまします事を、清少と式部と、やはり語り合ひて居たること也。「なほ」は「いひあはせ」にかゝる副詞。○几帳の手 几帳の几の丁字形にさし出でたる兩端を、手といふ。○さはりて 几帳の手に、簾の障りてと也。○黒みたる物 人影をいへる也。衣服の色にはあらず。○のりたか藤原説孝なり。諸註教隆の字を充てたるは無稽なり。職事補任を案ずるに、長徳四年七月五位藏人に補す。その前は六位藏人にてありけるなるべし。内大臣高藤の裔にて、正四位下左大辨に至る。六十六にて卒す。その弟宣孝は、紫式部の夫なり。○なほ事どもをいふに 式部と二人して、御二所のうへを、やはり色々といひ續けてゐたるにと也。「なほ」は「いふ」にかゝる副詞。○顔のさし出でたるを 簾の障りより覗きたる顔の出でたるをと也。○のりたかなめりそは 「そは説孝なめり」の轉倒にて、急遽の際の辭様なり。○そは「はそれはと同じかれど、さし迫りたる場合にのみ用ゐる。○あらぬ顔なり 説孝にあらぬ顔なりの略。○隠るれど頭辨にこそおはしけれ 隠るれど、その詮なくで、覗きたる人は、別人ならぬ行成なりと也。かく詞を補ひて見ざれば、どの辭さはりて義通せず。○見え奉らじとしつるものと 頭辨には見え奉らじとしつるものを、かゝ見られ奉りぬと也。「見えは見られの意。○もろ共に居たる人式部のおもとをさす。○立ち出でて 頭辨のなり。○なごりなく 残る限なくと也。「なごり」は波殘

してゐると、大層にこついた顔が、その簾の障間からさし出たのを、説孝であるさうなと思つて、見やると、そでない顔である。呆れた事と笑ひ騒いで、几帳を立てなほして隠れたが、その人は頭辨でおありなかつた。見られは致しますまいとしたものを見られてしまつて、甚だ残念である。一所にゐた人(式部のお許)はこちら向てゐたから、顔も見られない。頭辨が立出て「非常に残なくも見てしまつたよ」と仰しやるから「説孝が居ると思ひましたから、油断をしてすわ。何で見まいと仰しやつたのに、そんなにくんぐんとは御覽なされたのです」といふと、女は寢起の顔が、

大層よいといふから、或女の局に往つて障見をして、又もしか見えろと思つて、こゝに來たのです。まだ主上のお出遊ばされた時分からゐるのを、よう氣が付かなかつた事よ」といつて、それから後は、私の局の簾を潜りなどして、はひられるやうであつた。

の義。波の引きたる後の岩の間などに残る水をいふより轉りて、物の氣の残ることにいふ。○のりたかと思ひ侍れば 「思ひ侍れば」は思ひ侍りつればといはでは、文法上の時打合はぬやう也。○あなづりてぞかし 悔りてぞ見られ侍りけるぞかしの略。「あなづり」はあなづりの古言。○さつくくとはさつくくとはなどは見給ひつるの略。「などは」は「見給ふ」に係る。○女は寢起きたる顔なむいとよき 女の寢起の顔よしとは、その頃の諺なるべし。○ある人 或女なり。○かいはみ かいまみの音便。「かいまみ」は垣間見の義にて、物蔭よりひそかに見るをいふ。○見えやす 貴女の寢起きたる顔の見えやするの略。○あるを 居るをと也。○え知らざりけるよ 貴女はなり。○局のすだれうちかづき云々 局の簾を潜りて、入來り給ふやうなりと也。當時の殿舎の構造は、端に大抵簾を垂れたれば、簾を被くといへば、室内に入ることも也。

中宮は長徳元年にも、職御曹司に居させられたが、行成が辨官となつたのは同二年四月だから、その以後では、同三年六月、まづ職御曹司に入り、ついで梅壺にうつり、同四年二月、梅壺からまた職御曹司にお出なされた。さて長保元年六月の内裏炎上の際までは、そこに居させられたやうである。本文の出來事は「三月晦頃」とあるから、長徳四年か長保元年かの暮春で、さて説孝が六位藏人で居つたのは長徳四年七月まで、五位藏人で居たのは同五年(即ち長保元年)一月までであるから、これは必ず長徳四年三月頃の事である。(主上御年十九、中宮廿三、行成廿七、説孝五十二、清少卅三四?)

人の對話中に、横合からの相手穿鑿は、甚だ以ていかゞだが、清少と行成とは、失禮呼はりをする程の間柄ではなかつた。また辨内侍は、もとより懇意の間柄だから「大辨見えば」などの冗談もいつたものである。この大辨は内侍の夫なので、呼名も辨内侍といはれたらしい。あまり長話をする所から、岡燒半分にかかふと、行成もさる者「それさなせそと語ふ」の戲謔一番、この氣の利いた好會話は、只「久



しくいひ立つ」の一語に胚胎してゐる。

「いみじく見えて」からは、行成の性行の説明である。行成は一條朝四納言の一に數へられた名臣である。大鏡に、

至らぬ事にも御魂ひ深くおはして、勞々<sup>らくらく</sup>じうしなし給ひける御本性にて。

とある通り、才藝おほく、よく漢文を草し、最も書法に長じ、歌をも相應に詠んだ。(大鏡に歌は不得手なやうに書いてあるのは誤傳である)また、古事談に「正直者」と見え、本文に「まことに虚言し給はざりけり」とあるのは、たしかにその性格の一面を語つたものである。當時、他の才媛達が、慎深いといふ好名のもとに、あらゆる虚偽を行つてゐた習慣からして、驕慢の謗をさへ招いたほど、赤裸々な清少の態度は、いかにその正直であるかを證するもので、これ等共鳴の點、同好同臭味の點は、遂に兩者の接近を餘養なくさせたのであらう。そこで清少は行成を非凡と推獎し、行成は豫讓の言を引いて知己と許す。かう話の駒が合つては、遂に中よしと人も噂するやうになり、はては簾うち被くことにもなる。漸をおうて進む、事に次第があり、文に秩序がある。

行成の正直にも、かたくなにも見える直線的性行は、社會凡百の對象を、悉く婉曲な美の一線で劃してしまはうとした時代思潮には、殆ど順應しにくかつたらう。例の折過さぬを、人事の大理想とし、程のよきを、その動作の標準とした當時に、花晨月夕に朗詠して、風流に耽らうともせず、飛花落葉に誦經して、殊勝の珠數を爪繰ることもなくては、「うたて見にくし、け凄まじ」と誇られるのは、固より當然のことである。それをなほ「わが本性なり、改らざるは心なり」など放言するに至つては、彼を惡魔外道視するは、獨おとがひ細く、愛敬おくれた人ばかりではあるまい。

讀經と唱歌朗詠とは、當時の貴紳の専修科目であつた。讀經の學は即ち聲明で、  
帝、仲頼行政に琴をしらべさせ給ひて、行ひ人に孔雀經題經よませ給ひて、あはせて聞召すに、あはれに聽し

く、涙落さぬ人なし。(空穂物語、吹上の巻)

とある程、音樂的なものである。特にこの頃は大原の良忍が魚山の流風を鼓吹した時で、斯道は頗る盛行した。その結果、信仰功德の業は遂に遊藝化して、他の今様雜藝とひとしく、花晨月夕、經中の要句を互に座興に誦誦しあつた。これが所謂讀經争である。甚しいのは、風流艶冶の具となつて、或はその美音を操つて美人を挑み、或は不貞の女が仇し男と逢引中なので、法華經の要文を誦誦して立去ると、その哀音に魅せられて、その女も泣き、その男も泣いたといふ珍話もある。こんな時世に、行成のやうな讀經せぬ人も、稀にはあつたものと見える。

こんなけすまじい不評判な人で、誰彼にロクに冗談口もきかぬやうでは、いよ／＼女房達に、受の悪いのは當り前である。のみならず婦人の容貌は、場合によつては、その幸福の全部とも見られるものを、無遠慮にその造作の棚卸をして、好んで一部の反感を買ふ。實に不意氣不粹なのは行成である。これもその正直の結果かも知れない。

行成が婦人の容貌に對して、特殊の趣味を有つてゐることは勿論であらうが、この批評の裏面に潜在してゐる消息を窺ふに、恐らく清少の容貌を暗示したものはあるまいか。「願ほそく愛敬おくれたらむ人は、愛なう敵にして」と、餘所事らしくいつたのを見ると、清少自身は口元に愛敬があつて、願は二重顚、頸筋もふとり加減で、聲柄のよかつた女であらう。目鼻立は、行成の詞から想像をなかくと、目尻がすこしあがつて、眉ぶとで、鼻の行儀も、餘りよくはなかつたらしい。老後尼となつて居た時、男と誤認された一事でも、その相貌の大概を察することが出来よう。そのひどく醜い程ではなかつた事は、「憎けなるは心愛し」といつた行成の詞が、これを反證してゐる。下に清少が「いみじく憎けなれば」といつてあるが、それは單なる應酬の語に過ぎない。

序にいふ、奈良平安兩時代を通じての美人相は、眉細長く、目の切長くて、その釣上つたのよりは、



寧ろ下つた方をよいとした。下文大きにてよきものの段に「男の目、あまり細きは女めきたり」とある。鼻は高過ぎるよりは寧ろ低い方がよく、口元は尋常で、唇はあまり薄くないのがよく、豊頬で二重頰の太り肉で、頸も肥えてや、短く、慨していへば、脂肪質の女がよかつたやうである。髪は飽くまでふさやかに長いのをよいとして、平安朝に入つては、丈に餘るの、衣に餘るのといつたものである。これ當時の文學繪畫彫刻に現れた特相である。

行成が頭辨に任用されたのは、その才學の優長なるを證するものである。然るに彼が史記の豫讓の言、及び「改らざるものは心」の古語を引用すると、清少はすぐに遺誠、及び論語の語を應用して、その才學が更に一步も遡つてをらぬ。これ等の問答の様式は、當時においての模範的バイカラ振であつたらう。さてその結果は、只行成が執拗な、かたくな振を證明するにとゞまつた。

三月晦より一轉して、行文は叙事に入つた。「うへのきぬ勝」は、下の「黒みたる者の見ゆれば」の伏線である。當時の服色は、四位以上は皆黒色であつた。行成も四位の頭だから、黒袍を着てゐたのだらう。説孝は當時六位の藏人だから、その袍は青色か、又は緑衫であつたらう。この色は陰になつた所は、一寸黒ずんで見えるから、「黒みたる者」を説孝とばかり思つてゐたのは無理もない。まことに虚言し給はずと信用し切つた人が、まさかに垣間見しようとは思はなかつたからである。さて行成も説孝も同じ男なのに、一方は侮つて注意も拂はぬ程なのに、一方は見られたとて大騒をするは何故かといふに、その重なる理由は、この二人の身分の高下によるのである。上文に下等の者にはさもないが、殿原には恥隠れることをいひ、又下文にも、下衆女の名はよくは知らぬ趣にもてなして、最下級の半者の名は、自ら呼立て、もよいといつてゐる。つまり相手の身分の卑しいほど、階級紛更の恐がないから、心安く障壁を撤去し、高いほど威儀を正して、障壁を高くする。かうした心理状態は、今日の社交上にも、常見られ

ること、あながち珍しい事でもない。行成は殿上の貫主、説孝はその輕輩、これに對する清少の態度が格別なのは、もとより當然の事であらう。殊に定子中宮の如き、君寵を一身に鍾めて居られた方の御附女房は、頻繁なおあがりの御供で、常に殿上に宿直するから、藏人達とは、自然心易いあまりに、おもひ侮つて居ましたらう。

女の寢起の顔のよいのは、他に種々の原因もあらうが、一つは當時の傳粉法が、白壁ののこて塗であつたらうと想像されるから、寢起にはその厚化粧もはけて、却つて美しい顔の地肌が露れる爲であるまいか。さて女同志の衣具に埋れての、例の扇も何も隔てぬむき出しの素顔を、つくづくと見た行成が満悦は、高師直が風呂場覗きと、大した相違はないといへる。あ、藏人頭が宿直の獲物は、官女の寢起の顔だつた事を思ふと、當時の朝紳等ののん氣さ加減にも驚く。

この垣間見の一段を讀んで、端なく源氏物語に、空蟬の君と軒端の荻とが、碁を打つて居たのを、源氏の君の隙見した一條を想起する。叙事に眞假精粗の別こそあれ、共に有数の好文字である。そして源氏の君は、まだ垣間見などし給はざりつゝ、十七歳の初心で、「何心もなうさやかなるはいとほしながら」と、氣の毒らしく臆してゐるのに引換へて、廿七歳の行成が圖々しい世馴れた振舞は、またい、對照であらう。只源氏のは伊豫守が私邸の出來事なのに、これは禁内殿上での行爲であるから、何となく不謹慎で、猥りがはしい心地もするが、清少の筆付を察すると、そんな堅苦しい感じは、夢にも有たなかつたやうで、寧ろそれよりも寢起の顔を見られたのを、一大事と心得たらしい。時代の風尚といふものは、實に面白いものである。そこで最初、ひどく變物らしく早えた行成も、今はぞろ々凡々たる色ざかりの男となつてしまつた。これは讀者の意外とする所であらうが、その實清少も、特に意外と感じたに違ない。これらの矛盾は、清少の好奇心をそつて、遂にこの一篇の彩筆をふるふ動機を作つたらしい。「局の



すだれ打かづく」は、上の「見えなどもせよかし」に應じて、他人行儀の障壁を撤した趣とは見えるが、その親密の程度は、甚だ分明でない。ないが、當時の慣習上から觀察すると、餘程深入した間柄となつた事を、ほのめかしたものである事は争へない。

抑も中宮が、梅壺から職御曹司に移られたのは、この二月十一日に、暗部屋女御尊子の入内があつたのをば避けられたのである。けれども君恩は新人に薄くて故人に渥く、この職御曹司にまで出でまして、昔に渝らず睦ませられたのは、中宮に取つては、うへなき御面目で、奉仕の女房達までも、どんなにか嬉しかつたらう。

主上中宮の端ちかく出でまして、女房の臥處ともいはず居させられ、門脇の陣屋から、下衆の出這入するのや、殿上人のそ、りあるくの御覽になるなどは、打解けすぎて、餘に恐おほい。一體天皇皇后が仁壽常寧の二殿から、清涼弘徽の二殿に移られた頃から、權家の威勢は火のやうに熾になり、反比例に皇威は日に凌遲して、萬事簡略を喜ばれる傾向を生じて來た。この職御曹司や一條の今内裏における主上中宮の御動靜は、まさにそれを語つてゐるものである。

四十六段

殿上の名だ いめんこそなほをかしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問ふもをか。足音どもしてくづれ出づるを、うへの御局の東面に、耳をとなへて聞くに知る人の名のりには、ふと胸つぶるらむかし。又、ありともよく聞かぬ人も、この折に聞きつけたらむは、いかゞ覺ゆらむ。名のりよしあし、聞きにくく、定むるもを

(口譯) 殿上の名對面は、やはり面白い。主上の御前に、當直の者が伺候してゐる時は、すぐその座について、その名を問ふの

かし。はてぬなりと聞くほどに、瀧口の弓ならし、沓の音を、めき出づるに、藏人のいと高くふみこほめかして、うしとらの隅の勾欄に、高ひざまづきとかやいふあずまひに、御前のかたに向ひて、うしろざまに「たれくか侍る」と問ふほどこそをかしけれ。ほそなたかう名のり、又、人々さぶらはねばにや、名だ いめん仕うまつらぬよし奏するも、「いかに」と問へば、さはる事ども申すに、さ聞きて歸るを、方弘は、きかずとて、君達の教へければ、いみじう腹だちしかりて、かんがへて、瀧口にさへ笑はる。

釋 ○殿上の名だ いめん 「殿上」は清涼殿の殿上なり。「名對面」は名調とも、宿直申とも、問籍(瀧口に)ともいひて、禁中にて、毎夜亥の一刻(今の午後十時)に、當直の侍臣及び瀧口の勤惰を檢するため、名籍に就きて點呼するをいふ。北の陣、その他の問籍に區別して、清涼殿のを、「殿上の名對面」といふ也。花鳥餘情に「亥、一刻内豎時の簡を奏す。その後侍臣の名對面あり。殿上に御殿居する侍臣達に、名を問はれて名告ること也。この次に瀧口の殿居申あり」。殿上を見よ。○御前にさぶらふ折は、侍臣の帝の御前に侍ふ折はと也。これは特別の御用召など承りて、御前にある折ならん。○やがて問ふ、侍臣は殿上の間にうち揃ひて名對面するが例なれど、今御前に出仕したる者は、その座に就きて、直に誰そと問ふと也。「やがて」は即座にの意。侍中群要に「名調之時、御前二人候バ、其人問云誰ソ、外人ハ不問云々」。○くづれ出づる、列を作らずして、ドヤノと出で來るをいふ。名對面すとて、殿上人が、その場に參集するさま也。○うへの御局、清涼殿なる弘徽殿の上御局なり。○耳をとなへて、人々の耳

も面白い。足音など、がして、どやノと、侍臣達が出てくるのを、上の御局の東面の處で、耳をすまして聞くに、知人の名告つた時には、ふつと胸が潰れるであらうよ。又そんな者が居るとも、よく聞かぬ人の名をも、此時に聞付けたらうには、どんな氣持がするであらう。名告具合の上手下手を、聞著しく、女房達が評判するの面白い。殿上の名對面がすんだなど聞くうちに、又瀧口が弓弦を鳴し、沓の音をぞくぞくさせて出てくる。藏人が沓の音をひどく高くこぼくさせて、御殿の東北の隅の勾欄に、高跪とかいふ居すまひで、主上の御前の方に向けて、瀧口の方



にはうしろ向に、「誰誰が参つてゐるか」と問ふ様子が面白い。銘々に細い聲や高い聲で名のり、又當直の者達が缺席したせぬだらうか、名對面致さぬ由を、瀧口の上席の者から奏上するの、藏人が「どうした事か」と問ふと、差支の事故などを申上げると、その通り聴取つて歸るのであるを、方弘(藏人)は何も聴かなくて、方弘は自分の疎忽は忘れて、名對面せぬ瀧口がわるいとて、ひどく腹立ち叱つて、その怠慢の罪を正すといつて、殿上人は勿論、瀧口にまで笑はれる。

枕草子評釋

を、一つに澄ますをいふ。「となへて」は大鏡に「心を一つにとなへて、聞しめせ、榮花物語に「返すくも心をとなへて、祈り申給ふ」とあるとなへて、一つに整ふる意と見ゆ。と、のへての約轉なるべし。豊頼は「となへては唱へにて、經文などを、衆人の同音に唱ふるより出でたるにて、多人數の同じ様にするを、いへるなるべし」といへり。○知る人の名のりには、知る人の名告する時にばと也。名對面には各わが名をいひあぐれば也。○ふと胸つぶる ヒョット肝を潰すと也。突然知人の名を聞きたる時の心理状態なり。○ありとも聞かぬ人を、常はありとも聞かぬ人の名をとなり。こは中宮の御方に疎々しく、清少等のよくも知らぬ人なるべし。○いかゞ覺ゆらむ いかん感するならんと也。○名のりよしあし 名告りやうの上手下手なり。春註の、よき名あしき名といへるは非。○定むるも 女房達の定むるもと也。「定むる」は批評するなり。○果てぬなり 殿上人の名對面の果てぬなりと也。「ぬ」は現在完了の助動辭。「なり」は歎辭。これより瀧口の名對面あるなり。侍中群要に「殿上人謁了、元問人、更出、自御前、問、瀧口衆、云々」。○弓鳴し 鳴絃する也。絃打ともいふ。矢をはけずして、手にて弓の絃を張りて放ちて、ピンノ、と音を立つる也。その音にて妖魔を驚し、退散せしむるを目的とす。○沓の音を、めき出づる 二十名ばかりの瀧口が、名對面の爲に、清涼殿の庭上に列立せんとて、陣より出来る沓音なり。「そ、めくは」はツク、と音するをいふ。○いと高く いと音高くなり。○踏みこほめかし 踏立て、こほ、と音すると也。これは侍中群要に「板行頗令有音」と見えて、藏人が、清涼殿の簀子(すゐこ)のあるくに、わざと踏立て、音を立つる也。「こほめかし」は濁らぬをよしとす。こほめくを見よ。○うしろの隅の勾欄に 清涼殿の東北隅の勾欄になり。この「勾欄」は「勾欄」の意として聞くべし。○高ひさまづき 「ひさまづき」は和訓栞に膝曲衝の義とせり。跪の字を訓めり。「高跪」は兩膝を下に著けて、股と腰とを伸したるをいふならん。腰を踵にて支ふるは、普通の跪坐なり。○居すまひに 居すまひしての略。「居すまひ」は居住の義にて、居様をいふ。○うしろさまに 主上の方に向ひて。瀧口等に背を向けたるをいふ。○誰々か侍ると問ふ 「問ふ」は瀧口に問ふの略。日中行事に「下格子の後、殿上の名對面の事あり。藏人頭、孫庇の南の階に尻を懸く。殿上人は、上の戸の口、六位は壁のもとに候す。六位藏人、上首(頭)の前に進みて、たそといふ。各名告す。六位藏人一人、孫庇を北へ歩みゆきて、二間の前の階より、第三の板敷の上に跪きて、誰々か侍るといふ。瀧口絃打して、各名告を唱ふ」とあるを参照して、本文を心得べし。○ほそ高う名のり 瀧口がなり。○人々さぶらはねばにや 當直の瀧口に、不參者の多くあるをいふ。「人々」は名對面する人々の略。「にや」の下、あらんを略けり。○名對面つかうまつらぬ由奏するを 瀧口の上藤が、不參者勝なれば、今夜は名對面せぬ由を、藏人を經て奏するを也。侍中群要に「三人以上候時間之、不足、三人時不問」とあり。○いかにと問へば 藏人の問へばと也。その事故を問ふなり。○さはる事ども 差支の事情などと也。○さ聞きて歸るをしか聞届けて歸るを也。「さ」は障る事どもをさす。○方弘 源氏。左馬權頭時明の子にて、前和泉守致明の子となれり。源藏と稱せしを見れば、藏人たりし事明なり。阿波守に至る。○方弘は聞かずとて君達の教へければ 名對面せぬ次第を聞きて歸るが例なるを、方弘は聞かずしてゐたりと、君達の方弘に忠告したればと也。○いみじう腹立ちしかりて 方弘はわが疎忽をおきて、瀧口の名對面せぬを、ひどく立腹して、瀧口の上藤に小言をいへる也。○かながへて その罪を勘へてと也。罰に當てんとするをいふ。○瀧口にさへ笑はる 殿上人は勿論、瀧口にまで笑はると也。缺席の事故を申立つれば、素直に聞届けて歸るが故實なるを、例になく叱責したれば、却りて物議らぬ嘲を受けたる也。

(口譯)  
御厨子所の御膳棚と

御厨子所のおもの棚といふものに、沓をおきて、はらへいひの、しるを、いとほし



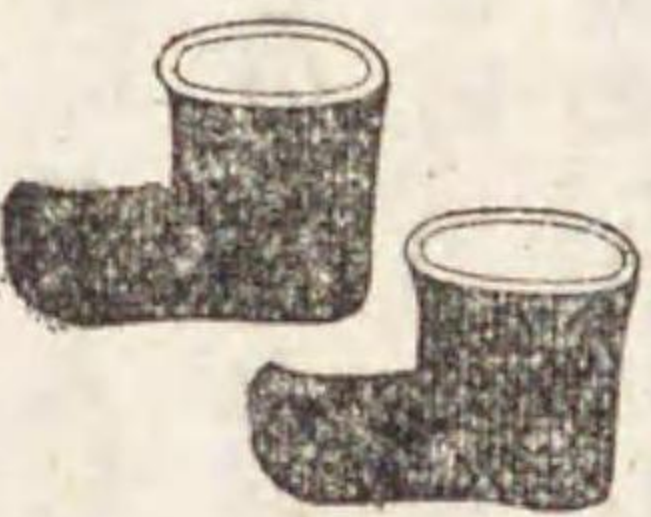
がりにて、「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々のいひけるを、「や、方弘がきたなき物ぞや」とて、取りに來ても、いとさわがし。

(考異) ○物ぞやとて、原本とての二字なし。古本による。

釋 ○御厨子所 ミヅシドコロ。後涼殿の西廂にありて、供御を調進する所なり。四位の殿上人を別當となし、民部大輔の五位を預となす。拾芥抄に「御厨子所、以、内膳、内藏、造酒、大膳、及諸御厨、衛府御贄、供、朝餉及朝夕御膳、用、土器、有、別當衆、云々」。○おももの棚 御膳棚なり。内膳その他より獻れる御食膳、菓子などを載せおく棚なり。○沓をおきて 方弘



浅



深

が沓を置きてとなり。○はらへいひの、しるを か、る穢き物を御膳棚に載せたるは、誰が仕業ぞ、宜しく本人を調べ出し、その穢させよと、人々のいひ騒ぐと也。すべて穢を穢へ清むるは、神代よりの習慣なり。○いとほしがり 氣の毒

がりと也。○え知らずと 方弘の沓なることは明なれど、方弘の物といは、贖物出さしめらる、が氣の毒さに、わざとかげびて、誰の物とも知らずと、主殿司などのいへる也。○とのもり司、人々の 主殿司やその他の人々のと也。○や、方弘がきたなき物ぞや 方弘の詞なり「や、にはやの發語を重ねたる也。「きたなき物」はこゝにては沓をいふ。流石にあから様に、沓とはいひ兼ねたる也。「物ぞや」は物なるぞやの略。「や」は歎辭。こは人々は、爲を思ひていひ隠すに、當人自らいひあらはせる也。○取りにきてもとさわがし 取りに來て、甚だ人目に立つばかり物騒しと也。「取りに來て」は沓を取りに來てなり。「も」は歎辭。「ても」をどもの意に解するは後世の意なり。

評 名調は清少が中宮上直の御供で、清涼殿の上、御局にまゐつて、常に聞馴れた行事である。

亥の刻過とて、御格子は皆おろしてあるのに、侍臣のは殿上、瀧口のは庭上で行はれるのだから、眼の前には、何物も見えない。只「耳をとなへて」の一句に、全文が胚胎して、すべて聴覺及びそれに件うた感想で叙し去つてゐる。蓋し奇文である。知人の名のりに吃驚し、名告方の巧拙をやかましく批評するなど、手持ないお夜づめの女房氣質が、よく現れてゐる。藏人が高麗の一事は、態度の描寫だが、正寅の隅は、丁度上御局の東面の格子前にあたるのだから、いつとなく見置いたのを、思ひ出すまゝ、に書いたのである。

結末は一轉して、方弘の挿話となつた。元來新參の藏人を教育するのは、藏人頭の責任で、また先任者の芳志である。それをトンチンカンに受取る方弘の疎忽加減は、瀧口にさへ笑はれ、お膳棚を沓棚と間ちがへ、取りに來ても騒しに至つて極まつた。退屈凌ぎに、いゝ事件出來と心得て、贖物をさわぐ君達と、女らしく同情を起して、知らぬ顔する宮女達との兩者の間に、方弘の疎忽が帶叙されてゐるのが面白い。

方弘の疎忽話は、下文にも見えて、あらわにの輔尹と、一つがひの頓狂者である。いづれも六位の輕輩だが、假にも藏人として、至尊の御躬ちかく侍ふ者に、こんな人物の續出したのは、初から精選でないことがわかる。二條帝の朝に、九條伊通公が「今は由なき人多く藏人に補し候ひにたり、御用心あるべし」と奏上したが、その弊因は、夙く百五十年も前の、この時代に兆してゐるのではあるまいか。

### 四十七段

わかくてよろしき男の、げす女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとにくけれ。知



りながらも、何とかや、かたもじは覚えていふはをかし。宮仕所の局などによりて、夜などぞ、さおぼめかむはあしかりぬべけれど、うちわたりなどは主殿司、さらぬ所にてはさぶらひ、藏人所にあるものをゐて行きて、よばせよかし。手づからは聲もしるきに。はしたものの、わらべなどは、されどよし。

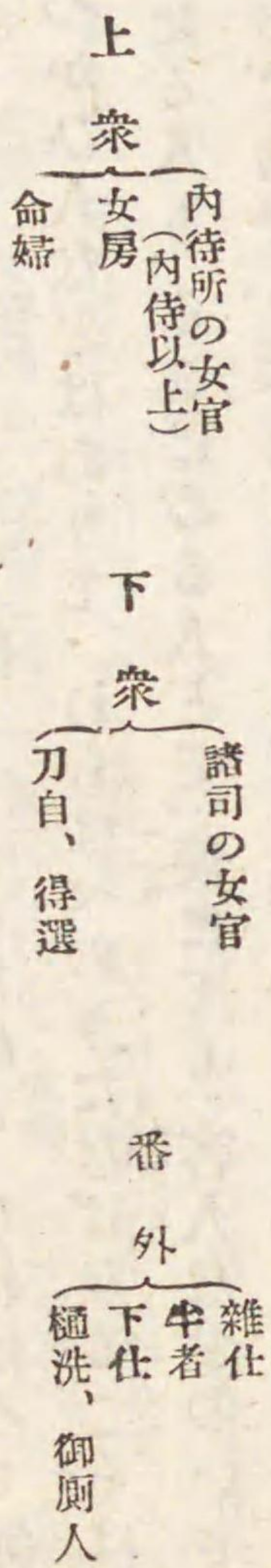
〔考異〕○うちわたりなどは主殿司 原本うちわたりなどはの句なし。古本による。

〔口譯〕若くてかなりな身分の男が、下衆女の名をいひなれて呼んだのは、甚だ憎い。知つてゐながらも、その名の半分は知らない風をして、何とかまあ、ぼんやりいふのは面白い。奉公先の局などに立寄つて、夜分など、さうはつきりしなからうことは、わるからうけれど、禁中なら主殿司、そこでない所では侍や、その家の藏人所にゐる者をつれていつて、その者に呼ばせなさいよ。自分から呼んでは、聲が著く人にわかつて、外聞がわるいからさ。けれど、半者や女童などは、自分で呼んでもよい。

た文字は覚えて」を隔て、「いふは」につづく。○かた文字は覚えて わざと名の片々、即ち半分は忘れたるやうにしてと也。二字名ならば、纔にその一字のみ記憶したるさまを作るをいふ。○宮仕所こは禁中と限らず、ひろく女房の奉公住したる所をいふ。○さおぼめかむは しか曖昧ならんこととは也。「さ」は片文字は覚えざる様をさす。「おぼめく」はボンヤリするをいふ。おぼくし、おぼろ、おぼつかなしなどみな同語。○とのもり司 禁中などには主殿司をの略。○さらぬ所 禁中ならぬ所なり。○さぶらひ藏人所にある者を 侍所及び藏人所にある者をの略。「侍」は家屋雜考に「侍は侍者の居る所にて、今時の詰所といふ程の名なり。これも古代は必ず東西廊の内に設けし也」とあり。親王攝關大臣等の家に置きたるものにて、大臣家にては攝關に昇進したる場合に、侍所を藏人所と改稱したりき。「藏人所」はこゝは禁中のにあらず。春宮坊、親王家、攝關家に置かれたる藏人所なり。○ゐて 率ゐてなり。○てづからは聲もしるきに 自身に呼立てんは、誰れその聲とあらはなるによりてと也。この句「あしかりぬべけれど」の次に廻して心得べし。「てづから」はみづからと同じ。宇治拾遺に「てづから仰せ候ふやう」とあり。「しるきに」は著きによりての略。○はした者 極めたる下衆の樋洗御厨人などより

は、稍優りたる雜仕の女なり。「はした」は半の義にて、どち附かずの半端なるをいふ。○されどよし されど名を呼ぶもよしと也。下衆ながら、名をいひ馴れて呼ぶも苦しからずと也。

〔評〕階級觀念のつよい時代では、下衆女に特別懇意らしく見えるのは、貴紳の體面に關するので、殊に若い男は見えもあることだから、空とぼけて、よくは知らぬ風を作れといふ。「何とかや片文字は」などは、甚だ神經的なこまかい注文である。かう心を偽つても、うはべを美しく飾らうとするのが、當時の上流社會の思潮の一部、否殊によると全部かも知れぬ。とはいへ、一面には、若い身空で、相應の身柄の男が、下衆女の名をあからさまに呼散したり、自身に聲を立て、女部屋を音づれる輩もあつたには、遠ない。でそれが無理想の心なしと感ぜられたのだらう。半者は身分が違ひすぎるので、却つて何等の惡感情も起らないのである。女童は子供だから、これは論はない。試にこゝにいふ上衆下衆を、後宮の婦人に就いて、わけて見よう。



四十八段

わかき人としごは肥えたるよし。受領などおとなだちたる人は、ふときいとよし。あまり瘦せからめきたるは、心いられたらむとおしはからる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。ことものどもは、されどしりにたちてこそ行け、

〔口譯〕若い人と乳呑兒とは肥えたのがよい。受領などいふ上だつた人は、太つたのが、大層よい。あまり瘦せ



先につとまもられいくもの、きたなげなるは心憂し。車のしりに、ことなることなきをのこ共のつれだちたる、いと見ぐるし。ほそらかなるをのこ、隨身など見えぬべきが、黒き袴のすそ濃なる、狩衣は何もうちなればみたる、はしる車のかたなどに、のどやかにてうち添ひたるこそ、わが物とは見えぬ。なほ大かたなりあしくて、人使ふはわるかり。きやれなど時々うちしたれど、なればみて罪なきは、さるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべのきたなげなるこそはあるまじく見ゆれ。家に居たる人も、そこにある人として、使にても、客人などのいきたるにも、をかしき童のあまた見ゆるは、いとをかし。

釋 ○ちごとはとあるべき也。このとの辭、この時代の文には略きていふことなし。必ず誤脱なるべし。○受領など 受領などのと也。○おとなだちたる 大人めきたるにて、人の上に立ちて重々しけなるをいふ。○瘦せからめきたる 「からめき」は枯めきなり。骨と皮とばかりに枯びたるをいふ。○心いられ 心苛られなり。いらくして神經質なるをいふ。○よろづよりは 何よりも同じ。○牛飼童 牛車の牛飼をいふ。これは老若にか、はらず、皆童形なり。(附圖参照)○なりあしくてもたるこそあれ 形あしくて有たるこそわろくあれの略。身形は美しくて使ふがよしと也。○ことものはされど「ことものは異者にて、他の者なり。牛飼以外の車副などの従者をいふ。「されど」は形あしくてもたるををさす。○しりに立ちてこそゆけ 車の後に附きて行くと也。○さきにつとまもられいくもの 車の前に、ジツト注目せられて行く者と也。牛飼をいふ。「者」の下、がの辭を略けり。○ことなる事なきをのこ

て干枯びたやうなのは、心はいらくしてゐるだらうと想像される。それ故にけなない。何よりは牛飼童の身形をわろくして使つてゐるのは、甚だいけない。ほかの召使などはわるい身形でも、車の後に供して行くのだからよい。先に立つて、ちつと眼をつけられて行く者が、きたならしいのは、甚だ感心しない。車の後に格別見だてもない家來共がつれて立つたのは、大層見苦しい。一體なら僂形の、様子がい、侍や、隨身などがありさうなのが、きたない袴の、しかも裾まはりの餘計に汚れて黒いの、狩衣はどことなしに、くたくに着古したのを著て、走る車の傍などに、ゆるく

としてつき添つたのは、自分の召使とは見えない。やはり總じて、身形をわろくして、人を使ふのはいけないのである。しかし着破など、折にはしてゐるけれども、着馴れて、これといふ難もないのは、それでもよい。召使などはある程の家で、小間使の童の身形のきたならしいのは、あるまいことと思はれる。その家に奉公してゐる人も、使つてゐる人も、客人が往つた時でも、その家にゐる者として、美しい童が、大勢見えるのは、大層おもしろい。

「ことなる事なき」は格別勝れたる所のなき也。風采衣裝などの揚りて見えぬをいふ。「をのこ」は召使の男、即ち家來なり。○ほそらかなる 瘦ギスなるをいふ。○見えぬべきが 車の後には見えぬべきが、さはあらでの略。○黒き袴のすそ濃なる すそ濃なる袴の黒きといふに同じ。「黒き」はきたなきに同じ。古びて汚れたるをいふ。「すそ濃」は下の方濃く、上にゆくに隨ひて淡くなる染方をいふ。但こ、は染色にはあらで、袴の裾廻りの塵埃に塗れて、ぼかしになりたるをいへるなるべし。○狩衣は何も「何も」はどごもなり。○うちなればみたる 著馴れて古くなれるをいふ。「たる」の下、がを略けり。○車のかた「かた」は傍なり。○のどやかにうち添ひたる ゆるくと隨ひ行くをいふ。主人の車は走るに、一向急ぎもせずにあるく従者なり。「たる」の下、をのこを略けり。○わがものとは見えぬ わが従者とは見えぬと也。別に往來する人のやうにて、車副の者とは思はれぬをいふ。○著やれなど時々うちしたれど 著破など折々してはをれどと也。○なればみて罪なきは 著馴れて、目に立つ程の疵のなきはと也。「罪なき」は難のなきをいふ。つまり形のあしからぬ也。○さるかたなりや それとしてあるべしよと也。見宥さる、をいふ。「や」は歎辭。○つかひ人などはありて 「使人」は令制式制に見ゆる資人か。式部にて選補し、位職に隨つて諸臣に賜ふ。太政大臣三百人、一位百人、以下遞減して、中納言三十人、五位二十人とす。或は使用人の意にて、家來をいふか。「ありて」はある程の家にての意。○わらはべの 小間使の小童なり。○家にゐたる人も その家に住へる人もと也。その居たる人の心地にも、をかしき童あるはよしといふ也。○そこにある人として その家に居る人としてと也。次なる「をかしき童の」へ續けて見るべし。○使にても 使にて人の來たるにも略。○まらうどのいきたるにも 客人の來たるにもと也。こゝの文章や、紛らはし。即ち「家にゐたる人も、使にても、客人のいきたるにも、其處にある人としてをかしき童の云々」と續くなり。



【評】立はしりする者は、輕捷敏活を尙ぶから、瘦ギスなのが適ふし、さうでない者は、沈著持重なのを尙ぶから、太り肉なのが自然相應する。これは何時の世でも誰でも、同感であらう。されば上流社會の思想を代表した、當時の文學美術には、多く太り肉が歓迎されてゐる。清少の御主人筋は、兼家公から始めて、道隆、伊周、隆家の子息まで、皆肥滿性であつた。瘦法師に心焦られたらんの批評は、體質上からしても、けに尤な觀察である。嘗て太り肉を眠けと評したのと、一對の面白い感じ方である。

美といふ感情一點張のやうに思はれるこの時代に、假にも家來を使ふほどの者が、召使の身形に、氣のつかぬ筈はない。それがさう思ふまゝにもならぬのは、例の經濟問題である。攝關大臣や、その他の權門、又は國司の勢力家、武家の棟梁などは、非常な豪奢をしたものであるが、率分堂に草が生えて、朝廷の用度が御不足勝になつた頃から、單に公給だけに衣食する無勢力な廷臣等は、窮乏が段々はけしくなつて來た。さればその子孫となると、忽ち零落して、家を賣り財貨を賣ることも珍しくない。藤原頼通（道長の子）が關白の時、陽明門内に袋が落ちてゐた。開けて見ると束帶裝束があつたが、それが粗惡極る物であつた。頼通が見兼ねて、長絹廿匹を添へて、落主參議藤原經頼の許におくり届けたことがある。參議のやうな要職にゐる人の裝束ですらかうだとすると、その召使の衣裳のわるさも想ひやられる。如上の事情に通ずると、米のなる木を知らぬ女房連の不遠慮な批評は、酷に失する譯であるが、そんな理窟を離れて見ると、一々肯綮に當つた意見である。

走る車は、例の好みからいへば、網代などであらう。その側にのそくと歩いて、供とも見えぬ供などは、對照上甚だ滑稽である。蓋し嘲罵の妙が見える。

牛飼は前に立つから、形がよくなくてはならぬといひ、又車の後につく従者を、形がわるくて取得もないのはいけないといふ。これではどちらにしても、形がよくなくてはならぬ事になる。これ「大方形

あしくて使ふはわるかり」の斷案の生ずる所以である。初に牛飼童の形ばかりをいつたのは、まづ控目に口を切つたもので、いひ立て、きた果は、いつか大膽になつて、一般に召使の形はよかれと揚言するやうになつた心理狀態の推移が面白い。童の綺麗なのを揃へて置くのは、當時の上流人士の、一つの自慢であつたらしい。何、童ばかりではない。女房さへ、三十人も四十人も抱へて、着飾らせて置いて、その豪奢を誇る具としたものである。

### 四十九段

人の家の前をわたるに、さぶらひめきたるをのこ土にをるものなどして、をのこ兒の十ばかりなるが、髪をかしげなる、引きはへても、さばきてたるも、又、五つ六つばかりなるが、髪をくびのもとにかいく、みて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、しもとだちたる物などさ、げたるも、いとうつくし。車とめて、いだき入れまほしくこそあれ、又、さていくに、薰物の香のいみじくかへたる、いとをかし。よき家の中門あけて、檳榔毛の車のしろうきよげなる、はじ蘇枋の下簾のしりはひいときよげなる、榻にたちたるこそめてたけれ。五位、六位などの、下襲のしりはさみて、さくのいとしろき、かたにうちおきななどして、とかくいさちがふに、又、さうぞくし、壺胡籙負ひたる隨身の出で入る、いとつきくし。くりやめのいと清げ

（口譯）人の家の前を通ると、その家來らしい者が、地面にすわる物、即ち蓆などを敷いて、男の兒の十歳ぐらゐのが、髪を美しげなのを、お下げにしたのも、散して垂れたのも、又、五つ六つぐらゐの兒で、髪を着物の袴首の處にたぐまらせて、顔が大層赤くふつくりとしてゐるの、怪しげな弓や、棒めいた物など、手に



持つて遊んでゐるのも、大層可愛らしい。乗つてゐる車をとめて、車中に抱き入りたい氣がする。そして又ゆくと、或家のあたりで、薰物の香が、ひどく匂つたのが、甚だ面白い。立派な家の中門を開けて、檳榔毛の車の新しく綺麗なのが、そして櫛蘇枋色の下簾のぼかし、大層綺麗なのが、榻に立つてゐるのは、極めてよい。お供の五位や六位などが、下襲の尻(裾)を、石帯にはさんで、笏の新しいのを、肩にさしなどして、あちこち行ちがふのに、又、正装をして、壺胡籙を負つた隨身が出入するのは、甚だ似合はしい。奥から、厨女の、なかく綺麗なのが、出て来て、某

なるがさし出でて、「なにがし殿の人やさぶらふ」などいひたるをかし。  
(考異) さしげたるも、原本も文字なし。今假に補ふ。○さく、原本さしとあり。一本による。  
○前を渡るに、門前を通るにと也。○さぶらひめきたる、侍らしきといふに同じ。○侍、親王、攝家、大臣以下の家人をいふ。職原抄後附に「凡稱侍者、親王大臣以下、諸家恪勤者之名也。」又、祇候の士をいふ。○つちにをるものなどして、土に居る物など取まかなひてと也。即ち庭など地上に敷けるをいふ。通釋に引ける岡本保孝の説に「地上に其子を居らせて遊ばせんとて、其用意に敷物など取賄ふ也」とあり。○髪をかしげなる、の下、をを略けり。○引きはへ、長く垂れたるをいふ。「はへ」は延への義。○さばきてたるも、散きて垂るもと也。垂髪は襟のあたりにて一所、元結にて結ぶが常なるを、これを結ばで散したるをいふ。○くびのもとにかいく、みて、「くび」は著物の領首なり。「かいく、み」は搔含みなり。髪の短きが、領首のあたりに疊なはるをいふ。髻髪のすこし長き程なるべし。○つらいと赤うふくらかなる、面が大分赤く脹らみたる也。多血的に肥えたるさまなり。「なる」の下、がを略けり。○あやしき弓、手遊に拵へたる弓をいふ。雀小弓の類なるべし。○しもとだちたる物、棒めきたる物なり。「しも」とは楚にて、藁枝のこと也。○さしげたるも、こ、にも文字なき時は、上の「たるも」のも對ふる所なし。○うつくし、いつくしの義に近し。愛らしきにいふ。○車とめて、前に「人の家の前を渡る」とあり。○さていくに、車にてなほ大路をゆくにと也。○いみじくか、へたる、これは又別の家にて、薰物を炷きたりと見えて、門前まで甚しく匂ひたると也。か、へたるを見よ。○中門、チウモン。表門の次にある中の門なり。郎の間を切通して門としたり。こ、を入れば殿前の庭なり。(附圖参照) ○あけて、中門を開くるは、よき客の



弓 小

車ながら出入せん設なり。○しろうきよけなる、新しくして綺麗なるをいふ。「なる」の下、がを略けり。○はじすはう、櫛蘇枋か。蘇枋に黄櫨をさしたる染色ならん。「櫨」はハゼともいふ。この樹皮を黄色の染料とす。○匂、この「匂」は染色上の名稱にて、ばかしたるをいふ。即ち下簾を櫛蘇枋の裾濃に染めたる也。○榻にたてたる、轆を榻に立てたると也。車の轆を牛より外して、榻に置くを立つ、といふ。○榻シヂ。車の轆を置く臺なり。四足にして經机の如く造る。(附圖参照) ○五位六位など、この家に使はる、五位六位達なり。(附圖参照) ○下襲のしりはさみて、裾を石帯に挿みてと也。「しり」は裾なり。裾は非常に長ければ、正式に練る時の外は、進退の便利の爲に折縮ねて、石帯に打懸け結びなどする也。うしろを見よ。○さく、のいとしろき、笏の新しきをと也。勿論木笏なるべし。「さく」は笏を直音に呼べるなり。笏を見よ。○かたにうち置き、肩に打置きなり。肩に笏を挿みたるをいふ。手を明るる爲なり。豊穎は、上に「車のかたに」とあるによりて、この「かた」も傍の意なりとして、腰に挿みたる笏の白く見ゆる傍に、裾を石帯に懸けて打置くと説けり。眞頼も同説なり。さもとと思はれぬにはあらねど、や、迂遠なり。○さうぞくし、正式の装束、即ち束帯したる也。但こ、は隨身の正装なり。(附圖参照) ○壺胡籙、ツボヤナグと。矢を盛つて背に負ふ器にて、細長く筒になりたるをいふ。これに對して、丈け低く扇開きになりたるを平胡籙といふ。「やなぐひ」は矢之杭の義。○くりやめ、厨女なり。水仕ならん。空穂物語にも「雑色、厨女」と見えたり。○何がし殿の人やさぶらふ、某殿の御供の人がお出なさるか也。客人の従者達に向つて呼立つるさま也。  
これは車ながら通りすがりに、人の門内を見込んだので、第一は小兒、第二は薰香、第三は權貴の家

車のお供の方はお出でてすか、などいつたのは面白い。



挿 尻

四十九段  
二九五



に、尊大の客人あるさまを叙べた。清少が非常に小供好きなことは、處々に散見してゐる。元來婦人が子供を好くのは、その先天的本能ではあるが、清少などの場合は、特に何等かの後天的事情が伏在してゐるのであるまいか。新拾遺集に、清少納言の女の歌がある。或は女の子の一人位はあつたらうが、この十年來は、大抵孤獨な女房生活を續けて居たから、その家庭味に渴いてゐたことはたしかである。徳川時代の奥女中や、今も石女や藝娼妓輩が、子供といへば目を無くして大騒すると、同様の人情であらう。いくら才女でも、女はやはり女である。世に人情をはずれた新しい女など、あらう筈がない。

侍などが冊いてゐる髪の美しい兒、更にをさない五つ六つの愛くるしい兒に對して、「車といめて抱き入れまほし」は、情の高潮を高唱した句である。ところでこの兒が皆男の兒である。門際の端近いらまで出て遊ぶことは、上流社會のお姫様にはないことであらうが、又清少の氣質としても、優柔な女の氣よりは、快活な男の兒の方を好いたことは、猫よりも、犬を愛したと同じであらう。

薰香の往來まで薰つてくるのは、奥床しい頂上であらう。無論よき家の様である。その頃車中に香を炷いて行くに、一條の大路が薰り渡つたと騒立てた話もあるから、これは決して誇張ではない。

概して氣の利いた筆づかひで、中門、檳榔毛の車、よき下簾、榻、供の五位六位、隨身の出入、すべて富貴相を、よく描寫してある。厨女の「何某殿の人や」と呼ぶに至つて、全文活氣を帯びてくる。

因にいふ、清少がこの才筆をもつて、下層社會の生活状態を描寫して置いて貰つたら、どんなにか社會史風俗史上に、大きな貢獻があつたらうと思ふが、當時の上流人の眼中には、全く下層社會は映じなかつたので、否見聞に觸れても、これを口にするには、紳士淑女の作法でないと感じて、遠慮したのも、やうである。下衆の家には、月のさすをさへ、勿體ながつてゐる。

五十段

瀧は おとなしの瀧。ふるの瀧は、法皇の御覽じにおはしけむこそめてたけれ。那智の瀧は、熊野にあるが、あはれなるなり。轟の瀧は、いかにかしがましくおそろしからむ。

(口釋) 瀧は音無の瀧が面白。布留の瀧は、法皇が御覽にお出で遊ばされたことがめでたい。那智の瀧、これは觀音の靈場たる熊野にあるのが、感心なのである。轟の瀧は、どんなにか、やがましく恐ろしからう。

○おとなしの瀧 類聚名所に紀伊牟婁郡とあり。拾遺集に「戀わびぬねをだに聞かむ聲たてていづこなるらん音無の瀧」。「瀧」の下、をかしを略けり。○ふるの瀧 大和山邊郡布留川の上流。○法皇の御覽じに 法皇は宇多法皇か、花山法皇か。いづれにしても、布留の瀧見に御幸ありし事、史に所見なし。古今集秋上に「仁和の御門皇子におはしましたしける時、布留の瀧御覽せむとおはしましたしける道に、云々」とあり。こは光孝天皇いまだ親王なりし時、布留の瀧に來給ひし也。又扶桑略記に、宇多法皇吉野の宮瀧を御覽せんとて、石上より素性法師を召して伴ひ行かせられしこと見ゆ。清少この二つの事實を混同して、布留の瀧を法皇の御覽ありしやうに思へるならん。旁註に、後嵯峨帝の御製を引證したるは妄なり。○那智の瀧 紀伊東牟婁郡。夫木集に、花山院「岩はしる瀧にまがひて那智の山高根をみれば花の白雲」。○といろきの瀧 陸前宮城郡今市。

例の歌枕の評判、音無、轟はその名が面白いのである。布留の瀧の事實相違、清少ほどの敏慧な者にも、記憶に誤のある所が、却つて面白い。那智の瀧は、その所在地の那智山補陀落寺が、觀音巡拜の札所として、當時花山法皇の巡拜せられたほどの靈地なので、それで「あはれなり」の推稱を受けたに過ぎない。實際はこの大瀧の壯觀を、清少に見せなかつたことは遺憾である。但あまり雄偉豪壯なもの



は、自然恐怖の念の伴ふことが免れないから、清少奈藤原氏時代の人の眼には、さのみよくも感じなかつたかも知れないと思ふ。

五十一段

川は 飛鳥川、淵瀬さだめなく、はかなからむと、いとあはれなり。大堰川。泉川。水無瀬川。耳敏川、又なに事を、さしもさかしく聞きけむとをかし。音無川、思はずなる名とをかしきなり。細谷川。玉星川。貫川、澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりその川。名取川も、いかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このしたにもあるなり。「たなばたつめに宿からむ」と、業平が詠みけむも、ましてをかし。

○飛鳥川 大和高市郡。源を稻淵山に發し、飛鳥村を北流して大川に入る。○淵瀬定めなく 古今集、雜に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」と見えて、山川なれば、雨などふれば一夜の中にも、淵瀬のさま變る由なり。○はかなからむと 「はかなし」は雅語譯解に、物事たしかならずして定なき心なりとあり。「と」の下、思はれてを略けり。○大堰川 山城嵐山の麓を流る。そこに大なる堰球を切りたれば、この稱あり。當時京紳等の、盛んに川道遙(船遊)せし處なり。○いづみ川 山城相樂郡。木津川の上流をいふ。瓶原、鹿背山の名所あり。鹿背山を見よ。○みなせ川 攝津島上郡。古今集「言に出ていはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しきものを」。○み、と川 平安の京中を流る

(口譯) 川は 飛鳥川、これは淵瀬のきまりなく變り易くて、はかなることだらうとあはれてある。大堰川、泉川、水無瀬川が面白い。耳敏川、これは又、何事をそんなにすばやく聞いたのだらう、と思はれて面白い。音無川、これは川の流に音が無いとは、意外な名と思はれて面白いのである。細谷川、玉星川が面白い。貫川、澤田川、この名を聞く、催馬樂などの面白い聯想がされるだらう。なのりその川が面白い。名取川も、

どんな名を取つたのかしらと聞きたい。吉野川が面白い。天の川、これは天ばかりかと思つたら、この下界にもあるのである。そこで、「棚機つめに宿からむ」と、在原業平が詠んだのも、まして面白い。

る小川なり。拾芥抄に「朱雀門前、二條南」とあり。六帖に、貫之「百敷の大宮ちかき耳敏川ながれて君を聞渡るかな」。○さしもさかしく 「さしも」は川の名の耳敏とあるをさす。「耳敏」は耳の疾きをいふ。「さかし」は賢しなり。○音なし川 紀伊牟婁郡。音無の瀧の流なり。六帖に「君こふと人しらねばやきの國の音無川の音だにもせぬ」。○思はずなる名と 川ならば流の音あるべきを、音無とは、思ひ寄らぬ名なりと思はれて也。○細谷川 萬葉七に「大王の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ」古今集に「眞金ふく吉備の中山(以下萬葉と同じ)」とあり。これを併せ考ふるに、「細谷川」は普通名詞となるべし。この草子の筆癖として、固有名詞の中に普通名詞を混入すること珍しからねば、普通名詞として、細き谷川と解すべきが如し。但備中の吉備の中山の細谷川の、固有名詞となりたることも古きことなれど、清少時代には、いづれなりしかは不明なり。○玉星川 陸奥。夫木集に「みちのくの玉星川のためさかに流れあふ瀬やあるとこそまで」。○ぬき川 伊豆貫川の略。梁塵愚案抄に美濃國とあり。催馬樂 貫川の瀬々のやはら手枕、やはらかにぬる夜はなくて親さくる妻」。○澤田川 山城相樂郡。瓶原あたりにての泉川の一稱なるべし。催馬樂に「澤田川袖つくばかり浅けれど恭仁の宮人高橋わたす」。○催馬樂 サイバラ。往古の里閭の風俗歌にして、唐樂の音調によりて歌ふ。正式には發聲者一人。笏拍子を掌り、助音十數人に及ぶも妨なし。笙、箏、篳篥、笛は一人一管と定む。舞なし。名義は(一)諸國より貢物を納むる庶民の口すさびに歌ひたる歌なればいふ、(二)神樂に前張あり。その拍子に歌ふ故に、これをもいふ、(三)この歌章中「いで吾駒早くゆきこそ」とあり、馬を催す詞なるを以て名づく、(四)唐樂の催馬樂より出でしならん等の諸説あり。○思ひはするなるべし 貫川、澤田川の名を聞けば、忽ち催馬樂などの聯想は出てくるなるべしと也。○なのりその川 勿告その義にて、いふ勿と聞ゆるがをかしき也。所未詳。○名取川 陸前名取郡。古今集に「みちのくにありといふなる名取川うき名取りては苦しかりけ



り。こゝに「名取川も」といへるは、上の「なのりその川」の、何か戀に關係あるやうに聞ゆる名義なるに對へて、これも戀に關係して、如何なる名を立てられたるならんといへる也。○名を取りたるにか善惡に關はず高名になる名を取るといふ。こゝは戀の爲の憂き名なるべし。「にか」の下、あらんを略けり。○吉野川 大和吉野郡。古來有名の勝地。○あまの川 河内北河内郡。交野を経て淀川に入る。○この下にも 天上の銀河に對して、この下界にもありと也。○柵機つめに宿からむ 古今集、羈旅に「惟喬の親王の許に、狩にまかりける時、天の川といふ所の川の邊におりて、酒などのみけるついでに、親王のいひけらく、狩して天の川原に到るといふ心を詠みて、盃はさせといひければよめる。在原業平、狩くらし柵機つめに宿からむ、天の川原に我は來にけり」と見えたり。歌の意は、狩に行暮して、思の外に天の川の邊に我は來れり、天の川ならば、必ず柵機の居る管ゆる、今宵は柵機に宿借りて明さんと也。「柵機津女」はこゝにては織女星の譯語にて、牽牛星と、天の川を隔て居りて、七月七日の夜のみ相逢ふといふ支那の傳説あり。七月七日を見よ。○業平 平城帝の皇孫。阿保親王の五男。兄行平と共に在原氏を賜はる。貞觀中右馬頭右近衛權中將に遷り、元慶中、相模美濃の權守を歴、四年卒す。年五十六。美男にして古今の才人なり。その歌は人麻呂と衡を争ふ。○ましてをかし たゞにてもをかしけれど、業平の名歌によりて、ましてをかしと也。○「水無瀬川」「玉星川」「吉野川」の下、各をかしを略けり。

飛鳥川の淵瀨は陳套ではあるが、さりとて飛鳥、藤原朝以來の名所だから、川盡しにはさし置かれまい。大堰、泉、吉野は勝地、又は故蹟であり、貫川、澤田川は古語により、餘は皆名義によつて、面白味を感じたのである。例の固有名詞の排列中に、挿評を試みた長短參差の文體は、清少一流の文字である。

五十二段

橋は あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵠の橋。ゆきあひの橋。小野の浮橋。山菅の橋。名を聞きたるをかし。うた、ねの橋。

(口譯)  
橋は あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の舟橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵠の橋。ゆきあひの橋。小野のうき橋。いづれも面白い。山菅の橋、これは名を聞いたのが面白い。うた、ねの橋が面白い。

○あさむつの橋 越前足羽郡。淺水の轉。催馬樂に「あさむつのとゝる」とふりし雨のふりにし我を、誰れぞこの中人たて、云々。○長柄の橋 攝津西成郡。この橋は文德帝の朝に既に斷絶して、渡船を以て往來せしが、古今集に「津の國の長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへん」と見えたれば、また新造したるものなるべし。○あまびこの橋 抄に飛驒とあり。天彦の名のをかしきならん。「天彦」は牙即ち山彦をいふ。○濱名の橋 遠江濱名郡。重之集に「水の上の濱名の橋はやけにけり打消つ波もより來ざりけん」。○ひとつ橋 一本橋なり。和名抄に獨梁を訓めり。固有名詞にはあらざるべし。六帖に「津の國のなにはの浦の二つ橋君をし思へばあからめもせず」。○佐野の舟橋 この佐野は上野群馬郡の佐野なり。「舟橋」は舟を横に河中に並べて、その上に板を打渡して橋としたるもの。萬葉十四に「上つけぬ佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかれば」。○うたじめの橋 大和奈良、東大寺の境内にあり。○とゞろきの橋 奈良の東大寺の西にあり。但堀川百首に、兼昌「我妹にあふみなりせばさりとわがふみも見てまし轟の橋」とあるに據れば近江ならん。廻國雜記には陸奥と見ゆ。○をがはの橋 新撰名所集に陸奥とあり。拾遺集に、業平「筑紫よりこゝまでくれどつともなしたちの小川の橋のみぞある」。○かけ橋 棧を訓めり。懸造の橋をいふ。固有名詞にあらず。「木曾路の橋」の所に引ける



拾遺の歌を見よ。○瀬田の橋 近江琵琶湖の南口、勢多川に架せる橋。古來名勝の地なり。○木曾路の橋 信濃木曾道中にある橋をいふ。拾遺集に、頼光「中々にいひも放たで信濃なる木曾路の橋のかけたるやなそ」。○堀江の橋 攝津の難波堀江の橋。○鵲の橋 淮南子に「烏鵲填河成橋、度織女」とあるによりて、天の川に鵲の橋をいへり、天上の橋なるより、禁中の事に思ひ寄せて、禁中の橋をいふことあり。大和物語に、忠空「鵲の渡せる橋の霜のうへを夜はにふみわけ殊更にこそ」。○のきあひの橋 鵲の行合の橋とありしを、かく二つに誤れるか。牽牛織女二星の行あふ意ならん。七月七日を見よ。六帖に「中空に君もなりけむ鵲のゆきあひの橋にあからめなせそ」。○をの、浮橋 未詳。「橋」の下、などをかしを略けり。○山すけの橋 下野の今の日光の神橋なり。古く山菅の蛇橋ともいへり。○名をきくにをかし この句の上に、一本には「一筋渡したる棚橋心狭けれど」とあり。「名を聞くにをかし」といふには、山菅の橋よりは適切なり。「棚橋」は高く懸け渡したる板橋なり。○うた、ねの橋 八雲御抄に大和とあり。或はいふ、うたじめの橋の誤寫なりしを、後人のまた別なる橋と思ひて書加へしものならんと。されど夫木集に「うた、ねのはしたなきまでぬる、袖かな」といふがあれば、従ふべからず。「橋」の下、をかしを略けり。

評 上と同じ文體ながら、殆ど固有名詞ばかりを列擧した間に、「名を聞きたるをかし」の短評を挿んだので、文に變化が生じた。

五十三段

里は 逢坂の里。ながめの里。いさめの里。人づまの里。たのめの里。あさ風の里。夕日の里。とほちの里。伏見の里。ながるの里。つまとりの里。人にとられたるにやあらむわが取りたるにやあらむいづれもをかし。

(口釋) 里は、逢坂の里。ながめの里。いさめの里。

らむわが取りたるにやあらむいづれもをかし。

釋 ○逢坂の里 近江逢坂の關附近。○ながめの里 未詳。「ながめ」は物思して打守る意なれば、名のをかしき也。○いさめの里 抄に伊勢、未來見の里なるべしといへり。六帖に「東路のいさめの里は初抄の長夜をひとりあかすわが名ぞ」。○人づまの里 未詳。「人づま」は他の妻なり。名のをかしき也。○たのめの里 信濃。夫木集に「信濃なるいな郡と思ふには誰れかたのめの里といふらん」。○朝風の里 八雲御抄に大和とあり。○夕日の里 抄に「丹後に夕日の浦ありこ、か」。○とほちの里 大和山邊郡十市。拾遺集に、伊尹「暮ればとくゆきて語らむ逢ふことの遠ちの里は住みうかりしも」。八雲御抄に、只遠きことなりといへるは、精しからず。○伏見の里 菅原や伏見と續くは大和添下郡、吳竹の伏見と續くは山城紀伊郡なり。いづれか。古今集に「いざこ、にわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくもをし」。○ながるの里 八雲御抄に「大和。攝津にもあるか」。夫木集に、聖覺「なきすてて急ぎなすぎを時鳥長居の里の名をぞ頼まむ」。里の「下、などをかしを略けり。○妻取の里 陸前。抄に「奥州古川といふあたり侍り」。○人にとられたる 人にながを妻を取られたるの略。○わが取りたる わが人の妻を取りたるの略。

評 橋と全く同じ様式の文である。妻を取り取られるは、この時代には多かつた事實で、一々擧げるまでもない。今日姦通を法律上では罪人とし、道徳上では背徳者として非難するほど、その當時では、悪事と感じては居なかつた。それは取られた方では、腹が立つには違ひないが、擲るの殺すのと騒ぐのは下等社會の事で、上流紳士は尙そしらぬ風を粧うてゐたものである。その代りまた、人を取りもするものである。だから、こんな問題に對しては、「いづれもをかし」と、只興味を以て評してゐる。

里。人妻の里。たのめの里。朝風の里。夕日の里。とほちの里。伏見の里。長居の里。いづれも面白い。妻取の里、これは人に自分の妻を取られたのかしらん、それともまた、自分が人の妻を取つたのかしらん、どちらにしても面白い。



五十四段

草は さうぶ。こも。葵いとをかし。祭のをり、神代よりして、さるかざしとなりけむ。いみじうめてたし。物のさまも、いとをかし。おもだかも、名のをかしきなり、心あがりしけむと思ふに。みくり。ひるむしろ。苔。こだに。雪間のあを草。かたばみ、あやのもんにても、こと物よりはをかし。あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる處、いとはかなくあはれなり。岸の額よりも、これはくづれやすげなり。まことの石灰などには、えおひずやあらむと思ふぞわろき。ことなし草は、思ふ事なきにやあらむと思ふもをかし。またあしき事をうしなふにやと、いづれもをかし。しのぶ草、いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。よもぎ、いとをかし。茅花、いとをかし。はまぢの葉は、ましてをかし。まるこすげ。うきぐさ。あさぢ。青つぐら。木賊といふ物は、風に吹かれたらむ音こそ、いかならむと思ひやられてをかしけれ。薺。ならしば、いとをかし。はすのうき葉のらうたげにて、のどかに澄める池のおもてに、大きなるとちひさきと、ひろごりたゞよひてありく、いとをかし。取りあげて、物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重むぐら。山

(口釋) 草は 菖蒲、菖が面白。葵が大層面白。賀茂祭の折、神代からして、そんな風に、挿頭の物となつたであらうと思ふと、非常にめでたい。その物の様子も、大層面白い。澤瀉は名が面白いのである。大づらに高ぶつて居るだらうと思ふので、みくり、ひるむしろ、苔、こだに、雪間の青草が面白い。かたばみ、これは綾織の紋柄でも、外の物よりは面白い。あやふ草は、岸の額に生えるのも、ほんに頼りなきさうで、哀である。いつまで草は、生える處が壁であるから、甚だはかなげに哀である。岸

すげ。やまゐ。ひかげ。はまゆふ。葦。葛の風に吹きかへされて、裏のいとしろく見ゆるをかし。

釋 ○さうぶ 菖蒲。五月の節句に用ゐる菖蒲なり。花菖蒲は徳川時代に至りて出来たる物也。○こも 蔦。所謂眞菰にて、蓆などに織る。「こも」の下、をかしを略けり。○葵 二葉の葵なり。枯れたる葵を見よ。○神代よりしてさるかざしと 年中行事秘抄、月令、袖中抄等を参酌するに、「賀茂別雷神、我は天神の子なりと宣ひて、天に昇りたるを、家人慕ひ悲みける夜の夢に、別雷神宣ひけるは、天の羽衣を作り、火を焼き棒を捧げて、走馬を飾り、奥山の賢木を取り、阿禮に立て、種々の彩色を垂てよ、又葵楓の蔓を、殿に飾りて待たば、吾來るべしと。即ちその教のまゝに祭をなすに、小野郷御蔭山に天降り給ふ」とあり。これ神代よりして、葵藿の、祭の髪挿に用ゐる、由來なり。「さる」は祭の折をさす。「かざし」とは冠の巾子などに飾り付けるをいふ。○物のさま 葵の有様にて、その二葉におひ立つをいふなるべし。○おもだか 澤瀉。花慈姑なり。葉は慈姑より瘦せて小し。○心あがりしけむと思ふに 「心あがり」は高ぶること、即ち傲慢なる也。澤瀉は面高に聞え、面高は、俗の大キナ顔ヲ、スルに當る故に、傲慢に構へたるならんと思はれて、名がをかしと也。「名のをかしきなり」の句を、「思ふに」の下に置換へて心得べし。○ひるむしろ 和名抄、延喜式に蛇床子を訓めり。滑人參、滑芹、藪面等の名あり。海邊沙地に生ず。田芹に似て香あり。秋莖の先に細白花叢生す。その實赤く黄ばみて、風の大きの如し。○こだに 木蛸にて、葛の一種なり。源氏物語にも見えたり。鈴木新いふ、今豆葛といふ物にて、木岩などに附きたる様蛸に似たれば、木蛸ともいふなるべしと。秋紅葉す。○雪間の青草 の下、などをかしを略けり。○かたばみ 和名抄に酢漿を訓めり。すいもの草、酢草の名あり。地に延へ生ずる小草。その葉

の額よりも、これはくづれ易さうである。眞の石灰の壁などには、よう生えないだらうかと思ふと感心しない。ことなし草は、名が無事なのだから、心配事がないだらうかと思ふのも面白い。それともまた、悪い事を護つて無にするかしらと思はれて、どちらにしても面白い。忍草が、甚だあはれである。屋のはづれや、さし出た物の端などに、無理やりを生えてあるさまが、甚だ面白い。蓬が甚だ面白い。茅花が甚だ面白い。濱茅の葉はこもとに面白い。まる小菅、浮草、淺茅、青つぐらが面白い。木賊といふ物は、風に吹かれた音は、どんなだらうと想像されて、面白い。薺が面



白い。ならしげが、甚だ面白。蓮の浮葉が、かはゆらしげな機で、しづかに澄んでゐる池の水面に、大きなのと、小さなのとが、廣がつて漂つてうごくのが、甚だ面白い。その葉を取上げて、何か押付けなどして見るのも、すぐれてひどく面白い。八重葎、山菅、山藍、ひかげ、濱木綿、葎が面白。葛の葉が風に吹返されて、裏の大層しく見えるのも面白い。

三瓣にして、瓣毎に一缺あり。この形を紋様とす。○あやのもん 綾地の文なり。「文」は紋様をいふ。○こと物よりはをかし 異物即ち他の紋様よりは面白しと也。紋様に躑躅、龍膽、菊、丁子など種々あり。○あやふ草 危草。如何なる物か知難し。或は危き處に生ひたる草を、すべて云ふならんか。和訓栞に「根無草の類なるべし」。○岸のひたひ 岸のさし出たる處なり。物の差出たる處を、すべて額といふ。○たのもしげなく さる崩れ易き岸の額に生ひたるは危けにて、頼もしき所もなしと也。和漢朗詠集に見えたる「觀身岸額離根草」とある、羅維の句を思ひて書けるが如し。○いつまで草 壁生草なり。八雲御抄にも「いつまで草は壁に生ふる」と見ゆ。萬年草とも、佛甲草(ホトケノツメ)ともいふ。陰濕の處に生ずる小草。○生ふる所いとはかなく 壁に生ふれば也。壁は岸の額よりも壞れ易くて、實にたよりなき也。○まことの石灰などには まことの石灰の壁などにはと也。「石灰の壁」は、即ち漆喰塗の白壁なり。屋垣、屏など漆喰塗にする也。○え生ひずやあらむと思ふぞわろき 「え生ひずやあらむ」は石灰の氣ありては、草など生えざる故なり。「と思ふぞわろき」はト思フ、トヨク、ナイの意なり。「思ふ」はわが思ふにて、「わろき」はその草の缺點なるをいふ。「思ふ」を他の人の思ふ意に解したる諸註は、かゝる辭様あることを知らざる故なり。○事なし草 何の變事もなしといふ名の草なり。河海抄には忍草の一名と見ゆ。又物忌の時には、事なしの義によりて、忍草を冠帽などに附くることあり。されど本文、事なし草と忍草とを別に出したれば、この時代の事なし草は、必ず異物なるべし。○思ふことなきに 無事なれば、何の氣苦勞もなき故なり。○あしき事を失ふにやと 凶事を無くすの意の名ならんかとも思はれて也。「こや」の下、あらんを、「と」の下、思はれてを略けり。○しのぶ草 和名抄に垣衣を訓めり。今八目蘭といふ物なり。古き軒端や老木の幹などに生ず。忍ぶといふ名よりして、殊に哀に聞ゆる也。○屋のつま 屋端なり。「つま」は行詰りたる所をいふ。○あながちに生ひいでたる 聊なる所に、無理に生え

たりと也。「あながち」は強ひての意。○蓬 端午の節供にもてはやすは勿論、餅にも和し、庭に植ゑてめでたる人もありき。○つばな 茅花。茅の花にて、春の頃綿の如き穂を出す。これを食ふ時は肥ゆる由、萬葉集に見ゆ。○はまち 濱茅。濱菅のことならん。葉は菅に似て小く、多く海邊の沙上に叢生す。○まろこすけ 丸小菅。菅の一種にて、その葉丸きものなるべし。眞頼説に太蘭といへるはいかゞ。菅と蘭とは形狀全く異れり。又春註に、荆三稜をあてたるも非なり。拾遺集に「夏草のしげみに生ふるまろこすけまろがまろねよ幾夜へぬらん」。○うき草 水上に浮べる草。おもに蘋萍をいふ。○あさぢ 淺茅。まばらに生へたる茅草なり。秋に至りてその葉色づく。○青つゝら 青鞭草。またあを葛。葛藤のことなり。山野の蔓草にて、その蔓にて籠などを編む。拾遺集に「野を見れば春めきにけり青つゝら籠にやくままし若菜つむべく」。この句の下、などをかしの略けり。○木賊といふ物は「木賊」は物など磨くに、常に用ゐたりしものならんも、その自生の態を見たることなかりし故に「といふ物は」と、餘所くしくいへる也。○なづな 薺。春の七種の一種にて、その花の實になりたる形より、三味線草、ペンく草ともいふ。この下、をかしの略けり。○ならしげ 平芝か。さらば芝生なるべし。歌の題をいへる所にも、芝ををかしき物に擧げたり。檜柴にても字は當れど、柴は木なれば、此處には入るべからず。○のどかに澄める 落著きて澄めると也。○大きなると小きと 大きな葉と小き葉とと也。○物おしつけ物におし當てと也。○八重むぐら 葎の繁りたるをいふ。「葎」は山野に自生する蔓草なり。○山菅 和名抄に麥門冬を訓めり。尉の鬚とも龍の鬚ともいふ。○やまる 山藍の略。山中に自生する一種の藍草なり。葉を採りて搗きて、その汁にて布帛を染め、模様など摺る。大嘗會、新嘗祭の齋衣をこれにて摺ることは、古き慣例なり。○ひかげ 日蔭葛の略。和名抄に蘿、日本紀に女蘿を訓めり、狐の手櫛ともいふ。高山の濕地に生ずる淺綠色の地に這ふ蔓草。○はまゆふ 濱木綿、濱萬年青といふ。高さ三四



尺ばかりにて、葉は萬年青の如く、幾重にも巻重ねたるが如し。萬葉四に「三藪野の浦の濱木綿百重なす心は思へどたゞに逢はぬかも」。○あし 蘆。この下、などをかしを略けり。○葛 秋の七草の一にて、山野に自生する蔓草。秋の初、長さ三五寸の穂を垂れて花咲く。豆の花に似て赤紫なり。その葉大にして、風を受けて翻り易し。萬葉十二に「水莖の岡のくす葉を吹返しおもしろ子等が見えぬ頃かも」。○裏の 葉の裏のと也。

評 女蘿、木賊、山藍は、裝飾、工作、染色用として、乾枯びたのばかり見たのであらうし、蛇床子、木訥、三稜草、馬鞭草、丸小菅、山菅、濱木綿などの僻草は、大抵古歌の連想によつたものらしい。但菅は、神祭に菅麻など用ゐるから、或は實見したかも知れない。澤瀉、あやふ草、壁生草、ことなし草は、その名義の面白きに取り、餘は實物に就いての感興によつた。菖蒲、葵は、上文にも既に屢見えて、そのめでたいことは無論のこと、茅花、淺茅、濱茅と同種の物を列ねたのは、下文、歌の題はの段にも淺茅とあつて、清少の嗜好のほどが伺はれる。雪間の青草は、上文に「雪間の若菜青やかに描出でつ、」とも見えて、一般に摘草の慣習のあつた當時には、實見の機會が多かつたらう。

垣衣に「あながちに」の一語を點じたのは妙であり、蓮の浮葉は、寫生が面白いうへ「漂ひありく」の活喻が、いよゝ奇である。取上げて物押付けて見るのは、まさに兒女子の態を現したものである。

古今和歌六帖（村上帝時代の著）の草の部を検すると、あやふ、いつまで、おもだか、蛇床子、薺を除く外は、悉く記載されてある。清少が六帖に枕藉して居つたことは、事實であらう。

蓮の條、一本及び萬歳抄などに、

「蓮はよろづの草よりも世にすぐれ、めでたし。妙法蓮華の喻にも、花は佛に獻り實は珠數につらぬき。念佛して發生極樂の縁とすればよ。又花なき頃縁なる池の水に、紅に咲きたるも、いとをかし。されば翠扇紅と詩

も作りたるにこそ。

とあるのは従ひにくい。蓮は六帖及び古今集等に見るに、専ら葉を詠んで、花を詠まぬ。況や標題にも草はとあるではないか。思ふに草の花はの段にあるべきが、こゝに混入したものだらう。

### 五十五段

#### 集は 古萬葉集 古今 後撰

(口譯) 歌集は古萬葉、古今集、後撰集が面白い。

○集は 當時「集」といへば、歌集をさしたる也。詩集あれ共、これは一般的のものならざればなり。

○古萬葉集 コマンエフシフ。萬葉集のこと。當時別に新撰萬葉(菅家萬葉)あり。又古今集を、はじめ續萬葉集といひたりき。かたゞ、在來の萬葉集に、古の字を冠して呼べるなり。袋草紙に「此集、末代之人稱古萬葉集」。雄略帝の朝より淳仁朝に至る、凡三百年間の長短歌を集めたるものにて、二十卷あり。飛鳥、藤原、奈良時代の歌を中心とせり。撰者は學說今なほ一定せず。本邦歌集中、第一等の價值あるもの也。○古今 コケン。古今の草子を見よ。○後撰 後撰和歌集は、村上帝の天曆五年、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等、勅を奉じて撰む。古今集以後の五十年間の歌を集む。この撰者達は、所謂梨壺の五人と稱せられたる歌仙なり。袋草紙に「古今、後撰、拾遺、云々三代集、以往加萬葉集、號三代集、而拾遺出來之後、棄萬葉集、用拾遺、云々」。この下、などを略けり。

評 歌集は紀氏新撰和歌、古今六帖を始として、家々の打聞等もまた多かつたらうが、勅撰、準勅撰の歌集は、この三集の外にはなかつた。随つて清少も、その敏慧な觀察と犀利な批評とを挿む餘地がなかつたと見える。



五十六段

歌の題は 都葛。みくり。駒。靱篋。つぼすみれ。ひかげ。こも。たかせ。鴛鴦。淺茅。しば。あをつら。梨。棗。朝顔。

○つぼすみれ 菫草の一種。「つぼ」といふは、その葉の丸くつぼめる故の名なり。花の形によるにはあらず。花の形は工匠の持つ墨斗に似たるより名づく。墨入の義なり。○たかせ 和名抄に舩を訓めり。小舟にて、舟縁の深きものをいふ。高瀬を上下する舟の義なるべし。○しば 芝。淺茅と青葛との間に列ねたれば、柴にはあらざるべし。○朝顔 桔梗、木槿、牽牛子、皆朝顔の稱ありき。但桔梗を朝顔といふことは、新撰字鏡に見えたるのみにて、次の段にも桔梗を、字音にて出したれば、この朝顔は必ず木槿なるべし。牽牛子をいふことは、尙後の事ならん。この下、などをかしの略けり。

○靱篋 棗を除いては、すべて六帖の題である。草の題に多く偏してゐるのは、女らしい優しい好みである。たゞし棗は、萬葉集には出てゐるが、それも主材としたのではなく、平安朝になつては、殆ど詠まぬ。その實こそ藥料にするが、木には何の風情もない。恐らく何かの誤であらう。

五十七段

草の花は なたしこ、からの更なり、やまとのも、いとめてたし。女郎花。きちか。う。菊のところくうつろひたる。刈萱。龍膽は、枝さしなどもむつかしげなれど、こ

と花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出てたる、いとをかし。わざととりたて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。かりのくる花と、文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺菫、董、おなじやうの物ぞかし。おいていけば同じなごうし。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひつづけたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などてさはた生ひ出てけむ。ぬかつきなどいふもの、やうにだにあれかし。されどなほ、夕顔といふ名ばかりはをかし。

(考異) ○おなじなど 原本、おしなどとあり。古本による。

○刈萱 ナデシコ。撫子の義。その花の愛らしきより喩へていふ。又和名抄に「トコナツ」とも訓めり。いはゆる河原撫子なり。唐撫子に對して倭撫子といふ。山野に自生して、淡紅色の花を著く。園中に栽培して、花葉の大なるを石竹といふ。これは唐撫子にて、支那より舶來せしものなるべし。○唐のは更なり 唐の翟麥はめでたきこといふも更なりの略。○やまとのも 大和の翟麥もの略。○女郎花、きちかう の下、をかしを略けり。○きちかう 桔梗の字音。和名抄に「アリノヒフキ」と訓み、新撰字鏡にはアサガホと訓めり。○菊のところくうつろひたる 菊の花のあちこち色の變れるがをかしと也。「うつろふ」は衰へて色の變るをいふ。白菊などは霜にあひて、薄紫に處々色付くなり。○刈萱 カルカヤ。もと屋を葺く料に刈る萱をいへるが轉れる也。八雲和抄に、高萱ともいふとあり。その花蓋の花に

(口譯) 歌の題は 都葛、みくり、駒、靱篋、つぼすみれ、ひかげ、こも、たかせ、鴛鴦、淺茅、芝、青つら、梨、棗、朝顔が面白い。

(口譯) 草の花は 翟麥が面白い。唐のなたしこ、は、いふまでもない。

大和のなたしこも、甚だよい。女郎花、桔梗が面白い。菊が花のところくう、色が變つたのが面白い。刈萱が面白い。龍膽は、枝振なども煩はしいけれども、他の花が皆霜枯れ切つたのに、その中から、ひどく花やかな色合して、さし出て咲いたのが、甚だ面白い。わざ／＼取出して、人並らしくする様でもないけれど、鎌柄の花が、かはゆらしげである。しかし名が厭である。その辭、雁の來る花と、文字には、い、字が書いてある。かにひの花、これは色は濃くはないが、藤の花に大層よく似て、春と秋と咲くのが面白さうである。壺菫、董、どれも同じやうな物ぞよ。花がすがれてゆ



くと、變りのないなどとは、感心しない。しもつけの花が面白い。夕顔は花が朝顔に似て、名前も朝顔夕顔といひ續けてゐるのも、面白かりきうな花の姿であつて、實が憎らしい恰好であるが、甚だ残念である。何でそんなにも亦大きく實つたのであらう。せめて酸漿などいふ物のやうにでも、あつてほしい。けれども、やはり夕顔といふ名だけは面白い。

(口譯)  
葦の花は、一向に見所がないけれど、帯帛などいはれたのは、深い趣があるのだらうと思ふと、一通りの物ではない。芽の萌出した様も、薄には劣らないが、秋穂の出たのは、薄とはちがつて、水の際で面白からうと思はれる。この草花の中に、今まで薄を書入れないのは、甚だ不思議と、人かいふやうである。ほんに秋の野を通じての面白さは薄にある。穂先の蘇枋色になつて、大層濃いのが、朝霧にぬれて靡いた

似たり。この下、をかしを略けり。○龍膽 リンダウ。○むつかしけ「むつかし」はウルサキ、煩はしなどの意。又氣味わるきをいふ。○こと花 異花なり。○わざと取立て、わざと多くの草花の中より取出でてと也。○人めかすべき云々 一人前らしくいふべき花にはあらねど也。人なみくを見よ。○かまつかの花「雁の來る花」とあるを、雁來紅のこと、する時は、葉雞頭に當るべし。秋雁の來る頃、その葉色づく故にいふ。○名ぞうたてけなる その名稱が疎ましけなりと也。鏢柄と聞ゆれば也。○雁のくる花ともじには 雁來花と漢字には書きたりと也。邦名はうとましけれど、漢名は好き文字なるをいへり。この頃「文字」といへば即ち漢字なり。この句の上に、然るにを補ひて聞くべし。○かにひの花「かにひ」は岩菲の音か。岩菲は仙翁花のことにて、春さくを剪春羅、秋さくを剪秋羅といふ。花に白紅黄等の色あり。○藤の花にいとよく似て 花の藤花に似たるは、今の岩菲になし。且花形は石竹に似たればそれにもあらず。尙考ふべし。○すみれ その葉の劍形になれる、普通の莖菜なり。相撲取草のこと。つぼすみれを見よ。香川景樹は「古董といへるは今の紫雲英(蓮花草)のことなり。古歌の趣を考ふるに、野面にはびこる程に咲けるもの、如し。今の莖はまばらに處々に生ひたれば適ひがたし」といへり。さらばこの莖は今の蓮花草にて、莖莖は普通の莖ならんか。尙よく考ふべし。○老いていけば同じ 花の老いがれては、二者殆ど區別なしと也。○しもつけの花 繡線菊をいふ。高さ一二尺、葉は楕圓にて、花は紅紫なるが簇り開く。この下、をかしを略けり。○夕顔 實を干瓢にする蔓草なり。夏白花あり、夕に開く故に、夕顔と名づく。なほ朝さく花を朝顔といふが如し。「顔」は美しき様を譬へていふ也。○朝顔に似て 花のさま朝顔に似てと也。この朝顔は木槿をいへるなべし。朝顔を見よ。○いひつづけたるもをかしかりぬべき 朝顔にいひ續けたるもの略。朝顔、夕顔と並稱したるも、實にをかしけなる花の姿にてと也。○にくき實のありさま 餘り大きく長き實なるが

憎らしきをいふ。○なごてさはた生ひ出でけむ 何とてさやうにもまた、實の結りたるならんとなり。「なご」は憎き有様をさす。○ぬかづきなどいふ物の云々「ぬかづき」は酸漿の古名なり。新選字鏡に「酸漿。加我彌吾。又、奴加豆支」とあり。酸漿の實の鈴生にぶらさがりたる様、點頭の如く見ゆるより、額突の名あるならん。夕顔の實の醜きをおとして、酸漿の實位にありたしと也。

葦の花、更に見どころなければ、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらむと思ふにたゞならず、もえしも薄にはおとらねど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。「これに薄を入れぬ、いとあやし」と人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見どころなき。いろくに亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたるのち、冬のするまで、頭いと白く、おぼれたるをも知らず。昔思ひいで顔になびきてかひろぎ立てる、人にこそ、いみじう似たためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、哀とも思ふべけれ。萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれて、なよくとひろごり伏したる。さを鹿の分きてたちならすらむも、心ことなり。から葵はとりわきて見えねど、日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えてをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には、岩つゝじも異なることなければ、「をりもてぞ見る」とよまれたるさすがに



をかし。さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつらに亂れさきたる夕ばえ。

のは、これ程の趣の物が、外にあるか、ありはせぬ。但秋のはては、甚だ見所がない。色々に咲亂れて居つた草花が、迹形もなく散つた後、冬の末まで、薄の頭が大層白く、ぼけかかったのも知らないで、昔の盛を思ひ出し顔になびいて、びらしやうしてゐるのは、人間にひどく似てゐるやうである。心當りの人になぞらへられる事があつて、それをばことに、哀とも思ひもしよう。萩は大層色が深く、枝がしなやかに咲いたのが、朝露にぬれて、萎えくとひるがつて、土についたのが面白い。鹿が取分けて、この花を立馴すと見えるのも、思ひなしが格別である。唐葵は、

取分けてよくは見えないが、日の影につれて傾くと見えるのが、普通の草木の心とも思はれないで、面白い。花の色は濃くないが、山吹に劣らうか劣りはせぬ。岩躑躅も、格別な取得もないが、「なりもてぞ見る」と歌に詠まれたのは、さすがに面白い。薔薇は近間では、枝の有様などは煩はしいが面白い。雨などが晴れあがつた水の際、又は黒木の階などの際に、亂れ咲いた夕映の趣は、甚だ面白い。

○みてぐらなど云々 旁註に「信濃の御射祭、七月廿七日、蘆の穂にて幣をつくる。蘆の花のみてぐらといふ」とあり。但「いはれたる」とあれば、蘆の花をみてぐらと詠める古歌などありしにはあらざるか。「みてぐら」は令充座の義にて、神に備へ奉る幣帛をいふ。○心ばへ 趣をいふ。○たいならず 凡ならず、一通りならずとの意。○もえしも薄には劣らねど 春萌出でしさまも、薄には劣らねどと也。この下、秋穂の出でたるは薄とちがひてを略けり。○水のつら 水邊をいふ。水面にはあらず。川づらといふも、川の邊の意にて、川の水面の意に用ゐるは後世のこと也。○これに薄を入れぬ云々 これまで薄のことにいひ及ばねば、わざとかくいへる也。「人いふめり」の下、それ故薄を入る、を補ひて聞くべし。○おしなべたるをかしさは 押ならしたる面白さはと也。即ち秋の野全體に通じての面白さはの意。○蘇枋にいと濃きが 蘇枋色にていと色濃きがと也。「蘇枋色」は暗紅色なり。○うち靡きたるは の下、美しくてを略けり。○さばかりの物やはある それほどの物が外にあらんやと也。○秋のはてぞ見所なき 薄の花は何時まで散らで残れる故にいふ。○かたもなく散りたる後 影もなく外の花は散りたる後なり。「かた」は形なり。○冬の末までかしらいと白く これは薄のさまなり。「かしら」は薄の穂先を譬へていへる也。○おほどれたる 亂れひろがりたる也。思ふにおほどかと同語ならん。しまりなくボツとしたるをいふ。源氏東屋に「おほどれたる聲して」。○昔思ひいで顔に云々 若やかに榮えし當時を思ひ出したるやうに靡きてと也。○かひろぎ立てる ビラシヤラして立ちて居るはと也。「か」は接頭語。「ひろぎ」はひろめくことにて、ひろめくはひろめくと同じ。「立てる」の下、必ずはを補

ひて聞くべき格なり。○人にこそいみじう云々 人のうへに、甚だよく似たる様なりと也。○よそふる事ありて 知人に擬ふる事ありてと也。○それをしもこそ云々 薄の衰へながら尙かひろぎ立てるは、見所なきもの、それをも哀と思ふと也。そは擬ふる事ある故なり。○色ふかく 紫色の濃きをいふ。○たをやかに しなやかなるをいふ。○なよくとひろがりしたる 婁娜くとひろがりて、地につきたる也。○さを鹿のわきてたちならず 「さを鹿」は眞小牡鹿なり。「わきてたちならず」は取分けて立たる也。○さを鹿を立馴すことは、萬葉八に「わが岡に棹鹿きなくさき萩の花妻とひに來なく棹寄り馴る、なり。鹿の萩を立馴すことは、萬葉八に「わが岡に棹鹿きなくさき萩の花妻とひに來なく棹鹿」、後選集に、貫之「行かへり折りてかさむ朝なく、鹿たちならず野べの秋萩」など、奈良朝以來、歌には常にいひ馴れたり。○心ことなり 思ひなしが格別なりと也。○から葵 向日葵なり、日まはりともいふ。○とりわきて見えねど 取分けてよくは見えねどと也。○なべての草木の心とも 普通の草木の性質とも思はれずして、面白しと也。○科學にいへば、總べての草木は、皆日の影に隨ふ性質あれども、殊に向日葵は目に見えて、その運動の著きなり。○さく山吹には の下、劣るべしやはを補ひて、尙から葵の事をいへるものとすべし。但から葵と山吹との花の色を比ぶるに、濃からねどいふ程の相違なし。なほ脱文あるべし。一本さ、山吹とあり。○岩つ、じ 山躑躅なり。○をりもてぞ見る 後拾遺集、春「岩つ、じをりもてぞみるせ」が著しくれる染の色に似たれば」によりて書けるか。されどこの歌は和泉式部のなり。清少自身と同時の人の歌を引かんこといかと思へど、濱臣はいはく、古人は心廣くて、その折人口に觸れし歌は、同時代にても引歌にせりと。尙考ふべし。○さすがにをかし「さすが」は「ことなる事なけれど」を承けたり。○さうび 薔薇、字音。うばらの花なり。○近くて近くてはの略。そばにて見るをいふ。○むつかしけれど 枝に針などあれば也。○黒木のはしなどのつら云々「黒木」は皮をむかぬ丸木をいふ。「はし」は階なり。「つら」は邊なり。「夕ばえ」は夕日の影に、



物の色よく映えて見ゆるをいふ。即ち薔薇の花が、黒木の樽階くわいしの邊などに咲亂れたるに、夕日のさして、光彩の映えたる景色は、實にをかしとなり。

評 この頃は、秋草を原野から掘取つて、庭前に移し植ゑることが流行してゐた。蓋し大和時代の都市が、最も山野に近くて、春花秋草に、興を遣ふことが多かつた遺習であらう。そこで前栽といへば、秋草の植込をいふやうになり、遂にはこの秋草に歌を添へて、勝負をきそひ、前栽合せんざいあはせの名稱さへ出来るやうになつた。随つて深窓の佳人も、單に秋草ばかりではない。一般草花に對する趣味識に、非常な發達を來し、鑑賞力に富んで居つた。こんな事情が、古來の繪畫などに、草花の多い一因を成したのたらう。

春の花に莖、躑躅は、藤原、奈良朝時代の吟詠の好題目であり、夏の花に薔薇は、白氏文集舶來後の市利である。尤も支那では、薔薇は觀賞的に發達して、樂天の「階底薔薇入夏開ハツチニキ」や、高駘の「一架薔薇滿院香」など、皆庭園に培栽した趣である。わが國にも舶來したのを、階下等に栽ゑたのだらう。源氏物語にも「階のものとさうびけしきばかり咲きて」とある。黒木の階と薔薇花との配置配色は、趣かあるもの、樂天の糟粕を免れないが、夕榮ゆふはなをあしらつたのは、ことに氣持のいい、氣の利いた觀察である。唐葵の大、しもつけの小、對照があるやうである。夕顔の名をめでたのは、源氏物語に、花の名は人めきてとあるに一致してゐる。六帖にはまだ見えぬ材料であるのを、この二才媛の彩筆によつて、はじめて世に紹介され、後世までの歌題となつたのは、多幸羨ましい。秋の花には、嘗て山上憶良が七草を數へて、はぎはぎ花、尾花おしな、葛花、異夢の花、女郎花、また藤袴、朝顔の花。

と歌つたのを、こゝに葛と藤袴とをばういたのは、眼が高い。撫子なほこに撫子合、女郎花に女郎花合おこなはれ、花山法皇は、築地の上に撫子を咲かせ、僧正遍昭は女郎花に戯れて、人に語るなと口止めしたりして、どんなに興味おほく感じたものであらう。菊は桓武朝からめで初められて、仁明朝には承和菊の

異種をも産したが、大抵は白菊を賞翫したものである。古今集に「花かあらぬか波のよするか(菅家)」「一年に二度にはふ花とこそ見れ(詠者不詳)」「移ろふからに色のまさるは(貞文)といひ、こゝに「ところどころ移ろひたる」とある、皆これ白菊のさまである。重陽の節には、酒に、著綿ちりめんにもてはやされて、秀才の詩賦にも入れば、なほざりな物ではなかつた。桔梗、ことに龍膽の紫を、霜枯の中に見付けたのは、鎌柄の紅と相俟つて、さすがに目もあやである。源氏物語にも、

枯れたる草の下より、龍膽の我ひとりのみ心長うはひいて、露けく見ゆる、云々。

とあるのも、おなじ着眼である。萩の寫生は一通りで、鹿の配合は、奈良以來の紋切形だが、薄となつては、實に奇抜である。まづ「これに薄を入れぬ」と、分疏的口氣を洩して注意を惹き置き、さてその特徴を叙したまでは、他人でもなほいひ得ようが「頭白く」より以下の譬喩が剝切で、皮肉で、清少でなくては、決して能はぬ筆致である。「よそふる事ありて」とは、何人を下に思つたのか、必ず白髪しろかみながく振亂した、或老女房をさしたに違ない。とにかく一場一抑、また一場、行文が變化に富んで、この段中の白眉である。蘆の花の御幣みでこは、なほ尋常をまぬかれ難い。

鑑賞力に富んだ結果、草花の佳處はもとより、缺點さへもよく洞觀されて、他の草木に對した時のやうに、浮泛な文字を著けず、いかにも明晰に批評し、褒貶してゐる。龍膽に「枝さしむつかし」、鎌柄に「わざと取立て、人めかすべきにはあらねど」、岩菲に「花の色は濃からねど」、莖に「おなじなど憂し」、夕顔に「にくき實のさま」、蘆に「更に見所なけれど」、薄に「秋のはてぞ見所なき」、唐葵に「取分きて見えねど」、躑躅に「特なることなけれど」、薔薇に「枝の様はむつかしけれど」など、一面に多くの貶詞を下した。その抑揚の筆法は、面白くない事もないが、あまりに要領を得過ぎて、含蓄の味が乏しい憾がある。又、躑躅や薔薇は木の花で、いくら歌入式分類でも、草に入れるは、あまりひどい。



大江維時が藏人の時、前裁の草の名を書かせられた所が、皆假名書にしたので、彼是いふ人があつた。さらばと漢名に書いて上げたら、讀得る者が一人も無かつたといふ時代において、階底の薔薇や、雁來紅の文字穿鑿は、共に眞名勝に走書した清少の面影を窺ふに足るではないか。

五十八段

おぼつかなきもの 十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に、闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみわたる。今いできたるもの、心も知らぬに、やむごとなき物もたせて、人のがりやりたるに、遅くかへる。物いはぬちごのそりくつがへりて、人にもいだかれず泣きたる。暗きに覆盆子食ひたる。人の顔見しらぬ物見。

○おぼつかなき ことにては心もとない、氣がかりなどの意。尙おぼつかなからずを見よ。○十二年の山ごもりの法師のめおや 「山」は比叡山、「めおや」は女親なり。叡山延曆寺にては、出家受戒後こもりて修煉するもの、十二年間、下山を聽さず。故にその母親は、殊に子のうへを案じて、覺束なく思ふなり。「めおや」の下、の心地を補ひて聞くべし。類聚國史に「弘仁十三年六月、傳燈大法師位最澄言夫如來制戒、隨機不同、衆生發心、大小亦別、伏望天台法華宗年分度三人、於比叡山令得度受戒、十二箇年不聽出山、四種三昧令得修煉、云々」。○しらぬ所 常にはのかぬ處なり。○闇なるに闇の夜なるにと也。○あらはにもぞある云々 知らぬ所なれば、火をともしては顯顯なるべしとて、わ

(口譯)

心もとないもの 十二年間山ごもりする山法師の母親の心持は、心もとない。知らぬ所に、闇の晩なのにいづたところが、あかるくてはあらはで、きまりがわるいかもしれぬといつて、燈火もつけないであるに、それでも並びあつて居たのは、心もとない。今來たばかりの奉公人の心立もわからぬのに、大切な物を持たせて、人の許に、使にやつたのに、早く歸つて來ないのは、心もとない。ま

口も利かない乳呑児がのけ反りかへつて、人にも抱かれず泣いたのは、心もとない。闇い所で覆盆子を食つたのは心もとない。役人の顔を見知らない物見は、心もとない。

さと暗がりにして置かる、也。○さすがになみわたる 暗闇なれども、流石に座を正して、他の人々と並び居たると也。隣の人顔も見えぬ暗闇に居るは覺束なき也。○今いできたる者の心も知らぬに 今この頃來て召仕はるる者の、よくはその性質もわからぬ者にと也。「知らぬ」は知られぬの意。○やむごとなき物 貴重なる物なり。やむごとなきを見よ。○人のがりやりたるに遅くかへる 人の許に遣りて届けさせんとしたるに、何時までも歸らぬと也。これ氣がかりにて覺束なき也。○物いはぬちごいまだ口を利かぬ乳呑兒なり。○そりくつがへりて云々 踏反りかへりて、人の抱かんとするにも抱かれず、泣入りたる也。これも譯がわからず覺束なき也。○覆盆子くひたる 暗くてはその美しき色も見えねば、覺束なき也。○人の顔見しらぬ物見 行列中の人物の顔を、誰それとも知らずして、只見物するは、覺束なしと也。「物見」とは行幸、祭、その他の行列などを見物するをいふ。以上句毎の下に、おぼつかなしを略けり。

評 始めて愛兒を手放して、比叡の山法師とする。もとより女人結界の靈地だから、父親こそ逢ひにも往けるが、女親は絶対に登山が出來ない。空しく愛兒に戀焦れて、その十二年の禁足期のはてるのを待つ。ほんに一日千秋の思はするであらう。

知らぬ處に往つたからとて、暗闇に置かれることは、今の時代でない事で、以て上流婦人が、その顯證なことを、いかに厭うたかが想像される。「なみ居る」とあるに思へば、中宮の御供などで、朋輩と共に、餘所に出た折の事であらう。宇治拾遺に、或女がよその家に泊つた時、見たい物があつても眞闇な所から、麻を績んであけますから火をともして下さいと頼んで、明りをつけて貰つた話が出てゐる。知らぬ家では、わざと火をともしぬ事と見える。

覆盆子は、當時盛に嗜好された果物で、陰曆五月、攝津河内邊から、京に輸入した物であつた。今の



西洋覆盆子ほど大きくはないが、色合は却つて美しいから、暗闇で賞翫するのは、いよく勿體ない、覺束ない氣持がするに、相違ない。しかし暗闇で物を食ふことは、いくら昔でもない事と思ふ。これは清少の假想であらう。

この時代には、祇園社頭の、骨なしといはれた雜藝法師のやうな藝人もないではないが、寄席もなく芝居もなく、成るべく、民衆の集會や歌舞の興行物を禁じたので、當時の人の娛樂は、祭その他の路次の行粧を見物するのが關の山であつた。今も役者の名を知ると、その芝居も一層面白いやうに、その行列中の近衛司や伶人などの顔を見知つてこそ、物見も一倍興味が加つたものであらう。

新參者の不信用、乳兒のぢれ泣はもとよりで、この段は大方、實際的事件に發程してゐる。

五十九段

たとしへなきもの 夏と冬と。よると、晝と。雨ふると、日てると。わかきと、老いたると。人の笑ふとはらだつと。黒きと白きと。思ふとにくむと。藍ときはだと。雨と霧と。おなじ人ながらも志うせぬるは、まことにあらぬ人とぞ覺ゆるかし。常磐木おほかる處に、烏のねて、夜中ばかりに、いねさがなくおちまらび、木づたひて、ねおびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひてをかしけれ。

(考異) ○いねさがなくおちまらび 原本、いねしくおちまどひとあり。一本による。  
○たとしへなき ちがひ過ぎて、比較にならぬをいふ。「たとしへ」は譬方なり。○きはだ 和名抄に

(口譯)

譬へやうのないもの 夏と冬と、夜と晝と、雨のふるのと、日の照るのと、若いのと年寄つたのと、人の笑ふのとおこるのと、黒いと白いと、思ふと憎むと、藍と黄蘗と、雨と霧と、いづれもかけ違ひ過ぎて、譬へやうもない。同じ人でありな

から思ふ心の無くなつたのは、ほんにちがつた人と思はれるよ。常磐木の多くある所に、烏どもが澤山ゐて、夜中時分に、寝相がわるく落ちこるが、木傳ひして、寝おびれた聲で啼いたのが、晝のにくにくい様子とは違つて、面白い。

「藥、一名黃木、和名岐波太」。高さ二三丈位、山中に生ずる。葉の形はや、漆に似て、夏の頃黄色の小さき花を開く。樹皮を煎じて黄色の染料とし、又藥用とす。○心ざしうせぬるは 情の醒めたるはと也。○あらぬ人 おなじ人にあらぬ人の略。○いねさがなく 寝さまのわるきをいふ。○おちまらび 落轉びなり。○木づたひて 木より木に傳ふをいふ。○寝おびれて 寝て物に驚き怖れたるをいふ。「おびれ」はおびえの轉語。○見め 見る目なり。

藍と黄といはないで、黄蘗といつたのは、色合の相違をいふのではなくて、その品質の相違をいつたのである。抑も藍色を染めるには、藍草に黄蘗を混用したことが、延喜式に出てるから、おなじ藍色を出す染料ながら、藍は草、黄蘗は木で、あまり違ひすぎて譬方なしといつたのである。

志のある折と渝つた折とは、同一人とは見えないとは、甚だ面白い感想である。この一句で、全文の鱗甲が悉く振つてくる。通釋に六帖の、

思はぬと思ふと二人くらふればおなじ人とやいふべかりける  
を踏みたるにやとあるのは當つてゐる。清少の種本に、六帖のあることは、前にも既に論じて置いた。上に「鳶鳥のうへは見入れ聞入れする人なし」といつた清少が、かうこまかに烏の觀察をしようとは思はなかつた。職御曹司は、周圍に木が多かつたとあるから、或は其處に居つての實見か。「晝の見る目にたがふ」が眼目で、憎けな烏にも、可愛らしい所のあるのを發見したのが、この手柄である。

六十段

忍びたる處にては、夏こそをかしけれ。いみじう短き夜の、いとほかなく明けぬる



忍んで逢ふ所では、夏が面白い。非常に短い夜が、大層たわいなく明けたので、すこしも寝ないでしまつた。所々方々が明けたまゝであるから、そのまゝ涼しく見渡された。やはりもう少し話したい事があるから、男女互に受答などするうちに、すぐ前から、鳥がたい高く鳴いて行くのは、ひどくあらはな心地がして面白い。冬の夜のひどく寒いのに、思ふ男と女を引かぶつて、埋れたやうになつて寝て聞くと、鐘の音が、何かの底で鳴るやうに聞えるのも面白い。鐘の聲も、一番はじめは羽の間に口を籠めて啼くから、聲が籠つて、ひどく深く遠く聞えるが、二

に、つゆ寝ずなりぬ。やがてよるづの所あけながらなれば、涼しう見わたされたり。なほ今少しいふべき事のあれば、かたみにいらへどもするほどに、たゞ居たる前より、鳥の高く鳴きてゆくこそ、いとけさうなる心地してをかしけれ。冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音の、たゞ物の底なるやうに聞ゆるもをかし。鳥の聲も、はじめははねのうちに、口をこめながら鳴けば、いみじう物深く遠きが、つぎ／＼になるまゝに、近く聞ゆるもをかし。

○しのびたる所 忍びて人に逢ひたる所なり。○はかなくあけぬるに タアイなく明けてしまふにと

也。○やがて 即ちなり。「涼しう見わたされ」にかゝる副詞。○あけながらなれば 夏の事とて、格子もおろさぬなり。○なほ今すこし云々 忍男の歸らんとするに、やはりもう少しいひたき事のあれば也。○かたみにいらへどもする 互に語り互に答へなどするの略。○たゞるたる前より「たゞ」は、次の高く鳴きてゆく」にかゝる副詞。○けそうなる あらはなると也。「けそう」は顯證の字音。○うづもれ臥して 衾の中に埋れて寝てと也。○きくに 物の音をなり。○物の底なるやうに 衾を被りたれば、何か物の底にて鳴るやうに聞ゆと也。○鳥の聲 「鳥」は庭鳥なり。○羽根のうちに云々 初め羽の間に嘴を籠めたるまゝにて鳴けばと也。一番鶏のさまをいへり。○物深くとはきが これも物の底深く遠く聞ゆるがと也。○つぎ／＼になる 次々になると也。即ち二番鶏、三番鶏となるをいふ。

番三番と順々になるにつれて、その聲が近く聞えるのも面白い。

上文の七月ばかりの段を思ひ合はせるがよい。鳥に驚かされながらも、尙それを面白がるに、ゆとりのある清少の性格がうかゞはれる。短文字の中に、叙事叙景が錯綜して、事件のはこびが早く、筆路が軽雋である。「冬のいみじく寒きに」から以下は、「埋れ臥して」が、氣の利いた造語のやうだが、これは當時の通用語だらう。鐘の音の描寫は面白い。「羽の中に口をこめながら鳴けば」は、さすがの才女も、その無經驗を暴露してゐる。

六十一段

懸想人にてきたるは、いふべきにもあらず。たゞうちかたらひ、又さしもあらねど、おのづからきなどする人の、簾のうちに、あまた人々居て、物などいふに入りて、とみに歸りげもなきを、供なるをのこわらはなど、斧の柄も朽ちぬべきなめりとむつかしければ、ながやかにうちながめて、みそかにと思ひていふらめども「あなわびし。煩惱苦惱かな。今は夜中にはなりぬらむ」などいひたる、いみじう心づきなく、かのいふものは、とかくもおぼえず。この居たる人こそ、をかしう見き、つる事もうするやうに覺ゆれ。又、さは色に出でては得いはず。「あゝ」と高やかにうちいひうめきたるも、「したゆく水の」と、いとをかし。立部、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるもいとにくし。よき人、君達などの供なるこそ、さやうにはあらね、たゞ

(口譯) 懸想人てきたのは、いふまでもない。只尋常の交際で話にき、又さうでもないけれど、自然尋ねてきたりなどする人が、簾の内にて、大勢女房達が居て、話などする中に入込んで、急に歸りさうにもないのを、お供の家來や、童子などが、斧の柄も朽ちてしまひさうなど、ひどく時の経つたやうに感じて、ぢれ／＼するので、



人などさぞある。あまたあらむ中にも、心ばへ見てぞゐてありくべき。

(考異) ○あゝと 原本あるとあり。詳解の師説による。

○懸想人にてきたるは云々 懸想する人として、その家にきたる者は勿論と也。「懸想」とは人を戀ふるをいふ。○たいうちかたらひ 只話すると也。尋常の交際をいふ。○さしもあらねど さもなければと也。「し」は強辭。「さ」は「たいうちかたらひ」をさす。○おのづからきなどする人 自然と尋ねて來りなどする人なり。懸想の人にもあらず、平生よりの友達にもあらず、只假初に立寄りたる人をいふ。○簾のうちにあまた人々ゐて 簾内に女房達の大勢居てと也。○物などいふに入りて 物などいふ其處に入りてと也。「物などいふ」は物語するをいふ。○とみに歸りけもなきを 話に實が入りて、急に歸りさうもなき也。○ともなるをのこわらは 其の訪問客の從者なる下人や男童なり。○斧の柄もくちぬべきなめり 斧の柄も朽果てさうに思はると也。こは仙童の圍碁を觀て、一局も終らざるに、斧の柄は既に腐朽し、家に歸りて見れば、故舊は死絶えたりといふ支那の神話によりて、長時間を経過したる意を、よそへたる也。述異記に「晋王質、石室山見數童子圍碁、與質一物如棗核、人含之不飢、局未終、斧柯爛盡、既歸無舊時人。」(今ノ述異記ニハ圍碁ノ事ナシ) ○むつかしければ こゝにては心のいふせくて憤る意とす。むつかるの形容詞格なり。むつかしを見よ。○長やかにうちながめて 長々と溜息してといふならんがと也。この下、人の耳に聞ゆる程に補ひて聞くべし。○あなわびし 「あな」は歎辭。「わびし」は難儀なるをいふ。○煩惱苦惱かな つらき苦しき目を見るをいふ。「煩惱」は佛教の語にて、また惑ともいふ。心身を惱亂せしむる精神作用をいひ、分ちて百八煩惱、八萬四千煩惱とす。「苦惱」は苦み

さやうなことはな  
い。たうとの供な  
どが、そんな風であ  
る。家來の澤山あら  
う中ても、その者の  
心立を見抜いて、連  
れてあるべきであ  
る。

惱みにて、これも佛典上の通語。○心づきなく 心につきなく思はる、をいふ。俗言の氣、ク、ハ、ヌ、にあたる。○かのいふ者はとかくも覺えず かの心づきなき事をいふ從者は、もとより下賤無知の者なれば、善惡何とも思はずと也。その論ずるに足らぬをいふ。○この居たる人 この簾の前に居たる人にて、來客をいふ。○をかしう見聞きつる事も云々 この居たる人のうへに就きて、平生甚だ心ありと見及び聞及びたる事も、この從者の陰言にて、消えてなくなるやうに感ずと也。この解諸註皆誤れり。○さは色にいでてはえいはず さう表面に現しては、よういはずしてと也。上の「煩惱苦惱かな、云々」と咬けるをさす。○あゝと高やかにうちいひうめきたるも 高く嗚呼と溜息吐きたるもと也。「あゝ」は歎息の聲なり。○下ゆく水のと 口に出してはいはぬは、いふよりも尙甚しと思はれてと也。六帖の「心には下ゆく水のわき返りいはず思ぞいふにまされる」の第二句を取出でて、「いはで思ふぞいふにまされる」の意を想はせたる也。「と」の下、思はれてを略けり。○いとをかし 上の「うめきたるも」の辭を承くるに「をかし」にてはをさまらず。思ふにもははの誤か。さらば意通ずべし。○すいがい 透垣の音便。竹などにて見え透くやうに造れる垣なり。○雨ふりぬべしなどきこえたるも云々 從者の雨が降りさうなりなどいふが聞えたるも、甚だ憎しと也。その主人に早く歸れと催促するやうに聞ゆる故なり。○よき人身分よき人なり。○さやうには 上に擧げたる種々の不作法なる言動をさす。○たい人などさぞある 平人の供などは、さやうなる事ありと也。「たいうと」は凡人の音便にて、よき人、君達よりはや、卑けれど、相應に身柄ある者をいふ。徒然草に「たいうとも舍人など給はるきは」とあるも同じ。○あまたあらむ中にも 家來の數多あらん中にもと也。○心ばへ見てぞ云々 その心立を見知りて、連れてあるくべしと也。「ゐて」は率ゐての意。

屋内はあた、かい空氣を煽動する女共のなまめき聲に、若い男の聲もまじつて、太陽氣なのに引換へ、



屋外ではお供の連中が待たびれて、動ともすると怨聲をはなつ。折柄を面白くもてなして、すさまじからぬやうにと心掛けた、その頃の人の耳には、どんなにか不快に聞えたことだらう。そこでその殺風景の大罪は、その主人に歸すると、攻撃が甚だ手きびしい。又「雨ふりぬべし」は、何の氣なしにいつたにしろ、折柄の興を醒すおそれがあるので、憎らしいのである。かういひ詰めてくると、何だか自分ながら、感情にはしり過ぎたやうに思はれる所から、自分に注脚を下して、よき人の家來には、そんな事がないと説明し、氣質を見て連れてあるけと忠告した。實際當時の貴紳中には、よく不斷から、雑色や牛飼などをしつけて置いて、車を人に貸した時、よる夜中引まはして使つても、少しも苦情をいはず、神妙に務めるやうに心掛けさせた人さへあつた。

「煩惱苦惱」は、佛典上の用語なのを、こんな下人等が口にする所を見ると、又、その宗教的意味から離れて、普通語に轉用されたのを見ると、如何に佛教が久しいこと、社會に深く浸潤し、且一般にひろく行はれたかを知ることが出来る。

六十二段

ありがたきもの 舅に響めらる、婿。又、姑に思はる、よめの君。物よく抜くるし  
ろがねの毛拔。主そしらぬ人のずさ。つゆの癖かたはなくて、かたち心ざまもすぐ  
れて、世にあるほど、いさ、かのきずなき人。おなじ處に住む人の、かたみにはぢか  
はし、いさ、かのひまなく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語集

(口釋)  
世に在難いもの、舅にほめられる婿、又、姑によく思はれる嫁さん、物よく抜ける銀の毛拔、主人のかけ口をきかない従者、すこしの癖も、

など書きうつす本に墨つけぬこと。よき草子などは、いみじく心して書けども、必ずこそきたなげになるめれ。男も、女も、法師も、ちぎり深くかたらふ人の、末まで中よき事かたし。つかひよきずんざ。播練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。

釋 ○ありがたき 存在することの難きをいふ。即ち滅多になきもの也。○しうと 舅なり。○しろがねの毛拔 銀の鑷子なり。銀は質柔なれば、物を食ふこと、鐵に及ばぬ也。○しうそしらぬ人のずさ 人を誇らぬ従者なり。「しう」は主の字音。「ずさ」は従者の音轉。「人」のは従者を強く印象せしめん爲に添へたる語にて、人の親、人の子の類なり。○癖かたはなくて 癖も缺點もなくて也。「かたは」は片端の義にて、かたはに同じ。物の不完全なるをいふ。不具者をいふも、この意より出づ。○世にある程世に立てる間なり。○おなじ所に住む人 同じ宮仕して、一つ所に居る女房ならん。○ほぢかはし 恥交しにて、互に畏敬するをいふ。○いさ、かのひまなく 少しの油断もなくと也。○ようい 用意の字音。注意するをいふ。○つひに見えぬこそかたけれ その用意するを、遂に人に見知られぬことが在難しと也。「見えぬ」は見られぬの意。抑も「つひに見えぬ」は聊の隙なく用意したりと思ふ人が、遂に見當らぬがと解くを至當とす。さては「難けれ」にては條理とほらねば、據なく、上の如く釋したり。○集など「集」は歌集をいふ。平安時代の通語なり。集はを見よ。○書きうつす本に 新しく書寫す本にと也。○よき草子 立派なる草子なり。質よき紙に、金銀の箔おし、或は泥繪など播きたる綴本なるべし。○男も女も法師も契ふかくて 男女の契深きは夫婦の關係の深きをいふ。法師の契深きは師弟關係の渾らぬをいふ。「契」は約束をいふ。○語らふ人の末まで云々 互に語らひ睦びかはす人の、その始の約束どほ

足りない所もなく、容貌も氣立もすぐれて、世に交つてゐる間、いさ、かの瑕のない人、いづれも在がたい。おなじ所に奉公住してゐる人が、互に遠慮もあつて、少しの油断もなく、氣をつけたと思はれるのが、つひぞ見えないのは、畢竟在難いのである。物語や歌集など書寫す本に、墨を附けぬことが、在がたい。立派な草子などは、ひどく注意して書くけれども、きつと、きたならしくなるやうである。男も女も法師も、縁深く馴合ふ人の、末とけて中のよい事は、在がたい。使ひよい従者が在がたい。播練を打たせに遣つたのに、まあよく出来たと見えるやうにしてよこ



すのは在がたい。

り、一生中よく暮すことは稀なりと也。「末まで」は身の終までなり。○ずんざ 從者の音便。○かいねり打たせ「かいねり」は搔練にて、何色にても練りたる絹をいふ。「かい」は接頭語。「打たせ」は光を出す爲に、槌にて打たせに、その職工の許にやる也。○あなめでたと見えておこす あ、美しと見ゆる程に、仕上げて送りこすものは少しとなり。「おこす」は俗のヨコスに同じ。○むこ「よめの君」、「毛ぬき」、「誇らぬ從者」、「疵なき人」、「墨つけぬ事」、「使よきずんざ」、「見えておこす」の下、各あり難しを略けり。

新婚當時は、婿は大抵女の家不起臥して、舅に顔をあはせ、嫁はまた、十分婿になじんでから、先の家に乗込んで、姑に顔をあはす。だからこの時代には、男には舅、女には姑が厄介な目のうへの癪であつた。人情はいつも變らぬものである。人間の契、これは今日でもさうだが、當時は殊に結婚の手輕な如く、離婚も世話なしであつた。法師の契は眞じめな事ではなく、男色關係の師弟法類ではあるまいか。

當時は、經卷や漢文物の筆寫は、専ら男の仕事であつて、漢字を男文字と呼んでゐた。こゝにいふのは、「物語や集など」とあるから、女文字即ち假名文字の筆寫である。假名は貫之や行成のやうに、男で上手に書いた人もあるが、文字の性質上、婦人に最もふさはしい字體であるから、その筆寫はおほく、婦人の仕事であつた。假名を女文字の、女手のといふのもわかる。今日現存の假名の名筆の中には、無名の婦人物が、澤山あること、自分は思ふ。源氏物語、梅が枝の卷に、

よろづの事、昔に劣りさまに淺くなりゆく世の末なれど、假名のみなむ、今の世は、いときはなくなりたる。古きあとは定まれるやうなれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。——女手を心に入れて習ひしさに、事もなき手本、おほく集へたりし中に、

とあつて、中宮の母御息所、故入道の宮、院の尙侍、前齋院などの筆迹を批評してゐる。當時は藤原氏の最盛期であつたと共に、婦人の勢力の最頂點に達した時であつた。随つて、各方面にその發展の迹

がいちじるく見えて、假名の上手なども、源氏にいふやうに、澤山の事と見える。なほ同卷に、

まだ書かぬ草子ども綴り加へ、表紙紐などいみじうせさせ給ふ。兵部卿宮、左衛門などにもせむ。自分も一よろひは書くべし。——墨筆並びなく撰り出でて、——高麗の紙の薄様だちたるか、せめてなまめかしきを、この物好みする若き人々試みむとて、宰相中将、式部卿宮の兵衛督、うちの大殿の頭中将などに「蘆手、歌繪を思ひくゝに書け」と宣へば、皆心々に挑むべかり。(源氏の君)例の寢殿に離れおはしまして書き給ふ。古き事ども思ひすまし給ひて、御心のゆく限、草のたゞのものも、女手をいみじう書盡し給ふ。御簾あげ渡して、脇息のうへに、草子うちおき、端近くうち亂れて、筆の尻くはへて、思ひめぐらし給へる様、あく世なくめてたし。白き赤き掲焉なるひらは、筆とりなほし、用意し給へるさまさへ、云々。(抄略)

これで大抵、當時の上流の男女が、書道に對する眞摯な態度と、その紙筆に對する趣味と、同ふことが出来よう。こんな調子だから、清少が、汚けになることを歎いたのも、その感じ方が、甚だ剗切なものであつたらう。

搔練打つことは、全くむづかしいものとみえて、この時代の家集などにも、小言をいつた例がある。よく打つたのは、水に落ちたのを取上げて振へば、ぬれた迹もつかず、同じやうな光であつたと、宇治拾遺にある。鑷子は眉を抜くために、婦人は皆用ゐたものである。かう見渡してくると、どれもこれも、婦人の環境の行事を、主にした文であることがわかる。

### 六十三段

うちの局は、細殿、いみじうをかし。かみの小部あげたれば、風いみじう吹き入りて夏もいとすゞし。冬は雪、霰などの、風にたぐひて入りたるも、いとをかし。せばく

(口譯) 禁中の女房の局は、細殿にあるのが、ひどく面白い。上の方



て、わらはべなどののぼり居たるもあしければ、屏風のうしろなどに匿かくしすゑたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせて、いとよし。晝ひるなどもたゆまず心づかひせらる。よるはたまして、いさゝかうちとくべくもなきが、いとをかしきなり。沓くつの音の、夜ひと夜聞ゆるがとまりて、只および一つしてたゞくが、その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しくたゞくに、音もせねば、寝いりにけるとや思ふらむとねたく、少しうち身じろぐおと、衣きぬのけはひもさななりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶ひきに、やをら立つる火箸ひしのおとも、忍びたれど聞ゆるを、いと叩きまさり、聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞くをりもあり。

(考異) ○思ふらむとねたく、原本と文字なし。抄本による。

○内のつぼね 禁中の女房の局なり。○ほそ殿 廊のことをいへど、こは殿舎の裏向の簀子に沿ひたる廂の間の局なり。既出。○かみの小部あけたれば 上部の小き部を釣上げたればと也。○風にたぐひて入りたるも 風につれて室内に入りたるもと也。「たぐひ」は並副なびふ、随ふなどの意。○のぼり居たるもあしければ 里の童などの、かゝる禁中に上り居たるも、規則上宜しからねばと也。○かくしすゑたれば 匿かくし置きたればと也。○こと所 異所にて、禁中ならぬ所をいふ。○晝ひるなども云々 かけ離れたる曹司しやくし、下屋しもやとは違ひ、こは晝間も來客ある故、油断なく氣遣はると也。○よるはた 夜はまたなり。○うち解くべきもなきが 氣易くして居られさうもなきことと也。「うち解く」は氣を許して慎まぬをいふ。○沓の音の夜一夜云々 細殿前ほそどのまへをゆきかふ人々の沓音が、夜通し聞ゆるがと也。○とまり

の小部を上げておくと、風が大分に吹込んで、夏も大層涼しい。冬は雪や霰などが、風につれて降込んでくるのも、大層面白い。部屋が狭くて、童などのあがつてゐるのも始末がわるいから、屏風の後に、他の所のやうに、聲高く笑ひなどもしないで、大層よい。晝なども油断なく、氣遣もされる。夜はまたまして、すこしも氣を許して、くつろがれさうもないのが、甚だ面白いのである。局前を通る殿上人などの沓の音の、夜通し聞えるその中のが、ひよいととまりて、只指一つで戸を叩くのが、あの人であるよと、ふつと氣のつくのが面白い。大層ながく叩

くの、音もしないから、その男が、もろ寝込んでしまつたと思ふだらうかと、残念に思はれて、少し身じろきする音や、衣摺いぢりの機子きこも、男が聞付けて、まだ寢ずねに居るのであると、思ふだらうよ。外で男が扇など使ふのも、耳に立つ。冬は火桶ひきに、しづかに立てる火箸ひしの音も、忍びやかにするのだけれど、そとに聞えるので、男が一層はげしく叩き立て、そのうへ聲を出しても呼ぶのに、陰ながら戸のそばに、そつと摺り寄つて、男のけはひを聞く折もある。



(巻繪節五安承) 前 殿 細

て、その中の沓の音の一つが、局の前にとまりてと也。○および一つして叩くに 指一つにて戸を叩くにと也。指一つにて叩くは、密にせん爲なり。和名抄に「指、俗云於與比」。○その人なりとふと知ること 局の内の女の心なり。今叩くはかの男なるよと、直に合點のいくことが面白しと也。○音もせねば 内には音もせねばと也。わざと答もせず、人の居る様子も見せぬなり。○寢入りねいりにけりと云々 以下もすべて局の内なる女の心なり。叩く男が、全く内にては寢込みたるものと思はんかと、残念に思はれてと也。○すこしうち身じろぐ云々 まだ寢ぬけしきを見せんとて、少し身動する音や、衣摺の音なり。「けはひ」はその氣色、又は容子をいふ。○さな、りと云々 男もしかなりと合點するならんよと也。「さな、り」は然しかにあるなりの約にて、まだ寢ずに居ることな、りは然しかにあるなりの約にて、まだ寢ずに居ることな、り。○扇など使ふもしるし 外なる男がなり。扇使ふは夏のさまなり。○冬は火桶ひきに云々 以下、男が戸を隔て、内のさまを窺ふ趣なり。○やをら立つる火箸の音も云々 徐に灰につきさす火箸の音も、外に聞ゆるをと也。「やをら」はやわらと同じ、荒くせぬをいふ。○いと叩きまさり云々 外なる男が、いよくはげしく叩き立て、遂には聲を出しても呼立つるにと